薔薇のマリア

Ⅷ.ただ祈り願え儚きさだめたちよ

十文字青 Ao Jyumonji

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

VIII. ただ祈り願え儚きさだめたちよ



「恋の……悩み？」

「はあぁっ？……そんなんじゃないよ。恋とか、僕にはわかんないしさ。縁なさそうだし。なくていいしね。そうじゃないんだ、ほんとに」

「わたしも……よく、わからないけど。難しくて。自分に、素直になろうとして……この気持ちが……何か、形をとろうとするけど、それがはっきりしなかったり……つかみきれなかったりして。でも……そこに、あることはわかるから。自分の……思いが」

「思い、かぁ」

「マリアは……ないの？」

「僕？」

「もしあるなら……それは、大切にしたほうがいいと思う」


キミはひとりぼっちだ。
世界に見捨てられてしまっているかのように孤独だ。
でも、決してあきらめないで。
ボクがここにいるから。
何があってもボクがいるから。
ずっと手を繋いでいたい。
片時でも指の先をふれあわせることができれば、それでいい。
できなくてもいい。
歩いていて欲しい。
ボクも歩いてゆくから。
キミの手を引いて、キミの足になって、キミに寄り添うことができればいい。
できなくたっていい。
見失わないで欲しい。
キミは、キミがそこにいることを。
そのためにボクは歌おう。
声を嗄らしていつまでも歌おう。
遠くからでも声を届けよう。
つまずいてしまったとき、くじけそうなとき、声を張りあげてボクは歌おう。
忘れないで欲しい。
忘れてしまってもいい。
キミが歩いてゆけるのなら。
ボクも歩いてゆけるはずだから。
やっと見つけた——キミを見つけた。


毛むくじゃらで、真っ黒で、
まん丸く、毛に埋もれてい
るせいか、口も鼻も耳も見あたら
ない。手足はある。爪もある——
目は一つしかなかった。
白目はない。虹彩は赤錆色で、
瞳孔は黒く縦に裂けていた——!?

薔薇のマリア

VIII．ただ祈り願え儚きさだめたちよ

十文字　青



角川スニーカー文庫



A BRAVE HEART OF RED ROSE Ⅷ

—maria,maria,maria……—

Ao Jyumonji

First published 2008 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.



illustration ： BUNBUN
design work ： design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

VIII

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE

VIII

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

孤高の黒き薔薇。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Naji
ナジ

黒毛。



Doctor
せんせい

お医者さん。

and the others

ZOO
クラン《動物園》

Lunch Time
クラン《昼飯時》

and etc.

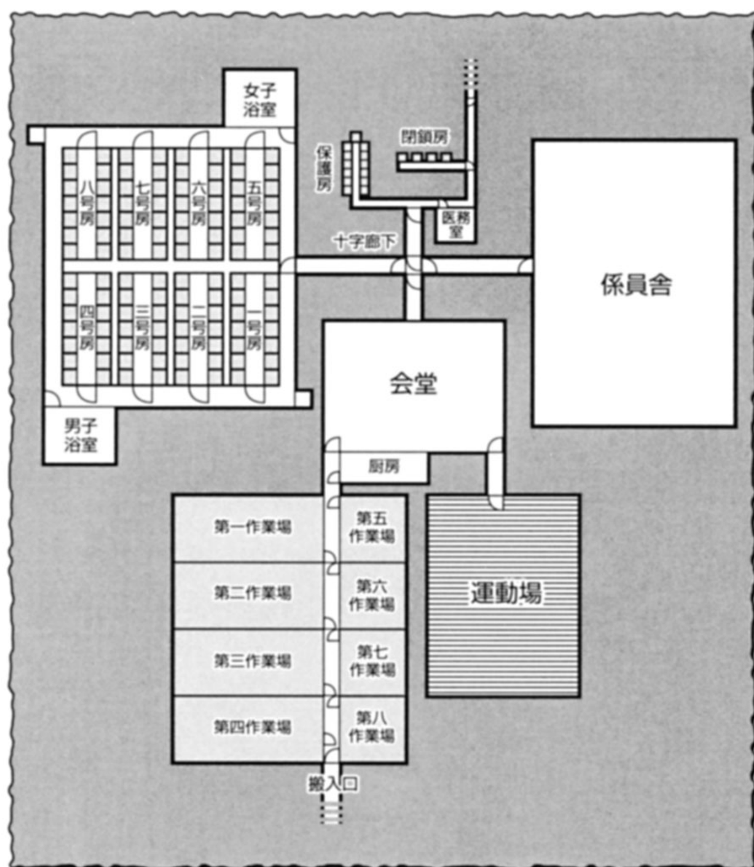
The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics



Asylum
アサイラム見取図

prologue



いろいろ、それはもう本当にいろいろあったけれど、最後の最後にはいい思い出をいくつか作ることができたし、結果的にはそう悪くない旅だった、なんて脳天気なことをぬかすのは、おそらくアンポンタン半魚人くらいのものだろう。

どこかの抜ぬけ作阿あ呆ほう腐くされ半魚が安らかな眠ねむりについている間、こっちはマジですっごく猛もう烈れつに、精神的にも肉体的にも素す晴ばらしく大変だったんだから、ド腐れ間抜け馬ば鹿かゾンビー魚には大いに猛もう省せいして欲しいものだ。まあ、どちらかといえば魚類寄りの脳に人間並みの機能を期待するのは、少々酷こくなのかもしれないけれど。

多た忙ぼうな髭ひげや行方ゆくえ不明のジョーカーとクローディアをのぞいたＺＯＯのみんなで海に行った。季節柄がら、泳ぐのはさすがに厳しいかと思ったら、魚野や郎ろうが魚だけに躊ちゆう躇ちよなく打ちよせる波に突とつ進しんしていって、ちべたいわボケェッ！　とか叫さけびながら跳とびあがってすっ転んでびしょ濡ぬれになっていた。そのあと「砂で何か作る大会」を開かい催さいして、豪ごう華かな晩ばん餐さんを緻ち密みつな仕事で再現したサフィニアが全員一いつ致ちで一等賞を獲かく得とくし、最下位は自じ虐ぎやく的な半魚人像を生々しく制作したカタリだった。ユリカの「山」は時間がかかったわりにどこからどう見てもただの山で、でも一生懸けん命めい作ったんだから、という理由で最下位をまぬがれた。カタリの抗こう議ぎは当然無視された。

海はなんとか無理やり参加させたけれど、これ以上はもう無理というかんじだったトマトクンを宿に寝ねかせておいて、人魚関係の史し跡せきや場所も一通り回った。雰ふん囲い気きから旅行者だとわかるのか、だいたいその一帯に住んでいるらしい人が勝手に案内役を買ってでてくれて、人魚にまつわる故事やら伝承やらまでたんまり聞かされた。とくに、大勢の人魚と人間が死んだという人魚戦争の悲劇には胸が痛んだ。一方で、往時には大勢の人魚が腰こしを下ろして音楽を奏かなでたという人魚岩で悠ゆう然ぜんと釣つりを楽しんでいる人々がいて、たまに人魚が釣れるんだとか、冗じよう談だんとしてはあまり笑えない、本当だったらもっと笑えない話を聞かされて、なんだかなあという気分を味わわされたりもした。おいしいものもたくさん食べた。さすがは港町、魚ぎよ介かい類るいは絶品だった。エルデンでは、魚といえば川魚か冷れい凍とう物か、あるいは生いけ簀すごと輸送してきて、鮮せん度どはよくても

生きが悪くなっているものしかまず手に入らないので、うわ、これ何？　同じ魚？　てゆうか、今まで僕が魚だと思ってたものって何なわけ？　みたいに思うこともしばしばだった。海産物以外の食材も豊富で、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツを巡めぐる騒そう動どうに巻きこまれている間はもうぜんぜんそれどころではなかったから気づかなかったが、何もかもが美味だった。エルデンに帰ったら、しばらくご飯がまずく感じられるかもしれない。ただ、スイーツに関しては名店ひしめくエルデンに軍配が上がる。南国産の珍めずらしい果物の数々はおいしかったけれど、ヌー・ベイルのケーキがちょっとだけ懐なつかしくなったりもして、サフィニア、ユリカと三人で、帰ったらすぐに絶対一いつ緒しよに行こう、と約束した。いつの間にか、すっかりエルデン人になっちゃってたんだな、と実感した。あのくそったれで超最低ＳＵＣＫなエルデンが少しだけ恋こいしかった。

　ロム・フォウとアルファは先に旅立った。朝、いきなり、じゃあ行くよ、と言いだしたので、どこへ向かうのかと尋たずねたら、とりあえず北かな、と真顔で返された。南は海だからね。あたしもアルファも結構泳げるけれど、海を渡わたろうとは思わないんだ。あー、そりゃあそうだよね、と答えるしかなくて、正直ちょっと困った。トマトクンを起こそうとしたら、ロム・フォウに止められた。疲つかれているみたいだから、いいよ。それに、会おうと思えばいつだって会えるしね。ロム・フォウは大海豚いるかの間のソファで熟じゆく睡すいしているトマトクンの胸を軽くパンチして、穏おだやかで、でも、少しだけ苦しそうな笑え顔がおを一いつ瞬しゆんだけのぞかせると、またね、とみんなに挨あい拶さつをしてアルファとともに行ってしまった。あまりにも呆あつ気けない出発だった。見送りくらいしないと、と思いついて宿の外に駆かけだしたときにはもう、ロム・フォウとアルファの姿はどこにも見あたらなかった。あとで目を覚ましたトマトクンにそのことを伝えると、まあ、そのうち帰ってくるだろう、という結構そっけない返事だった。ただ、それを聞いたサフィニアは微び妙みような表情をしていて、ああなるほど、と思った。トマトクンは、帰ってくる、と言った。ここはまだジェードリなのに、帰ってくる、と。それはつまり、ロム・フォウが帰る場所は、場所ではなく、トマトクンのところで、そのことをトマトクン自身、意識しているかしていないかはともかく、わかっていて、認めているということだ。サフィニアにしてみれば、そうした特別な、分かちがたいと思えるほどの絆きずなが、自分とトマトクンとの間にはあるだろうか、と考えて、否定的な結論にたどりつかざるをえなかったのだろう。でも、僕らには

時間がある。くじけないで、めげずに、がんばれ、サフィニア。どうせ長期戦だ。何しろ、相手は鈍にぶいんだし。

　ジェードリを発たつ朝には、髭とムソーのおじいちゃんと、それからチーロ・パンカロ率いるカルロ・ボッシ以下パンカロ・ファミリーの十人ばかりが見送りにきてくれた。少し気になって、あのルカという女の子のことをおじいちゃんに尋ねてみたら、くわしゅうはようわからんがどっか行ってしもうたという話じゃ、との答えが返ってきた。ふと、あいつと瓜うり二ふたつの顔をしたリクのことが脳のう裏りをよぎった。あの子らの母親役じゃったローラちゃんはなあ、とおじいちゃんがもふもふ笑った。ようでけた立派なおなごやったからなあ。わしゃあの子らのことは心配しとらんのんよ。一人、見込みのあるのんがおってなあ。頭がええで、スカウトしてなあ、わしがおっ死ちぬ前に蘇そ生せい式教えたろうと思うとるんよ。おじいちゃんの話はちんぷんかんぷん気味だったけれど、なんとなく、ルカはリクと一緒にいるのではないかと思った。

　エルデン、か。

　僕はエルデンに帰るんだ。

　そのときがいよいよ迫せまってくると、思い出したくない、考えたくないことが次々と浮うかんできて、なんだかこのままもう少しジェードリに滞たい在ざいしていたいような気もしてきた。もちろん、やっぱ帰るのやーめた、なんて今さら言いだせるはずがないし、そんなことを本気で考えているわけでもなかった。

　ちゃんと考えなければならないことは、もっと他ほかにある。

　はっきりさせないといけない。

　これ以上、曖あい昧まいなままにはしておけない。

　エルデンに戻もどれば、絶対にあいつと顔をあわせることになる。こっちが望まなくても、あっちからやってくるだろうから、それはさけられない。

　何を言っても、殴なぐっても、蹴けっても、高層寺院の屋上から突つき落としても、懲こりずに近づいてくるから、もう勝手にすれば、と半分以上あきらめていた。

　いや、そうじゃない。

　違ちがう。

　何をしても、どうなっても、どういう扱あつかいをしても、拒きよ絶ぜつしてさえ、あいつが離はなれてゆくことはないのだろうと、心のどこかで思っていた。

　だって、実際、そのとおりだったから。

　ＳｍＣがらみの件があったときも、結局、あいつは土ど壇たん場ばでＳｍＣを裏切って、以前と同じように、というか、それ以上につきまとってくるようになったわけだし。

　おかげで、あいつの前でとんだ醜しゆう態たいをさらしてしまう羽目に陥おちいって。

　あいつの、おそらく他人には見せたくなかったのだろう、何か、そう、何かとしか言えない、何かを見てしまったりして。

　あいつの話を聞かされて。

　あいつに元気づけられたりして。

　僕はあいつが身近にいる現実をとことんまで拒きよ否ひしようとはしていなかった。知らず識らずのうちに受け容いれていた。だから、深く考えていなかった。気づかなかった。

　さぞかし浮かない顔をしていたのだろう。ユリカに心配されて、サフィニアにも気づかわれ、おじいちゃんが、ほんなにわしと別れるのがつらいんじゃったら、わしもエルデン行こうかのう、などと見当違いなことを言いだして、髭ひげが困っていた。髭は、隠いん居きよの身だった超ちよう高こう齢れいの師し匠しようがふたたび責任ある立場に就ついて、もう一働きしなければならない状じよう況きように心痛が絶えない様子だった。ただし、おじいちゃんのほうはといえば、現げん役えき復帰してからよりいっそう元気になって、きれいな僧そう服ふくのせいもあってか、百二十四歳という実じつ年ねん齢れいよりも三十歳か四十歳くらい若く見えた。冗じよう談だんだろうが、おじいちゃん自身、あと百年はいけそうだと言っていた。髭曰いわく、神しん殿でんの復興には少なくとも五年、これでも体てい裁さいが一応整うだけで、崩ほう壊かい前の威い容ようと機能を取り戻すまでには十年、二十年の月日がかかるらしいので、できることならなんとかそれまでがんばって欲しいもの

だ。ということは、次に髭と会うのはいつのことだろう。ユリカが髭の僧服の裾すそをつかんで、なかなか放そうとしなかった。お前が拙せつ僧そうの筋肉を必要とするならば、いつでも飛んでゆくゆえ、そのときは強く願うがよい。髭が微笑ほほえみながらそう言うと、ユリカは、バカ、と笑い返しながら、ようやく貸切の高速乗合馬車フライング・ワゴンに乗りこんだ。荷物とともに前部一階座席に足を踏ふみ入れてから気づいた。内装がやたらと豪ごう華かだった。それでいて、鼻につかないかんじで、ようするにすこぶる趣しゅ味みがよく、また、真ん中あたりのシートが取り払はらわれ、テーブルが設置されていて、その上には大量の豪ごう勢せいな料理が並べられていた。あとで御ぎょ者しゃに聞かされたところでは、他にも各種食材、珍ちん品ぴん名品等々がある者の指示によって運びこまれ、貨物室に積まれているという。やつの仕し業わざに違いない。

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。こんなことをするくらいなら、見送りにくればいいのに、嫌いや味みな男だ。クローディア。あまり話をする機会はなかったけれど、きれいな人だった。二人にもいつかまた会えるだろうか。根こん拠きょはないが、会えるような気がする。

　チーロ・パンカロが、そのうち遊びに行くかもしんねーからよ、そんときは頼たのむぜ、って、何頼むかっつーと、案内とかな、おもしれーとこ連れてってくれよな、みたいなことを義手を振ふり回しながら叫さけんで、カルロ・ボッシにたしなめられていた。坊ぼっちゃんはもう首ドン領ンなンですよ、そんな暇ひまあるわけないでしょうが。しばらくはやらなけりゃならないことが山積みです。ここを離れるなんて冗談じゃない。わーってるよォ、言ってみただけだろ？　マジでカルロはアレだよなァ、って何だよアレって、でも、坊ちゃんはやめろよな、と言い返したチーロに、申し訳ありません、坊ちゃん、と切り返してみせるカルロは誰だれかに似ていると、なんとなく、最初から思っていた。やっとわかった。秩ちつ序じょの番人のヨハン・サンライズだ。どうりで気にくわないわけだ。まあ、さすがにパンカロ・ファミリーの連中とは二度と会うこともないだろうから、どうでもいいけれど。

　ほんならなあ、達者でのう、とおじいちゃんが手を振ってくれた。髭はカタリに、しばらく拙僧がおらぬのだから死ぬでないぞ、と釘くぎを刺さしてくれた。チーロ・パンカロはパンカロ・ファミリーの連中に歌を歌わせて、太たい鼓こを叩たたかせ、ギターを弾

ひかせた。カルロ・ボッシのギターがやたらと上手で驚おどろいた。回転海豚いるかの従業員や宿しゆく泊はく客も外に出てきて、ちょっとした騒さわぎになった。馬車が坂道を走りだした。海が見えた。あの眺ながめは一生忘れられないだろう。

　ジェードリはみるみるうちに遠ざかっていった。

　ピンパーネルは窓からいつまでもジェードリを見ていた。

　カタリはトマトクンと一いつ緒しよになって寝ね息いきを立てはじめた。

　ユリカが淹いれてくれたお茶をサフィニアと三人で飲みながら、ジョーカーが用意したとおぼしき料理をつまんだ。どれも絶品だった。ユリカが、こんなものどうやって作ちゆくるのかしら、とため息をついたら、サフィニアが食材と調理法を説明しだした。聞いても、どうしぇわたしにはできないもの、と少しふくれっ面つらになったユリカがかわいかった。髭、早く帰ってくればいいね、と言ってみた。しょうね、とユリカは素す直なおにうなずいた。でも、トワニングはじゅっと神殿のことを気にかけていたから、かえってよかったのかもしれないわ。ああいう人だから、どこに行っても居場所を見ちゅけられなくて、初めて自分を受け容れてくれたのがお師匠しゃまで、自分の力を生かしゅことができたのが蘇しよ生しえい式しきで、自分を認めてくれたのが神殿の人たちで──だから、神殿を離れないといけなくなったときはしゅごくちゅらかったと思うの。きっと、いちゅかは戻もどらないといけなかったのよ。しょれがたまたま今になっただけなんじゃないかしら。だけど、Ｚじ０ゆ０□にもトワニングの居場所はあるし、いてくれないと困るし、いて欲しい人だから、しょのうち帰ってくるわ。

　そうですね、とサフィニアが目を細めた。

　髭とユリカの間にもいろいろあるんだろうなと思いながら窓のほうへ顔を向けると、ピンパーネルと目があった。ピンパーネルが微び笑しようを浮うかべたので、こっちも少しだけ笑ってみせた。

　ジェードリはどんどん遠くなっていった。

　当然のことながら、そのぶんエルデンが近づいてきていた。

　夜が深まっても寝ねつけなくて、寝しん台だいから起きだし、馬

車の二階最後部にある露ろ台だいに出た。車輪や馬ば蹄ていの音がうるさかったけれど、すぐに慣れてしまったし、手すりから身を乗りだすと、つめたい風が気持ちよかった。しばらく風にあたって頭を冷やしていた。

　どれくらいかかっただろう。

　ようやくポケットから、飾かざりリボン付きの白い小さな箱をとりだすことができた。

　間を置かずにリボンをほどいて、箱から中身を出した。光こう沢たくのある透すきとおった石と、きらきらした石でできた、薔ば薇らが象かたどられているヤラ・ナイヤの細工物だ。値段は九十八ダラー。でも、本当は九万八千ダラーだったらしい。サンブレイク・ホテル前のマルナカ商店でお土産みやげとして買った。薔薇の他ほかにも、ウミガメをベアトリーチェに、巻き貝をモリーに。薔薇は──自分用だ。お買得だったし、とにかくモノがよくて、きれいだし、かわいいし、一つくらい自分の部屋に飾るために買っておくのも悪くはない。むしろ、買わないと損だ。自分にそう言い聞かせた。

　この薔薇の細工物を手にとったとき、あいつの顔が思い浮かんだことなんて、忘れてしまおうとした。なかったことにしてしまいたかった。

　旅から戻ったら、あいつにさよならを言おうと決めていた。

　それしかないんだ。考えれば考えるほど、もうそうする以外にないと思う。



　どうして気づかなかったんだろう。気づきたくなかったから、考えようとしなかったのか。そうかもしれない。だって、覚えてる。ちゃんと覚えてる。あいつの姿。あいつの言葉。あいつの声。あれがキミでなければ、助けたりしなかった。キミだからだ。キミだから……！　キミを見捨てることなんてできなかった。べつに、だからどうしたと言うつもりはないヨ。キミは気にしなくていい。ボク

がやりたくてやったことだ。キミに責任はない。キミには見せたくなかった。知られたくなかった。知れば、キミはボクをもっと嫌きらいになるだろう。恰かつ好こう悪いところをサ。わかるヨ。キミのことなら、全部。見るな……！　男には仲間がいてネ……何人も、何十人も。男はしくじったんだ。自分の口から言いづらいことを、昔から知っている、心やすい仲間にだけ話した。しくじったんだ。しくじった。キミに責任はない。ちょっとした──ある出来事がきっかけで、仲間たちが動どう揺ようしはじめるまではネ。出来事。いつの間にか、四十八人。それが、一人いなくなって、一人抜け、また一人去って……男はヤケクソ気味に思ったものサ。最後にはどこまで減るだろう？　六人？　いや、あのときの六人のうち、二人、もう欠けた。どうして？　いなくなった。抜けた。去った。欠けた。出来事。責任。しくじった。あいつに助けられた。アンダーグラウンド。Ｄ７。地中砦アヴァシー。ＳｍＣ。あいつはＳｍＣを殺した。それからだった。あいつが目の前に現れなくなった。気がついたら、どういうわけかＳｍＣの手先になっていた。そして、そのＳｍＣを裏切った。それで、何もかもがもとどおりになった、かのように思えた。本当に？　本当にそうだろうか？　もしかして、もとどおりは僕だけじゃないのか？

　昼飯時ランチタイムのベティが泉セン里リで言っていた。

　たまたま今回は、土ど壇たん場ばで状じよう況きようがうまく転んだからよかったけど──いつかあなたとあたしたちを天てん秤びんにかけなきゃならなくなったら、あいつ、どうするのかしらね。

　その土壇場がくるまでに、あいつは何を失ったんだろう。

　僕のために、いや、僕のせいで、あいつはどんな目に遭あったんだろう。

　わからない。知ろうとしなかった。知りたくもない。

　だって、たとえば、カタリがあのまま蘇生式を受けられず、本当に死んでしまっていたら、なんて、考えただけで怖こわい。怖くてたまらない。

　もしきみがそんなふうに何かを、誰だれかを、失っていたとしたら、どうしよう。

　だから、知りたくないんだ。

知らないままでいたほうがきっと幸せなんだ。楽なんだ。

そんな僕に、あいつは懲こりずに、ためらわずに、まっすぐ目を見て言ったんだ。

キミはボクの太陽だ。闇やみ夜よを照らす月で、夜空を彩いろどる輝かがやく星だ。すべてをつつみこむ空だ。母なる大地で、地上をうるおす水だ。ボクの胸を焦こがす炎ほのおだ。キミはボクのすべてだ。キミがいない世界なんて、意味も価値もない。ボクはキミが拒きょ否ひしようと、たとえキミがボクを憎にくもうと、何度でも、何度でも、その機会があれば必ず救うヨ。

どうして。

なんでだよ。

重いよ。

重すぎて、無理だよ。

薔薇の細工物を握にぎりしめた。

このまま思いきり力をこめたら、壊こわしてしまえるだろうか。

でも、できない。

できそうにない。

だったら、捨てちゃえ。

走りつづける馬車の上から捨ててしまえば、拾うことは絶対にできない。

そうだ。

捨ててしまうことが、今の僕には必要なんだ。

これくらいできないで、断たち切ることなんてできるはずがない。

腕うでを振ふり上げて、一つ息をついた。

さあ、捨てるんだ。

　捨てちゃえ。

　捨てろ。

　捨てないと。

　捨ててしまわないと、僕は。

　──いったい、どうなるっていうんだ。

「うがー！」

　わけがわからなくなったので、叫さけんでみた。その大声を聞きつけてやってきたにしては、早すぎる。露ろ台だいへの扉とびらが開く音がしたので、慌あわてて振り向くと、月明かりの下もと、パジャマの上にガウンを羽織ったサフィニアが目をまん丸くしていた。そりゃあ、こんな真夜中に一人で奇き声せいを発している異常者の姿を目もく撃げきしてしまったら、誰だって驚おどろくだろう。

「マリア……どうしたの……？　何か、あった……？」

「え？　あ、や、ええと、これは、ほら、なんてゆうか、うん、ちょっと寝ねられなくて、それで、えっと、ストレス発散、てゆうか……」

「それだけ……？」

「な、なんで？」

「うん……」

　サフィニアはゆっくりと露台に足を進めてきて、すぐ隣となりで手すりにもたれかかった。

「わたしの、気のせいかもしれないけど……悩なやんでるみたいだったから……最近の、マリア」

「そ、そう？」

「なんとなく……だけど」

「へー。あー、そう見えてたんだ。うーん……」

「恋こいの……悩み？」

「はあぁっ？」

　思わずまた大声を出してしまった。もちろん、ここは全力全開で否定すべきだろう。だって、ぜんぜん違ちがうし。それなのに、どうしてか身体からだ中から力が抜ぬけていって、弱々しく首を横に振り、違うよ、と言うのがやっとだった。

「……そんなんじゃないよ。恋とか、僕にはわかんないしさ。縁えんなさそうだし。なくていいしね。そうじゃないんだ、ほんとに」

「わたしも……よく、わからないけど」

　サフィニアは胸に手をあてて月を見上げた。

「難しくて。自分に、素す直なおになろうとして……この気持ちが……何か、形をとろうとするけど、それがはっきりしなかったり……つかみきれなかったりして。でも……そこに、あることはわかるから。自分の……思いが」

「思い、かぁ」

「マリアは……ないの？」

「僕？」

「もし、あるなら……それは、大切にしたほうがいいと思う」

　銀色の髪かみと翡ひ翠すい色の瞳ひとみが月のしずくを浴びて、はっとさせられるくらいきれいだった。

　捨てられなかった薔ば薇らの細工物の感かん触しょくを確かめながら、ため息をつくしかなかった。

　こんなことなら、あいつとなんか出会わなければよかったのに。

　でも、あいつに救われなければ、僕はとっくにどこかでみじめに死んでいただろう。

　いつの間にか複雑に絡からみあってしまった糸をほどくことができれば、もっと事態は単純明快になって、自分の気持ちに正直にな

ることもできるかもしれない、なんて意味のない考えにとらわれかけて、我ながら甘すぎると自じ嘲ちようした。

　やっぱり、僕には無理だ。

　しょうがないんだよ。

　無理なものは無理なんだから。

　それがわからないきみのことなんて、嫌きらいじゃないけれど、好きじゃない。


fragments

1

　寝しん台だいに身体を横たえると、すかさず扉の上部にある四角い覗のぞき窓の覆おおいが開いて、そこから黒覆ふく面めんが顔というよりも覆面を覗かせた。

　連中は目の部分だけに穴が空けられた頭部をすっぽりと覆い隠かくす黒い覆面をかぶっているので、素顔はわからないし、いつも同じ灰色の服を着ている。何の誰だれそれと名乗るわけでもなく、そもそもまともに口をきくこと自体ないから、全部で何人いるのか知らないが、とりあえずまとめて黒覆面とでも呼ぶしかない。

「起きや。まだ就しゆう寝しん時間やないで」

　無視すると、黒覆面が扉を蹴けりはじめた。ぐおあんぐおあん。寝台と便器が備えつけられているだけであとは何もない、天てん井じようだけ高くて、縦も横も歩いて五歩きっかりの狭せま苦くるしいこの部屋中に響ひびき渡わたる、本当にひどい音だ。

　すぐに頭が痛くなってきた。

　耳をふさいでも、全身が小刻みに振しん動どうしているように感じられて気持ち悪い。

　感じられて。

　感じられる。

　感じる。

　だったら、心を閉ざしてしまえばいい。

　閉ざされた心は何も感じない。

　天井の真ん中に埋うめこまれた丸い物体が、片時も絶やすことなく発しつづけている青い光も気にならなくなる。

　刺し激げきという刺激に対して鈍どん感かんになって、瞼まぶた

が重くなり、ああ、眠ねむいといったらない。

「寝たらあかんっちゅうとんのやろ」

　扉が開く音がして、腕うでをつかまれ、無理やり引っぱり起こされた。

　目を開けて、ぼんやりと黒覆面を見た。

「ええか。寝んなや。寝よってもな、何度でも叩たたき起こしたるからな」

　どうして、と尋たずねても無む駄だだ。黒覆面たちは一方的に言いたいことを言いたいように言うだけで、何かきいてもどうせ答えてはくれない。

　黒覆面の手を振ふり払はらい、寝台に浅く腰こしかけて、後頭部から肩かたまでを壁かべにもたれさせる体勢になった。

　黒覆面は出ていった。

　目をつぶると、やがて心が勝手に閉じていった。

2

　くぐもった音が聞こえてきた。おそらく、扉とびらの向こうで黒覆面が別の扉を蹴る音だろう。しばらくすると、音はやんだ。

　部屋は一つではない。四つある。その一つ一つに、誰かが、何かが閉じこめられているのか。閉じこめられて。そう。閉じこめられている。

　いつからここにいるのか。

　もうどれくらいここにいるのか。

　どうしてここにいるのか。

　考えても意味がない。わからないからだ。わからない。何も。何

一つ。ここはわからないことだらけで、わからないことしかここにはなくて、足りないんだ、心こころ許もとないんだ、不安なんだ、苦しいんだ。

　拳こぶしを握にぎり固めて壁を叩いた。

　あまり強く叩くと、黒覆面に気づかれてどやされるから、そっと、何度も、何回も叩いた。

　もし壁の向こうに誰かが、何かがいるのであれば、ここに誰かが、何かがいることを知って欲しかった。自分が誰なのか、何なのかさえわからないから、せめて誰かに、何かに、自分がここにいることを知ってもらいたかった。

3

　黒覆面が部屋に入ってきて、革かわ手て錠じようをかけられ、両手を背中に固定されて、サンダルを履はくように命じられた。

「立て。検けん診しんだ」

　追い立てられるように部屋を出て、扉が四つ並んでいる薄うす暗ぐらい灰色の廊ろう下かを歩いた。突つきあたりを右に曲がって、その先の角を右に折れると、左手に扉がある。黒覆面が扉をノックしてから開け、中に入るように手て振ぶりでうながした。逆らわずに扉の向こうへと足を踏ふみ入れると、青い光が絶えることのないあの部屋よりもだいぶ広くて、さまざまなものであふれている白い部屋にたたずんでいる自分に気づいて戸と惑まどった。もう何度目だろう。この部屋に連れてこられるたびに味わう感覚だが、慣れることはない。背後で扉が閉まった。黒覆面は呼ばれるまで入ってこないから、検診が終わるまで、この部屋にいるのは二人と一匹だけだ。

　せんせいは部屋の一番奥に置かれている机の前で椅い子すに座って、何か書きものをしていたようだ。何でもかんでも紙や紙切れに書きとめて、それらを粘ねん着ちやくテープや小さな鋲びようで部屋中に貼はりつける癖くせがせんせいにはある。せんせいの机や、椅子や、壁や、棚たなや、何らかの装置や、四台ある寝しん台だい

をそれぞれ仕切るカーテンまで、よく見れば、黒い文字で何か書かれた四角い紙や手でちぎられた紙切れが一枚も貼られていない場所はほとんどない。

　ここはせんせいの部屋だ。黒覆面には医務室と呼ばれている。

　ようやく手を止めたせんせいが、上半身を振り向かせ、ああ、座って、と言うと、また机に向きなおった。何か思いついたら、ただちに、すべてを書き記しておかねばならないというのがせんせいの考えだった。

　時は一いつ切さいの仮借なく流れ去りゆく。我々はただ置き去りにされる一方だ。駆かけ去ってゆく時に追いすがろうとしても、追いつくことなどできはしないのだよ。見捨てられしものどもは色いろ褪あせてゆき、やがて潰ついえるのだろう。大事な記き憶おくさえもね。それゆえに、私は書き残すのだよ。一つとして忘れたくはないからね。

　いつか、せんせいがそんなことを言っていたような気がする。

　回転椅い子すに腰を下ろして、せんせいの書きものが終わるまでじっとしていた。

　せんせいは丈たけの長い白い衣類を身につけている。服だけではなく、せんせいは白い。髪かみの毛が、眉まゆ毛げが、睫まつ毛げが、肌はだが、唇くちびるまでもが、黒い目をのぞいて、何もかもが真っ白だ。この医務室も、せんせいが書く黒い文字と、まっ黒い一いつ匹ぴきの生き物以外は、ほとんどが白か透とう明めいに埋めつくされている。

「これでいい」

　せんせいは二枚の紙切れを机の抽ひき斗だしに貼りつけて、こちらに身体からだを向けた。紙切れに書かれた文字を読もうとしたが、不意に机の下から黒い毛に覆おおわれた尻尾しっぽのある小さな生き物が飛びだしてきて、そちらに気をとられた。

　生き物は床ゆかからせんせいの膝ひざの上へ、それから肩の上へと跳とび乗って、まん丸い身体を震ふるわせた。毛に埋うもれているだけなのかもしれないが、目も口も鼻も耳も見あたらない。やはり毛むくじゃらの手足の先には爪つめらしきものがあり、自由に動

かせるらしい無毛の尻尾は紐ひものようだ。ナジ、と、その生き物のことを、せんせいはそう呼んでいた。

「待たせてしまったね」

　うなずいてみせると、せんせいは唇を少しだけゆがめた。

「何か変わったことはないかい。たとえば、そう、体調が思わしくないとか」

　首を横に振った。

「よく眠ねむれないとか、気に病やんでいることがあるとか」

　もう一度、首を横に振った。

「本当に？」

　うなずいた。

　あったとしても、ない。どうでもいい。あってもなくても同じことだ。

「それならいいがね。ああ、手錠を外してあげよう」

　せんせいが抽斗を開けて鍵をとりだし、椅子から立ちあがって革手錠を外してくれた。

「服を脱ぬぎなさい」

　言われるままに服を脱いで、せんせいが指し示した寝台の上で横になった。

「目を閉じて」

4

　青い部屋にいる。

ずっとこの部屋にいる。

いつまでここにいるのだろう。

いつからここにいるのだろう。

どうしてここにいるのだろう。

わからないから、考えても意味がない。

寝台の上で膝を抱かかえて座っている。

身体に力が入らなくなって、横になる。

黒覆面が何か叫さけんで、扉とびらを蹴けりはじめる。

起きあがらなければと思うのだが、どうしても起きあがることができない。

黒覆面が部屋の中に入ってきて、力ずくで引っぱり起こされる。

いつしか青い光が弱まり、横たわることが許される。

そうでなくても眠くて眠くて仕方ないのに、なかなか寝ねつけない。

あの青い光のせいだろうか。それとも黒覆面のせいか。

ここにいるせいか。閉じこめられているせいか。

たまに医務室に連れてゆかれて、せんせいとナジに会う。

また部屋に連れ戻もどされて寝台に腰こしかける。

心が閉じてゆく。

もう閉じきっている。

どこにも行くところがない。

ここにいるしかない。

ここだけが自分のために用意された場所なのだろう。

僕は、

ぼくは、

ボクは、

ひとりだ。

ひとりきりだ。

ひとりぼっちだ。

弱まった青い光の中で、拳こぶしを握にぎり固めて壁かべを叩たたいてみた。

そっと、何度も、何回も叩いた。

あきらめてしまいそうになった。

もうやめようと思った。

こたえる音がした。

5

ボクはひとりなのだろう。

ひとりぼっちなのだろう。

ボクはひとりきりでここにいる。

ボクが知っていることはただそれだけだ。

ボクは自分が何ものなのかさえ知りはしない。

誰だれか教えてくれないか。

些さ細さいなことでもいい、何か手がかりをくれないか。

壁の向こうにいるのだろう何ものかは、いつもこたえてくれるわけではなかった。二回に一回、いや、三回に一回、せいぜいその程度で、あちらがこちらに呼びかけてくることはなく、ときには、長い、長い間、応答がないこともあった。それでも、これで最後にしようと心に決めて壁を叩くと、どういうわけか何ものかは壁を叩き返してくれた。まるで、どれだけの厚みがあるのかすら定かではないこの壁を通して、気持ちが伝わっているかのようだった。

気がつくと、その姿や声を想像していた。

キミは今、何を考えているだろう。どうしているだろう。本当は迷めい惑わくがっているのではないか。そんなことはないはずだ。そうであれば、とっくにこたえることをやめているだろう。

壁の向こうにいるキミに会ってみたい。

会えるものなら、いつか会いたい。

医務室に連れてゆかれるとき、じっと扉を見つめた。

この扉の向こうで、キミは息を殺して足音に聞き耳を立てているかもしれない。

そう考えると、たまらなかった。いっそ叫びたかった。

ボクはここだ！

そこにいるキミに会いたい！

キミは知っているはずだから。ボクが、ボクという存在が、ちゃんとここにいるということを、ボクをモノのように扱あつかう黒覆面や、親切だけれどその裏側にあるものをうかがわせず、結局何も教えてくれないせんせいや、いるだけのナジとは違ちがい、キミなら証明してくれるように思えてならないから。

ボクには重荷だった。

これ以上、自分自身を保っていられる自信がなかった。

何しろ、ボクにはボクが何ものなのかわからなかった。

ボクはボクだと大声で言い立てたところで、誰も耳を貸さなかっ

た。

　キミだけだった。

　声にならない声にこたえてくれるのはキミしかいなかった。

　キミに会いたい。

6

「ボク以外にも、いますか。部屋に、閉じこめられている──」

　検けん診しんのとき、思いきってせんせいに尋たずねてみた。

　せんせいは白い手をのばしてきた。頭を撫なでられた。

「申し訳ないが、私の口からは言えないのだよ。たとえ知っていたとしても、教えてあげることはできない」

「そうですか」

「代わりに──そう、その代わりと言ってはなんだが、今日は、きみにおもしろいものを見せてあげよう」

　せんせいは身をひるがえして、医務室の壁の一面をほとんど埋うめつくしている大量の紙切れを剝はがしはじめた。しばらく黙だまって見ていると、よければ手伝ってくれるかな、と求められた。うなずいてせんせいの隣となりに立ち、次々と手て渡わたされる小さな鋲びようを右手の上に、紙切れを左手の上に載のせていたら、受けとりそこねた鋲が一つ、床ゆかに落ちた。拾おうとした拍ひよう子しに、右手を握りしめてしまったらしい。痛みを覚えて手を開くと、掌てのひらがいくらか傾かたむいていたせいで、残りの鋲すべてがざらざらと床に降った。掌にはいくつもの赤い小さな玉が浮うきでていた。せんせいが、大変だ、と手首を握って赤い玉を黒い目で見つめた。

「血が出ているよ。手当てしなければならないね」

「ごめんなさい」

「いや、きみのせいじゃないよ。どういう点に注意すべきか、前もって指示しなかった、私の落ち度だよ」

　回転椅い子すに座らされて治ち療りようを受けた。痛いかい、とせんせいにきかれて、うなずくことにためらいを覚えた。そのうち手当てが終わり、今度は失敗しないように用心してせんせいの手助けをした。間もなく真っ白い壁の一面が剝むきだしになって、せんせいの机の上は大量の紙切れに占せん領りようされた。鋲のせいで、よく見ると壁は穴だらけだったが、せんせいはかまわず机の下から何かを引っぱり出してきた。それは箱形の鞄かばんのようで、その中身はやはり箱形の物体だった。せんせいは箱形の物体を机の上に載せようとしたが、紙切れの山が邪じや魔まで果たせなかった。椅子を使ってはどうかと提案すると、せんせいは、ああ、そうだね、と唇くちびるの両りよう端たんをつりあげてみせ、最終的にはせんせいの椅子を上限まで高くして、その上に分厚い書物を五冊重ね、さらにその上に箱形の物体を設置する形で落ちついた。

　さあ、きみは椅子に座りなさい、と命じられたので、そのとおりにすると、せんせいは医務室の照明を消してしまった。

　かすかな光すら射ささない完全な暗くら闇やみが訪おとずれた。

　せんせいの声がした。

「おもしろいだろう？」

7

　闇だけでなく、何かを見たように思うのだが、何も覚えていない。

　遠い、遠い、遥はるか遠い昔の出来事だからか。

　本当は昔の出来事なのかどうかも判然としない。

　ボクの手に握にぎられているものは、いつも今だけだ。

その今も、すぐに指の合間からすり抜ぬけていって、とてつもない速度で遠ざかってゆき、後ろ姿さえ見えなくなってしまう。

紙切れを、ボクにもください、とせんせいに頼たのんでみた。

忘れてしまわないように、すべてを書きとめておきたかった。

それはできない、とせんせいは首を横に振ふった。

私の判断で、勝手にきみに何かを与あたえることはできないのだよ。

そのかわりに、私がきみの話を聞いて、紙に書きとめておいてあげよう。

せんせいが紙切れや紙に書きつづった文字の羅ら列れつを見せてもらった。さまざまな形の記号らしきものや文字らしきものが、繋つながったり、ばらばらに並べられていたりしたが、読むことはできなかった。

古い言葉だからね、とせんせいは言った。

たしかに、医務室を半ば埋めつくしている紙切れや紙には、一枚の例外もなくびっしりと何か書きこまれているが、ごくまれに見覚えのある文字が交まじっている程度で、どれも意味不明だった。

私の記き憶おくは私だけのものだからね、とせんせいは唇の両端をつりあげてみせた。所しよ詮せん、私以外には読み解くことができないのだよ。

だったら、ボクの記憶はどこにあるのだろう。

自分の手を見つめた。腕うでを見つめた。胴どう体たいを見つめた。脚あしを見つめた。足の指を見つめた。でも、顔はわからない。自分で自分の顔を見るすべはない。

せんせいに尋ねた。

ボクはどういう顔をしていますか。

せんせいの白い手がのびてきて、頭を撫でられた。

きれいな顔をしているよ。まるで、よくできた人形のようだ。人形。がらんどうの心にむなしく響ひびく言葉だった。人形。ボクは人形。部屋に連れ戻もどされてから何度も呟つぶやいた。黒覆面が扉とびらを蹴けるのもかまわず繰くり返し呟いた。青い光が弱まるまで呟きつづけた。横になることもなく呟いた。寝しん台だいの上で膝ひざを抱かかえて呟きつづけた。疲つかれて、疲れきって、疲れ果て、壁かべに後頭部を押しつけて、天てん井じようを見上げながら呟いた。拳こぶしを握り固めて壁を叩たたこうとした。何度も途と中ちゆうでやめた。ついに我が慢まんしきれなくなって、一度だけ強く叩いた。

キミはそこにいますか。

8

「よろしかったのですか。所長みずからお運びいただいて」

「かまわないよ。ここの仕事は意外と暇ひまでねえ。俺が手ずからやらなけりゃあならないことは実際たいしてないんだよ」

せんせいに所長と呼ばれた男は、白地に黒い斑はん点てんがある細身のズボンを穿はいて、赤い上着を羽織っているが、その下には何も身につけていないため、奇き妙みようになめらかな首から腹までの素す肌はだがあらわになっていた。艶つやのある男の黒くろ髪かみはまっすぐ肩かたまで届いていて、左右に裂さけた薄うすい唇は亀き裂れつのようで、禍まが々まがしい輝かがやきを宿した双そう眸ぼうはあくまで不ふ穏おんだった。

「さあて、気分はどうだ、４２８」

気分。４２８。所長。わからない。検けん診しんだと思っていた。医務室まではいつものように黒覆面に連れてこられた。おかしなことはあった。革かわ手て錠じようをかけられなかった。せんせいの検診は一通り受けた。終わったあと、いつもの白っぽくて飾かざり気のない服ではなく、白い肌着と靴くつ下した、靴、それからポケットのついた青い上着とズボンを手て渡わたされて、それらを身につけるようせんせいに指図され、そのとおりにした。その直後

だった。扉が開いて、黒覆面ではない男たちが医務室に入ってきた。所長はその中の一人だった。回転椅子に腰こしを下ろしたまま動けないでいると、所長が目の前まで歩いてきて言った。さあて、気分はどうだ、４２８。

「ああ、まだよくわかってないのか」

　所長は鬼き気き迫せまる両りよう眼めを細めて、薄い唇くちびるをゆがめた。

「４２８というのはお前のことだよ。今までは名前がなかっただろう。閉へい鎖さ房ぼうにいるかぎりはとくに必要ないからねえ。だが、一いつ般ぱん房に移るとなれば、名無しの権ごん兵べ衛えじゃあいろいろと不便だから、そうもいかない。というわけで、お前は今後４２８と呼ばれることになる。四号房の二十八番目だから、４２８。簡単でいいだろう？」

「所長、どうか順を追って説明してあげてください」

「所長、椅い子すを」

　ほぼ同時だった。所長に付き従ってきた二人の男が別々のことを言って、そのあと顔を見あわせた。

　一人は眼鏡めがねをかけていて、黒覆面の服とよく似た灰色の衣類を身にまとい、小こ脇わきに何か抱かかえている。

　もう一人の鉤かぎ鼻ばなで髪と目が灰色の男は、縦たて縞じまの上下を着ていて、所長のすぐ後ろまでせんせいの椅子を引きずってきたところだった。

　眼鏡の男が小首を傾かしげてみせると、鉤鼻の男は椅子の背もたれをつかんでいる手に力をこめて顔をそむけ、眉み間けんに深い縦たて皺じわを刻んで舌打ちをした。

　所長は二人を見比べて、息を吐はきながら肩をすくめた。

「どうも俺の秘書は新任の副所長が気に入らないらしくてねえ」

「私は、べつに」

　秘書らしい鉤鼻の男がうつむき加減で抗こう弁べんしようとした

が、所長は許さなかった。

「口答えするんじゃないよ。生意気に。秘書の分際で。お前ごときが」

「申し訳ありません」

「謝ればすむと思ったら大おお間ま違ちがいだよ。現実ってやつはねえ、砂糖菓が子しみたいに甘くはないんだ。それどころかほろ苦い、ときには苦すぎて顔をしかめるだけじゃあ足りず体調どころか頭の出来まで悪くなって、何もかもぐだぐだになっちまうことさえあるんだよ。最初から底そこ抜ぬけに頭が悪すぎるブワァカには無関係だろうが。まあ──」

　所長は顎あごをしゃくって秘書を下がらせ、椅子にどっかと腰を下ろして脚を組んだ。

「そうはいっても、俺は分別のあるアバンギャルドで立派な大人アダルトだから、ここはかわいい秘書と新しい副所長二人ともの顔をきっちり立ててやるわけだがねえ。偉えらいだろう？　ようするに、これが所長の仕事というものさ。ちんけな仕事だよ。おい、あれをよこせ、副所長くん」

「はい」

　新任の副所長だという眼鏡の男が、所長が差しだした右手の上に何かを載のせた。それは副所長が持っていたもので、紙の束を二枚の厚紙で挟はさみ、紐ひもか何かで綴とじてある。医務室にも同じようなものがたくさんあり、せんせいはそれらをファイルと呼んでいた。所長は副所長から手渡されたファイルを開いてぱらぱらとめくりながら目を通していたが、やがて眉まゆをひそめて閉じてしまった。

「なんだか面めん倒どうだねえ。話して聞かせないといけないことが山ほどあるじゃないか。どうしてこの俺がこんなことをしなけりゃならないんだ」

「ご自分で言いだされたことです」

「うるさいよ、お前は。たかが秘書のくせに、俺に意見するつもりか。百年どころか一万年早いんだよ。いや、早いも遅おそいもない、永遠に駄だ目め、駄目、駄目、ノーグッドだ」

「申し訳ありません」

「なんでしたら」

　所長に叱しつ責せきされた秘書が深々と頭を下げている間に、すかさず副所長が申し出た。

「僕が代わりにやりましょうか」

「ほおォ。忠義面づらするだけで無む為い無策無能無ぶ粋すいの我が秘書と違ってなかなか気が利きくじゃないか、副所長くん。俺は嫌きらいじゃないよ、そういう便利屋的な精神構造の持ち主はねえ、何しろ、パシリに最適だ」

「お褒ほめにあずかり光栄です」

「だが、あまりこびへつらってばかりいると、猜さい疑ぎ心しんという名の鋭するどい針を俺のナイーヴな心に突つき刺さすことになって墓ぼ穴けつを掘ほる羽目になりかねないよ」

「ご忠告痛み入ります、所長。心します」

「よかろう。あとはお前に任せる、副所長。でも、そうだねえ、一応、自己紹しよう介かいくらいはしておこうか」

　所長が首の骨をボキボキ鳴らしながら、身を乗りだしてきた。無色透とう明めいのはずなのに、濃こく濁にごった色がついているかのように感じられる空気が押しよせてきて、息苦しくなった。

「俺はこのアサイラムの所長、ゼックス・ツィッファーだ。４２８、このあと副所長が説明するだろう諸しよ事じ項こう以外に、お前が知っておくべきことが一つだけある。それは何かというとだねえ、このアサイラムは俺の王国だ。このアサイラム及およびこのアサイラムに属する物、人間、すべては俺の所有物であり、俺の一部でもあるから、それらが傷ついたり傷つけられたりすることは、俺にとっておォーいなァーる悲しみであり、痛みだ。俺は我が慢まんするのが苦手だからねえ。俺に我慢なんか強しいるんじゃないよ？　そのためにはどうするべきか、どうしたらいいか、考えろ。イマジネーションを働かせろ。お前が考えることはザッツオールそれだけでいい。べつに間違ってもいいんだよ。そのときは矯きよう正せいしてやるからねえ。お前がちゃあんと正しい答えに行きつくまで、何度でもだ。いいかい？　わかったね？　返事はどうし

た？」

「はい」

「お前は素す直なおだねえ。かわいらしい面ツラも俺好みだ。４２８、ありがたく思うがいい。どうやら俺はお前のことを愛してやれそうだよ」

　我知らず右手が動いて、自分の胸のあたりをまさぐった。まるでその愛とかいうものを探そうとでもしているかのようだったが、見つかる気配はなかった。

　当然だ。もしそれがそこにあるのだとしても、それが何か知りもしないのだから、探しあてられるはずがない。

「何だ、４２８、お前、愛を知らない憐あわれなこどもなのかい？」

　所長が音もなく椅い子すから立ちあがった。

　背が高く、かなり肩かた幅はばが広いわりに異様なほど腰こしの細い男がかがみこんできて、耳みみ朶たぶにその吐と息いきがかかった。

「愛とはねえ」

　異様に熱い息だった。

　それでいて、凍こおりついてしまいそうなほどつめたくもあった。

「与あたえることだよ。勘かん違ちがいしやすいが、決して間違えちゃいけないのは、愛は与えられるものでも、求めるものでもないということだ。ただしねえ、いいかい、××××」

　肌はだが粟あわ立だった。

　熱くてつめたい息のせいかと思った。

　違う。そうじゃない。

　今、この男はボクを何と呼んだ……？

「よォく覚えておけ、４２８」

　そう。

　４２８。

　それが自分の名だ。

　この男に、アサイラムの所長に、ゼックス・ツィッファーに与えられた名前だ。

「与えることの本質は、つまり本当の愛は、愛の本体は、愛の本ほん性しようは、惜おしみなく奪うばうものなんだよ」

　所長は４２８の両肩をつかんで、ゆっくりと首を回しながら舌なめずりした。

「しかし、こうして見ると、まるでやたらと出来具合のいい人形みたいだねえ、お前は。歯は応ごたえがなさそうなぶん、かえっていじめ甲が斐いがありそうだし、その愛らしい顔に傷がつかない程度に、せいぜいみんなにかわいがってもらうがいいよ」

　人形。

　ボクは、人形。

　そう言われたのは初めてではないような気がする。

　いつか、誰だれかに言われた。

　所長は眼鏡めがねの副所長にファイルを渡わたすと、鼻歌を歌いながら踵きびすを返した。

　鉤かぎ鼻ばなの秘書は引き離はなすことのできない影かげのように所長に従って医務室から出てゆき、副所長が一人だけ残った。

「━というわけで、ここからは僕が。ああ、申し訳ありませんが、せんせいは外していただけませんか」

「私がいると、何か不都合でも？」

　せんせいは少し目を見開いて副所長を見た。声こわ音ねもやや硬かたかった。どうやらせんせいは医務室から出てゆきたくないよう

だが、副所長はこともなげに、ええ、とうなずいた。

「僕とあなたでは職分が違うでしょう。あなたの仕事は彼を診しん察さつして何か問題があれば対処することで、一いつ般ぱん房ぼうに移る彼に何か教えてあげることではないはずです」

「それはそうですが」

「でしょう？　それにね。僕は誰かに監かん視しされながら仕事をするのがあまり好きではないのですよ。ただ好きではないというだけの話なのですが、僕の要よう請せいに従っていただけると非常に助かります」

「監視しているつもりなどありませんよ」

「そうですか。でしたら、少々席を外していただいても、とくに問題ないのでは？」

「わかりました」

　せんせいは両手をあげてみせ、唇くちびるの両りよう端たんをつりあげて首を縦に振ふった。

「ただし、急きゆう患かんが出たらここを使います。それも私の職分ですから、問題はありませんね？」

「もちろんです。ご協力感謝します」

「とんでもない」

　せんせいに頭を撫なでられた。

　ナジを肩にのせて医務室から出てゆくせんせいの後ろ姿を目で追いながら、さっき所長に４２８ではない別の名で呼ばれたように感じたのは、やはり気のせいだろうと考えていた。

　思い出せないからだ。４２８は何と呼ばれたのだったか。呼ばれたような覚えがあるだけで、それ以上のことはわからない。

　人形。人形と言われたような気がする。あくまで気がするだけだ。今でも、何かが喉のどの奥のほうに引っかかっているような感覚はたしかにあるのだが、もし本当に引っかかっているとしても、

すでにそれは失うせつつあった。

「それでは、始めましょうか」

　副所長がせんせいの椅子に座ってファイルを開きかけ、途と中ちゅうで手を止めた。

「ああ、その前に、そうですね、所長の言い方を借りれば、あなたが知っておくべきことが、いえ、あなたに覚えておいていただきたいことが、二つあります」

「はい」

「やだな。はい、なんてよしてくださいよ」

「どう答えればいいですか」

「自分で考えてみてください」

「自分で」

「そうです。自分で」

　副所長はファイルを膝ひざの上に載のせて、じっと４２８を見つめている。

　考えろと言われたので考えようしているのだが、何を考えればいいのか判然としない。

　自分で、考える。

　疑問があれば、せんせいに尋たずねた。せんせいが答えを教えてくれることはめったになかったから、あとは忘れるまで放ほうっておいた。

　考えたところで、どうせ答えが出るわけでもない。

　たとえ答えが出たとしても、何が変わるわけでもない。

　そうして４２８は、たくさんのものを忘れてきたのだろう。

　いっそ、自分が自分であることまで忘れてしまえたら、もっと楽かもしれない。

　そうすれば、キミの返事を期待しながら壁かべを叩たたいて、うなだれることもない。

「まあ、いいでしょう」

　副所長がファイルをぽんと叩いて、右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直した。

「少しずつ慣れてゆけばいい。あまり急ぎすぎるのもよくありません。そうだ。あなたに覚えておいてもらいたいことが二つあるという話でしたね。一つは、あなたの名前です」

「……名前？」

「ええ。４２８はあなたの名前ではありませんからね。ただの番号です。今後、係員たちはその番号であなたを呼ぶでしょうし、あなたが名乗らなければ、仲間たちもあなたをその番号で呼ぶでしょうが、それではあまりにも味気ない」

　副所長は不意に眼鏡を外した。

　静かな黒い目だった。せんせいの目と同じ色だが、まったく違ちがう。比ひ較かくする対象が目の前に現れて、ようやくわかった。真っ白いせんせいという存在の中で、そこだけ底知れないほどまっ黒いあの瞳ひとみは、見る者を不安にさせる。せんせいの目には、向かいあっても、どれだけ近づいても、４２８の姿が映らないからだ。何一つ映さず、ただひたすら黒々としている。

　副所長の目はそうではない。

　ひっそりと凪ないでいる黒い双そう眸ぼうの中に、誰だれかがいる。

　ボクだ。

「思い出してください」

「おもいだす」

「そうです。あなたは知っているはずです」

「しっている」

「ええ。あなたはただ、忘れているだけですよ」

「わすれる」

「だから、思い出してください」

「おもいだす」

「そう。あなたの名前を」

　アジアン。

「はい」

　副所長がうなずいた。

「あなたはアジアンです」

　囁ささやくような声だった。

　それなのに、すっと胸に沁しみこんできて、見る間に深まり、どこまでも広がっていった。

「ボクは……アジアン」

「そうですよ」

「ボク、が」

「忘れないでください、アジアン。あなたの名前を。あなたがあなたであることを」

「ボクが……ボクで、あることを」

「そうです」

「ボクは、アジアン」

「ええ」

　副所長は眼鏡をかけなおし、唇くちびるの両りよう端たんをほんの少しだけつりあげて、目め許もとをゆるめ、微笑ほほえんでみせた。

　ずっと視界を遮さえぎっていたものがあって、それが今、消え失うせたかのようだった。

　唐とう突とつに思いついた。

「ボクは」

「はい」

「ボクは、会ったことがありますか。いつか。どこかで。あなたに」

「そうですね」

　副所長はファイルの上で両手を組みあわせて首を傾かたむけた。

「僕の名前を一度で覚えることができたら、答えてあげてもいいですよ」



　前を行く黒覆面はもう黒い覆面をかぶっていないから、元黒覆面とでも呼ぶしかない。覆面の代わりに黒い帽ぼう子しをかぶっている元黒覆面と同じ恰かつ好こうをした者が、このアサイラムには大勢いるようだ。

　とりあえず、医務室を出てから十字廊ろう下かを通って一いつ般ぱん房ぼうにたどりつくまでの間に、元黒覆面をふくめて八人見かけた。彼らは廊下と廊下とが交わる場所にある格こう子し状の鉄てつ扉ぴに配置されていて、元黒覆面の要よう請せいに従い、腰こしに吊つるしている鍵束から一本の鍵を選びとって解かい錠じようし、鉄扉を開ける。元黒覆面が、おおきに、とアジアンを連れて開けられた扉を通り抜ぬけると、ああ、とか、ご苦労さん、とか、短い言葉を返しながら扉を閉め、すぐに施せ錠じようする。それがこのアサイラムで係員と呼ばれている彼らの役目らしい。元黒覆面も係員の一人だ。閉鎖房がらみの仕事をする間、係員は黒い覆面をかぶることになっているのだという。閉へい鎖さ房に収容されている者と不必要な会話をすることも許されない。その他、従うべき多くの規則が係員にはある。係員たちに監かん視しされ、管理されている者たちもそれは同じだ。たぶん結構大変やで、お前じぶん、慣れるまではな、と元黒覆面に言われた。閉鎖房は閉鎖房で、一人っきりやし、つまらんやろけど、楽っちゅうたら楽やからな。退たい屈くつか、きっつうてめんどうか、どっちがええか、やな。

　意味のない選せん択たくだ。そもそも選択することなどできはしない。

「この先が一般房や」

　元黒覆面が顎あごをしゃくって前方の扉を示した。扉の前には大おお柄がらで猪い首くびの係員が立っていて、元黒覆面とアジアンが目の前までくると、そっくり返って、ふん、と鼻を鳴らしてみせた。

「そいつが例の４２８かよ。閉鎖房を出た途と端たん、よりにもよって四号房たァなァ。ご愁しゆう傷しよう様さまってやつだぜ」

「くだらんことくっちゃべっとる暇ひまがあったら、さっさと開けんかい」

「何がくだらねェんだ。俺ァ親切心から新入りに忠告してやってんだぜ？　何しろ、四号房の房長はあの４０１だからなァ。気にくわ

ねェやつだと見なされちまったら最後、死んだほうがマシだって目に遭あわされる。そうなってからじゃァ遅おせェだろうが」

「暴力行こう為いは懲ちよう罰ばつ対象やんか。お前じぶんら、黙もく認にんしとんのかい」

「やられたほうが誰にやられたか口を割ろうとしねェんだから、しょうがねェ。それになァ、閉鎖房ばっかりで楽してるてめぇらと違ちがって、いろいろとあんだよ。こっちはなァ、大勢相手にしてんだからよ、それなりのやり方ってのがなァ」

「わしかてやりとうてやっとるわけやないわ。それこそしゃあないやろ。わしらは上の命令どおりに動くしかあらへんのやさかい」

「異論はねェよ。で、その４２８の上に直接立つことになるのが、４０１ってわけだ」

　猪首の係員はこもったような笑い声を立てながら解錠して扉を開け、両手を広げて少しだけ腰を屈かがめた。

「ようこそ、一般房へ。この先が安住の地になるか針のムシロになるかはてめぇ次し第だいだ。せいぜい気張ることったぜ。何しろ、俺らの仕事はてめぇらに規則を守らせることで、てめぇらの命を守ってやることじゃァねェからなァ。てめぇらが死のうが生きようが、基本的には知ったこっちゃねェ」

「身も蓋ふたもない言い方やな」

　元黒覆面が苦く笑しようまじりのため息をついて扉をくぐった。否定しなかったということは、元黒覆面も猪首の言い分が間違いだと考えているわけではないのかもしれない。

　元黒覆面のあとを追って一般房に足を踏ふみ入れると、正面は壁かべで、左右に廊下がのびていた。元黒覆面は左へ進んだ。灰色の壁に挟はさまれた天てん井じようの高い廊下にひとけはなかったが、次第に複数の声らしきものが聞こえてきた。後ろで扉が閉まってゆく音がした。振ふり返ると、猪首の係員が途中で手を止めて、顔をゆがめてみせた。アジアンに何か伝えようとしているのだろうか。わからなかった。

　廊下は右に折れていて、突つきあたりの左手には格子状の鉄扉で隔へだてられた小部屋があった。

　小部屋の中には机と椅子が置いてあり、一人の係員が背中を丸めて座っていた。元黒覆面が扉を指で叩たたくと、その係員は無言で立ちあがり、扉を開けて廊下に出てきた。係員は立ってもひどい猫ねこ背ぜだった。

「聞いとるやろ。こいつが４２８、四号房の新入りや」

「ああ」

　猫背の係員は元黒覆面の言葉に微かすかにうなずいて、アジアンに顔を向けた。細い目だった。薄うすい唇くちびるが何か物言いたげに動いたが、結局、猫背は喋しゃべらずに廊下の先へと足を進めた。足音を立てないで歩く男だった。

　そこから先は、右側にやはり格子状の鉄扉が四つあって、声はその向こうから聞こえてきていた。

　猫背は一つ目の鉄扉を通りすぎ、二つ目も素す通どおりした。鉄扉の先は廊下よりもやや幅はばの広い通路になっていて、その両側に小部屋が並んでいるようだ。どの鉄扉にもアジアンと同じ服を着た男たちが群がって、こちらに視線をそそいでいる。声をかけてくる者もいた。おい、こっち見ろよ。おい。新入り。うへっ。すげえぞ。別べつ嬪ぴんじゃねえか。男だろ。かまやしねえよ。あれならぜんぜんいけるぜ。だな。こっち向けって。よおく顔見せろよ。おい。奇き声せいを発する者もいた。口笛を吹ふく者もいた。格子状の鉄扉を両手で叩く者もいた。床ゆかを踏ふみ鳴ならす者もいた。前を行く猫背の係員とアジアンを挟みこむ恰好で後ろについた元黒覆面が、やかまし一てかなわんのう、と呟つぶやいた。それを聞きつけたのか、三つ目の扉にさしかかったあたりで、おい、やかましいだとよ、静かにしろよ、静かによう！　係員様のおおせだぞ、静かにしろって！　と誰だれかが大声で叫さけんだ。笑いが起こった。その瞬しゅん間かんだった。猫背がベルトから棒のようなものを抜ぬいて、それで鉄扉を殴おう打だした。鉄扉にほとんど身体からだを押しつけるようにしていた何人かの男たちが飛びのいた。廊下が静まりかえった。片時の静せい寂じゃくだった。猫背が棒をベルトに戻もどして歩きだし、三つ目の扉の前を行きすぎると、男たちはまた騒さわぎはじめた。

　あかん、わしには向かん部署や、と元黒覆面がため息をついた。

　猫背は相変わらず口をつぐんだまま何も言わず、四つ目の鉄扉の

前で立ち止まった。

　その鉄扉は、前の三つとは様子が違っていた。静かだ。鉄扉のそばには誰もいない。無人なのか。いや、人の気配はある。中が見える位置までくると、小部屋の中にある二段寝しん台だいに寝ねそべったり腰こしかけたりしている男たちの姿が目に入った。こちらに顔を向けている者もいるが、そっぽを向いている者も多い。小部屋から出ている男は三人だけだった。

　一人は通路の一番奥に置かれた椅子に腰かけて膝ひざに肘ひじをつき、うつむけた顔の前で手を組みあわせていて、あとの二人はその両りよう脇わきに立っている。

　猫背が腰の鍵束から鍵を選びとって解かい錠じようし、扉を開けると、脇の二人がゆっくりとこちらを見た。

　右の男は禿とく頭とうで眉まゆがなく、三角型の顎あご鬚ひげを生やし、黒くろ縁ぶちの眼鏡めがねをかけている。かなり背が高くて肩かた幅はばも広く、厚みもあるが、頭が小さくて引き締しまった身体つきをしているので、妙みように縦に長く見える。

　左の男も右の男にはだいぶ劣おとるものの、それでも堂々とした体たい軀くの持ち主だ。肌はだが黒く、目も、ごく短い髪かみの毛も黒いので、色白で頭とう髪はつのない右の男とは好対照をなしている。

　椅子に座っている男は依い然ぜんとして顔を上げようとせず、髪の毛が白いことくらいしかわからない。せんせいの髪のように真っ白ではない、ほんの少しだけ黄みがかった白はく髪はつだ。アジアンと元黒覆面を引き連れた猫背が目の前まできても、男は身動き一つしなかった。

「４０１。新入りの４２８だ」

　猫背が低くかすれた声でそう言うと、ようやく男の肩がわずかに上下したかに見えたが、それだけだった。

「面めん倒どうを見てやれ」

「承知した」

　猫背に答えてみせたのは、椅子に座っている男ではなく、黒い肌

の男だった。元黒覆面に、お前じぶんが４０１なんか、ときかれると、黒い肌の男は、いえ、と首を横に振ってみせた。元黒覆面はそれ以上何も言わなかった。猫背も用は終わったとばかりに踵きびすを返した。元黒覆面も猫背に従い、二人が出ていって扉を閉めるまで、アジアンは椅子に座っている男の頭部をじっと見つめていた。他ほかにどうすればいいか見当もつかなかった。誰も、何も言いださなければ、いつまでもそうしていたかもしれない。

「俺は、リー」

　黒い肌の男が半歩前に進みでてきて、わずかに首を傾かたむけた。

「リー・ブラックだ。番号は４０２。房ぼう長ちよう補ほ佐さを務めさせてもらっている。そっちのでかいやつはレイジ。番号は４０９で、同じく房長補佐だ。係員は俺たちを番号で呼ぶ。自分以外の番号も極力覚えることだ。４２８、お前、名前は」

「アジアン」

「それなら俺たちはお前をアジアンと呼ぶ。なかには名乗らないやつもいるんでな」

「名乗らない……どうして」

「さあな。俺の知ったことじゃない。そんなことはどうでもいい。アジアン、今、お前が身をもって知らなければならないことは別にある」

　リーがアジアンの後方へと視線を送った。誰かへの合図だったのかもしれない。後ろで人が動く音がした。振ふり返ると、小部屋から出てきたとおぼしき何人かが扉の前に壁かべを作っていた。不意に圧力のようなものを感じて、前に向きなおったアジアンのすぐ脇をレイジが通り抜けていった。背後に回られた。何をしようというのだろう。わからないが、どうやら彼らは何かしようとしているようだ。

　椅子に座っている白髪の男が顔の前で組んでいた手をほどいて、息を吐はいた。

　前に屈かがめていた上半身を起こし、骨を鳴らしながら首を回して、ちらりとアジアンを見た右目は青く、左目は黒かった。

　色だけではなく、顔全体が一見してそれとわかるほど左右非ひ対たい称しようだ。

　ひどく歪いびつだ。

「４２８。アジアン、とかいったか」

　その声までひずんでいた。

　答えようとしたら、頭頂部に重い衝しよう撃げきを感じて腰こし砕くだけになった。何が起こったのかわからなかった。とにかく、立っていられない。アジアンは床ゆかに膝をついて、倒たおれかけた身体をかろうじて両手で支えた。返事は、と後ろから声が聞こえてきた。レイジの声だろうか。

「４２８」

　椅子に座っている男がもう一度繰くり返した。

「アジアン」

　そうだ、と。

　答えようとした。

　できなかった。

　うなずこうとした瞬しゆん間かん、視界が激しく揺ゆれた。自分の身体からだは床に転がっているようだ。息ができない。何かがこみあげてきて、口から飛びだしそうだった。後ろのレイジに、今度は右の脇わき腹ばらを蹴けられたらしい。返事は。レイジがまた言った。だが、返事をしようとしているアジアンを妨さまたげているのは、他の誰だれでもない、レイジだ。そのことを説明すべきだろうか。声が出せない。椅子に座っている男に、４２８、と呼ばれた。アジアン。そう、ボクはアジアンだ。副所長が教えてくれた。結局、一度聞いただけでは副所長の名前を覚えることができなかった。でも、ボクはアジアンだ。ボクはボクだ。それを明らかにすればいい。たったそれだけのことが、今はできない。しようとするたびに、背中を、脛すねを、上じよう腕わんを、レイジに殴なぐられ、蹴られて、邪じや魔まされる。椅子に座っている男が低い笑い声をあげはじめた。しばらくすると、あちこちの小部屋からも次々と笑いが起こった。やっとわかった。椅子に座っている男はアジア

ンの返事など求めていない。おそらく、最初からこうするつもりだったのだろう。だから、扉とびらに見張りを立てた。そうして新入りを痛めつけることが、彼の、彼らの目もく論ろ見みだったのだろう。

　何のために。どうして。考えても無む駄だだ。ずっとそうだった。何も知らず、知るすべもなく、何もかもが無意味だということだけ、どうにかわかっていた。あの青い光の部屋から出て、何か変わるかもしれないと思った。たしかに変わった。黒覆面たちとせんせいとナジに会う他は、姿も声も知らない誰かと壁かべ越ごしに互たがいの存在を知らせあうだけの時間と比べれば、外界からの刺し激げきは遥はるかに、圧あつ倒とう的なまでに多様で、量も多い。だが、それだけだ。それらを甘んじて受け容いれて、じっとしていることしか、アジアンにはできない。

「無む抵てい抗こう主義でも気どってやがるのか」

　椅子に座っていた男が立ちあがって、靴くつの爪つま先さきをアジアンの頰ほおと床の間に差しこんできた。顔を上げさせるのに、手ではなく足を使ったということだろう。

「かわいげのねぇ野や郎ろうだな。人形みてぇにこぎれいな面ツラしてやがるくせによ」

　人形。

　こぎれいな面。

　人形。

「舐なめろ」

　男は、ここだ、と示すように爪先を動かしてみせた。

　アジアンは黙だまって男の顔を見上げていた。

　人形。

「カハッ」

　男は笑ったのだろうか。歯を剝むいて口を開け、右目を細めて左目を見開くと、ただでさえゆがんでいる顔がさらにいっそうめちゃ

くちゃになった。男はしゃがみこんできて、アジアンの髪かみの毛をつかみ、ぐいと引っぱりあげた。

「俺の名はダリエロだ。番号は４０１。覚えとけ、アジアン。俺がこの四号房の房長様だ。俺の足を舐めたくてたまらなくなったらいつでも言えよ」

　ダリエロと名乗った男は、アジアンの髪の毛から手を放して、もう一度、カハッ、と笑い、レイジに向かって顎あごをしゃくってみせた。

　レイジは無言でうなずいて、アジアンの身体を軽々と肩かたにかつぎあげた。そうして荷物のようにどこかへ運ばれてゆくらしい。ボクはダリエロの靴を舐めるべきだったのか。考えても無駄だろう。ずっとそうだった。副所長が言っていた。自分で考えてみてください。考える。考える。考える？　どうして？　理由。考えたくない。そう、ボクは──考えたくない。何も考えたくない。考えたくないんだ。

　思い出してください、と副所長に言われた。

　思い出せない。違ちがう、思い出したくない。

　どうして？　理由。その理由は、わからない。わからなくていい。

　知らないほうがいいこともあるのだよ。

　そう言われた。

　誰に……？

「お前の小屋だ」

　放ほうり投げられた先は寝しん台だいの上だった。四号房の通路の両側には小部屋が七つずつ並んでいる。その中で一番廊ろう下かに近い位置にある小部屋の約半分を占せん領りようしている二段寝台の下段だった。

　レイジはアジアンの上に覆おおいかぶさるように屈かがみこんできて、右手をのばしてきた。首をつかまれた。大きくてつめたい手だった。レイジの右手はアジアンの首を簡単に握にぎり潰つぶして

しまえそうだった。黒くろ縁ぶちの眼鏡めがねの奥でその瞳ひとみは微かすかにも動かない。アジアンを見ているのかさえ定かではなかった。

「強者に従わない弱者は愚おろかだ。弱い上に愚かでは踏ふみ潰され絶えても仕方ない」

　それだけ言い残して、レイジは去っていった。咳せきが出て止まらなかった。自分は絞しめ殺されかけていたのだとようやく気づいたが、身体中が疼うずいて胸や首を押さえることすらままならなかった。扉の前に人ひと垣がきを作っていた男たちが、こちらに視線を投げかけながら、ぞろぞろと自分たちの小部屋へと帰ってゆく。彼らは皆みな、強者に従う賢かしこい弱者なのだろうか。自分は愚かな弱者なのか。

　アジアンは目をつぶった。

　こうして瞼まぶたを閉ざしてしまえば、心も閉じて、何かを感じることも、何かを考えることもしなくてすむ。

　痛みさえそのうち薄うすらいで、やがては気にならなくなるだろう。

　何も考えたくないのだから、考えもしなかった。

「こっぴどくやられたみたいだな」

　二段寝台の上段に誰だれかいるなんて想像もしなかったが、そもそも一人部屋であれば、寝台が二段である必要がない。

　上段が軋きしむ音を立てた。上にいる何者かが身動きしたようだ。目を開けると、さらに物音がして、梯はし子ごに足をかけて上段から下りてくる男の姿が見えた。男は右手で上段の縁ふちをつかみ、左手で肩や腰こしを叩たたいたり、首筋のあたりを掻かいたり、欠伸あくびをしたりしながら、しばらくアジアンを眺ながめていた。目め尻じりがやや下がっている黒髪の男だった。上着の前がはだけていて、どこかだらけた雰ふん囲い気きを漂ただよわせているが、そのせいか、じっと見つめられていても、脅きよう威いや不安を感じない。まったく違い和わ感かんなくそこにいる。まるで空気のような男だ。

「適当にしおらしくして見せてりゃいいのに、顔に似合わず強ごう

情じようなのか、単に馬ば鹿かなのか。お前さん、これからしばらく大変だぞ」

　男は鼻をすすって唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせた。

「まあ、覚かく悟ごしておくことだな。つらけりゃさっさと降参しちまったほうがいいのかもしれんが、ダリエロは執しゆう念ねん深い。水に流しちまいたい過去をわざわざすくってきて、さあぜんぶ丸のみにしろとか、それくらいのことは言いかねんやつだ」

「……キミは」

「ああ？　俺か？」

　男は肩をすくめてアジアンの足あし許もとあたりに腰を下ろした。

「この先、お前さんとこの小屋で寝ね起おきすることになる男さ。少なくとも、我らが四号房の房長殿の気が変わって、係員に小屋替がえの申しん請せいを出して、それが認められるまでの間は、もし俺のいびきやら歯は軋ぎしりやらがやかましくても、我が慢まんしてもらうことになる。おそらく、そのへんは大だい丈じよう夫ぶだと思うがね。こう見えて、俺はお行ぎよう儀ぎよく静かに眠ねむるほうだ」

「……眠っている自分のことが、どうしてわかる」

「そう、じつはわからん」

　男は短く笑って顔だけこちらに振ふり向かせた。

「なんとなくそんな気がするだけだ。誰かに苦情を言われたこともないしな。４２８、お前さん、閉へい鎖さ房ぼうにいたんだって？」

　うなずいてみせると、男は、そうか、と呟つぶやくように言って立ちあがり、腰を曲げたりのばしたりしながら、名前は、ときいてきた。

「アジアン」

「いい名だな」

「そうかな」

「覚えやすそうでいい」

　男は右手を差しだしてきて、ぎこちなく片目をつぶってみせた。

「俺の番号は４０３で、名はクラニィだ。いつまでのつきあいになるかわからんが、これからよろしくな、アジアン」

10

　一いつ般ぱん房ぼうの一日は時間ごとに細かく区切られている。一日が始まり、終わるものだということさえ忘れていたアジアンにとっては、次から次へとめまぐるしく何かが襲おそいかかってきて、それらを受け止めたり受け流したりしているだけで精せい一いつ杯ぱいだった。とくに、二段寝台の下段で眠ることと、会堂と呼ばれる広い部屋にそうとうな数の男女が集められて、そこで一いつ斉せいに食事をとることと、作業と称しようされる時間があって、その間は作業場に押しこまれ、命じられるままに木だの金属だのを切ったり削けずったり、土をこねくり回したり、皮をなめしたり、できあがった革を型紙にあわせて裁断したり、決められたとおりに縫ぬいあわせたりしなければならないことには、慣れるまで時間がかかりそうだった。

　担当する作業が決まっていない新入りのアジアンは、適性を見るためという理由で、第一から第八まである作業場に日ひ替がわりで行かされた。同室のクラニィは陶とう工こうで、わりと楽しくて俺は嫌きらいじゃないがね、と語っていたし、アジアンも黙もく々もくと土をさわっているとあっという間に時がすぎたので、ここに決まればいいと内心思っていたのだが、最終的には第二作業場の木工に配属されることになった。

　どうやら、四号房の房長であり、第二作業場の班長でもあるダリエロの推挙によるものらしかった。

「いいかぁ、きみタチ、手ぇ抜ぬかねぇでビシッとやれよ。係員の

おやっさんタチ困らせやがったらこの俺が承知しねぇからな。じゃあ、今日もまずはハリキッて道具点検。おやっさんタチ、お願いしぁーっす」

　ダリエロがそう号令をかけたらすぐに、お願いしぁーっす、と唱和しつつ頭を下げなければならない。その頭を下げる角度も、班長のダリエロは三十度で、一等と呼ばれる優ゆう秀しゆうな作業員は四十五度、二等は六十度、三等は七十五度と定められている。もっとも、そのような規則があるわけではない。そう定めたのはダリエロだ。

　独自のルールや指導法で四号房や第二作業場の者たちをとりしきり、秩ちつ序じよを保っていることで、ダリエロは係員たちに高く評価されているらしい。だから、そのためにダリエロが少々規則を逸いつ脱だつしたとしても、たいてい見み逃のがされるようだ。ダリエロに逆らう者はその一党によって制裁を受けるが、仮に暴力行こう為いを係員に訴うつたえたところで、認めてもらえるかどうかわからないし、仮に認めてもらえたとしても、一党の別の者に報復されることは目に見えている。残された道は、実力でダリエロを屈くつ服ぷくさせるしかないが、これもかなり難しい。ダリエロは天性の喧けん嘩か上手で、しぶとく、興奮すると常じよう軌きを逸いつして凶きよう暴ぼうになるのだという。ダリエロのやつにサシで挑いどむ馬ば鹿かはいない、とクラニィも言っていた。かといって数でもかなわねえしな。楯たて突つくだけ阿あ呆ほらしいってことさ。

　アジアンは何も知らずにダリエロに刃は向むかった。

　そんなつもりは毛頭なかったのだが、ダリエロはそう受けとったようだ。

　それにしては、つつがなく日々はすぎていった。

　食事や入浴の折に、食べ物をかすめとられたり、足あし払ばらいをかけられたり、石せつ鹸けんが回ってこなかったりなどの嫌いやがらせをされることはあったが、クラニィ曰いわく、その程度は新入りなら誰だれでも仕し掛かけられる悪戯いたずらのたぐいだというし、アジアン自身もさして気にならなかった。むしろ、四号房の者たちの中でもとりわけダリエロに近しいと思われる、リー・ブラックやレイジを中心としたダリエロ派とでも言うべき連中がほとんど接せつ触しよくしてこないことが不ふ審しんだった。それでい

て、どこにいても彼らの視線を感じた。たとえば、向かいの小屋の番号４１９メツェルディと番号４１７ポーという二人の男たちはダリエロ派らしかった。二人は夜中でも必ずどちらか一方が起きていて、絶えずアジアンの小屋を見張っていた。食事のときは、アジアンは四号房に割り当てられた長テーブルの端はしの席で、隣となりはクラニィだが、向かいには番号４２２アルバートが座った。この男もダリエロ派だった。入浴の際も、周りにはいつもダリエロ派の男たちがいた。アジアンは四六時中監かん視しされていたが、どうやら今のところはそれだけのようだった。今までは。

　作業は、道具入れの箱から各自必要な道具をとりだして持ち、それを係員が点検して、誰が何を所持しているか、それは定められたとおりか確かく認にんし、用紙に書きとめる道具点検から始まる。今日から正式に木工の第二作業場に配属されることになったアジアンは、少なくとも当分の間は磨きと呼ばれる工程を担当することになったので、布手て袋ぶくろとヤスリと紙ヤスリがあればいいと前もって言われていた。

　ところが、紙ヤスリは何箱もあって、見ると、それらはすべて目の粗あらさが違ちがい、裏面に異なる番号が刻印されていた。作業の間、私語は禁止されているので、誰かに尋たずねていいかどうかも判断がつかない。磨みがきの担当作業員らしき者は他ほかにもいたが、それぞれ持ちだす紙ヤスリの枚数はまちまちだった。考えた末に、全種類を一枚ずつ持ってゆくことにして、長テーブルの前に整列した。両手にはめた手袋以外の道具をテーブルに置いた直後だった。ダリエロが「お願いしゃーす」の号令をかけ、新入りで三等のアジアンは慎しん重ちように七十五度の角度まで腰こしを折って、ゆっくりと戻もどした。

　第二作業場の作業員はアジアンをふくめて二十四人で、全員男だが、一号房ぼうから四号房の者たちが入り交じっている。班長のダリエロが、おやっさん、と呼ぶ係員は全部で五人いて、全体を監視する一人をのぞいた残りの四人が、それぞれ六人ずつの道具点検を順番に行ってゆく。アジアンは最後だった。係員はアジアンを睨にらみつけてから、両手につけている手袋を確かめて、長テーブルの上に置いたヤスリに目をやり、それから紙ヤスリを手にとった。

「何だ、これは。一人で何枚持ってきているんだ、貴様」

「八枚」

係員に何か質問されたときは、即そく座ざに、はっきりと答えなければならない。返事をしなければ反抗と見なされて懲ちよう罰ばつ対象になるし、不ふ明めい瞭りよう、あるいは不正確な返事であると判断されれば予備反抗とされて、やはり懲罰を受ける場合がある。だから、アジアンは係員の目を正面から見返して即答したのだが、その答えは相手を満足させなかったようだ。

「そんなことは見ればわかる。俺はなんで貴様が八枚もの紙ヤスリを持ってきたのかときいているんだ、４２８」

「理由は」

アジアンは隣に立っている小太りでやや頭とう髪はつの薄うすい男の横顔をちらりと見た。番号４１４、ローガン。昨夜の自由時間に、布手袋とヤスリと紙ヤスリを用意すればいいと助言してくれたのはあの男だ。クラニィとも親しげに話していたし、ダリエロ派ではないようだったから、疑いは抱いだかなかった。

「わからなかったから。何枚持てばいいか」

「何？　わからなかった、だと？　どういうことだ、４０１。新規作業員への指導は班長の役目だろう」

「そりゃあお説のとおりですがねぇ」

ダリエロは手を腰の後ろあたりで組んで胸を張り、少しだけ首を傾かたむけた。

「どう指導するかについて細かい規定があるわけじゃあねぇし、そのあたりは班長の裁量だと思ってるんだが、違いますかねぇ、おやっさん」

「違わんな」

「俺の勘かん違いじゃなくてよかった。というわけで、俺は４１４に一任しましたよ。４１４は磨きの熟練工で、その道じゃあ俺よりくわしいくらいだ。指導係ってわけです」

「なるほど。だったら、４１４、貴様は４２８にどう指導した」

「あ、はい」

　ローガンは手袋をつけた右手の甲こうで額をぬぐって、何度も唇くちびるを舐なめた。

「ええと、俺は、手袋と、ヤスリと、それから、紙ヤスリは、４２８はまだ新入りだから、三番と五番と七番を持つように、と」

　違う。

　でたらめだ。

　ローガンは嘘うそをついている。

　閉へい鎖さ房を出てからというもの、アジアンの記き憶おくは、以前のようにすぐ不ふ鮮せん明めいになったり、崩くずれ落ちるように形を失ってしまったりすることがなくなった。アジアンはローガンの言葉の一言一句まで正確に覚えている。

　ローガンはこう言った。道具はさ、あれだから、手袋とね、それはどの工程でも同じなんだけど、あと、ヤスリと、紙ヤスリがあるからさ、これで全部だから。簡単だから、迷うこともないんじゃないかな。

　それを聞いていたクラニィが、ふん、と鼻を鳴らして、ローガンは、はは、と笑いながら髪かみの毛が薄くなっている頭頂部を撫なでた。

　あのときは気づかなかったが、こうして振ふり返ってみると、クラニィはローガンの助言について何か思うところがあったのかもしれない。

「三番、五番、七番の三枚か」

　係員は黒い帽ぼう子しを一度脱ぬいで、目ま深ぶかにかぶりなおした。

　その右頬ほおと左の眉まゆ尻じりには古そうな傷きず跡あとがある。

　眉み間けんに刻まれた縦たて皺じわは深く、動かない眉は太くて、眼光はきわめて鋭するどい。

　この係員は第二作業場担当で、他には会堂での食事や運動場での

運動、入浴時にも監かん視しにつくことがあるが、規則に忠実にして厳格で、とにかく懲罰を与あたえたがる男だと見なされているらしい。

　係員は名乗ることがないため、名前は不明だが、かつて一挙に七人を不定期の保護房送りにしたという無情さから、死神、との渾あだ名なで男を呼ぶ者が多いようだ。

「貴様が４２８に指導した内容は、それで間違いないな、４１４」

「あ、はい。他は、必要に応じて、ちゃんと許可をもらって使うことになっているので。４２８には、まだいらないから」

「そのとおりだ。貴様の指導は正しい。そうであるにもかかわらず、どうしてこんなことが起こった」

　死神はベルトのホルダーから教導鞭べんと呼ばれる短い金属製の棒を抜ぬいて、その先でテーブルを何度か叩たたいた。係員たちは常に武装していて、威力的妨害を行う者には即座に攻こう撃げきを加えて制圧することができると規則で定められている。それ以外にも、必要に応じて武装を用いた威圧を行う権限も係員にはあって、死神は事あるごとにその威い圧あつを多用することで知られ、制圧の名手でもあるらしい。

「原因はいくつか考えられる。大別すれば二つ。一つ、４１４の指導は不十分だった。つまり、４１４が偽ぎ証しようした。一つ、４２８が十分に４１４の指導を理解できなかった。４１４にはあえて問うまい。すでに指導内容を証言している。４２８、貴様はどうだ。４１４に対して反論はあるか」

「ボクは紙ヤスリとしか聞いていない」

「貴様の記憶に間ま違ちがいはないと断言できるか」

「はい」

「──と、言っているが？」

　死神にねめつけられたローガンは、下を向いて、口を開けたり閉じたりしながら、しきりと鼻をこすっている。顔が赤い。死神がゆったりとした足どりでアジアンの前からローガンの前へと移動して、教導鞭で自分の首と肩かたの間あたりを叩きはじめた。すぐに

返答しなければ反抗と見なす、という威圧だ。身の危険を感じたのか、ローガンはようやく声を出した。

「……いやあ、おれは、でも……たしかに、言いました。その……紙ヤスリは、三枚だって。だから、ええと……うん、おかしいな……」

「まったくもって奇き妙みような話だ。俺は誰だれを信用すればいい。そもそも貴様らは俺にとって信じるに足る相手なのか」

　死神はローガンやアジアンだけでなく、全員を見回してから、ふっと息を吐はいた。

「必ずしもそうとは思えんな」

「ちょっといいっすかねぇ」

　挙手したダリエロに、死神が斬きりつけるような視線をそそいだ。

「何だ、４０１」

「俺は班長です。４１４に指導係を任せたのは俺だ。４２８の監かん督とく責任も結局は俺にある」

「そのとおりだ」

「懲ちよう罰ばつは俺に下してください」

　大勢が息をのんだ。

　アジアンにとっても意外だった。

　ローガンが嘘をついていることは、まず間違いない。だが、それがローガンの意志だとは思えなかった。アジアンに指導するようローガンに命じたのがダリエロであれば、当然、ローガンに嘘をつかせているのもダリエロだと考えるのが自然だろう。それなのに、どうして。

「どうか４１４と４２８の二人には寛かん大だいなご処置を」

　ダリエロはゆがんだ顔をさらにゆがめ、首を傾かたむけて両手を

広げてみせた。

「そうですねぇ、何日か移動をやらせるってのはどうですか。思うに、とくに４２８は新入りだってこともあって、ここの作業の意義や重要性をまださっぱり理解してねぇようだ。そういうのは身体からだで覚えさせるのが一番ですよ。ついでに、その間、４１４に口頭でいろいろ叩きこませりゃいい。作業の邪じゃ魔まにもなりませんしねぇ。どうでしょう、一つ、この線で考えちゃくれませんか」

「貴様に懲罰を、だと」

「ええ。これでも班長やらせてもらってますからねぇ。責任はちゃんととってみせねぇと、示しってものがつかねぇ。それに、信しん頼らい関係ってやつは大事だ。すっかりってわけにはいかなくとも、まあ、ある程度はおやっさんたちに信じてもらえねぇと、俺らも作業がやりづらくてかなわねぇ。作業にかぎらず、日々の暮らしにおいてもねぇ。俺らがそんなのを求めるのは贅ぜい沢たくなのかもしれませんがねぇ」

「よかろう」

　死神は軽くうなずいて教導鞭の先せん端たんをまずダリエロに向けた。

「４０１、貴様は五日間、自由時間外出禁止とする」

「謹つつしんで」

　ダリエロが一礼してみせると、死神の教導鞭はローガン、アジアンを順々に指した。

「４１４、４２８の両名は五日間、移動を担当しろ。作業の内容については４１４が４２８に指導するように。今度はせいぜいしっかりと理解させることだ」

「あ、はい」

「４２８、貴様、返事はどうした」

「はい」

「よし、道具点検終しゅう了りよう。各自作業開始」

　死神がそう宣言するやいなや、作業員たちが一いつ斉せいに動きだした。

　作業が始まってしまえば、あとはもう勝手に休きゅう憩けいをとることは決して許されない。ほんの数秒でも手を止めていると、係員の叱しつ咤たが飛んできて、場合によっては教導鞭で激励される。アジアンも黙だまって突つっ立っているわけにはゆかない。とりあえず、磨みがきの道具を道具箱に戻もどしに行ったが、移動とはいったい何だろう。何をするべきか見当もつかない。

　作業場の各所に散ってゆく作業員たちを眺ながめていると、死神と目があった。

　死神がこちらへ近づいてこようとして、足を進めはじめた。その瞬しゅん間かんだった。

　袖そでを引かれた。

　ローガンだった。

「あ、あの、こっちだよ。きて。何をするか、教えるから」

　アジアンは無言でローガンについていった。

　木工の第二作業場と金工の第一作業場は、他ほかの作業場よりも広い。おそらく、製造される品物が大きく、材料もかさばるからだろう。ローガンに案内された場所は、そんな第二作業場の出入口から見て奥の角だった。

　そこには大小様々の木材が整然と積みあげられていて、そのそばに係員が常時一人立っている。第二作業場の作業員たちは必要に応じてここに木材をとりにきて、係員に承しよう認にんしてもらい、自分たちの持ち場へと運んでゆく。移動とは、その手伝いでもするのだろうか。

「ええとね」

　ローガンは係員に何度も頭を下げながら、木材の山を指さした。

「俺たちの仕事は、これなんだけどね」

　意味がわからず口をつぐんでいると、ローガンはいかにも苦しま

ぎれといったかんじの笑えみを浮うかべた。

「これをね、どうするかっていうと、移動させる」

「どこに」

「あっちだよ」

　ローガンは、何も置かれていない、がらんとした反対側の角を指で示した。

「あっちに、この木材を全部運ぶんだ。俺と、きみとでね。うん。で、それが終わったら、今度はこっちに戻す」

　一瞬、ローガンが何を言っているのかわからなかった。

　木材をここから別の場所へと運んで、それから戻す。簡潔にして明めい瞭りようで間ま違ちがえようがないが、果たしてローガンは本当にそう言ったのか。

「じゃあ、やろうか。早く始めないと、ほら、まずいしさ」

　どうやら、そうらしい。

　ローガンはさっそく布手て袋ぶくろをはめた手で自分の背せ丈たけほどもありそうな板材を持ちあげ、肩かたにかついだ。

　係員を見ると、教導鞭で自分の掌てのひらを叩たたいていた。威い圧あつだ。腑ふに落ちないが、やるしかないのだろう。

　アジアンはローガンの真ま似ねをして、山の一番上にある一枚の板材をつかみ、引っぱろうとした。手て許もとに引きよせるだけでも重労働だった。それを肩にかついで歩くとなると、かなり心許ない。この八日間、力仕事も経験してきたが、これほど重くて持ちづらい物を一人で運んだことはなかった。

「４２８、何をぐずぐずしている！　止まっていないで動け！」

　アジアンは係員の叱咤に押されるようにして、板材をかつぎあげた。足を前に出そうとした途と端たん、身体からだ全体がふらついた。なんとか転ばずにすんだが、今度は板材の端はしが床ゆかを叩いた拍ひよう子しに体勢が崩くずれた。アジアンの背丈と同じ程度

の長さがある板材の、だいたい中間あたりが肩にのるようにしなければならない。後ろが長すぎたのだろう。位置を調節している間に、また係員の叱咤が飛んできた。かまわずに板材を前方へとずらした。そうするとどうにかまっすぐ歩けるようになったが、すぐに板材の重量自体が肩にこたえはじめた。

　奥歯を嚙かみしめて前を見ると、ローガンが向こう側の角に板材を置いて、もう小走りで引き返してこようとしていた。

　下を向いて、とにかく足を交こう互ごに前へ出すことに集中した。

　すれ違いざまだった。

「……ごめんね」

　ローガンの顔を見ようとして、やめた。

　肩が痛かった。

11

「──あ？　何？　移動……？」

　今日は食事もろくに喉のどを通らず、運動の時間は運動場の隅すみに立っているだけでやっとだった。十九時からの自由時間が待ち遠しくてたまらなかった。二時間の自由時間はずっと自分の寝しん台だいで横になってすごした。そのうち就しゆう寝しん準備の二十一時がやってきて、房ぼう内ないの小屋と呼ばれている各小部屋が施せ錠じようされて閉へい鎖さされ、あとは二十二時の消灯、就寝を待つだけとなり、ようやく少しだけ身体が楽になってきた。それで、二階寝台の上段で寝ね転ころんでいるのだろうクラニィに、例の移動について尋たずねてみたのだった。

「移動、ねえ。あれだろう。木材をあっちからこっちへ運んで、もとの場所に戻して、それを繰くり返すってやつだよな。お前さんはまだ知らんみたいだが、どの作業場でも似たような作業はある。懲ちよう罰ばつ一歩手前っていうか、まあ、実体は懲罰だな」

「あんなこと、何のために」

「やってみてわからなかったか？」

「わからない」

「それ、さ」

　クラニィは大きな欠伸あくびをして、それがおさまりきらないうちに間延びした声でつづけた。

「意味がわからない、というかな、意味がないことをやらせる。やっぱりな。人間、何かをやるにせよ、やらされるにせよ、結果ってやつを求めるわけだ。一口に結果って言っても、いろいろあるだろうが──たとえば、苦労して何かこしらえて、その出来栄ばえを誉ほめられるとかな。評価ってやつだ。もっと即そく物ぶつ的に、いい物をたくさん作ったら、うまい飯を食わせてもらえるとかな。まあ、報ほう酬しゆうだな。そこまでいかなくても、何か形になるものができあがるってだけで、気分的には区切りがつくもんだ。向き不向き、性格にもよるだろうが、とにかく必死になって腕うでを磨みがくことに熱中して、それで満足していられる、そんな奇き特とくなやつも中にはいたりする。じゃあ、いつまでやったって絶対にどんな結果も出やしない、しかも、それがわかりきってるとしたらどうだ？」

「……どう、って」

「どうもこうもない、か。やってられねえ。そんなかんじだろうな。右から左へ運んで、やっと終わったと思ったら左から右へ。サボったら係員に励まされる。時間内はとにかく動きつづけなけりゃならん。やあ、こんなにうまくいった、要領よくできるようになった、みたいに、自分を慰なぐさめてやることもできそうにない単純労働だ。ただひたすらきついだけだからな。だから俺は言っただろう。実体は懲罰だってな」

「ダリエロは自由時間外出禁止になった」

「一番軽い懲罰だ。本来なら、お前さんとローガンがそいつを食くらってたんだろうが」

　クラニィが低く笑い、寝台が微かすかに振しん動どうした。

「ダリエロの野や郎ろうにまんまとしてやられたってわけだ。まあ、やつのやり口の中じゃあすこぶるかわいい部類だな。それくらいで音ねを上げたくなったんなら、さっさと頭でも何でも下げちまったほうがいい」

「ボクは、べつに」

「そのわりには、お前さん、ずいぶんとつらそうにしてなかったか？」

「まだ、慣れていないから。身体が」

「さっさと慣れることだな。お前さんがどう感じてるか知らんが、ここの暮らしはそんなに悪くはない。飯も三食出る。睡すい眠みん時間もたっぷり与あたえられる。作業の間だって、ちゃんと休きゅう憩けいまである。少なくとも肉体的には、適応しちまいさえすればどうってことはない」

「肉体的には……？」

「人間ってのは、暇ひまさえあればごちゃごちゃと考えたがる生き物だしな。とはいえ、いくら考えたところで、どうにかなることばかりじゃない。たとえば、俺たちは作業でかなりいろんな物を作ってるが、このアサイラムの中で使用される品物は限られてる。じゃあ、残りはいったいどうすると思う」

「それは、外に──」

　自分で言ってから違い和わ感かんを覚えた。外。外とは何だ。外？　わからない。だが、その単語を口にしたのは間ま違ちがいなくアジアン自身だ。

「外、か。ふん……」

　クラニィは鼻を鳴らして、身体からだの向きでも変えたのか、寝台が揺ゆれた。

「そうじゃない。壊すんだ。それか、燃やす。お前さんも知ってるかもしれんが、運動場の奥に開かずの扉とびらってのがあってな。俺たちにとっては開かずの扉でも、係員たちにとっては鍵を使えば開けられる、ただのでかい鉄の扉だ。その向こうに、作業場で俺たちが汗あせ水みず垂らして作った品物を粉こな微み塵じんにした

り、焼しよう却きやくするための設備がある」

「どうして……せっかく作った物を」

「不要だから、だろう？　つまり、俺たちはほとんど作るためだけに作ってるってことだ。いや、作らされてる。さっき移動の話をしたな。あれはな。べつに、移動だけに限ったことじゃない。じつは作業自体がほぼ無意味なのさ。まあ、さすがにそんなことをおおっぴらにするってのはどうもうまくない、みたいな判断があったのかもな。ずいぶん前は余よ剰じよう生産物を運うん搬ぱんする仕事も俺たちに割り当てられてたんだが、なくなった。今は係員たちがぶつくさ言いながらやってるんじゃないか」

「ボクたちは必要のないことをやらされているのか」

「ごちゃごちゃ考えたって、何がどうなるってわけでもないんだがね」

「キミがそんな話をするから」

「俺が何か話そうが、話すまいが、お前さんはそのうち考えたってどうにもならんこと考えだしただろうさ。それからだ。本番はな」

　クラニィは大きく息を吐はいた。どうやら話をつづける気はないらしい。

　アジアンは目をつぶって、閉じた瞼まぶたの上に手の甲こうをのせた。

　考えてもどうにもならないことを、考えるようになる。

　それからが、本番。

　たしかに、ここでは閉へい鎖さ房ぼうのように、考えたそばから忘れてしまうことはない。あそこにいる間は、たまに会うせんせいやナジの存在さえ、普ふ段だんはあまり意識していなかった。隣となりの部屋の、何者か、としか言いようがないのだが、その誰だれかのことは、常に、とはいわないまでも、かなりの頻ひん度どで考えていたので、おそらく忘れる暇がなかったのだろう。今となっては、時折、壁かべを叩たたき返してくれた、あの誰か、男か、女か、そもそも人間なのかどうかすらわからない、やはり、何者か、と呼ぶ以外にない存在のことしかほとんど思い出せないくらいだ

が、きっといろいろなことが頭の中を駆かけめぐっていたはずだ。何しろ、時間だけはたくさんあった。ありあまるほどの時間の中で何かを考えて、また別の何かを考えて、考えて、だが、それらはすべて無意味だったのだろう。その圧あつ倒とう的な無意味さに押し潰つぶされていた。

　一般房に移されて、重石おもしが取り除かれたかのように感じていた。

　違ったのか。結局、同じなのか。

　でも、外、とボクは言った。

　ボクはそれを知っているのか。

　外。

　そこには何があるのだろう。

「クラニィ」

「何だ」

「キミは」

　何か言いかけて、それが言葉にならず、違うことを尋たずねた。

「──キミは気づいていたのか。ローガンが、ボクに嘘うそを教えたことを」

「どうだかな」

「そう思える」

「じゃあ、そうかもしれんな」

「どうして」

「そんな義理はないからな」

　寝しん台だいが大きく揺れた。クラニィが起きあがって寝台から下りる音がした。蛇じゃ口ぐちをひねって、水でも飲んでいるのだろう。しばらくすると、クラニィは上段に戻もどっていって、また

横になったようだ。

「俺はただお前さんと同じ小屋にぶちこまれてるってだけだ。ローガンがダリエロに脅おどされてお前さんをちょっとした罠わなにかけようとしてたことに、俺は気づいてたかもしれん。俺はお前さんに忠告してやれたかもしれん。だとしても、なんでわざわざそんなことをしなけりゃならない？　そんなことをして、俺に何の得がある？　むしろ、面めん倒どうを背負いこむことになるのは目に見えてる。まず間違いなくダリエロに絡からまれるだろうしな」

「キミはダリエロ派なのか」

「俺としては何派でもないつもりだが、他人にどう見られてるかはわからんね。雷ライ切キリあたりにでもきいてみたらどうだ」

「雷ライ切キリ……？」

「番号は４０５。今は保護房に入ってるな。そのうち出てくるんじゃないか。事あるごとにダリエロに楯たて突ついて、よく懲ちょう罰ばつを食くらってる。お前さんの、その何派って言い方を借りれば、さしずめ反ダリエロ派のリーダー格ってところか。もしお前さんがダリエロに従うつもりがないなら、そっちに近づいておくのも手かもしれんな」

「キミの言葉は鵜う呑のみにできない」

「そうかい」

　クラニィは喉のどを鳴らして静かに笑った。

　ふと、どこかで聞いた覚えのある笑い声だと思った。

　どこか。どこで……？

　ボクはいつからここにいるのだろう。

　もうどれくらいここにいるのか。

　どうしてここにいるのか。

　それは所しょ詮せん、考えても意味がない疑問なのか。

今のアジアンにはわからなかった。

12

全身が痛だるいかんじで、肩かたはだるさなど吹ふき飛んでしまうほど激しく痛んだ。

おかげで今日の移動は昨日よりもつらかった。何度も足や手が勝手に止まり、数えきれないくらい係員に叱しつ咤たされ、一度は教導鞭べんできつく激げき励れいまでされながら、結局、昨日は作業時間内に四往復できたのに、三往復しかできなかった。それでもなんとか作業をつづけ、死神が作業終しゆう了りようを告げた瞬しゆん間かん、膝ひざや腰こしから力が抜ぬけてしゃがみこんでしまい、ダリエロ派の連中だけでなく、他ほかの作業員たちにも笑われた。係員たちが全員を叱咤して、笑いはすぐに収まったが、作業場を出る前に死神に威い圧あつまじりの厳重注意を受けた。アジアンより遥はるかに作業量が多かったはずのローガンは、汗あせまみれではあるものの平然としていた。引き締しまっているどころか緩ゆるんだ身体からだつきで、とうてい力がありそうには見えないローガンが、あれだけひっきりなしに動いて、なぜへたばらないのか不思議だった。食事も入浴も負担だった。所定の三十六項こう目もくについて問題ありなしを記き載さいし、所感を書かなければならない日誌も苦痛だった。自由時間までがとにかく長かった。

そうしてどうにかこうにか房長と房長補ほ佐さによる点検・点呼、係員による点検・点呼を乗り越こえ、ようやくやってきた十九時からの休養は、だが、見覚えのある係員に邪じや魔まされた。

「起きや」

主に鍵かぎ係と房ぼう内ないの見張りを務めている猫ねこ背ぜの係員を引き連れて四号房に入ってきたのは、元黒覆ふく面めんだった。

「センセのお呼びや。医務室に行くで。検けん診しんや」

当然、拒こばむことなどできるはずもなかった。アジアンは元黒覆面に連れられて十字廊ろう下かを通り、医務室へと向かった。途

と中ちゆう、歩き方がおかしかったのか、元黒覆面に、なんや、怪け我がでもしとんのかい、お前じぶん、ときかれたが、首を横に振ふってみせるのが精せいーいつ杯ぱいだった。元黒覆面は、おおかた、しごかれとんのやろ。身体鈍にぶっとったやろしな。それくらいでちょうどええのかもわからんな、と勝手なことを言っていた。何か言い返したかったが、声を出すのが億おつ劫くうだった。どう言い返せばいいか見当もつかなかった。アジアンは黙もく々もくと、足あし許もとがふらつかないように注意して、できるだけ元黒覆面に遅おくれないように歩いた。医務室は遠かった。果ての果てだった。ようやくたどりついた。

　扉とびらの脇わきに、背が高くて黒い丸眼鏡めがねをかけた無む帽ぼうの係員が立っていた。

　ひょろ長い体型に特とく徴ちようがあって、もしかしたらこの係員は黒覆面の一人ではないかと思った。案の定だった。黒眼鏡は手に黒い覆面を持っていた。この男はいつも黒眼鏡をかけて、その上に黒覆面をかぶっていたのか。それとも、覆面を脱ぬいで眼鏡をかけただけか。不明だが、黒眼鏡は元黒覆面の目礼を完全に無視した。元黒覆面は、ケッ、と吐はき捨てながら扉を開けた。

　久しぶりの白い医務室だった。

　せんせいの姿は見あたらなかった。

　ナジもいない。

　奥の寝しん台だいがカーテンで仕切られている。

　あの中だろうか。

「センセ、連れてきましたで。わしは表で待っとりますさかい」

「ああ、ありがとう」

　やはり、せんせいはあのカーテンの奥にいるようだ。元黒覆面が、ほな、終わりよったらまた呼んでください、と言い残して医務室から出ていった。しばらく待っていると、ナジを肩にのせたせんせいがカーテンの合わせ目から姿を現した。あのカーテンの向こうにはまだ誰だれかいるのだろうか。たぶん十日ぶりに会うせんせいやナジよりも、そのことが気になった。医務室の外に黒眼鏡の黒覆面がいた。黒覆面はいつもアジアンを医務室の中に導き入れると、

あとは検診が終わるまで外で待っていた。それは、つまり、アジアン以外の誰かが医務室にいるということで、閉へい鎖さ房の監かん視しを担当する係員は黒覆面をかぶるのだから、その誰かとは、閉鎖房に閉じこめられている何者か、ということではないのか。

「元気そうだ、と言いたいところだが、そうでもなさそうだね」

　閉められたままのカーテンを見つめているアジアンの視線を遮さえぎるように、せんせいが近づいてきた。

「慣れたかい、一いつ般ぱん房には」

「はい」

　短くそう答えながら、アジアンはまだカーテンから目を離はなせないでいた。

「どうした」

　気がつくと、せんせいが目の前にいた。

　せんせいの指がアジアンの頬ほおにふれた。つめたかった。

「何か気になることでも？」

「いいえ」

「座りなさい」

「はい」

　アジアンはせんせいが目で示した背もたれのない回転椅い子すに腰を下ろした。

　医務室の壁かべや備品は、相変わらず黒い文字が書きこまれた白い紙し片へんにほとんど埋うめつくされていた。

　せんせいは机の前の椅子に腰かけて脚あしを組み、あのつめたい指の先で肩の上のナジをそっと撫なでた。

「きみは私の患かん者じゃだからね。何か問題が生じたらすぐに対処しなければならない。そのためにきみの日誌は見せてもらっているのだよ。昨日から作業で移動を担当しているらしいね」

「はい」

「楽な仕事ではないね。きみにはまだきついだろう。担当を変えてもらえるよう私から所長に頼たのんであげようか」

「大だい丈じよう夫ぶです」

「つらくはないのかい」

「仕事だから」

「きみにはふさわしくない仕事かもしれないよ」

「規則だから」

「規則など、その気になればいくらでも変えられるのだよ」

「変える……？」

「規則は守るためにあるのではない。縛しばるためにあるのだよ。縛りつけるために、ね」

　せんせいは何かつづけようとしたが、不意に目を瞠みはって右手を挙げた。

「少し待っていてくれるかい。思い出したことがあってね。書きとめておきたいのだ」

「はい」

「すまないね」

　せんせいは机の抽ひき斗だしから四角い紙をとりだして、その上に黒いペンで何やら書きはじめた。

　耳を澄すますと、ペンが走る音以外に、カーテンの向こうから何者かの息づかいが聞こえてくるような気がした。

　気のせいかもしれないが、あそこに誰かがいるように思えてならない。

「これでいい」

　せんせいは紙を五つに破って、それらをすべて小さな鋲びようで壁に留めた。

　たなとぅす、じゃしゅぎしゅ、あるかーでぃあ、うるくはんど、やぬぅ、という綴つづりが目に入った。

　しかし、一いつ瞬しゆん後にはどの文字とどの文字がどう繋つながってそう読むことができたのかわからなくなった。

「待たせたね。さあ、診しん察さつをしよう。服を脱いで」

「はい」

　アジアンは椅子から立ちあがって、靴くつと衣類を全部脱いだ。衣類をたたんで椅子の上に置くと、せんせいが一番奥の手前の寝台を指さした。カーテンで閉ざされた寝台の隣となりだ。そこに誰かがいて、自分はその誰かに近づこうとしているのだと考えると、胸の鼓こ動どうがわずかに高まった。寝台に敷しかれた白いシーツはひんやりしていた。その上で仰あお向むけに寝ねている自分と同じように、カーテンの向こうでも誰かが横になっているのだろうか。せんせいがカーテンを引いた。今までそんなことをしたことはない。やはり隣に誰かいるのだろう。厚手のカーテン二枚を隔へだてた場所に、手をのばせば届くかもしれないほどすぐ近くにいるその誰かのことが頭から離れない。キミはボクの声を聞いていただろう。ボクがここにいることも知っているだろう。ボクもキミがそこにいることを知っている。このカーテンを指でつまんで引いたら、キミはこたえてくれるだろうか。

　キミはそこにいますか。

「目を閉じて」

　せんせいが診察のときに何をしているのか、アジアンはよく知らない。見ることができないからだ。ただ感じることしかできない。せんせいはアジアンの閉じた瞼まぶたの上に何かを貼はりつける。目を開けようとしても開けられなくなる。それから鼻と口に何かをあてがわれる。多少息苦しくなるが、呼吸はできる。首と手首と足首、それから腰こしのあたりに何かを嵌はめられて、身動きがとれなくなる。腕うでの、肘ひじの裏側あたりに何かが押しつけられる。おそらく鋭するどい物体だ。それは皮ひ膚ふをたやすく突つき破る。同じようなことがあちこちで行われる。せんせいのつめたい

指がふれることもある。せんせいは何かを調べているのかもしれない。せんせいがペンを走らせる音もたまに聞こえる。せんせいは何かを書きとめている。忘れないように。鋭い物体に突き刺されるよりも激しい痛みを感じることもある。せんせいはその指よりもつめたい何かを、たとえば腹部に突きつけて一気に引く。思わず声を出してしまうこともある。せんせいが、大丈夫かい、と言う。何も考えずに、はい、と答える。そのとき、アジアンの身体からだは切り開かれているのかもしれない。皮膚の内側にあるものが露ろ出しゆつして、外気にふれているような感覚がある。だが、見ることができないから、はっきりしたことはわからない。硬かたいもの同士がこすれあうような音がする。やわらかいものが曲がったりゆがんだりするような音もする。何か液体のようなものが音を立てる。我が慢まんするのだよ、とせんせいが言う。何も考えずに、はい、と答える。たぶん、アジアンは切り裂さかれている。切り落とされている。切り刻まれている。ばらばらにされる。そしてまた繋ぎあわせる。それは思い違ちがいかもしれない。わからない。アジアンは見ることができない。ただ感じることしかできない。

　やがてせんせいが、鼻と口にあてがわれていたものを、それから、身体の各所に嵌められていたものを外して、瞼の上に貼りつけてあったものを剝はがしてくれる。目を開けると、せんせいに見下ろされている。せんせいはたいていアジアンの頭を撫なでる。

「いい子だ。よく我慢したね」

「はい」

「このまま待っていなさい」

　いつもと手順が違う。せんせいは箱形の入れ物を持ってカーテンの合わせ目から出ていった。アジアンは一人取り残された。せんせいはどこへ行ったのだろう。すぐにわかった。隣だ。せんせいはカーテンの向こうにいる。二枚のカーテン越ごしにせんせいの声が聞こえる。

「──いいだろう。服を着なさい」

「はい」

　あれは、でも、せんせいの声じゃない。

まるで自分の声のようだった。

自分の声と似ているわけではないが、なぜかとても似通っているように感じられた。

誰だれなのだろう。

キミはいったい何者なのか。

今、キミは服を着ている。

音が聞こえる。布と布が、あるいは布と皮膚がこすれあう音だ。

たしかめたい。

キミが誰なのか、この目で見たい。

アジアンは足あし許もとにたたまれていた真っ白いキルトを引きよせて、自分の身体をくるんだ。

寝しん台だいの上で四つん這ばいの姿勢になって、せんせいが出ていったカーテンの合わせ目に手をふれようとして、ためらった。

このまま待っていなさい、とせんせいは言った。自分はせんせいの命令に背そむこうとしている。いや、すでに背いている。

隣で寝台が微かすかに軋きしむ音がした。寝台から下りたのだろう。足音が聞こえる。あれはサンダルの足音だ。隣のカーテンが引かれた。せんせいか。せんせいが歩いてゆく。おそらく扉とびらに向かっているのだろう。せんせいは扉を開けて、黒覆面を呼び入れるはずだ。サンダルの音はしない。立ち止まっている。たぶん、寝台のすぐそばだ。もしかしたら、このカーテンを引き開けたら、すぐそこにキミがいるかもしれない。裏地のついたカーテンの厚さがいまいましかった。このカーテンがもっと薄うすければ。影かげでキミがどこにいるかなんてすぐにわかるはずだ。せんせいが扉を開けた。せんせいは黒覆面に検けん診しんの終しゅう了りようを告げるだろう。そうしたら黒覆面が医務室に入ってくる。連れてゆかれてしまう。キミの吐と息いきを聞いたような気がした。やはりすぐそばだ。カーテンに手がかかった。思いきって開けてしまおうとしたが、指がひどく震ふるえている。力が入らない。それでもなんとか少しだけ引いた。できた隙すき間まからは医務室の風景が見えるだけだった。身を乗りだして隙間に顔を突っこんだ。右を見た。

　真っ赤な髪かみの毛だった。

　瞳ひとみは信じられないくらい鮮あざやかな橙だいだい色いろだった。

　ほっそりとしていて、心許なげな立ち姿だった。

　何ものかが丹たん精せいを凝こらして作りあげたのではなく、偶ぐう然ぜん、奇き跡せき的にできあがったのだとしか思えない。

　なんてきれいなんだろう。

　目を疑うほどだ。

　いや、ひとたび目まの当たりにしてしまえば、疑うことなどできはしない。

　白とも灰色ともつかない色の服を着せられたキミは、ボクの視線を受け止めて、胸のあたりに手をあてている。

　ほんのりと色づいた唇くちびるがわずかに開いていた。

　驚おどろいているのかもしれない。

　でも、ボクのほうがもっと、何倍も、何十倍も、何百倍も驚いている。

　なぜなら、

　それは、

　だって、

　ボクは、

　キミを、

　知っている。

　そう。

　ボクはキミを知っている。

会いたかった。

ずっとキミに会いたかった。

会いたくてたまらなかった。

怖こわいくらいに会いたかった。

キミを見つめたい。見つめていたい。何時間でも、何日でも、いつまでも、キミを、キミだけを見つめていたい。キミの声を聞きたい。囁ささやき声でもいい。呟つぶやく声でもいい。その叫さけび声はボクの胸をやすやすと引き裂くだろう。泣き声はボクを絶望させるだろう。笑い声はボクを天まで昇のぼらせる。キミの香かおりはボクを恍こう惚こつとさせ、安心させ、あるいは昂たかぶらせるに違いない。キミにふれたい。ほんの少しでいい。ふれることができなくてもいい。でも、キミを抱だきしめることができるのなら、そのためなら、ボクはあらゆる事物を滅ほろぼしたっていい。全部を犠ぎ牲せいにしてもいい。この望みが叶かなわなくてもいい。満たされなくてもいい。だけれど、もしも叶うのなら、取引を持ちかけられたとしたら、ボクはどこまでも譲じよう歩ほするだろう。追いこまれてもいい。立っていられる場所がなくなってもいい。それでもボクはキミを選ぶだろう。選ぶこと、求めること、願うこと、それはすべてキミに繫つながっていて、ボクはそれを断たち切ることは決してできないだろう。

ボクは知っている。

キミはボクのすべてだ。少なくとも、すべてになりうるのだということを知っている。

キミの何もかもを知りたい、知りつくしたい。

恐おそろしいほどに、ボクはキミが欲しくて欲しくてたまらない。そこに限界はない。限度もない。ただ何もかもを超ちよう越えつしたキミしかない。キミは唯ゆい一いつにして全だからだ。

でも、ボクはキミを知らない。

キミは誰だれだ。

どうしてボクはキミを知らないんだ。

　こんなにも会いたかったのに。

　会わないほうがよかった。

　なぜそう思うんだ。

　ひょろ長い黒覆面が医務室に入ってきて、キミの両手に革かわ手て錠じようを嵌はめ、連れてゆく。

　キミは一度も振ふり返らなかった。

　そんなキミを見送ることしかボクにはできなかった。

　追いかければいい。

　思いたったときにはもう、キミは黒覆面に連れ去られて、医務室の扉は閉ざされていた。

　せんせいが扉の前で振り向いて、唇の両端をつりあげてみせた。

「このまま待っていなさい、と言ったのにね。いけない子だ、アジアン」

13

　どこかにいた。

　ここではない場所に。

　あれはどこだろう。

　わからない。

　白い指がのびてきて、顎あごの先にそっとふれた。

　真っ黒い爪つめだ。訝いぶかしく思いながら顔を見た。せんせいだった。せんせいは目を閉じていた。ひどく不安になって、せんせい、と呼びかけると、瞼まぶたがゆっくりと開いた。せんせいの目ではなかった。白目にあたる部分が真っ黒で、黒目が、漆しつ黒こ

くだったはずのせんせいの黒目が、真っ赤だ。せんせいではない。違ちがう。

「きみは、私の」

　でも、この声は。きみは私の。きみは、おまえは、私の。私の、おまえは。きみきみわたしおまえのわたしのおまえは。のしたわはえまおまえはわたしの。おまえはわたしの。知っている。この声を。白目が黒く、真しん紅くの虹こう彩さいと黒い瞳どう孔こうの境目が金色に輝かがやいている。この目を、この白い指を、黒い爪を、知っている。この男を、知っている。どこかで、いつか、会ったことがある。この男と。そうだ。知っている。この男を、知っている。ボクは。

　あれはどこだろう。暗い。ひどく暗い。底だ。どこまでも深い。深しん淵えん。男が何か喋しやべっている。低く乾かわいた声で誰かに語りかけている。時折こちらに顔を向ける。その男の目。黒と赤と金の目。黒い唇くちびる。黒い爪。白い髪かみを後ろに撫なでつけている。眉まゆ毛げや睫まつ毛げまで白い。肌はだも白い。その全身に、何かがのたうっているような、うごめいているかのような黒い紋もん様ようが浮うきあがる。ボクは座っている。座らされている。傾かたむいた椅い子すに座らされて身じろぎもできない。

　ボクは人形だ。ボクはボクとしてそこにいるのではない。だったら、何のためにボクはいるのだろう。わたしのためだよ、と男が言う。わたしのためにおまえはいるのだよ。そうだろう。ボクはうなずかない。そうは思わない。男が手をのばしてくる。黒い爪を。ボクは椅子に座っている。座らされている。身動きがとれない。おまえはにんぎょうだよ。わたしのためのにんぎょうなのだよ。

　ああ、暗い。とてつもなく暗い。どこまでも深い、ここは底だ。深淵に扉がある。おまえはわたしのにんぎょうだ。ボクは否定しようとして、男から顔をそむける。自分の身体からだを見る。そこに人形の証あかしを見つけて愕がく然ぜんとする。どうすればいい。どうしたらボクは。どうにもならないよ。おまえをもとめるものたちがたくさんいるよ。おまえはただこたえてやればいいのだよ。おまえはてにいれるだろう。おまえのそんざいりゆう。おまえがいることのかち。おまえはおまえでいられる。ボクは首を振ろうとする。必死にあらがおうとする。男が嗤わらう。唇の両りよう端たんをつりあげて嗤う。ああ、ここは深い、あまりにも深すぎる、ここから出なければ、出てゆかなければ、何も見つけられない。何を探

そうとしているのかさえ、わからないくせに。

「いっそ、――でも作ってしまったらどうかな」

ずっと考えていたんだ。

ずいぶんと長い間、考えていた。

いつも肝かん心じんなところをぼやかした小こ賢ざかしいばかりの言葉や、それが本物かどうか確かく認にんするすべがない感情だけでは信じあえない。

本当は信じたいんだ。

でも、信じることがうまくできない。

何かが必要だと思った。

形のある、何かが。

たとえば――はどうだろうか。

それがあれば、それがあることを理由にして、言い訳にして、たまには寄りかかりあうことくらいはできるだろう。

誰よりも、自分にとってそれが必要なのではないかと。

それが欲しいのだと。

願って、望んで、手に入れようとした。手に入れた。

安住の地を。

小さな楽園を。

そのはずだった。

いつもの会議だ。やつらはとりたててやることがないものだから、いつも会議ばかりしている。また悪口を言っているのだろう。愚ぐ痴ちでもこぼしているのだろう。悪わる巧だくみをしているのだろう。うるさい。黙だまれ。じっとしていろ。

冗じよう談だんではないなぜなにゆえ我らが黙らねばならぬのだ

この哀あわれでみじめで卑ひ劣れつで虚きよ言げん妄ぼう言げん吐はきの美しいだけが取り柄えの裏切り者の王子め何も知らぬ無知で厚こう顔がんで愚おろかで屑くず以下の価値しかない八つ裂ざきこそがふさわしい否いなそれすらも勿もつ体たいない貴様こそが黙れ黙りおれさあ傷ついたか脆もろい弱いかわいそうなかわいそうな愛いとしく憎にくたらしい我らの王子よ我らが慰なぐさめてやろうだから寄よ越こせ寄越すのだ渡わたせ今すぐ引き渡せさすれば王子よ貴様は楽になるのだぞ何も考えずにすむのだぞ何も我らは甘かん言げんを弄ろうしているのではないぞ貴様のためだ貴様のかわいそうな貴様のためだ何もかも貴様のそれをよく覚えておくのだ心せよ死に腐くされの美しいだけしか能がない忌いみ子の悲しみの孤こ立りつした差別されるに値あたいする生いけ贄にえの王子め王子の殻からを被かぶらされた人形め。

ああ。

わかっていたはずなのに。

忘れようとした。忘れたふりをしていた。無理だった。

近づけば近づくほど思い知らされる。

ボクはそこには行けない。

その楽園はボクにはふさわしくない。

あまりにも違いすぎて。

だけれど、そこにいたかったんだ。いつまでもしがみついていたかった。

同時に、捨ててしまいたくもあった。

どうしてうまくやろうとすればするほど、自分はただの役割と化して、それに自分自身をあてはめて踊おどるだけの人形に成り下がってしまうのだろう。

それはボクじゃない。ボクじゃないんだ。ボクを見て欲しい。欺あざむいているのはボクなのに。

失う前に、壊こわしてしまう前に自分から捨ててしまえば、負うべき傷の痛みもやわらぐかもしれない。

　一人で歩いてゆこう。灰色の荒あれ地をどこまでも歩いてゆこう。

　あてなんかなくていい。

　黄色い太陽がぎらぎらと照りつけて身体中の水分を容よう赦しゃなく奪うばってゆく。

　そのうち干ひからびて前へ進む力がなくなり、すべてが終わる。旅に出よう。

　何度もそう心に決めかけては、結局、決めあぐねていた。

　そんなときに、見つけたんだ。

　キミを見つけた。

　ずっとボクが探していたのはキミだった。

　キミとの出会いはボクのものだ。

　ボクだけのものだ。

　そうさ。王子よ。

　そいつは貴様のものだ。

　いただいてしまえ。

　黙れ。

　黙れ。

　黙れ。

　黙るものか黙るものですか王子め肥こえ溜だめに落ちて歌う声を奪われた鳥のごとき王子め棘とげだらけの籠かごに閉じこめられて翼つばさも衰おとろえもはや立っていることもできぬ惰だ弱じゃくなる王子め貴様のおまえのものだと何もかもが貴様の勘かん違ちがいだ大いなるそれは錯さく誤ごだ間違いだ貴様のおまえのものは我らのものだ我らの餌えさださあ食わせろ助けを求めているではないか救いを救ってやろうではないかそしていただいてしまおう我らが流る浪ろうの寂さびし子の儚はかなき王子よ貴様ではなく我らが喰

くろうてやろうぞしゃぶりつくしてくれる骨まで嚙かみ砕くだいて味わいつくしてやろうぞ。

「一度しか言わない。よく聞け」

　遅おそかった。間に合わなかった。

　抑おさえることができなかった。

「その人から離はなれろ。さもないと全員殺す」

　本当に、少しも、まったく、予想もしていなかったと言いきれるか。

　まさかあんなことになるなんて、考えてもみなかった？

　心のどこかで恐おそれてはいた。いつだって怯おびえていた。

　失うことを。

　そうすれば気づかざるをえなくなる。

　ボクはもう一人じゃない。

　それなのに、こんなにも一人だ。

　そうさ所しよ詮せんはそういうことさわかっているではないか愚ぐ鈍どんで鈍のろ間まで欠損していてそのままでは使いものにならぬ観賞用にしかならぬお飾かざりの王子よ貴様はおまえは孤こ立りつ無む援えんだ無む駄だなことだ足あ掻がいても藻も掻がいても無意味だ何にもならぬ貴様は喜劇の王子だお笑い種ぐさだ一人きりだどうせ救われぬかわいそうなかわいそうな我らの我らの我らの単なる獲え物ものだ身の程ほどを知れ。

　でも、キミは、キミだけは、違う。

　だって、ボクはキミをこんなにも求めている。

　でも、どうして、ボクは。

　会いたい。

　会いたいんだ。

会いたくてたまらない。

それなのに、キミがいない。

キミを捜さがした。

キミを待っていた。

「久しぶりだね、アジアン」

14

作業が終わったあとの十六時四十分から十七時二十分までの時間は、入浴か運動に割り当てられている。

運動といっても、運動場と称しようした、端はしにベンチがあるだけのだだっ広い灰色の大広間に一いつ般ぱん房ぼうの全員が放ほうりこまれて、四十分間を思い思いにすごすだけだ。監かん視しの係員に希望すれば、片手では握にぎれない大きさの黄色いボールが貸し出されるが、数に限りがある。各房で支配的な影えい響きよう力を持っている者以外は、たいてい揉もめ事を恐れて係員に近づくことさえしない。逆に言えば、ボールを持っているのは有力な派は閥ばつに属している者だ。

たまに、そうした派閥の間でボールのぶつけあいが始まることがあって、度が過ぎると係員たちが止めに入る。

あとは、運動場に二つしかない階段状の大きなベンチ、通つう称しよう・階段椅い子すをどの派閥が占せん領りようするかという争いがあるようだ。現在は一つを四号房のダリエロ派が、もう一つを八号房の女たちが、それぞれ自分たちの領土として、他ほかの者たちに睨にらみをきかせている。

いずれにしても、今のアジアンにとってはどうでもいい。

いや、それどころではないと言ったほうが正確だろう。

体調も気分も最悪だった。

立っているのがつらくて、壁かべに背をもたれさせて床ゆかに腰こしを下ろしているのだが、それでも苦しくてかなわない。肋ろつ骨こつがぎゅっと縮まって肺を圧あつ迫ぱくしているかのようだ。背中が張るというよりも強こわ張ばっていて、呼吸をするたびに疼うずいた。脚あしは自分のものとは思えない。意のままにならない棒きれがぶら下がっているみたいで、いっそ邪じゃ魔まなだけだ。腕うでも似たような有様で、手は信じられないくらい熱を持っていた。分厚くて熱い肉でできた手て袋ぶくろをはめているかのようだ。首は頭を支えているというよりはかろうじて吊つり下げている。はっきりした痛みを覚える肩かたは、むしろさしたる苦痛の種ではない。痛みは歯を食いしばってこらえればいいが、この苦しさに耐たえるすべはどうしても思いつかない。正直、不思議なくらいだ。作業の時間が終わるまで、無数の叱しっ咤たや何度もの激げき励れいを受けたにせよ、よくも動きつづけることができたものだ。

せんせいに担当を替えてもらえるように頼たのめばよかった。もういやだ。移動はつらい。つらすぎる。まだ二日もある。いや、二日で終わるだろうか。必死でやっているつもりなのだが、これだけ何回も何回も係員に叱咤、激励されている。死神が延期を申し渡わたしてきたとしても驚おどろかない。明日も移動。明後日あさってても移動。その次の日も、また次の日も移動をやらなければならないとしたら、果たして我が慢まんできるだろうか。自信がない。きっと無理だ。

次の検けん診しんはいつだろう。もし今せんせいに会ったら、迷わず頼みこむ。移動はやめたい。そのために、医務室に行きたい。そして、キミに、そう、またキミに会いたい。

キミの夢を見たような気がする。

内容は覚えていないが、おそらく、あまりいい夢ではなかった。

そのせいなのかもしれない。

キミのことを考えるのもつらい。

ダメだ。

こうしてじっとしていると、苦しみや痛みだけに心が奪うばわれて、ひねり潰つぶされてしまいそうになる。

運動場は四角いが、四辺が同じ長さではなく、会堂に通じる廊ろう下かへの扉がある辺と、それと向かいあっている例の開かずの扉がある辺は、他の二辺よりも短い。一号房から八号房までの男女が全員詰つめこまれてもかなり余よ裕ゆうがあるくらいだから、そうとう広いのだろう。

階段椅子は二つの長い辺の真ん中あたりに一つずつあって、アジアンはダリエロ派が占領しているベンチから距きょ離りをとり、その先に処理設備があるという開かずの扉の近くにいる。会堂への扉周辺は、どうやら派閥に属していない、あるいは属することができず、少人数でつるんでいるような連中でにぎわっていて、一人きりで座っていられるような雰ふん囲い気きではなかった。その点、今、アジアンがいるあたりは、誰だれも彼も周りの者と口をきくでもなく、だいたいうつむいて何かやっているか、座って目を閉じているかだから、騒さわがしくなくていい。

とはいえ、あぶれ者もさまざまだ。なかには壁に向かって何かぶつぶつ呟つぶやいている者や、上半身裸はだかになってひっきりなしに身体からだを動かしている者もいる。上半身裸の男は白い仮面で素す顔がおを隠かくしているのだが、あれは問題ないのだろうか。それにしても、すごい筋力だ。いきなり逆立ちを始めたと思ったら、男は右手の人差し指だけで体重を支えていた。信じられない。

あの男も四号房だ。ダリエロ派のレイジよりもずっと背が高く、幅はばや厚みも遥はるかにまさっていて、運動の時間だけでなく、房内でも暇ひまがあればああして身体を鍛きたえているような印象がある。一目でも見れば、四号房一の変わり者というあの男の評判について、誰も異論は唱えないだろう。

仮面の男の所業に驚くよりも呆あきれていたら、少しだけ気が紛まぎれた。

アジアンは天てん井じょうを仰あおいで、ゆっくりと息を吐はいた。

不意に赤い髪かみと橙だいだい色いろの瞳ひとみが脳のう裏りをよぎって、首を振ふった。

ボールをつきながら近づいてくる者がいることには気づいていた。

　三人連れだった。

　一人はリー・ブラックのような黒い肌はだの男で、細かく編んだ長い髪と、まん丸い目が特とく徴ちよう的だ。番号も名前も知らないが、四号房で、ブラックと一いつ緒しよにいるところをよく見かける。ダリエロの側近であるブラックの腰こし巾ぎん着ちやくといったところだろうか。

　あとの二人は、向かいの部屋からいつもアジアンを見張っている連中だから、その顔は見み飽あきている。額から目を通って頬ほおに達する大きな×の字の傷きず跡あとがあり、絶えず薄うす笑わらいを浮うかべているのがメツェルディで、常に青白い顔をうつむかせ、こめかみのあたりを指で押さえているのがポーだ。

　ちらりと三人を見やった瞬しゆん間かん、ボールが飛んできた。

　ボールはアジアンの右頬をかすめて壁にあたった。

　壁にはね返されたボールは、一度バウンドして黒い肌の男の手に収まった。

「ア・ジ・アァ～ン。調子はどうお～？」

　黒い肌の男は歌うように節をつけて言いながら、ボールをついた。

　一回。

　二回。

　三回目の直後だった。黒い肌の男はボールを両手で持って胸の前に引きよせ、右足を勢いよく前に出した。ボールを投げつけてくる、とは思わなかった。ボールが男の手を離はなれることはない。理由はわからないが、アジアンはそう判断した。そのとおりだった。男は歯は茎ぐきを剝むきだしにして目を細めた。

「びっびんないんだもぉ～ん。ア・ジ・アァ～ン、つっまんねぇ～よぉ～。なんっか、オレがバッカみたいじゃ～ん、イヤッ！」

　うっうっうっ、と、喉のどというより肺を震ふるわせるようにして笑ったのはメツェルディだ。ポーはこめかみを指でもみながら小声で何か呟いている。

　黒い肌の男はボールをメツェルディに渡わたし、よん、よん、よぉ～ん、という意味不明のかけ声にあわせて軽く跳はねながらアジアンの隣となりまでくると、床ゆかにしゃがみこんだ。

「オレ、ネームはシャマニ、ナンバーはヨン、イチ、ゼロ、つっ、まっ、りぃ、イヤッ！　すなわっちぃ～、ヨンヒャクジュ～なわけ。オーケィ？　覚えた？　簡単っしょ？　ネ？　覚えたよね？　イヤッ！　つーわ、け、でっ、よろぴこ」

「よろしく」

　アジアンはシャマニを一いち瞥べつして短くそう答えただけで、差しだされた右手は握にぎらなかった。シャマニはしばらく不満そうにン～ン～言いながら手を出しつづけていたが、やがてあきらめたのか引っこめて、いきなりフッハハッと笑いだしたかと思うと、態度が一変した。

「テメェ調子こいてんじゃねぇ～ぞ、アッ、コラ？　何様だと思ってんだ？　テメェ何様だっつってんだよヲ～イ？　人が下手に出てりゃ～つけあがりやがってよ～このオレがやさしいだけの男だと思ったら大おお間ま違ちがいだぞ？　わかってんのかヲ～イ？」

「つけあがっているつもりなんかない」

「それがつけあがってるんだっつ～の。だいたい生意気なんだよ。だってテメェ、移動でヒ～コラいってんだろ？　なのに何、その態度？　いいと思ってんの？　のびちゃうかもよ？　何、ずっとちゅらい思いしたいんでちゅかぁ？　もちかちてマゾヒストでちゅかぁ～？」

「それは係員が決めることだろう」

「ホ～そぉ～かなぁ～ホンットォ～にそぉ思ってんの？　マジで？　真しん剣けんに？」

　シャマニがただでさえ丸い目をよりいっそう丸くすると、メツェルディは下した唇くちびるを舐なめながら、えっえっえっ、と笑い、ポーも声こそ出さなかったものの唇を笑う形にゆがめてみせた。

　ふと階段椅子のほうに目をやってみたら、ダリエロやリー・ブラックらがこちらを見ていた。考えるまでもないことだが、シャマ

ニはダリエロに命じられてここにきたのだろう。おそらく、アジアンに何か伝えるために。

「甘あめぇ～よ、ア・ジ・アァ～ン。テメェの運命なんぞオレらの房ぼう長ちよう様の匙さじ加減一つでどぉ～にでもなっちまうってこと、どぉ～してわかんねぇ～のかな？　バカなの？」

「だとしても、ボクにはどうしようもない」

「そぉ～んなこともないと思うんだけどな？」

　シャマニは床に腰こしを下ろして首を左右に曲げた。

「つーかさぁ～、テメェはなぁ～んか勘かん違ちがいしてるって。ぜってぇ～そぉだって。あのな？　ダリエロって、そんな常にムチャクチャな人ってわけじゃねぇ～よ、実際？　わりと考えるとこは考えてたりするよ、マジで」

「そう」

「あぁ～ら、何、その関心ない、関係なぁ～いみたいなリアクション。さみっしぃ～なぁ～せつないねぇ～悲しくてたまらんねぇ～。オレがきわめて真ま面じ目めに話してるってのにそぉ～ゆう態度はないんじゃね？」

「ボクはちゃんと聞いている」

「そいつぁ～よござんした。したっ！　てヲ～イ、よかねぇ～ザンスよ殺すぞテメェ？　オレに話をさせろよ、真面目な話してんだからよ？」

「話があるなら好きなだけ話せばいい」

「話すよ。話しちゃうよ。つーかさぁ～、もぉ～なんかオレ忘れちったよ何話せばい～かさぁ。なんだっけ、えっとぉ～……」

「医務室」

　ポーが暗く湿しめった声でぼそりと言った。

「ああああっ！　そぉ～それ！」

　シャマニは手を打ちあわせてから、イヤッ！　と叫さけびながらポーに向かって親指を立ててみせた。

「医務室だよ医務室。そぉ～だった。んで、テメェあれだろ、昨日連れてかれたろ、医務室。検けん診しんとか言って」

「ああ」

「何だよあれ？　どぉ～ゆうこと？　検診って何、テメェあれか？　病気持ちなわけ？　持病ありんこ？」

「さあ」

「さあじゃねぇ～よ。自分の身体からだのことなんだから、自分でわかんだろぉ～がよ。持病ありんこかどうかくらいはよ。わかんだろフツー」

「わからない。でも、検診は閉へい鎖さ房にいたときから受けていた」

「ずっとかよ？」

「覚えいているかぎりでは」

「これからも受けるわけ？　検診」

「たぶん」

「センセイとは親しいの？　つまりぃ～、その、親密かどうかってこと。て、同じじゃねぇ～かよオレ、何言っちゃってんのよ。とにかくオレは、ア・ジ・アァ～ン、テメェにきいてるわけ、医務室のセンセイとはいったいどぉ～なのよ？」

「親しい、とは思わない」

「へぇ～」

　シャマニは鼻の下あたりを指でごしごしこすって、チッチッチッと舌を鳴らした。

「よっくわっかんねぇ～けども、つってもだ、これからも検診受けるっつーことはぁ～だ、それっつーことは、よぉ～するにあれだよ

な、事実として、テメェはケッコー医務室に入れるってことだよな？」

「……シャマニ、それ以上は」

　ポーがこめかみを押さえながら止めに入った。

　シャマニは、おおおっと、と両手で口をふさいで、歯は茎ぐきを剝むきだしにして笑いながら立ちあがった。

「あんま余計なこと口走ったら、オレもあれだかんな、やっべぇ～からな。へっへっへっ。今日はこのくらいにしといてやんよ。感謝しろよ、ア・ジ・アァ～ン」

「何を感謝すればいいのかわからない」

「それはテメェの頭が悪わりぃ～からだよ」

「そう」

「そう、ってヲ～イ、そうとうむかつくやつだな。さてはムカポンだな、テメェ」

　軽口をたたいているような口調ではあったが、その両りよう眼めには不ふ穏おんな輝かがやきが宿っていた。

　シャマニはそれをごまかそうとでもするかのように、これまで以上にくねくねした奇き妙みような身み振ぶりで、メツェルディにボールを返すよう要求した。

　メツェルディは手て渡わたすのではなく、軽く投げた。

　シャマニは腰をひねりつつ右足を後方に振ふり上げて、シュッ、と鋭するどく息を吐はいた。

　アジアンは動かなかった。

　動けなかった。

　シャマニの右足がボールをとらえた。

　黄色いボールがひしゃげる瞬しゅん間かんをアジアンは見た。

飛んできた。

ものすごい速度だった。

次の瞬間、息ができなくなった。

胸と喉のどの間あたりだ。

ボールが直ちよく撃げきした。

身体が勝手に反応して、ボールを受け止めようとしたのだが、わずかに間に合わなかったのだろう。

ボールが床ゆかに落ちて弾はずんだ。

メツェルディが薄うす笑わらいを浮うかべながらボールを拾い、ポーはこめかみを指で押さえたまま、ぷっ、と吹ふきだした。

「あのねぇ～忠告しておくよぉ～ん、ア・ジ・アァ～ン」

シャマニは左手を腰こしにあてて、右手の人差し指を左右に振ってみせた。

「テメェはさっさとダリエロに謝り入れろ。んで、どぉ～か仲間にしてください、そのためなら何でもします、お願いしますって頼たのめ。頼みこめ。そうしねぇ～とテメェ、ろくな目に遭あわないよん？　もっちろん、オレはい～けどさぁ。テメェはムカポンだしねぇ～勝手にのたうち回ってればってかんじだけど、テメェはどぉ～なのよ？　テメェ的には？　それでい～わけ？　考えてみろよ。テメェにとって何が得で、何が損か。すぐにわかるはずだけどな？」

三人が背中を向けて歩き去ってゆくまで、アジアンは必死に我が慢まんしていた。どうして我慢しなければならないのか、自分でもよくわからなかったが、とにかくそうするべきで、そうしなければならないと強く思った。三人の後ろ姿が階段椅い子すのそばまで遠ざかってから、ようやくアジアンは咳せきこむことを自分に許した。背中を丸めて、口に袖そでをあてがっていたのだが、よほど激しく咳をしていたのか、係員が近づいてきて、どうした、４２８、大だい丈じよう夫ぶか、ときいてきた。声を出して答えられる状じよう況きようではなさそうだったから、アジアンは首を何度も縦に振ってみせた。

係員はそのうち持ち場に戻もどっていった。

咳はなかなか止まらなかった。

15

会堂で向かいの席に座るアルバートは、まばたきをほとんどせずにアジアンを凝ぎよう視ししたまま、器用にフォークを操あやつってきれいに食事を平らげる。背が高く、いつも髪かみを丁てい寧ねいに撫なでつけていて、目鼻立ちも整っているのだが、欠点らしきものがないその外見が、なぜか仮の姿であるかのように感じられる男だ。

アジアンはフォークを休めて、アルバートの目を見つめ返してみた。

珍めずらしくアルバートの手も止まった。

自分にとって、何が得で、何が損か。

考えればすぐにわかるはずだとシャマニは言った。

どうやら、それは正しくないようだ。

食事終しゆう了りようの十七時五十分になって、係員たちが「下げ膳ぜん！」の号令を発しても、アジアンはアルバートから目を離はなさなかった。食事は半分ほど残っていた。アルバートも同じだった。隣となりのクラニィが膳を下げるために椅子から立ちあがっても、アジアンはじっとしていた。他ほかの者たちも続々と席を立ちはじめた。

アルバートが唇くちびるの端はしをゆがめた。

誰だれかが駆かけよってきた。

「下げ膳だぞ！　貴様ら何をやっている！」

係員だ。それでもアジアンはアルバートを見すえていた。アル

バートがとうとう先に目をそらして、係員に頭を下げた。アジアンはアルバートが席を離れてから、フォークをトレイの上に置いてゆっくりと立ちあがった。係員に呼び止められ、怒ど鳴なりつけられたが、一言謝るだけですんだ。厨ちゆう房ぼうのそばに膳台と呼ばれる大きな棚たな付きの台車が二台置かれていて、食器はそこに下げることになっている。前を行くアルバートはやけにゆったりとした足どりだった。すぐに追いついてしまい、追い越こそうとしたら、速度を上げてきた。アジアンが足を止めると、アルバートも立ち止まった。結局、並んで歩く羽目になった。膳台の周りにできている人だかりの最さい後こう尾びについても、アルバートはアジアンの隣から離れなかった。今までは下げ膳のときまでつきまとってきたりはしなかった。これもダリエロの指示なのだろうか。だとしたら、何のために。どうせアジアンは逃にげることも隠かくれることもできないのに。

いや、だが、本当にできないのか。

何か方法はないのか。

ある。

せんせいに頼めば、閉へい鎖さ房ぼうに戻してもらえるかもしれない。

そうすれば、作業をさせられることもない。四六時中誰だれかに見張られているわずらわしさからも解放される。あの青い光の部屋に閉じこめられて、静かに、じっとしていられる。何も考えなくていい。というよりも、考えられなくなる。考えても意味がないからだ。

ボクは誰かを見て、その誰かはこう思っているだろうとか、こんなことを考えているだろうと想像する。

でも、何の根こん拠きよがあって、ボクはそんなふうに想像しているのだろう。

自分をその誰かに置き換かえて考える？

自分を？

その自分のことさえ、よくわかっていないのに？

　白い仮面をかぶった巨きよ漢かんの背中が目の前にある。隣にはアルバート。顔に×の傷きず跡あとがあるメツェルディも近くにいる。ポーは見あたらない。レイジが膳台の最上段にトレイを置こうとしている。ダリエロはどこだろう。リー・ブラックとシャマニと、もう一人、二人と同じような黒い肌はだの男がいる。クラニィはもう会堂をあとにしようとしていた。ローガンがその後ろにいる。クラニィと親しい、というよりも、クラニィを慕したっているらしい二人の若い男がローガンに追いつこうとしていた。やたらと長い髪の毛を編んで首に巻きつけているあの男も、たしか四号房だ。左手の指が五本ともないあの老人も、よくダリエロのそばにいるから、当然、四号房ということになる。仮面の男に匹ひつ敵てきする体格だが、いつもうつむき加減で、ぼんやりした目をしているあの男も四号房だ。どう見ても男性なのに、女のように髪をのばし、尻しりを振ふって歩いているあの男も。背が低く、太っていて、やけに離れた左右の目の高さがずいぶん違ちがい、鼻はひん曲がっていて、唇が引き攣つれて膨ふくれているあの男も知っている。あの男も。あの男も。あの男も。四号房の者はたいてい覚えている。

　気がつけば、ボクは驚おどろくほど彼らを見ている。

　単に物もの珍めずらしいからだ。

　ずっと閉鎖房にいた。黒覆面は何人いようがただの黒覆面だったし、せんせいやナジとはたまに会うだけで、壁かべの向こうのキミとは声を交わすことさえできなかった。それと比べたら、今は周りに人がたくさんいる。いろいろな人がいる。何もかもが、誰も彼もが目新しい。たしかに、作業はきつい。何かを考える余よ裕ゆうなんてないときもある。でも、一日中息も絶え絶えで、倒たおれる寸前か倒れていて、目を開けていることすらつらいという状じょう況きょうでもない。

　ボクは見ている。

　そして、ボクは考える。

　彼らは何ものであり、ボクは何ものなのだろう。

　くだらぬことを。

　くだらぬ。

誠にくだらぬ。

考えるだけ無む駄だだ無駄だ無駄だと言っているのがなぜわからぬ偽いつわりの欺あざむきの偽られ欺かれ無む為いのある意味有為の愛めでられたがりの許されたがりの弱き惰だ弱じやくなる貧弱なる脆ぜい弱じやくなる柔にゆう弱じやくなる虚きよ弱じやくなる孤こ弱じやくなる繊せん弱じやくにして軟なん弱じやくで薄はく弱じやくにして劣れつ弱じやくの大切な重要にして貴重な無価値な堂どう々どう巡めぐりの螺ら旋せん状の決して行きつくことのない終着点にたどりつくことはできぬのにそれを望む愚おろかな馬ば鹿かな愚ぐ鈍どんな蒙もう昧まいな阿あ呆ほうな痴ち愚ぐ魯ろ鈍どんな痴しれ者め捧ささげ者の癖くせに愚にもつかぬ愚か者め。

「──きゃっ」

何かが身体からだにぶつかったということはわかった。ただ、それが何だったのか、何が起こったのか把は握あくするまではいくらか時間がかかった。

視線を落とすと、女が尻しり餅もちをついていた。食べ残しはなかったようだが、手に持っていたのだろうトレイや食器が床ゆかに転がっている。着ている服はアジアンたちと同じだ。五号から八号房には女たちが収容されているので、その中の一人なのだろうが、不自然だ。膳ぜん台は二台あって、一号から四号房の者たち用と、五号から八号房の者たち用、つまり、男と女で分けられている。トレイをはじめ、すべての食器類にはそれぞれの番号が刻まれているし、どちらの膳台に戻もどしても同じというわけにはゆかない。たしか、食器等を決められた膳台に返へん却きやくしないことも規則違い反はんのはずだ。どうしてここに女が。

「いったぁ～い……あぁ～、いたいよぉ～……ちょっと、立てないかもぉ。あのぉ、悪いんだけど、手、貸してくれなぁい？」

疑問に思いつつも、アジアンはトレイを左手で持ち、右手を差しだした。黒い髪かみを短くしている女は、アジアンの手を両手で握にぎるというよりも、腕うで全体に絡からみついてきた。立ちあがる気がないのではないかと思えるくらい重かった。アジアンは体勢を崩くずしかけて、トレイが揺ゆれた。アルバートと不毛なにらみあいをしていたせいで、食事は半分ほど残してしまった。落とすわけにはゆかないので、どうにか踏ふんばって女を引っぱった。女はようやく立ってくれたが、そうかと思ったら今度は胸にしがみつい

てきた。

「あっ……」

　まるで、足あし許もとがふらついて、思わず、仕方なく、やむをえずそうなってしまった、とでもいうような仕し種ぐさだが、実態は明らかに違う。どうしてそんなことをしたのかわからないが、女は意図的に身体を密着させてきた。小こ柄がらなわりに重量感のある女だ。背はアジアンよりも頭一つ分は低いだろうか。女はアジアンを見上げて首を傾かたむけてみせた。

「ありがと。あたし、ナツコ。覚えといてね？」

　言い終わるか言い終わらないかのところで、係員が怒ど声せいを発しながら駆かけつけてきた。係員はナツコと名乗った女の肩かたをつかみ、アジアンから引きはがした。ナツコは、痛い、ちょっと、痛いってば、と抗こう議ぎの声をあげながらも、逆らう気はないようだが、謝罪して目こぼしを願おうという態度でもなかった。代わりに、男たちをかきわけて走ってきたやたらと背の高い女が、ごめんなさい、本当にごめんなさい、すみません、ほら、ナツコちゃんも謝って、もう、どうしてこんなことするの、いっつもいっつも、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、と繰くり返し繰り返し係員に頭を下げている。何しろ、男でもめったにいないような際きわ立だった長身だ。上半身を九十度以上倒しては起こし、倒しては起こしを飽あくことなくつづけるその謝罪には問答無用の迫はく力りよくがあった。係員も気け圧おされてしまったようで、やがてナツコを解放し、トレイと食器が転がっている床を指さして、片づけろ、と命じるなり離はなれていった。背の高い女は大きなため息をついてすぐにトレイを拾いだし、ナツコも手伝いはじめたが、本来は逆ではないのか。

「あ……あの、ナツコちゃんが、し、失礼なこと、して……ご、ごめんなさい……」

　背の高い女は、ナツコにトレイを渡わたすと、アジアンの前で深々と頭を下げた。

「わ、悪気はない……と、思うから、許してあげて……」

「ボクは、べつに」

「そぉだよねぇ？　あたし、失礼なことなんてしてないしぃ」

「な、ナツコちゃん！　男の人にし、し、しがみつくなんて、そ、そんなの、は、は、は、はしたないことだよ、もちろん、失礼だし、だって、同意もなく……」

「姉さんは大おお袈げ裟さすぎ。勝手に挿そう入にゅうしたわけじゃないんだからさぁ」

「そ、そ、そ、そうにゅ」

「まぁ、仮に挿入したって減るもんじゃないしぃ、あ、出したぶんは減るか、でも、すぐにたまっちゃうだろうから、たいしたことじゃないと思うけどぉ」

「な、な、な、な、ナツコちゃん、な、な、何を」

「何って。そんなのぉ、男と女がいたらやることなんか結局一つしかないじゃん？」

「そ、そんな、ことないよ、こ、恋こいとか、その、いろいろ」

「まぁそれはそれで大事だけどねぇ。思いがあればあるだけ燃えるしぃ。むしろ、萌もえ萌えするってゆーかぁ。ようするにそのぶん気持ちいいしぃ」

「な、な、な、ナツコちゃん！　もう、行くよ！　また怒おこられるから……！」

「ちょっ、姉さん、引っぱんないでって、姉さん力強いんだから、いたっ、いたたた！」

「ご、ごめんなさい！　お、お騒さわがせして……！」

　どうやらナツコの姉らしい背の高い女は、引きずるというよりも、ほとんど抱かかえるようにして妹を連れ去った。周りの連中は少しの間にやにやしたり隣となりの者と囁ささやきあったりしていたが、係員たちが教導鞭べんを手にして威い圧あつを始めると、すぐにおとなしくなった。

　アジアンは何気なくトレイに目を落とした。

最初は、何かが足りない、と思っただけだった。

顔を上げて、いつの間にかアルバートがいなくなっていることに気づき、もう一度トレイに目をやって、ようやくわかった。フォークだ。

フォークがない。

おかしい。

フォークはトレイの上に置いた。

ちゃんと覚えている。

それなのに、いくら見直しても、置いたはずのフォークがない。

前にいる者たちがどんどん膳ぜん台にトレイを置いて離れてゆく。

アジアンも突つっ立っているわけにはゆかないが、食器の紛ふん失しつは大きな問題になる。懲ちよう罰ばつだけではすまない。アジアン自身がフォークを隠かくし持っているのであれば、それを返へん却きやくすればいいだけのことだが、そうではない。なくなった食器が見つかるまで、身体検査はもちろん、部屋中を、それで足りなければ、房内をすべてあらためられることになっているはずだ。

アルバート。もしかして、あの男の仕し業わざか。しかし、アジアンがそう言ったとしても、係員が信じるだろうか。仮に信じたとしても、あの男が何らかの方法でフォークを処分してしまったら。

いずれにしても、ただではすまないだろう。

かといって、何か講じることのできる手立てがあるかといえば、思いつかない。

アジアンはやむをえず足を進めた。

すぐ前の巨きよ漢かんが膳台の最上段にトレイを置こうとしているところだった。

不意にその手が止まった。

巨漢が振ふり返って、白い仮面をこちらに向けた。

巨大といってもいいだろう左手に、何かがつままれている。

やけに小さく見えるが、紛まぎれもなくそれはフォークだった。

妙みようだ。

巨漢が右手の人差し指で親指だけで支えているトレイの上にも、フォークがある。

つまり、巨漢は二本のフォークを持っているということだ。

ありえない。

そう、そんなことはありえないのだ。

巨漢はフォークをアジアンの目の前に差しだしてきた。

「これは、お前のものだな」

間ま違ちがいなく仮面のせいだろう、くぐもっている、低い声だった。

アジアンはフォークの柄えの部分を見た。

４２８、と刻まれている。

うなずく以外にできることはなかった。

「ああ」

「了りよう解かいした」

巨漢はアジアンのトレイの上にフォークをそっと置いて、前に向きなおった。何を了解したのか、尋たずねる間もなかった。巨漢は膳台にトレイを置いて行ってしまった。巨漢の大きな後ろ姿を見送っていると、出口のあたりでこちらを見ているアルバートと目があった。

アルバートは唇くちびるだけ笑う形にゆがめてみせ、背を向けて会堂から出ていった。

　フォークについては、やはりアルバートがやったに違いないと確信したが、いったい何のためにそんなことを。

　アジアンは微かすかに首をかしげながら膳台に近づいた。トレイを膳台に置いて歩きだすと、後ろから肩かたを叩たたかれた。鼻だの顎あごだの耳だのが尖とがっている吊つり目の男で、四号房だが、口をきいたことは一度もない。ただ、よくねばつくような視線を送ってくるので、覚えている。男は、いやァ、せいぜいがんばってくだせェよ、しっかりねェ、とアジアンの肩をまさぐるように撫なでまわして去っていった。番号は４２３。シュトレーハウゼン。あの男もたしかダリエロ派のはずだ。

16

　十八時から食事の時間よりも長い四十分間を費やして日誌を書いたあとは、房ぼう長ちようまたは房長補ほ佐さが日誌の回収と点呼を行い、さらに係員による点検と点呼がある。十九時から二十一時までは自由時間で、房内であれば自由に動き回ることが許され、眠ねむってはいけないが、自分の寝しん台だいで横おう臥がするだけならば問題ない。

　クラニィは小屋から出ていった。

　他ほかの房のことはわからないが、少なくとも四号房では、１から６までの数字を各面に書き入れた木製の小さな立方体を二つ使い、出目によって勝敗を決める遊びが流行している。木工の作業員が係員の目を盗ぬすんで製作し、作業場から持ちだすのだというその立方体は、賽サイと呼ばれている。もちろん、そんなものが数限りなく出回るはずがないから、賽サイを所持している者はそう多くない。また、賽サイ自体が賭かけの対象になって争そう奪だつされるので、長く持ちつづけていられるようなものでもない。それにもかかわらず、長期にわたって賽サイを保持している者たちが若じやつ干かん名いて、クラニィはその中の一人だ。

　お前さんもやってみないか、とクラニィに誘さそわれたことがある。

アジアンは断った。ルールがわからないから。そう言うと、クラニィは、そんなのはすぐに覚えちまうと思うがね、と笑いながらも、重ねて勧すすめようとはしなかった。

賽サイを持つ者の周りには自然と人が集まる。

クラニィは今日もどこかの小屋で賽サイを振るのだろう。

その間、アジアンは隅すみ々ずみまで疲ひ労ろうが染しみ渡わたった身体からだを休めている。

目を閉じているところを誰だれかに見られると、だいたいダリエロの手下がやってきて名前を呼ばれ、それでも目を開けないと、カウントが始まる。五まで数える間に反応しなければ、係員に告げ口されて懲罰だ。面めん倒どうだから、できるだけ瞼まぶたを閉じないようにする。眠ねむ気けというよりも、すさまじいだるさが絶え間なく襲おそってきて、いっそ意識が飛んでしまえばいいのにと願うこともしばしばだが、そう都合よく事は運ばない。この身は意外としぶといようだ。壊こわれてしまいそうで、壊れない。脆もろいようで、どこまでも耐たえる。もう無理だと思い膝ひざをついても、また立ちあがる。移動の作業をしている間は、明日は迎むかえられないのではないかと本気で考える。何度も、何度もだ。だが、一日をどうにか乗り越こえ、重苦しい眠りに落ち、目が覚めると、あきらめ半分ではあるものの、今日もまた我が慢まんしなければと決意している。

そうだよそうでなくては困るというよりもそれは必然だ貴様は貴様はお前はそうお前は貴様は貴様だけのお前だけのものではないのだから勝手に好きなようにされては困る冗じよう談だんではない馬ば鹿か者め丁てい重ちように大切に硝子ガラス細工のように羽のように扱あつかえたまったものではないのだからな貴様は貴様の貴様は貴様の貴様のものでは決して決してないのだからなゆめゆめ忘れるな。

声とは言えなかった。

聞こえたのではないからだ。

少なくとも、耳で聞いたのではない。音ですらなかった。頭の中に直接響ひびいた。それも違う気がする。ただ、覚えがある。馴な染じみがあると言ってもいい。珍めずらしい現象ではまったくな

い。たとえば、ボクは今、寝台の上に身体を横たえている、と考える。言葉を使って思考する。それに似ている。とてもよく似ているが、違いもある。大きな違いが。あれは、自分が考えたことではなかった。間違いない。あんなことを考えたりはしない。でも、だったら、誰が？　何ものが？　そもそも、初めてなのか。同じようなことがなかったか。

　あった。ついさっきだ。あれは会堂だった。下げ膳ぜんの途と中ちゆうでナツコという名の女がぶつかってきた。その直前だった。

　わかってわかっているだろうに。

　惚ほうけても惚けても惚けても無む駄だだというのに。

　忘れる忘れる忘れる忘れることなどできようはずもないのに。

　たとえ忘れることができたとしても無意味無意味無意味無意味無意味だというのに。

「……ボクは……」

　愚おろかないたいけな無価値なからかい甲が斐いのある弱虫の美しいお飾かざりのやんごとなき下げ賤せんの貴重な滓かす同然の金きん箔ぱくよりは値打ちのある滑こつ稽けいな猿さる回まわしの出来合いの手作りの人形め。

「黙だまれ」

　黙れ黙れだと黙れと命じられる謂いわれなどないなありもしないことを愚かしい馬鹿げたことをだから貴様はお前はどうしようもない無残で憐あわれで磔はりつけにされるのがむしろふさわしい。

「……やめろ……やめてくれ……ボクは……」

　身体を横にして、両手で頭を抱かかえた。わかっている？　惚けても無駄？　忘れることなどできない。わかっている。ああ。わかっている。わかっている。知っている。知っているのか。ボクは、知って、何を、知って、わかって、それが、何か、どうして、ボクは、わかっているのか。違ちがう。知らない。何も知らない。わからない。覚えてなんかいない。何も覚えていない。嘘を吐つけ嘘を偽いつわりを欺あざむくことなどできぬそれは不可能だそれがわからぬのだとしたらとんだ阿あ呆ほうだうつけだ巻き手のおらぬ

ねじ巻き仕じ掛かけだ嘘を吐くな。違う。嘘じゃない。嘘なんかついていない。嘘だ大嘘だ嘘塗まみれだ見よ嘘に汚よごれておる汚れた嘘に。嘘。嘘？　嘘。何が嘘だというんだ。すべてだ貴様のお前のすべてが嘘だ嘘の上に嘘を塗りかためてさらに嘘で飾った嘘だ。どうして。どうしてそんなことが。わかるさわからいでか貴様のお前の貴様のことはお見通しだ何もかも簡単だたやすいことだ知りつくしている知らぬことなど何もない。ボクは、ボクを知らないというのに。貴様がお前が愚かだから玩具おもちゃのようなものだからだ手て慰なぐさみに弄もてあそばれ捨てられる無用の長物だからだ戯たわけめ。やめろ。言うな。ボクを苦しめるな。貶おとしめるな。蔑さげすむな。そんなことはしないよ慰なぐさめてやろうそのためだろう？　何が。ここにいるここに貴様のお前の。違う。違わない。違う。違う。違わない。違、違、違、違わない。違う。わからない。もうわからない。どれが、どこが、どこまでが、自分で、どこまでが、自分ではなく、自分は、いったい、どこにいるのか、ここにいるのか、それは自分なのか、わからない。わからない。わからない。わかりたくもない。

　おそらく、逃にげだそうとしたのだ。

　どこにも逃げ場などありはしないのに。

　身体を起こして、寝しん台だいから下りようとした。いや、実際、下りた。

　そこで身動きがとれなくなった。

　各小屋は通路に接する一面が鉄てつ格ごう子しで、その一部が開閉する仕組みになっているのだが、今は自由時間だから、当然、開け放たれている。

　まるで格子扉とびらの代わりに出入口をふさいでいるかのようだった。

　男は白い仮面をかぶっている。

　そそり立つ壁かべのごとき圧あつ倒とう的な体たい軀くだ。

　なぜ仮面の巨きよ漢かんがこんなところにいるのか、まるで見当がつかなかった。

　ただ、身体が勝手に身構えていた。

　仮面の巨漢は、何かききたいことがあるとか、世間話をしたいとか、そうした理由でここにいるのではおそらくない。

　だとしたら、何のために。

　やはりわからないが、あのとき膳台の前で、仮面の巨漢は、了りよう解かいした、と言った。

　あの言葉と何か関係があるのか。

「４２８」

　仮面の目の部分に空けられた穴の奥が底光りしているように見えた。



「俺にはお前とやりあう理由がない。正直、お前は戦う価値があるほど強そうにも見えない。だが、挑いどまれれば応こたえるのが俺のポリシーだ」

「……戦う？」

　この男は何を言っているのだろう。挑まれれば？　やりあう？　何のことだかさっぱりわからない。しかも、何を考えているのか、いきなり自分の上着に手をかけたかと思うと、それを中の白いシャツごと脱ぬぎ捨ててしまった。赤しやく銅どう色の素す肌はだがあらわになったわけだが、半はん裸らとは言えないだろう。男は筋肉の鎧よろいを身につけている。服を脱いだぶん、質量というか嵩はいくらか減ったはずなのに、まったくそう見えない。それどころか、かえって大きくなったように見える。同じ人間とはとても思えないあの男と、戦う？　誰だれが？　ボクが？　どうして？

　どうやら、何か誤解があるようだ。

　行き違いか、勘かん違いか、それは不明だが、こちらにも戦う理由なんかありはしない。正直、戦う価値のあるなし以前に、戦い自体が成立しないのではないかと考えざるをえないほど、男は強そうに見える。挑まれれば応えると男は言ったが、挑んだ覚えがそもそもないのだから、応えてくれなくていい。

　アジアンはそのあたりをちゃんと説明しようとして、男に近づいていった。失敗だった。男はそれを返答と見なしたらしく、踵きびすを返して、くぐもった、だが、腹の底に響ひびく野太い声で力強く宣言した。

「果たし合いだ」

　その一言がどういう意味を持ち、何を引き起こすのか、アジアンは知らなかった。どうも当事者の片方であるらしいアジアンだけが理解していなかったようだ。皆みなは明らかにわかっている様子だった。

　賽サイを振ふりあっていた者たちが手を止めて、次々と小屋から飛びだしてきた。四号房ぼうと廊ろう下かとを隔へだてている格子扉の前に人ひと垣がきを作りはじめる男たちもいた。メツェルディとポーとアルバートとシャマニが小屋に乱入してきて、四人がかりでアジアンを羽は交がい締じめにした。あらがう間もなかった。アジアンは小屋の外へ連れだされた。そこかしこから、シュ、シュ、シュ、という音がわき起こった。何事かと思って見てみたら、男たちが嚙かみしめた歯の合間から息を吐くことで出している音らしかった。さかんに自分の掌てのひらを拳こぶしで叩たたいている者もいる。煽あおろうとしているのか。だが、ことさら大きな音を立てたり、大声を出したりする者は一人もいない。当然だろう。大お

お騒さわぎすれば、係員がくる。自由時間中、係員は二十分ごとに一いつ般ぱん房内を見回ることになっているが、それ以外の時間も見張り小屋と呼ばれる小部屋で待機していて、異状を察知すればすぐに駆かけつけてくるのだ。

　つまり、どういうことだろう。

　アジアンは通路の真ん中あたりで仮面の巨漢と向かいあっている。

　四号房の他ほかの連中は小屋の中から、あるいは通路に出て二人を見守っている。

　通路の突つきあたりに置かれた椅子には誰も座っていないが、その両りよう脇わきにリー・ブラックとレイジが立っている。

「久しぶりだな。四号うちの房での果たし合いは」

　ブラックは腕うで組ぐみをして顎あごを撫なでた。

「あいにく房長は誰かさんのせいで部屋から出られない。立ち会いは俺がやろう。前の見回りから──」

「三分経たった」

　レイジが用意していたかのように答えると、ブラックも予行演習をそのままなぞるようなわざとらしさでうなずいた。

「長くても十分で片をつけることだ。決着がつかなければ、勝負はひとまず俺が預かる。余計な邪じや魔まが入った場合も同様だ。そのときは後日再戦ということになる。わかっているだろうが、どうなろうと恨うらみっこなし、チクリ野や郎ろうはろくな生き方も死に方もできないと相場が決まっている。くだらん考えは起こさないことだ。他に何かあるか。リキエル、お前はどうだ」

「ある」

　ブラックにリキエルと呼ばれた仮面の巨漢は、ゆったりした動作で右手の人差し指をアジアンに突きつけた。

「お前の名前をきいておきたい」

「アジアン」

　とっさに名乗ってしまったが、アジアンはまだ自分が置かれた状じよう況きようを把は握あくできていない。頭ではなんとなく理解できているのだが、認めたくないと言ったほうが正しいだろうか。

「そうか」

　白い仮面が上下に動いた。

「アジアン。せめてその名を我が胸に刻もう。俺は４０４、リキエルだ。準備はいいな」

「よくない」

　アジアンは首を振った。その拍ひよう子しに、遠くの小屋からこちらを見ているクラニィの顔が目に入った。クラニィはもともと下がり気味の眉まゆ尻じりを一段と下げ、唇くちびるをへの字に曲げて、とくにおもしろがっているふうでもなかったが、アジアンと目を合わせようとはしなかった。

「キミはボクと戦う理由がないと言った。それはボクだって同じだ。どうしてボクが、キミと果たし合いなんか──」

　突とつ然ぜん、あちこちから唸うなるような声があがった。おそらくダリエロ派の連中だけではない。他の者も混じっている。どうやら抗こう議ぎの意思表示らしいが、なぜ彼らに非難されなければならないのか。まあ、おそらく、毎日自由時間が与あたえられているとはいえ、せいぜい賽サイを振りあうくらいしか楽しみがない男たちにとって、果たし合いとやらは、たとえ最初から結果が見えていたとしても、多少の刺し激げきと暇ひま潰つぶしにはなるのだろう。それはわからなくもないが、アジアンにしてみれば、どう考えても多少の刺激ではすみそうもない。暇どころかアジアンが潰されてしまう。リキエルもおかしいとは思わないのだろうか。自分でも言っていたではないか。戦う価値があるほど強そうに見えない者が、いきなり、何の脈みやく絡らくもなく、果たし合いを挑いどんできた。あまりに不自然ではないか。これは誰かが仕組んだ茶番だ。そう考えるべきだ。

　首しゆ謀ぼう者しやはダリエロに違ちがいない。

　そして、実際に罠わなを仕し掛かけた者がいる。

「どうしても何も」

　格子扉とびらをふさいでいる人垣の最前列だった。

　アルバートはきっちり撫でつけた髪かみの毛を指で梳すいて、大おお袈げ裟さに肩かたをすくめてみせた。

「アジアン、あなた、食事のあと、リキエルのトレイに自分のフォークを置いたんでしょう。それは果たし合いを望むという合図だ。ここの伝統ですよ。誰だれだって知ってます。試ためしにきいてみればいい。知らないと言う者などいませんよ。当然、あなただって知っているでしょう。新入りといっても、あなた、もう十日以上ここにいるんだ」

「……キミは」

「アジアン」

　ブラックがチッチッと舌を鳴らした。

「何か文句があるのなら立ち会い人として聞いてやらないでもない。だが、舞ぶ台たいに上がっておいて、やはり劇はやらないなんて話が通用するとは思わんことだ。見ろ。もう観客はその気になっている。誰も納なつ得とくしない。何より、そいつは神聖な戦いに対する冒瀆だ。そうだろう、リキエル」

「ああ」

　ボキボキ、ボキボキ、という音がした。何かが折れる、あるいは砕くだけるような音だった。

　違った。

　リキエルが片方の手をもう一方の手で握にぎって、指の骨を鳴らしたのだ。

「俺たちに与えられた生は神聖だ。生を貫つらぬくことは絶えざる戦いだ。ゆえに戦いは神聖だ。戦いにおける最大の敵は目の前に立ちはだかる何ものかではない。自分自身だ。俺は見える敵手を通して見えざる己おのれと戦う。己に打ち勝つことこそが戦いにおける真の勝利だ。アジアン、お前も己と戦うがいい。お前は俺の鏡となり、俺はお前の鏡となろう」

　いや、いい。

　べつにボクの鏡になんかなってくれなくてもいいし、キミの鏡になるつもりもない。

　そう言いたいのだが、言えない。ダメだ。不用意に声など出そうものなら、その隙すきにリキエルは一いつ瞬しゅんで距きょ離りをつめてきて、一いち撃げきでアジアンをしとめるだろう。リキエルは四歩か五歩の距離を隔へだてた場所にただ立っているだけなのだが、まるで鼻先に拳こぶしを突きつけられているかのようだ。首を絞しめられているかのごとき息苦しさも感じる。下がりたいが、下がれない。それどころか、指一本動かせない。

「蛇へびに睨にらまれた蛙かえるってやつだな」

　誰かがそんなことを言った。

　クラニィの声ではないかと思った。

　その瞬間だった。

　身体からだが浮ういた。

　吹ふき飛ばされたのだ。

　どうしてそんなことができたのか自分でもわからないが、どうやらアジアンは両手を前に出して防ごうとしたらしい。

　リキエルの右足だった。

　蹴けりだ。

　その結果、今、アジアンは空中を移動している。

　どこまで飛んでゆくのだろう。

　時間がやけにゆっくりと流れている。

　いつの間にか音が絶えていた。

　緩かん慢まんで静せい穏おんな世界のすべてが急に加速して、やかましく騒さわぎはじめたかのようだった。

　背中に、次いで尻しりに衝しよう撃げきを感じた。うお、という声はアルバートのものだろう。どうやらアジアンは鉄てつ扉ぴの前の人ひと垣がきまで吹っ飛ばされたらしい。そうしてアルバートに受け止められたというよりもぶつかって、尻から床ゆかに落ちた。歓かん声せいが聞こえる。あるいは罵ば声せいか。アジアンは両手を頭の上あたりで交差させた。リキエルがもう目の前にいる。手刀だ。振ふり下ろされる。むしろ落ちてくる。粉々に砕かれたのではないかと思った。両りよう腕うでだけでなく全身が。視界が激しく振しん動どうして一瞬真っ暗になり、真っ白になって、また真っ黒になった。

　もう終わりか。

　誰の声だろう。自分か。それとも、リキエルだろうか。

　終わりか。

　終わりなのか。

　もう終わりか。

　たわいもない。

　情けない。

「……うるさい……」

　ああ。

　これは自分の声だ。

　自分は目をつぶっている。だから何も見えない。目を開けろ。さあ。見ろ。見える。ひどくかすんで、そのうえゆがんでいるが、見える。頬ほおが冷たい。顔の横半分が。これは床だ。自分は床に寝ねそべっている。なんでボクが。立て。立たないと。立てるか。身体は、動く。動かせる。起きあがれ。ダメだ。力が入らない。だったら、近くの格こう子しに手をのばせ。つかんで、それを支えにして、もたれかかったままでもいいから、どうにか立ちあがるまで、なぜかリキエルは待っていた。とはいえ、すぐそばにいる。ここはリキエルの間合いの中だ。下がらないと。いや、下がることはできない。後ろは人垣だ。

　リキエルは静かに息を吐はいた。

「やはりお前は弱い。だからといって、ただちにこの戦いの意味が失われるわけではない。それを決めるのは、俺とお前だ」

　意味。

　弱い。

　ボクは弱い。

　戦いの意味。

「いかなる敵と相あい対たいしても、俺はそこに俺自身を見る。お前にも見えるか。お前の姿が」

　ボクの姿。

　ボク自身。

　見えない。

　見えやしない、そんなものは。

　ボクの目に映っているのは、一人の男だ。

　筋きん骨こつ隆りゅう々りゅうとした赤しゃく銅どう色の上半身をさらして、白い仮面をかぶっている巨きょ漢かんだ。

　圧あつ倒とう的な力だ。

　あらがいがたい強大な力そのものだ。

　そうだ。

　この力にはとうてい勝てそうもない。もう勝負はついている。膝ひざを屈くつして許しを乞こえばいい。負けました。降参します。助けてください。いやだ。これ以上は無理だ。どうせ抵てい抗こうしても無む駄だだ。力。力。力。あがくことはない。もがいたって仕方ない。溺おぼれかけているのなら、いっそ息を止めてしまえ。楽になろう。あきらめてしまおう。投げ捨てよう。受け容いれろ。

　受容せよ。

　何を？

　現実を。

　事実を。

　真実を。

　貴様はお前は我々の大切なえがたい代えのきかぬ獲え物ものであるそのことを。

「……む」

　リキエルが低く呻うめいた。アジアンは足を一歩前に進めた。二歩目で一気にリキエルとの間に横たわっていた距きょ離りをつめた。アジアンは膝を折って身体からだを沈しずめ、リキエルの左のくるぶしを狙ねらって足あし払ばらいをかけた。リキエルはよけなかった。全身に力をみなぎらせて弾はじき返そうとした。それで体勢が崩くずれたアジアンを上から振り下ろした拳こぶしで打ちのめそうとしたのだろうが、そうはならなかった。アジアンはリキエルの左足首に右足の爪つま先さきを引っかけて、その位置を中心とした半円を描えがくように身体を回転させた。一いつ瞬しゆんでリキエルの背後をとり、その右の膝裏に踵かかとを斜ななめに叩たたきこんだが、相手も素す早ばやく反応した。リキエルは右足が揺ゆらいだ拍ひよう子しに、そのまま後ろへ倒たおれこんできた。巨体でアジアンを押し潰つぶしてしまおうという腹だろう。アジアンはさらに後方へ転がってこれを回かい避ひした。すぐに立ちあがって、近くの小屋の鉄格子を足がかりにして天てん井じようまで駆かけのぼり、そこから仰あお向むけに倒れているリキエルめがけて急降下した。リキエルはよけずに両足を上に向けた。アジアンはその足裏を蹴けって、いったん距離をとった。

　リキエルは反動をつけて即そく座ざに起きあがった。アジアンはその瞬間に再度接近して、リキエルの懐ふところに入りこみ、分厚い筋肉の鎧よろいの、それでも他ほかと比べれば薄うすい部分に次々と拳を叩きこんだ。リキエルの息づかいが乱れた。いくらかきいているようだ。アジアンは、だが、手を止めてしゃがみながらリキエルに背中を向けた。ちょうどアジアンをつかまえようとリキエルが両腕をのばしてきたところだった。うまくすり抜ぬける形になった。アジアンはさらに身をよじってリキエルの股ももの間を通り抜け、そこで身体を縦に一回転させた。右足の踵をリキエルの後

頭部に浴びせて、そのときの反発力を利用してまた離はなれた。リキエルは倒れなかった。ただ、振り向くまでやや時間がかかったし、足あし許もとがわずかにふらついていた。好機だ弱っているぞ殺やれ斃たおせ愚おろかな敵を下げ賤せんの下げ郎ろうを馬ば鹿か者を増ぞう上じよう慢まんだと思い知らせてやれ徹てつ底てい的に叩き潰せ。ボクはそう思っているのか。思っている。そうなのか。違ちがう。ボクじゃない。でも、ボクかもしれない。どこに境目があるのだろう。どれがボクでどれがボクではないのだろう。どこからどこまでがボクなのか。ボクは何を思っている？　何を考えている？　何を感じている？　ボクの心はとても冷えている。冷えきっている。ボクは何も感じない。ただひたすらつめたいだけで、そこには何もない。ただボクがいるだけだ。目の前には敵がいるだけだ。白い仮面をかぶった巨漢がいる。ボクはつめよる。彼の右膝を両側から蹴りつけて、その膝を、さらに右肩かたを踏ふみ台にして、身体をひねって側頭部に回し蹴りを見み舞まう。彼は倒れる。すぐ近くの鉄格子に倒れかかって動きが止まる。ボクは着地して、息つく間もなく彼に襲おそいかかる。それは彼の罠わなだった。彼はすっと体勢を低くしてボクを迎むかえ撃うった。突つきあげるような後ろ蹴りだった。

　ボクはそれをまともに食くらった。顎あごから左頬ほおのあたりだった。間抜けだやはり貴様はお前は大間抜けだ我々がいなければ何もできぬみなしごだ無残で憐あわれなか弱い餓が鬼きめ。ボクは後ろに倒れた。すぐさま立ちあがろうとしたが、やめた。ボクは横に転がった。彼がボクを踏みつけようとしたからだ。ボクは彼の足に組みついて、関節を本来曲がらない方向に曲げようとしたが、あっさりと振ふりほどかれて、鉄てつ格ごう子しに叩きつけられた。息がつまった。呼吸が満足にできないままで、身体を丸めて床ゆかを転げまわった。敵は執しつ拗ようだった。図ずう体たいが大きいにもかかわらず、鋭えい敏びんで繊せん細さいで融ゆう通ずうがきいて的確だった。筋力に物を言わせるのではなく、緻ち密みつな組み立てで攻せめてきた。敵に対応しなければならない。応おう酬しゆうしなければならない。逆ぎやく襲しゆうしなければならない。殺せ斃せ生いけ贄にえにしろ。違う。見きわめろ。鉄格子を背にして敵を待ちかまえる。敵が殴なぐりかかってくる。紙かみ一ひと重えでよける。よける。よける。右の拳。左の拳。右。右。左。右。右。右。右。左。左。右。途と切ぎれた。その隙すきに敵の脇わきをすり抜けながら敵の脇わき腹ばらに肘ひじをめりこませる。それで敵の動きが一瞬だけ鈍にぶくなる。背中をとった。やるかいいぞやろうやってやろう手を貸そう貸して欲しいでしょう何も難し

いことはない一つも簡単なことだじつにたやすい。右手をのばす。肩けん胛こう骨こつと肩胛骨の間あたり。やや左寄りの位置。それでいい。たったそれだけでいい。たしかに簡単だ。

　ボクは何も感じない。

　そこには何もない。

　ただボクがいるだけだ。

　ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクが、ボクは。

「──ああああああああぁぁぁっ……！」

　どこにいる？

　ここに？　いるのか？　本当に？

　敵の、リキエルの肩の上まで一跳とびで到とう達たつし、頭全体を抱かかえるようにして、その太い首に両りよう脚あしをからみつかせ、絞しめて、絞めて、絞めて、絞めている。リキエルは引きはがそうとして殴りつけてきたり、鉄格子に体当たりしたりするが、放すものか、離れるものか。なぜ？　何のために？　わからない。わかるものか。これが、ボク？　ここにいるのが？　こうしているのが？　リキエルが足をもつれさせて転てん倒とうした。ボクは背中を打って、息ができなくなった。リキエルも呼吸ができなくて、仮面の奥から妙みような音を発している。ボクはやがて空気を吸いこむことも吐はきだすこともできるようになったけれど、あえて息を止めていた。リキエルの右手が空をつかんでは放した。何かを探しているのか。ようやく見つけたようだった。

　リキエルの右手がボクの肩を叩いた。

　お前はそこにいる。

　そう言われたような気がした。

　リキエルの手は力を失った。

　ボクの意識も薄れてゆき、すぐに途切れた。

17

目が覚めたか、と上段のクラニィが笑いまじりの声で言った。

どうやら誰だれかが運んでくれたらしく、気がつくとアジアンは自分の寝しん台だいの上に寝ねていた。小屋の格子扉とびらは閉ざされているので、自由時間はもう終わったのだろう。ただ、房内の照明はまだ点ついているから、消灯の二十二時にはなっていない。就しゆう寝しん準備の二十一時から二十二時の間か。通路の一番奥にある壁かべ掛かけ時計を確かく認にんする気力はなかった。

全身が何か別のものに作りかえられてしまったかのように思いどおりにならず、熱を持っていて、あちこちが痛むというよりも重苦しい。

自分は怪け我がをしているのか。しているとしたら、どの程度の負傷なのか。意識はしっかりしていると思うが、数秒前はどうだったのか、十分前は。係員が小屋の格子扉を閉めにきたときの記き憶おくはまったくないのか。あるような気もする。ないと言っても嘘にはならないような気もする。自分は眠ねむっていたのか。それとも、失神していたのか。ぼんやりしていただけか。朦もう朧ろうとしていたのか。意識が混こん濁だくしていたのか。どれも正しく、どれも間ま違ちがっているように思えてならない。

「小屋が閉まる前にな。リキエルがきた。タフだな、あいつは。あのガタイだしな」

「……そう」

「お前さんに何か言いたいことでもありそうな様子だったがね。あいにくその相手がぴくりともしないもんで、あきらめて帰っていったよ。そのうち聞いてやるといい」

「ボクに……言いたい、こと？　何を……」

「さあな。俺はやつじゃないんでね。わからんよ。リキエルが果たし合いで負けたのも、俺が知ってるかぎりでは初めてだしな」

「……ボクは……勝ったのか」

「覚えてないのか」

「いや……」

　覚えている。

　アジアンは両脚だけでなく全身を使ってリキエルの首を絞めた。リキエルが落ちた瞬しゅん間かんをまざまざと記憶している。落ちる間ま際ぎわのリキエルに肩を叩たたかれたことも。リキエルはなぜあんなことをしたのだろう。単なる降参の合図だったのか。あるいは、それ以外の何かを伝えようとしたのか。

　いずれにしても、勝負に勝ったという実感はない。

　アジアンは勝とうとしたわけでも、勝ちたかったわけでもなかった。

　斃たおそうとした。

　リキエルを殺そうとしたのだ。

　土ど壇たん場ばで思いとどまった。

　ボクは自分で自分を止めた。

　自分？

　あれが、ボク……？

「だったらもっと喜んだらどうだ」

　本気とも冗じよう談だんともつかない、クラニィの声こわ音ねだった。

「ちょっとした快挙ってやつだぞ。何しろ、あのリキエルには、レイジも、リーも、雷ライ切キリも勝てなかったんだ」

「……レイジに……リー・ブラックも？」

「ああ。最近はどういうわけか平和なもんだが、前は結構何かにつけ果たし合いを挑いどんだり挑まれたりってのはあったのさ。二十

何人からの野や郎ろうどもがこんな場所に押しこまれてりゃあ、みんな仲よく楽しくってわけにはいかんしな。係員も俺たちが羽目を外しすぎないで勝手に殴なぐりあってる分には見て見ぬふりだ。リキエルは全戦全勝だった。ダリエロもあいつには手を出さない。その代わりってわけじゃあないだろうが、今回はうまくあいつを利用しようとして、このざまだ。ダリエロのやつ、さぞかし腹に据すえかねてるだろうよ」

　クラニィは喉のどを鳴らして静かに笑った。

　聞いた覚えのある笑い方だ。

　そう感じたのはこれが初めてではない。

　二度目だ。

「キミは……知っていたのか。あれが、ダリエロに仕組まれたことだって」

「少なくとも、なんでまたお前さんがリキエルに喧けん嘩かを売らなけりゃならんのか、不思議ではあったがね。まあ、リキエルはあのとおり、ちょっと変わったやつだ。どうも戦いの意義はその戦い自体にあるみたいに考えてるらしいし、売られた喧嘩は言い値で買う。使いようによっては使えるだろうな」

「フォーク、か」

「お前さんが迂う闊かつだったのさ」

「知らなかった。そんな慣習があるなんて」

「新しいルームメイトが、何から何まで手とり足とり教えてもらわんと歩くこともままならない餓が鬼きだと最初からわかってたら、俺も少しは親切にしてやってたんだろうが。大人は自分の世よ渡わたりくらい自分でどうにかするもんだからな」

「ボクは、餓鬼なのか」

「そういうことを他人にきくあたりがどうもね。自分で考えて、自分で判断したらどうだ、アジアン。他人のことはおろか、自分のことさえわかるようでわからないのが人間なのかもしれんが、わかろうとすることくらいはできるんじゃないか。しかし──」

　寝しん台だいが微かすかに軋きしんだ。

　クラニィが体勢を変えたのだろう。

「殺されはしないだろうと思ってはいたが、まさか勝っちまうとはな」

「ボクだって」

「勝てるとは思わなかった、か」

「ああ」

「そのわりにはお前さん、途と中ちゆうからやけに冷静だったがね」

「冷静？　ボクが……？」

「俺の目にはそう見えたってだけの話だ。ただ、俺はこれでも目は悪くないんだが、その俺が一瞬、見失っちまうくらいすばしっこかったのは間違いないな」

　クラニィはいったい誰だれの話をしているのだろう。いや、他ほかの誰でもない、アジアンのことだ。それはわかるが、納なつ得とくはできない。あのときの自分は冷静とは程ほど遠かったはずだ。だから、断だん片ぺん的な記き憶おくしかない。

　はっきりと覚えているのは、確実に負ける、と思ったことと、リキエルを殺そうとしたことと、思いとどまって、首を絞しめたことくらいだろうか。

　自分が敏びん捷しようだとも思わない。体力的には小太りのローガンにも遥はるかに劣おとっている。だが、そんな自分がリキエルを打ち負かしたことは事実だ。

　だから受け容いれろ受け容れてしまえばいっそ気が楽になるというのに何を貴様はお前は拒こばむのだ愚おろかな下げ衆すなくだらぬ無意味な無む為いなどうでもいい自尊心が邪じや魔ましているというのならばそれを我々がたやすく粉々に粉こな微み塵じんに木こっ端ぱ微塵に二度と修復することなど能あたわぬようにどこまでも細かく打ち砕くだいてくれようか？

誰だ。

この声は。

違ちがう。

声なんかじゃない。

だったら、何だ……？

アジアンは鈍にぶく痛む頭を横にずらして、向かいの小屋に目をやった。

いつもなら、必ずメツェルディかポーのいずれかがアジアンを見張っているのに、今日は様子が違う。

上段のメツェルディが寝台から右足をはみ出させてぶらぶらさせているが、それだけで、下段のポーはここからだと姿が見えない。

嫌いやがらせの監かん視しはもうやめたのか。ダリエロの指示か。それとも、二人の意志で与あたえられた役目を放ほう棄きしたのだろうか。

寝台が大きく揺ゆれた。

クラニィが梯はし子ごを使って上段から下りてきて、洗面台の蛇じや口ぐちをひねり、うがいをして、水を一口飲んだようだ。

「なあ、お前さん」

蛇口が閉まる音がした。

アジアンは視線を右上に向けた。

クラニィは目をそらさなかった。

もともと下がり気味の眉まゆ尻じりがさらに下がっている。

眉み間けんに縦たて皺じわが刻まれていた。

クラニィは首を横に振ふって息を吐はいた。

「──いや、何でもない」

本当は何か言おうとしていたはずだ。

何を言おうとしていたのだろう。

こちらから尋たずねる前に、クラニィは梯子をのぼって上段に戻もどった。

しばらくの間、二人とも口を開かなかった。

アジアンは待っていて、クラニィもまた待っているかのようだった。

二人していったい何を待っていたのか。

「まあ、執しゆう念ねん深いやつだしな」

待ちくたびれたのか、クラニィは欠伸あくびのようなため息をついた。

「そのうちまた何か仕し掛かけてくるだろうさ。せいぜい用心することだ」

アジアンは返事をしなかった。

不意に赤い髪かみと橙だいだいの瞳ひとみが頭の隅すみをよぎって、胸が締しめつけられた。

声が聞きたい。

無む性しように、キミの声が。

18

移動の最終日は五日間のうちで一番楽だった。最後の最後でようやく身体からだが慣れてきたのかもしれない。ローガンと同じペースで木材を運ぶことはできなくても、その三分の二か、あるいはそれよりもいくらかましな能率で仕事ができたと思う。達成感や満足感はなかったが、安あん堵どのようなものは感じた。これならば、なんとかこの先も作業をやっていけるのではないかという手て応ご

たえがあった。

　作業の時間が終わったあと、あのさ、その、一つ、きいてもいいかな、とローガンが声をかけてきた。

「どうしてきみは、おれを責めないのかな、と思ってさ」

「キミは責められたいのか」

「……そんなわけ、ないよ。ただ、責められてもしょうがない、とは思うんだよ」

「そう」

「恨うらんでないのかい、おれを」

「よくわからない」

「わからない、って……？」

「だから、恨んでいないと言っても、間違いじゃないと思う」

　ローガンはうつむいて頭とう髪はつが薄うすくなってきている頭を撫なでつつ、いや、うん、そう、それならいいんだけど、と小声で呟つぶやいて顔を上げた。

「悪かったよ。ごめんね。本当に。本当に、ごめん。今さら謝ってもどうしようもないんだけどさ。断れなくてね。相手が相手だったし。その、正直言って、断るよりも、言われたとおりにするほうが面めん倒どうが少ないんじゃないかと思ったんだ。おれは移動とか、あんまり苦にならないし。はっきり言って、きみのことはぜんぜん考えてなかった」

「おかげで少し、自分のことがわかった」

「え？」

「これくらい身体を動かしても大だい丈じよう夫ぶだとか。こうすると痛いとか。あれは無理だとか。ボクはわかっていなかったから」

「そ、そう」

「キミに指図したのはやっぱりダリエロか」

ローガンは首を横に振って、いいや、リー・ブラックだよ、と訂てい正せいした上で、そういうのは、ダリエロは直接やらないみたいだよ、とわざわざ教えてくれた。

「面倒が増えるんじゃないのか」

「どうかなあ」

ローガンは作業場から出てゆくダリエロを一いち瞥べつした。

「状じよう況きようがちょっと変わってきたみたいだしね。きみの立場も、前とは違うよ。たぶん」

状況の変化といえば、運動の時間にリキエルがアジアンのそばで指立て伏ふせをしたり倒とう立りつをしたりするようになった。理由は不明だ。何か話があるようだから聞いてやれとクラニィには言われたが、結局、リキエルとは果たし合い以来口をきいていない。何しろ、相手が話しかけてこないし、こちらとしてはとくに用があるわけでもないので、声をかけるのもためらわれる。ただ、気がつくと近くにいる。アジアンが場所を変えると、リキエルもさりげなく移動するので、思いすごしではないだろう。昨日の自由時間も、アジアンの小屋の前までくると、おもむろに鉄てつ格ごう子しを使って訓練を始めた。仮面のせいもあって、何を考えているのかさっぱりわからないが、とにかく今もリキエルはアジアンのすぐ脇わきで指立て伏せをしている。迷めい惑わくというほどではないものの、常に視界の隅に巨きよ体たいがちらちらして、少しばかりうっとうしいというか、気になって仕方ない。

アジアンは左前方にいるリキエルが目に入らないように顔を右に向けた。運動場の隅で壁かべに向かって何か喋しやべっている男は四号房ぼうだ。あの男は誰だれと話をしているのだろう。自分と会話しているのだとしたらずいぶん器用だ。それとも単なる独り言なのか。アジアンは聞き耳を立ててみた。その気配を察したのか、男は一度、びくりと身体を震ふるわせて口をつぐんだが、すぐにまた何やら話しはじめた。ろくせん……ななじゅう……き、ろくせんごひゃく……っぴき、ろくせん……じゅうきゅう……。声が小さくて、聞こえそうで聞こえない。アジアンは立ちあがって男に近づき、床ゆかに腰こしを下ろした。ここなら聞こえる。ろくせんごひゃくはちじゅっぴき、ろくせんごひゃくはちじゅういっぴき、ろ

くせんごひゃくはちじゅうにひき。

　男はひたすら何かを数えているようだ。

　ろくせんごひゃくきゅうじゅういっぴき、ろくせんごひゃくきゅうじゅうにひき、ろくせんごひゃくきゅうじゅう、さん、びき。

　気がつくと、リキエルがすぐそばで逆立ちをしていた。

　いつの間に。

　ろくせんごひゃくきゅうじゅうよん、ひき、ろくせんごひゃくきゅうじゅう、ご、ひき。

　ろくせんごひゃく、ごひゃく。ご。

　きゅうじゅう。

　きゅう。

　きゅうじゅう。

「次は、ろくせんごひゃくきゅうじゅうろく、じゃないかな」

「……ろく、ひき。ろっ、ぴき。ろく……ぐぐぐ！」

　男はこちらに顔を向けて黄色い歯を剝むきだしてみせた。次の数が出てこない様子だったから、思わず口を出してしまったのだが、それが気に障さわったのか。男は高さも幅はばも違ちがう左右の目を見開いて、まん丸くて大きい鼻の両側に張りだした小鼻を膨ふくらませ、でこぼこした顔全体を赤黒く染めて、ふう、ふう、ふう、とさかんに息を吐はいている。やがて、ところどころが引き攣つれている紫むらさき色いろの分厚い唇くちびるがぶるぶる震えだし、まばらに生えている針金のような髪かみの毛が逆立ちはじめた。男はかなり腹を立てているようだ。それくらいはアジアンにもわかった。

「邪じや魔ましたかい」

「……そ、そういう、問題か、ふつう！」

「でも、キミは怒おこっているだろう」

「そうじゃなくて！　お、おかしいだろが！　明らかに！　変だぞ、おまえ！」

「何が変なんだ」

「あるだろが、ふつう！　思うことが！」

　男は声を荒あららげて自分の顔を指さした。

「こ、この顔だぞ！　何か思わんのかよ、おまえは！　この顔見て！　自分で言うのもなんだけどなあ、この顔だぞ！」

　アジアンは男の顔を凝ぎよう視しした。

　見つめあう形になった。

　しばらくすると、男が目を背そむけてしまった。

「……み、見るなよ！　そんな！　そんな、目で……」

「キミは人に見られたくないから、いつも壁に向かっているのか」

「そ、そうだよ！　悪いかよ！　ていうかなあ、お、おれがっていうよりも、誰もおれのことなんか、見たくないだろが！　それくらいわかるだろが、ふつう。おれだってよ」

「どうして」

「どうしても何も」

「キミはべつに、あの男みたいに」

　アジアンはリキエルを一瞥した。

　右手の人差し指一本で指立て伏せをしていたリキエルが、動きを止めてこちらに顔を向けた。

「仮面をつけているわけでもないし」

「……む、むしろ、仮面とか、つけれるくらいなら、つけたいっていうかな。おれは持ってないしよ。あんな仮面」

「譲ゆずってもらえないかきいてみたら」

「き、きけねえよ！　怖こわくてよ！　無理だろが、ふつう！　ていうかなあ、そんなふうに言うならおまえが頼たのんでくれよ！　おまえ、果たし合いで勝っただろが！　おまえの言うことなら聞いてくれるかもだしよ！」

「リキエル、この男に譲ってくれないか、その仮面」

「──て、まじで頼むのかよ！　そこは断るだろが、ふつう！」

「すまないが」

　リキエルは人差し指から小指に代えて、指立て伏ふせを再開させた。

「これしか持っていない。譲ることはできない」

「そう。というわけで、ダメだった」

「いや最初から期待してねえよ！　ていうかなあ、おれはべつに仮面とかつけたいわけじゃないから！　そういうことじゃねえよ。わかるだろが、ふつう」

「キミは自分の顔を人に見られたくないんだろう」

「ま、まあ、そうだよ。いやそうじゃねえよ。そうじゃなくて、みんなおれの顔なんか見たくないだろうっていう、ようするに、屈くつ折せつした心理なわけよ。そりゃそうだろが。生まれたときからこの顔なんだからよ。どう考えたって多少はひねくれるだろが、ふつう。ていうかなあ、なんでおまえ、ぜんぜん意味わかんないみたいな顔してんだよ」

「わからないから」

「なんでわかんねんだよ！　どうせあれなんだろが、おまえはえっらいきれいな顔してるからよ、そんなやつにはおれみたいなやつの気持ちなんてなあ、わかるはずねえとか、そんなオチかよ、なんだよそれ。結局そうかよ！」

「たしかに、ボクにはキミの気持ちがわからない」

「そうだろうな！　そうだと思ったよ！」

「でも、キミだけじゃない。誰だれの気持ちもよくわからない」

「なんだよそれ！　そんなのあたりまえっていえばあたりまえのことだろが、ふつう！　ていうかなあ、わかんねんだったら、わかろうとしろよ、それくらい！」

「できるかな」

「し、知らねえよ！　なんでおれにふるんだよ！　おまえのことなんだからよ。おまえが自分で考えるべきだろが」

「そうか」

　アジアンは右膝を右腕で抱かかえて天てん井じようを見上げた。わからないのであれば、わかろうとすればいい。できるかできないかは自分で考える。クラニィにも自分で考えろと言われた。それから、副所長にも。

「もしかして」

「……なんだよ」

「キミは自分のことを醜みにくいと思っているのか」

「こ、言葉をよ、選べよ、そこは、もうちょっとよ、婉えん曲きよく表現っていうかなあ、いくらなんでも傷つくだろが、ふつう！　そりゃあ思ってるけどよ！　自覚はあるよ、ずっとこの顔なわけだしよ！」

「ボクはそう思わない」

　アジアンは上に向けた左の掌てのひらに目を落とした。

「キミは醜くない」

「……おまえが言っても説得力ねえよ」

「そうかな」

「皆かい無むだよ」

「そう」

「絶無だよ！」

「あくまで、ボクが自分で考えてそう結論づけた。それだけの話だ」

「ひ、独りよがりだよな、そんなのは！　おれはずっと、この顔見てびびられたり、逃にげだされたり、泣かれたり、馬ば鹿かにされたり、蹴けられたり、吐はき気がするとか言われたり、そんなのばっかりだったんだしよ！　だったら、それが客観的事実って思うだろが、ふつう！」

「だから、ボクはキミを醜いとは思わない。それ以上のことは言っていない」

「そんなのたいして意味ねえよ！　じつはちょっとだけ嬉うれしいけどよ！」

「嬉しい？」

「そこをきくなよ！　つっこむところじゃねえだろが、そこは、ふつう！」

「そう」

「まじでそうだよ、ほんとによ！　なんか調子狂くるうな！　変なやつだ！」

「そうかな」

　アジアンは左手を握にぎりしめて、もう一度開いた。

　どうやら客観的事実ではないらしいが、やはり男が醜いとは思えない。

　知っているからだ。

　本当に醜いものを。

　本当に醜いものとは。

　それは。

　何かを思い出しかけていた。

「頭ん中でよ」

　思い出さずにすんだ。

　男の声のおかげだった。

「虫を作ってたんだよ。おれのオリジナルの、きれいな色の虫だよ。それを、一匹ぴき、二匹ってな、思い描えがいてよ、頭ん中を埋うめてくんだよ。そしたら、それでいつかいっぱいになって、何も考えなくてよくなるだろが。余計なことはよ。寂さびしいとかな。つまらんとかな。どうでもよくなるだろが。虫じゃなくてもいいんだけどな。いろいろやるんだよ。癖くせなんだよ」

「つまり、キミは寂しくて、つまらないのか」

「悪いかよ」

「わからない、けど──」

　考えよう。

　自分で。

「悪くはないと思う」

「あたりまえだろが。おれが寂しかろうがつまらなかろうが、誰にも文句なんか言われる筋合いはないし、言われたって困るしよ。だいたいおれが寂しいとか言っても誰も気にせんし、せいぜい笑われたり馬鹿にされたりきもいとか言われたり蹴っ飛ばされるくらいだろが」

「そうなんだ」

「嫌いや味みなやつだよな、おまえ。そうなんだとか、そんな言われ方したら、おれだってむかつくだろが。どっか行けよ」

「わかった」

「行くのかよ！」

「行かないほうがいいのか」

「お、おまえの好きにすればいいだろが！　そこはきくなよ、きか

んだろが、ふつう！」

　男は壁かべに向きなおってうなだれた。横目でちらちらとアジアンの動向をうかがっている。男はさっき寂しくてつまらないと言っていた。寂しいとはどういうことだろう。物足りないということか。一人きりでいたくないということか。それならば理解できる気がする。

　アジアンは壁に背中をもたれさせて、運動場を見回した。向かって右側の階段椅子にはダリエロ派の連中がたかっていて、左側の階段椅子には女たちがいる。ナツコと、その姉らしい背の高い女の姿もあった。ナツコはアジアンの視線に気づいたようで、手を振ふってきた。この場合、どうするのが適当なのか。とりあえず左手をあげてみたら、ナツコが甲かん高だかい声を発しながら今度は両手を振って、周りの女たちも次々とこちらを見た。背の高い女がナツコに何か言っている。あの一帯が騒そう然ぜんとしているのは、どうやらアジアンのせいらしい。手をあげてみせたのがよくなかったのか。もしかしたら間ま違ちがった対応だったのかもしれない。

「……い、いいよな、女にもてそうだもんな、おまえ」

「もてるって」

「いっぱい女に好かれるってことだろが。それくらいわかるだろが、ふつう」

「女が、ボクを？」

「おまえだって女は好きだろが。男だもんよ。いろいろあんだろが。いろいろ。さわりたいとかよ。ちゅうしたいとかよ。ぎゅっとしたいとかよ。何言わせんだよ。でも、言うくらいべつにいいだろが。それくらいよ。どうせおれなんか、たぶんっていうかきっとっていうか、一生女には縁えんがないしよ、絶対」

「ちゅう？　ぎゅっと……？」

「そこ説明しろってかよ！　むしろ実演しろってか！　できるかよ！　そこはわかんだろが、ふつう！　こう、自分の内からわきあがってくる的な、求める的なものとかあるだろが。なんていうか、欲望っていうか、本能っていうかよ、なんていうか──」

　一ひと目め惚ぼれしたんだ、キミに。

　ボクはキミという存在に惹ひかれ、恋こいに落ちた。

　キミがたとえ犬だろうと猫ねこだろうと異界生物フリークスだろうと大ゴ脂ツ羽キ蟲ーだろうと、ボクはきっとキミを好きになっただろう。

　キミを愛するために、キミだけを捜さがしだしただろう。

　大だい丈じよう夫ぶ、ボクを信じて。

　ボクはいやだ。

　キミはボクのすべてだ。

　キミがいない世界なんて、意味も価値もない。

　愛ゆえに。

　愛してる。

　キミを、愛してる。

　キミだけを、愛してる。

　キミを。

　キミだけを。

「……マリア」

　口にした瞬しゆん間かん、その言葉は溶とけて消えてしまった。

　自分が何か言ったことは覚えているのだが、それだけだ。

　胸が押し潰つぶされそうだった。心臓を鷲わしづかみにされているかのようだ。アジアンは両手で胸を押さえた。声がもれた。頭の両側がひどく疼うずきだした。ずき、ずき、と痛みの音さえ聞こえるような気がする。何かがわきあがってきた。それは何らかの形をとろうとするのだが、その寸前で崩くずれてしまう。

「お、お、おい、ど、ど、どうしたんだよ、おまえ、いきなり！」

　顔を上げると、すぐ目の前に男が屈かがみこんで目をしばたたか

せていた。その後ろにリキエルも立っている。大丈夫、と言おうとしたが、声にならなかった。男が手をのばしてこようとして、引っこめた。ためらっているようだった。何度か手を出しては引っこめたあげく、男は右手の人差し指でアジアンの肩かたをそっとつついた。

「お、おまえ、あの、ていうか、その、へ、平気かよ」

　まだ胸も頭も痛むが、少し治まってきた。それでもちゃんとした声は出せそうになかったので、うなずくだけにしておいた。

「そ、そうかよ。それならいいんだけどな。あんまり平気そうには見えねえけどよ。ま、まあ、おまえが平気っていうなら、平気なんだろうしな」

　男はまた角の定位置に戻もどり、リキエルもやがて指立て伏ふせを始めた。

　アジアンは壁に後頭部を押しつけるようにして天てん井じようを見上げた。

　何度か深呼吸をすると、だいぶましになった。

　男が、おまえ、アジアンっていうんだよな、と呟つぶやくように言って、咳せき払ばらいをした。

「お、おれは、ボダダグっていうんだよ。いいんだけどよ、おれの名前なんて、どうでも。番号は４２０だよ。もっとどうでもいいんだけどよ、おれの番号なんてな」

「どうでもいいことはない」

　アジアンは自分の額に手をあてた。

　やけにつめたかった。

「知っていれば、キミの名を呼ぶことができる。知らないと、呼べない」

「そ、そ、そんなのは」

　ボダダグは、あ、あ、あたりまえだろが、と言いながら、何度も

鼻をすすった。

　だから、キミの名を知りたい。

　そう思った。

19

　その日の自由時間は、明らかに普ふ段だんとは様子が違ちがっていた。

　係員が各小屋の扉とびらを解かい錠じようしていっても、誰だれ一人として通路に出てゆかない。いつもなら、掌てのひらの中で賽サイをジャラジャラやりながら寝しん台だいから下りてくるクラニィも、上段で寝ねそべったままだ。自由時間になると、アジアンの小屋の前で鉄てつ格ごう子しを使って訓練を始めるリキエルもやってこない。運動場で話をして以来、アジアンの小屋の隅すみを占せん領りようし、オリジナルの虫だの獣けものだのについて熱心に語るようになったボダダグも姿を現す気配がなかった。

　どうやら、何かが起こる日のようだ。

　そして、それを誰もが知っている。

　クラニィに尋たずねてみようと思いたったが、その必要はなかった。

　小屋の解錠をすませて出ていったばかりの猫ねこ背ぜの係員が戻ってきた。一人ではなかった。やたらと顎あごの長い係員も一いつ緒しよにいて、二人の係員に両側から挟はさまれる恰かつ好こうで四号房ぼうの前まで連れられてきたらしい男は、アジアンたちと同じ服を着ていた。

　男は革かわ手て錠じようを嵌はめられている。

　角張った形に整えられた黒い髪かみと太い眉まゆ、それから何よりも、左頬ほおにある「雷」の刺青いれずみが印象的な、鋭するどいながらも涼すずしげな目をした男だ。

　係員たちは四号房の中に男を押しこんで革手錠を外すと、すぐに立ち去った。

　房内は水を打ったように静まりかえっている。隣となりの房から聞こえてくる音がやかましく感じられるほどだ。

　張りつめた静せい寂じやくの中で、男は革手錠から解放された両手の具合を確かめるように右手で左の手首を握にぎり、それから左手で右の手首を握った。

　そういえば、以前クラニィが言っていた。

　そのうち出てくるんじゃないか、と。

「お務めご苦労さん」

　そのクラニィの声だった。

　男がこちらに顔を向けた。

　正確にはクラニィを見たのだろう。

「毎度お騒さわがせして」

「騒がすどころか、不気味なくらい静かになっちまってるがね」

「そのようで」

「お前さんも、少しは賢かしこく立ち回ればいいものを」

「人にはできることとできねえことがあるんで」

「俺みたいに小こ賢ざかしくはなれん、か」

「決してそんなことは」

「お前さん自身はいいんだろうが、お前さんの子分どもが肩かた身みの狭せまい思いをしてそうだったもんで、ついな」

「もとより人の上に立てる器うつわじゃありませんから」

「そうかい」

「あんたが締しめるとこ締めてくれりゃあ、あの腐くされ外げ道どうも勝手はできねえはずですが」

「よしてくれ。柄がらじゃない」

「そうは思いませんが」

「買いかぶられると困るな。だいたい、この狭せま苦くるしい場所で、気にくわんとかうざったいだとかな。ちょっと我が慢まんすればいいだけの話なのに、なんでいちいち揉もめなけりゃならんのか、俺にはさっぱりわからんよ。そんなことをやっていても疲つかれるだけだ」

「人それぞれですから」

「まあな。だから、やりたいやつが勝手にやってればいい。俺も勝手にやるさ」

「あんたはそれだけの男じゃねえと俺は思ってますが」

「思うだけなら自由だ。押しつけられちゃあたまらんがね」

「あいにく頭が固くて」

　男は口くち許もとを少しだけゆるめて目線を下げた。

　アジアンと目があった。

「お初です」

　いったいどう答えればいいものか。アジアンが迷っていると、男は両りよう膝ひざを手で押さえるような体勢になって頭を下げた。

「雷ライ切キリと申しやす。お見知りおきのほどを」

　よくわからないが、かなり丁てい寧ねいな挨あい拶さつをされているらしいということは、なんとなく感じる。それに対して、どう応じるべきなのか。

　見当もつかないので、アジアンはとりあえず寝台から下りて、雷ライ切キリに近づいてゆき、そっくり同じことをした。つまり、両膝に手をついて頭を下げてみたのだが、申しやす、という言い方は

どうもぴんとこない。結局、顔を上げて、ただ名乗るだけにとどめておいた。

「ボクは、アジアン。番号は」

「そいつはいらねえ。好きじゃねえんで」

「そう」

「本当は、覚えられねえ」

　雷ライ切キリは唇くちびるの端はしと一緒に目許もゆるめてみせた。

「顔と名前で精せいーいつ杯ぱいなんで」

「ボクもまだあまり覚えていない」

　つられて、自分の顔の筋肉が微かすかにゆるむのを感じた。

「一いつ般ぱん房に移ってきて日が浅いから」

「俺が保護房に叩たたきこまれる前はいなかった」

「そうみたいだ」

「でも、俺とは関かかわらねえほうが。腐れ外道に睨にらまれる」

「もう睨まれてる」

「そいつは」

　雷ライ切キリは唇の片かた端はしをつりあげて、目を細めた。

「豪ごう気きだ」

「それだけじゃあない」

　クラニィが少し眠ねむそうな声を後ろから飛ばしてきた。

「そいつはな。こう見えて、ただの優やさ男おとこじゃない、なかなかのタマみたいだぞ。何せ、驚おどろくなかれ、あのリキエルを果たし合いでぶっ倒たおしちまいやがったんだ」

「何ですって？　リキエルを？」

　突とつ然ぜん、弾はじけるような笑い声が房ぼう内に響ひびき渡わたったので、驚いた。

　雷ライ切キリは腹を抱かかえてひとしきり笑った。

「すげえ！　あのリキエルを！　誰だれ一人歯が立たなかったってえのに！」

「いや、あれは……」

「仮にまぐれでも、すげえものはすげえよ。いやあ、すげえ。やるねえ、あんた。そのときの話、とっくり聞かせちゃくれねえか」

「でも、たいした話は」

「ご謙けん遜そんですかい。まあ、偉えらぶるよりはずっといいや。俺はむしろ好きだね。気に入ったよ。話の件、どうか頼たのんます。そうとなりゃあ、さっさと用を済ませてこねえと」

「用って」

「復房したら腐れ房長殿にご挨拶しねえといけねえんで」

「ダリエロに？」

「しきたりなんで」

　雷ライ切キリはアジアンとクラニィに目礼するなり、通路の奥へと向かって歩きだした。

　突つきあたりには、自由時間外出禁止の懲ちよう罰ばつを三日前に解かれたダリエロが椅い子すを置いて座っていて、その両りよう脇わきにリー・ブラックとレイジが控ひかえている。そこで雷ライ切キリを待ちかまえるのかと思いきや、違ちがった。雷ライ切キリが通路の半分あたりを通りすぎたときだった。小屋の中から様子をうかがっていたのだろう男たちが、おお、と声をあげた。ダリエロがやおら椅子から立ちあがったのだ。

　誰かが、一人ではない、何人もが、生なま唾つばを飲みこむ音がした。

小屋から顔を出して、雷ライ切キリに何か声をかけた目の細い男は、たぶんダリエロ派ではない。同じように別の小屋から飛びだして、雷ライ切キリを止めようとした髪かみの毛が緑色の痩やせた男も、ダリエロ派の連中からはいつも距きょ離りをとっている。緑色の髪の男を後ろからつかまえて小屋の中に引きずりこんだ金きん髪ぱつを真ん中分けにしている男も同じだ。クラニィが言っていた雷ライ切キリの子分どもとは、彼らのことなのかもしれない。

雷ライ切キリは、だが、止まろうとしない。

ダリエロもゆったりとした足どりで歩いてくる。

房内がまた静かになった。

このままだと、二人は通路の三分の二あたりの地点でかちあうことになるだろう。

その瞬しゆん間かん、どうなるのか。

わからないが、おそらく何かが起こる。

アジアンは鉄てつ格ごう子しに指をかけて力をこめた。

会ったばかりの男ではあるものの、雷ライ切キリのことが気がかりだった。相手はあのダリエロだ。しきたりだか何だか知らないが、雷ライ切キリが挨拶をして、ああそうか、ですませるとは思えない。ダリエロはきっと何か仕し掛かけてくるだろう。雷ライ切キリのことはまったくと言っていいほど知らないが、あの男ならそれをうまくかわすのではなく、受けて立つのではないかという気がする。アジアンに予想できるくらいだから、当然、ダリエロもそのあたりは見み越こしているだろう。出方を読まれている雷ライ切キリは不利だ。

あと五歩くらいだろうか。互たがいに二歩ずつ歩みよれば、両者の間には足を一歩踏ふみだすだけで無になってしまう距離しか残らない。

いつの間にか、クラニィがアジアンの横に立っていた。

クラニィは爪つめを立てて首筋を掻かきながら、わずかに顔をしかめた。

大勢が一いつ斉せいに息を吐はいた。

はっとして通路に目を戻もどすと、二人はもうすれ違っていた。

何も起こらなかったのか。

どうやらそのようだ。ダリエロは足を止めていない。薄うすい唇を舌先で舐なめながらこちらへ向かって歩いてくる。

雷ライ切キリは違った。意表を突かれたのだろう。少しの間、立ちつくしていた雷ライ切キリは、猛もう然ぜんと振ふり返ってダリエロの背中を大おお股またで追いはじめた。あるいは、すでにこの時点で雷ライ切キリはダリエロの術中に陥おちいってしまっていたのかもしれない。図はからずも、そして、やむをえず、と言ってもいいだろう、ダリエロに付き従う恰かつ好こうになった雷ライ切キリは、太い眉まゆをつりあげて、ぎりぎりと奥歯を噛かみしめていた。冷静さを失っている、少なくとも、失いつつあるように見えた。いや、間もなく完全に失った。

ダリエロがげっぷをして、それだけでは飽あきたらず、放ほう屁ひした。

雷ライ切キリの顔色が変わった。

「さて、と」

ダリエロがようやく足を止めて振り返ったのは、房の出入口の手前で、アジアンとクラニィの小屋のすぐ前だった。

「お帰り、雷ライ切キリ。どうだったよ、保護房生活は。見たところ、血色もよすぎるくらいだし、満まん喫きつしてきたみてぇだな」

「たしかに極ごく楽らくだった」

雷ライ切キリは首を傾かたむけて鼻柱に皺しわが寄るほど思いきり顔をしかめた。

「あそこじゃおめえの薄うす汚ぎたねえ面ツラあ拝まずにすむ」

「ご挨あい拶さつだな。てめぇ、ちっと会わねぇうちに俺が誰だれか忘れちまったのかよ」

「忘れちゃいねえ」

「だったら口のきき方ってもんがあるんじゃねぇか」

「ああ……？」

「ああ、じゃねぇだろうが。忘れてねぇと言ったそばからそれかよ。痴ち呆ほうか、てめぇは」

「誰が痴呆だ」

「てめぇ以外誰がいるっつうんだよ。雷ライ切キリ、てめぇは懲罰食くらって復ふく房ぼうしてきたんだ。そうしたらよ、いの一番にやるべきことってのがあんだろうが。わかりませんとは言わせねぇぞ。てめぇは懲こりずに何度も何度も保護房に叩たたきこまれてる札付きのワルなんだからよ。知らねぇわけがねぇ。てぇことは忘れちまったんだろうが。つまり痴呆なんだよ、てめぇはよ」

　雷ライ切キリは唇くちびるを震ふるわせるだけで何も言い返さなかった。

　ダリエロは鼻を鳴らしてうなずいた。

「わかったよ。しょうがねぇ。痴呆のてめぇを憐あわれに思ってこの俺が直々に、懇こん切せつ丁てい寧ねいに教えてやる。感謝しろよ。いいか雷ライ切キリ、こう言え。房長様、ただいま帰りましてございます、わたくしめが不在の間、お変わりありませんでしたでしょうか、これからもどうか何とぞよしなにお取りはからいいただけますようお願いいたします。当然、頭も下げろよ。さあ、言え」

「ふざけるんじゃねえ、外げ道どうが」

　突つきあげたというよりも、打ちあげたかのようだった。

　雷ライ切キリの右拳こぶしがダリエロの顎あごを正確にとらえた瞬間、隣となりのクラニィが顔を撫なでて、あーあ、とため息まじりの気け怠だるげな声をもらした。

　ダリエロはそれにしても見事に吹ふっ飛びすぎではないかと思われるほどきれいに吹っ飛んで、鉄格子に後頭部と背中を打ちつけた。

「係員！」

　すかさず叫さけんだのは向かいの小屋のメツェルディだった。さらにダリエロに飛びかかってゆこうとした雷ライ切キリに、大勢の男たちが次々と組みついていった。猫ねこ背ぜの係員はすぐに駆かけつけてきた。猪い首くびの係員と顔の長い係員も少し遅おくれて到とう着ちゃくした。雷ライ切キリは係員たちに羽は交がい締じめにされ、革かわ手て錠じようを嵌はめられて房から連れだされた。

「……どうなるのかな、雷ライ切キリは」

「そりゃあ」

　クラニィは口をへの字に曲げて肩かたをすくめてみせた。

「保護房行きだろうな。何日ぶちこまれるかはわからんがね」

「戻ってきたばかりなのに」

「いつものことさ」

「そうなんだ」

「まあ、今までは短くても一日くらいはなんとか我が慢まんしてたんだがな。記録更こう新しんってやつだ。ひょっとしたら、お前さんの武勇伝に触しよく発はつされたのかもな」

「ボクのせいなのか」

「真に受けるなよ。今回はダリエロの仕し掛かけが早かった。それだけの話さ」

「おい」

　顎をさすりながらも、にやにやして雷ライ切キリを見送っていたダリエロが小屋の鉄てつ格ごう子しを叩いた。

「人聞きの悪いこと言うんじゃねぇよ、クラニィ。俺は被ひ害がい者しやなんだ」

「被害者ね」

「何か言いてぇことでもあるのかよ」

「言いたいことがありそうな顔に見えるか」

「いいや。ただの老ふけ顔にしか見えねぇな」

「だろうな。俺は正直者なんでね。すぐ顔に出ちまう。出てないってことは、何もないってことだ」

「狸たぬき野や郎ろうが」

　ダリエロは鉄格子を蹴けりつけ、アジアンに一いち瞥べつをくれてから去っていった。まぎれもなく、敵をねじ伏ふせよう、圧あつ倒とうしよう、息の根を止めてしまおうとしている者の眼まな差ざしだった。このところ、アジアンに対しては、直接、間接を問わず、手出ししてくる気配すらないが、まだあきらめたわけではないということか。

　ため息が出た。

　おそらく、それを見るか聞くかしたのだろう。クラニィが喉のどを低く鳴らして静かに笑った。何か言いたいことでもあるのか。尋たずねかけて、自分がダリエロと同じことを言おうとしていることに気づいた。

「タヌキ、か」

「そいつは俺に言ってるのか。何だ、お前さんまで」

「いや。ただ、タヌキって」

「ん？」

「何だろう、と思ってサ」

「あ……？」

　クラニィは両りよう眼めを見開いてアジアンを見つめた。

　ややあって、アジアンの肩を何度も叩きながら声を立てて笑いだしたが、長くはつづかなかった。

　クラニィは急に黙だまりこみ、自分の口を手で押さえて顔をしかめた。

どうかしたのか、ときこうとした。

声をかける前に、クラニィは首を横に振ふって、背中を向けてしまった。

アジアンは何も言えなかった。

クラニィも口を開こうとしなかった。

20

小屋の扉が閉められて施せ錠じようされ、就しゆう寝しん準備が告げられてから間もなくだった。会堂や運動場で何度か見かけたことがある、だが、外見に特とく徴ちようがないため、とりあえず中肉中背としか言えない係員が四号房に入ってきたかと思うと、ざわめく男たちには目もくれず、アジアンとクラニィの小屋の鉄格子を教導鞭べんで叩たたいた。

「４２８。副所長が君を呼んでいる」

ざわめきが高まって、一いつ瞬しゆん、騒そう然ぜんとしかけた。アジアンのまだ短い一いつ般ぱん房ぼう生活において、就寝準備から起き床しようまでの間に見回り以外で係員が房内に入ってきたことは一度もないし、房内の雰ふん囲い気きからしても、おそらくこれは異例の出来事なのだろう。しかも、呼びだしを受けているのは他ほかの誰だれでもない、アジアンだ。

小屋を出る間ま際ぎわ、上段のクラニィに視線を送った。

クラニィは頭の後ろで組んだ両りよう腕うでを枕まくらにして横になり、目を閉じていた。

小屋の扉を開けて待っている係員がまた鉄格子を叩いた。

「早くしたまえ、４２８」

係員に付き従う恰かつ好こうで四号房を出て十字廊ろう下かを通り会堂へ行くと、眼鏡めがねをかけた男がぽつんと椅い子すに腰こ

しかけていた。ちょうどいつもアルバートが座っている席だ。

「やあ、きましたね」

　副所長はアジアンを見るなり椅子から腰を浮うかせて手招きした。

「いきなり呼びだしたりして、申し訳ありません。こちらへどうぞ」

　拒こばむ理由はないし、その権利もないのだろう。係員がこれ見よがしに教導鞭で自分の腿ももを叩いてみせた。ほんの少し反応が遅おくれただけでこれだ。今までこの係員にはとくにどのような印象も抱いだいていなかったが、かなり厳格で威い圧あつ的な男らしい。

　アジアンは副所長の向かいの席、つまり普ふ段だんから自分が使っている椅子に腰を下ろした。

　係員は背後に立っている。

　副所長が右手の人差し指で眼鏡の位置を直しながら椅子に座りなおし、テーブルに肘ひじをついて両手を組みあわせた。

「──さて。あなたにわざわざお越こしいただいたのは、他でもありません」

「何か」

　アジアンは副所長の目をのぞきこんで、そこに自分の姿を探した。

　眼鏡のせいだろうか、黒い瞳ひとみには何も映っていないように見えた。

「ボクに、用でも」

「それがですね」

　副所長は顎あごを上げた。おそらく、アジアンの後ろにいる係員に目をやったのだろう。

「ああ、あなたは席を外してもらえませんか」

「それは命令と受けとらせていただいてかまいませんか」

「命令でなければ従ってくれないのでしたら、そう受けとってください」

「わかりました」

「それと、できれば、この件については秘密にしておいてもらえると助かるのですが」

「それはできかねます」

「そうですか。じつは、最初から期待していませんでした」

「ご用件がお済みになりましたらお呼びください」

　係員は十字廊下への扉の前まで移動した。そこで副所長に呼ばれるまで待つ気らしい。席を外せと言われてうなずいておきながら、会堂から出るつもりはないようだ。副所長は肩かたをすくめてみせた。

「まあ、いいや。話をつづけましょう。どこまで話しましたっけ。そうそう、あなたにお越しいただいたのは他でもない、というところまででしたね」

「はい」

「はい、はよしてくださいと言いませんでしたっけ」

「言われました。前に」

「べつにいいんですけれどね」

　副所長はこめかみのあたりを中指で押して鼻から息を吐はいた。

「馴な染じんでしまっているのかな。ここに」

「だいぶ慣れました」

「そうですか。それはよかった、と言いたいような、言いたくないような、微び妙みようなところなのですが」

「微妙？」

「ええ。いや、こちらの話です。気にしなくていいですよ。それとも、気になりますか」

「微妙に」

「おっと。うまい返しですね。勉強になります。メモしておきましょう。頭の中に。でも、本当に気にしないでください。僕のことは重要ではありません。どうせたいしたことはできませんしね。するわけにはゆかないのです。思わせぶりに聞こえますか」

　アジアンがうなずいてみせると、副所長は首を傾かたむけて唇くちびるを笑う形にゆがめた。

「よかった。狙ねらいどおりです」

「何を」

「はい？」

「何をしたいんですか。あなたは」

「僕は、何も」

　副所長は両手を広げて首をゆっくりと横に振ふった。

「何もしません。直接は。何かするのは僕ではなくて、あなたですよ、アジアン」

「ボクが？」

「そうです。あなたが何かしたいと思い、それを為なすのでなくては意味がないのです」

「どうして」

「どうしてだと思いますか」

「わからない」

「考えてください」

「……考える」

「そうです」

「自分で」

「ええ。あなたは今、何がしたいですか」

「ボクは、今──」

　アジアンは胸に手をあててうつむいた。

　服も、皮ひ膚ふも、その下の肉も、肋あばら骨ぼねも、心臓までも、かきむしってしまいたい。

　できない。

　そこまで到とう達たつしていないからだ。

　その瞳を、髪かみの毛を、唇を、顎を、頬ほおを、睫まつ毛げを、こんなにもありありと、色いろ鮮あざやかに思い浮うかべることができるのに、ボクはキミを呼ぶことさえできない。

　知りたい。

　せめてキミの名を知りたい。

　会いたい。

　一目でいいから、キミの顔を見たい。

　すぐ近くでキミを感じたい。

　今にもあふれだしてしまいそうな思いを、何かが堰せき止めている。

　ここから先に進むことがどうしてもできない。

　それでも、ボクは吐きだしてしまう。

「……会いたい」

　願いを。

たった一つの望みを。

「どうやら、それが鍵のようですね」

副所長がそっと息をついた。

アジアンが顔を上げると、副所長は右手の人差し指と親指で顎をつまんでテーブルに目を落としていた。

「鍵……？」

「ですが、扉を開けるのはあなたでなくてはいけない」

「どの、扉ですか」

「ここには扉がたくさんありますものね。でも、それはあなたが見つけないと」

副所長はテーブルに肘ひじをついて顔の前で両手をあわせた。

「僕はまだ新任ですし、所長はいい加減なところもおありになりますが、あれでなかなか用心深い方なので、あまり派手なことはできません。でも、いろいろな仕事を一いつ般ぱん房ぼうの者に任せるようにすることくらいなら、もしかしたらできるかもしれない。ここは人手が足りませんからね。閉じこもりきりで、とくに楽しみがあるわけでもなく、単調で、士気が上がるような仕事でもない。少しでも手が抜ぬけるようになるのなら、係員たちにとっても大だい歓かん迎げいでしょう。僕はこれを〝省力及および能率向上のための改革プログラム〟と銘めい打うって企き画かく書しよを作成し、所長に実行を進言しようと思っています。承しよう認にんしてもらえるかどうかわかりませんが、うまくゆけばあなたがたには現状よりもう少し働いてもらうことになり、係員たちの負担は減ります。細かいことでも積み重なれば結構大変なんです。たとえば、係員にとりわけ不人気な仕事としては、清せい掃そうがありますね。今現在、房内はあなたがたが自分たちで掃そう除じしていますが、他ほかの場所はすべて係員が行っています。アサイラムは広い。何しろ、これだけの人数が一歩も外に出ることなく生活しているのですからね。ある程度広くないと困る。医務室のせんせいだけです。外に出ることができるのは。知っていましたか」

「……外に」

「そうです。外に。僕らは住みこみで、彼だけ通いなんですよ」

「鞄かばん」

「何です？」

「鞄が……せんせいの鞄が、机の、下に。鞄の中から、せんせいが、何か──」

「とりだして、あなたに見せましたか」

「あれは」

「たぶん、鍵でしょう」

「鍵」

　鈍にぶく光る金属でできた鞄だった。むしろ、箱と言ったほうがいいかもしれない。それに把とつ手てがついている。せんせいはそれを机の下に隠かくしている。

　いつだったか、それを引きだしてきて、目の前で開けた。

　おもしろいだろう？

　そうだ。あのときだ。せんせいは部屋を暗くした。何かを見せられた。何だろう。光。動く光。像。あの鞄には何か箱形の物体が収められていた。それが光を発して壁かべにめまぐるしく動くものを映した。それをひどく懐なつかしく思った。同時にひどく新しん鮮せんだった。しかし、それだけではなかった。あの鞄には他にも何か入っていた。

　せんせいが照明をつけた。それが目に入った。

　尋たずねた。それは何ですか。

　ああ、これかい。

　それは黝あおぐろかった。硬かたそうだった。重みもありそうだった。輪に棒がぶら下がっていて、その棒から短い横棒が左右に何本も突つきだしているような形をしていた。せんせいはその輪の部分に人差し指を通して左右に振ふってみせた。



　鍵だよ。

　ここから外に出るときと、ここに入るときにはこれが必要なのだよ。

　この鍵がね。

「それもまた、鍵かもしれないですね」

　副所長は一いつ瞬しゆん目を細めて、また眼鏡めがねの位置を直した。

「ともあれ、僕は僕の仕事をします。ちょっとした改革を。あなたがたは普ふ段だん立ち入ることのない場所がここにはたくさんあって、係員たちもその管理や維い持じにはうんざりしているのです。たとえば、保護房とかね。それから、閉へい鎖さ房ぼう」

　ボクはそこにいた。

　そして、キミがそこにいる。

「掃除当番をやってもらおうかと思っているのですが。一般房の皆みなさんに」

「……閉鎖房も？」

「中は無理でしょうね。以前のあなたと同じように、あそこに入っている人がいますから。外の通路なら認められる可能性はあります」

「誰だれが入っているんですか」

「それは」

　副所長は唇くちびるに人差し指の先をあてた。

「言えません。僕の口からは」

「どうして」

「わからないからです。予想はだいたいついていますが、はっきりとはわからない。それに、あなたが強く望めば、そのうちきっとわかりますよ」

「ボクが、望めば？」

「一番大切なことです」

　副所長は遠くの係員をちらりと見た。副所長だけでなくアジアンも声をひそめて話していたので、おそらく係員にはほとんど聞こえ

ていないはずだ。

「さて、世間話はここまでにして、本題に入りましょうか」

　副所長が少し声を大きくした。

「あなたにわざわざお越こしいただいたのは、他でもありません。僕は新任でしてね。まだ実績がないので、いろいろとがんばって所長に認めてもらおうと必死なんです。じつはですね、あなたが閉鎖房から一般房に移動することになったのも、僕の提案です。どういうことかというと、閉鎖房はいずれなくしてしまいたいのです。どうしても一人ないし二人の係員が、あそこに張りついていないとなりませんからね。もったいないじゃないですか。人員の効率的な運用を図はかるというわけです」

「閉鎖房が……なくなる？」

「すぐには無理ですが。あそこに入っている人を一般房に移すには、せんせいの承認が必要ですしね」

「せんせいの」

「はい。まあ、それはいいのですが、僕が取り組もうとしていることがもう一つありまして、簡単に言えば一いつ般ぱん房ぼうの規律強化ですね。現状は房長制度が係員を補ほ佐さしている形ですが」

「それが、何か」

「見直してはどうかと思っていましてね。なかなか表面化しないようですが、どうも問題が多いようなので。それで、あなたに事情聴ちよう取しゆをしたいと、こういうことです」

「なんでボクに」

「単刀直入にうかがいますが、嫌いやがらせを受けていませんか？」

「いいえ」

　即そく座ざに否定したことが自分でも意外だった。

　ただ、副所長もとくに驚おどろいている様子はなく、声こわ音ね

も淡たん々たんとしていた。

「あなたは五日間、ローガンと一いつ緒しよに作業で移動を担当していますね。まったく同時期に、ダリエロは自由時間外出禁止の懲ちよう罰ばつを受けている。それから、運動場でシャマニがあなたにボールをぶつける場面を係員が目もく撃げきしています。注意や警告にはいたらなかったようですが。また、この翌日、あなたの頬ほおに擦さつ過か傷しようを確かく認にん、これも係員からの報告です。あなたの日誌には何の記き載さいもありません」

「だいぶ慣れました」

「それで？」

「慣れるまではいろいろあった。それだけです」

「四号房での生活に何も問題はないと？」

「ありません」

「そうですか」

　副所長は唇を笑う形にゆがめた。

「いや、いいんです。それならそれで。存在しない問題を無理やりでっち上げようとしているわけではありませんから。じゃあ、事情聴取はこれでおしまいです。また何かあれば呼びださせていただくかもしれませんが」

「一つ、きいてもいいですか」

「何でしょう」

「ボクはあなたに会ったことがありますか」

「二度目ですね」

「前は答えてくれなかった」

「だったら、もう一度──」

「ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ」

「あっています」

　副所長は椅い子すから立ちあがり、テーブルに両手をついて身を乗りだしてきた。

「ええ。僕はあなたのことを知っていますよ、アジアン」

21

　焦こげ茶ちゃ色の肌はだをした４１８のトトが軽く握にぎった右手と左手で筒つつを作り、その穴に向かって、ふうっ、と息を吹ふき入れると驚くべきことが起こった。筒の先にあたる左手の小指と掌てのひらの合間から何か白い煙状のものが出てきたのだ。いや、煙などではない。最初気体にしか見えなかったそれは、すぐに密度を増して固体と化し、細い棒のような乳白色の物体となって床ゆかに落ちた。

　一本。二本。三本。四本。五本。六本。

　━七本。

　棒は重なりあい、あるいは弾はじきあって、名状しがたい複雑な紋もん様ようを運動場の床に描えがいた。

　皆みなが生なま唾つばを飲みこんだ。

「ど、どうッなんだよ、これッ」

　こらえきれなくなったように棒を指さしたのは、緑色の髪かみをした４２４のヘンドリクだ。

　金きん髪ぱつを真ん中分けにしている４１５のアンガルセンが鼻先で笑ってみせた。

「落ちつけよ、おまえは。だいたい落ちつきってものがないんだよ。全般的に。ヘンドリク、おまえってやつは。とりあえずじっとしてろ。黙だまって待ってろ」

「うむ」

　黒髪を結ゆっている目の細い４０７の寂ジヤク星セイが腕うで組ぐみをしてうなずいた。

「貴様も十分やかましいがな、アンガルセン」

「ああん？　何？　何か言った？」

「聞こえなかったのか」

「いや、聞こえたよ。そりゃあ聞こえましたよ。だからこのおれさまに喧けん嘩か売ってるのかってきいてんじゃん。わかんだろ。それくらい。文脈からして」

「つーかさ、マジうるせって。てめえは。アンガルセンのくせによ。黙ってろッつの」

「何だ、この緑野や郎ろう。くせにってのはどういう意味だよ。ヘンドリクの分際で」

「どうッいう意味もこういう意味もあるかよ」

「お、おまえらな、ほんと、すげえうるさいんだよ。もっと静かにするだろが、ふつう」

　横から口を挟はさんできたボダダグを、ヘンドリクとアンガルセンが同時に睨にらみつけた。

「ああ？　てめえなんか顔ッつーか存在自体がクッソうぜえじゃねえか」

「そもそも人間の顔してないくせに、人間様同士の会話に割りこんでくるんじゃないよ、おまえは。この身の程ほど知らずが。思いあがりも甚はなはだしいんだよ」

「……ぐ、ぐ、ぐ」

「静かに」

　アジアンが声をひそめて言うと、皆、口をつぐんだ。なんでも心霊体アプラマとやらを用いているらしいトトの占うらないの結果が

出ようとしている。あぐらをかいて棒の模様を見つめていたトトが、まん丸い目を一いつ杯ぱいに見開いて、鼻の穴から息を吐はいた。

「……ふすっ……！」

「おお！」

「棒が──」

「消えたッ！　つーか消し飛んだ！」

「す、す、す、すっげえ！」

「くるか？」

「出ちまうのかよッ！」

「は、は、早く！」

「……出たダ」

　トトが目をつぶってうなずいた。

「今日の、目の黒い人は、ラッキー度数、二十五ダ」

「俺だッ！」

　髪は緑色だが目は黒いヘンドリクが両手をあげて、同じく黒い目の寂ジヤク星セイは腕組みをしたまま低く唸うなっただけだった。

　目が緑色のアンガルセンがヘンドリクを押しのけてトトにつめよった。

「おいっ、おれさまは！」

「目の緑の人は、ラッキー度数、三十一・三ダ」

「よっしゃ勝った！」

「お、おれは……」

　自分を指さしてみせたボダダグの目は濃こい灰色だ。

　トトは首をひねった。

「目の灰色の人は、ラッキー度数、三十二ダ」

「ぶへへへへ」

「気持ち悪い笑い方してんじゃないよ、おまえは！　不細工のくせに生意気なんだよ！」

「つーか人間じゃねえだろ、てめえはだいッたい！」

「……に、人間だぞ、おれ」

「目の青い人は」

　トトがアジアンをちらりと見た。

「ラッキー度数、四ダ」

　アンガルセンやヘンドリク、ボダダグだけでなく、寂ジヤク星セイまで、にやりというか、にたりというかんじで笑った。

「──四、か」

　こころなしか身体からだ全体が重くなったような気がする。自然と目線が下がった。我知らずうつむいてしまったようだ。小さなため息が出た。

「う、占いは、占いダ」

「つーかそんッなに落ちこむこたーねえべ……」

「そ、そうだぞ、占いなんだからな、あんまり気にしちゃだめだろが、ふつう」

「そんな気にするのなんて、根っからのバカだけじゃん。バーカ。考えろよ。少しは。所しよ詮せんは占いなんだからよ。ただの」

「所詮って言うなダ」

「そうだな」

　寂ジヤク星セイが鼻を鳴らした。

「ただの占いじゃあない。たいした芸だ」

「占いダ！　占い占い占い占い占いダったら占いダ！」

　占いが趣しゅ味みであり、特技であるどころか、おのれのすべてでさえあるらしいトトは、背が低いだけでなく幅はばも厚みもないので、一見、子供のようだ。

　日誌を書くときに配られる筆記道具や、作業場で使われるチョークなどを少しずつくすねて蓄たくわえ、それで絵ばかり描かいているボンドという男が四号房にいるのだが、彼が自分の小屋の壁かべに白いチョークで描いたトトは傑けつ作さくだった。

　それは丸と棒の組みあわせで、顔は丸、目は丸の中に小さな丸で、鼻はなく、唇くちびるは二重丸で、身体は横棒と縦棒が交差し、縦棒の終しゅう端たんから斜ななめ左右に二本の棒がのびていた。たったそれだけなのに、その絵はまさしくトトだった。感心して、クラニィやローガン、それからいつも彼らと賽サイで遊んでいるギャンガーやデ・ペドロにも見てもらうと、たしかにトトにそっくりだと全員が口をそろえて言った。

　痩やせこけていて、落ちくぼんだ目をしたボンドは、誰だれとも口をきかない。声をかけられてもそちらに顔を向けるだけだ。うなずいたり首を振ふったりすることすらほとんどない。ただ、自分以外に関心がないというわけではないようで、今も運動場の真ん中あたりに座って周囲に視線を巡めぐらせているが、ボンドはよくああして尋じん常じようではないくらい真しん剣けんに周りを観察している。その成果がボンドの小屋を埋うめつくしている絵なのだろう。とはいえ、その絵を壁や床ゆかや寝しん台だいや便器や洗面台に描くことも、鉛えん筆ぴつやチョークをかすめることも、もちろん立派な規則違い反はんだ。実際、ボンドは何度も懲ちよう罰ばつを食くらったようだが、それでも決してやめないどころか、とうとう保護房ぼうの中でも食べ物や汚お物ぶつを使って絵を描きまくるようになった。それ以来、係員たちも皮肉まじりにボンドを〝巨きよ匠しよう〟と呼んで、その行こう為いを黙もく認にんするようになったのだという。

　最初にアジアンをボンドの小屋に連れていってくれたのは、ボダダグだった。ボンドはボダダグの絵も描いていて、ボダダグはいたくそれが気に入っているらしい。おそらく、絵自体よりも、ボンドが自分に注目してくれたことが、みずからを醜みにくいと思ってい

るボダダグにとっては嬉うれしかったのではないかとアジアンは考えている。

　その〝巨匠〟ボンドと〝占うらない師〟トトは同じ小屋で、何度か例の心霊体アプラマで占ってもらったりしているうちに、運動の時間や自由時間を一いつ緒しよにすごすようになった。アンガルセン、ヘンドリク、寂ジヤク星セイの三人は、雷ライ切キリの子分ではないようだが、ダリエロとその一派に従う気などさらさらない、四号房における圧あつ倒とう的な少数派だ。雷ライ切キリが保護房行きになった日の翌日の自由時間に話しかけてきて、それからたまにアジアンのいる場所に集まってくるようになった。

　リキエルが相変わらずアジアンのすぐそばで指立て伏ふせや指一本での倒とう立りつに励はげんでいる。

　アジアンは自分の膝ひざを抱かかえている両手に少しだけ力をこめ、運動場の壁に後頭部を押しつけて天てん井じようを見上げた。

　だんだんと慣れてきている。自分の目の前に誰かが、それも一人ではなくて何人もが、腰こしを下ろして何かを話し、それに相あい槌づちを打ったり、誰かが笑ったり、あるいは機き嫌げんをそこねて罵ば声せいを浴びせたり、言い返したりする。最初はやや居心地が悪くもあったそんな状じよう況きようが、あたりまえになろうとしている。

　この胸の中はがらんどうだった。胸だけではない、頭も、腕うでも、足も、指の先まで、身体中が空くう洞どうで、その裏側は乾かわききっていて、ひどくざらついていた。そこには何もなかった。自分という形だけがあった。いつかせんせいの白い手がその外側をなぞった。きれいな顔をしているよ。まるで、よくできた人形のようだ。人形。ボクは、人形。そう。ボクはからっぽの人形だった。でも、今は違ちがう。ボクの中に何かがある。微かすかな熱を感じる。あんなに干ひからびていたボクの裏側が、少しだけ湿しめっている。ボクという形があるだけじゃない。ボクは間違いなくここにいる。

「つーか」

　ヘンドリクが立ちあがり、緑色の髪かみを引っかき回しながら上から顔をのぞきこんできた。

「何だよ、てめえ。いッくらなんでも、ちょっと黙だまりこみすぎだろ。そんッなにアレだったのかよ、ショックっつーか何つーか。ラッキー度数」

「まあ、言っても四じゃん？　四。一ひと桁けたでもさらに下のほうだしな。四ってことは」

　アンガルセンが顔をゆがめて左手で金きん髪ぱつをかきあげ、寂ジヤク星セイは静かにせせら笑った。

「四は死に通じる。不ふ吉きつな数字だ」

「……こ、こいつらって、最低だよな」

「うッせえぞ、こッの不細工野や郎ろう。てめえはツラが最低だろうがよ」

「わ、悪かったな。それくらい、わかってるんだぞ、おれだって」

「わかってんだったら、なおせッつーの」

「それは無理だろう」

「そ、そうなんだぞ、寂ジヤク星セイの言うとおり、無理なんだからな。無理なことはどうやってもできないだろが、ふつう」

「威い張ばるようなことかよ、バーカ」

　アンガルセンがボダダグの後ろ頭を平手で叩たたいた。結構いい音がしたが、ボダダグは顔が少し赤らんでいて楽しそうだ。

　トトが身体からだ全体を丸めて上うわ目め遣づかいでアジアンを見ている。

「……占いは、占いダ」

「ああ」

　アジアンは軽くうなずいてみせた。

「べつに気にしてないヨ」

「で、で、でも、占いだから、当たることもあるダ。ていうか、

けっこう、当たるダ。ぜんぜん当たらなかったら、意味ないダ」

「そう」

「よ、四は、一とか、二とか、三よりは、いいダ」

「うん」

「気を落とすなダ。強く生きろダ」

「強く、か」

　アジアンは胸に手をあてて目をつぶった。

「トト」

「な、何だダ」

「オレンジ色の目の人はどうなのかな」

　返事がないので目を開けてみると、トトが首を傾かしげていた。アンガルセンやヘンドリク、寂ジヤク星セイやボダダグもそれぞれに怪け訝げんそうな顔をしていた。当然の反応かもしれない。一いつ般ぱん房ぼうに収容されている男女のほとんどが集まっているはずの運動場を見み渡わたしても、オレンジ色の目をした者など一人として見あたらないからだ。

「──いや」

　アジアンは目を伏せた。

「いいんだ。何でもない」

22

　閉じた瞼まぶたの上に何かが貼はりつけられている。目を開けようとしても開けられない。鼻と口には何かがあてがわれていて、多少息苦しいが、呼吸はできる。首と手首と足首、それから腰のあたりに何かを嵌はめられているので、身動きがとれない。

　身体のあちこちで皮ひ膚ふが突つき破られ、引き裂さかれている。切り開かれて、抉えぐりだされ、探さぐられて、弄いじくり回されている。痛みはむろんある。だが、感じる痛みはすぐに頭の隅すみのほうへと追いやられてしまう。他ほかのことを考えているからだ。そのことばかりを考えている。

　隣となりの寝しん台だいに、二枚のカーテンを隔へだてた場所に、キミがいる。

「今日は違うね」

　せんせいが手を止めた。

「様子が違う。何な故ぜだろうね。当ててみせようか」

　せんせいのつめたい指が首筋にふれた。

「気になるのだろう？」

　答えてはいけない。

　せんせいには何もかも見み抜ぬかれているのだと思いたくはない。

　せんせいにそう思わせてもいけない。

　違ちがうからだ。

　ボクは、違う。

　せんせいの人形なんかじゃない。

　そうだ。

　そうさ貴様はお前は違うそいつの奴やつの人形などではない決して断じてそうではなく貴様は貴様はお前は我らの獲え物ものであり我らへの捧ささげ物であり我らの我らのための可愛かわいい愛すべき憐あわれむべきがらくたの役立たずの壊こわれかけの愛いとしい愛しい大事な大事な愛あい玩がん人形にすぎぬ。

　違う。

　違う。

　ボクは。

「会わせてあげようか」

　ボクは、でも、結局、たやすく操あやつられてしまう。

　目の前にぶら下げられた餌えさから顔を背そむけることが、どうしてもできない。

　声に出さなくても、うなずいてみせなくても、同じだ。

　これでは懇こん願がんしているのと変わらない。

「いいよ」

　せんせいはやはり見通しているのだろう。

　ボクは逆らうことができない。できるはずがない。

「他ならぬきみの望みだ。叶かなえてあげよう。ただし、少しだけだよ。それから、このことは決して誰だれにも言ってはいけない。内ない緒しよだよ。いいね」

　──はい。

「いい子だ」

　せんせいに頭を撫なでられた。

　手首や足首に嵌められていたものが次々と外され、口と鼻を覆おおっていたものが取り除かれて、瞼に貼られていたものが剝はがされると、もうこれ以上は一秒たりとも待てない気分になっていた。身体からだを起こそうとしたら、せんせいのつめたい手に肩かたを押さえられた。せんせいは唇くちびるの両りよう端たんをつりあげた。

「慌あわてる必要はないよ。それに、服を着なければ」

　せんせいはそう言うとカーテンの合わせ目をくぐって外へ出てゆき、たたんで回転椅い子すの上に置いてあった服を持ってきてくれた。

　どこかに隠かくれていたらしいナジが寝台の上によじのぼってき

て、キーともピーとも言いがたい声を出した。

　急いで服を着た。

　早く会いたい。

　少しでも早く。一秒でも長く。

　キミに会いたい。

「ここで待っていなさい」

「はい」

「この間のように私の言いつけを破ったりしたら、あまりいい結果にはならないよ。きみは決して愚おろかな子ではない。私の言っていることは理解できるね」

「はい」

　何度でもうなずいてやる。這はいつくばって服従を誓ちかってもいい。今なら誤解していたのかもしれないと考えることさえできる。せんせいを誤解していた。閉へい鎖さ房ぼうにいたころはせんせいだけだった。もう覚えていないが、いろいろな話をした。体調が悪ければ、せんせいが薬を飲ませてくれた。せんせいは親切だった。親身になってくれた。真しん紅くの虹こう彩さいと黒い瞳どう孔こうの境目が金色に輝かがやいている、あの目、あの黒い爪つめ、おまえはにんぎょうだよ、おまえのそんざいりゆう、おまえがいることのかち、おまえはおまえでいられる、あの言葉は、すべて夢だ。幻まぼろしだ。

　せんせいがまたカーテンの合わせ目から出ていった。

　カーテン越ごしに隣となりの寝しん台だいが軋きしむ音が聞こえた。

「服を着なさい」

　せんせいの声だ。返事はなかった。ただ、ふたたび寝台が軋む音がして、違う物音がそれにつづいた。微かすかな音だった。おそらく服を着ているのだろう。ということは、裸はだかだったのか。前は何も思わず、何も感じなかったが、なんだかとても奇き妙みよう

だ。ほんの少し前まで、ボクらは素すつ裸ぱだかで、カーテンを隔へだてて隣となりあった寝台に横たわっていた。おかしなことだ。

　キミは知っていただろうか。

　ボクはキミに会いたかったんだ。

　ずっと会いたかった。

　会いたくて会いたくてたまらなくて、何度も何度も閉鎖房の壁かべを叩たたいた。

　キミは知っていただろうか。

　あの閉鎖房での耐たえがたい日々に耐えることができたのは、おそらくキミのおかげだ。

　キミがたまに壁を叩き返してくれたからだ。

　そこにキミがいる。

　それだけを頼たよりにボクは息をしていた。

　一いつ般ぱん房ぼうに移ってから、キミのことを考えなかった日は一日もない。

　もしキミがひとりきりで寂さびしがっていたらどうしよう。

　平気かもしれない。平気であればいい。

　でも、平気じゃないかもしれない。

　キミが待っていたらどうしよう。

　ボクが壁を叩く音を待ち焦こがれていたらどうすればいい。

　もうあきらめてしまっていたとしたらどうしよう。

　ボクがここにいることを、どうやってキミに知らせればいい。

　せんせいが二枚のカーテンをつかんで引き開けた。

　信じられなかった。

　今キミは間ま違ちがいなくそこにいるのだと信じてしまった瞬しゅん間かん、キミが消えてしまいそうな気がして怖こわかった。

　キミはこちらに背を向けて寝台に腰こしかけている。

　夢にまで見た真っ赤な髪かみだ。

　赤毛という言葉は不適当だろう。キミの髪の毛は真紅以外の色にはなりえない。色いろ褪あせることも、これ以上色が深まることもない。初めから真紅という言葉があって、それをもってキミの髪の色を表すのではない。キミの髪の毛があって、初めて真紅という言葉が生まれた。そう考えざるをえない。

　キミは華きや奢しやだ。

　その肩は儚はかないほどに細く、背中は向こう側が透すけて見えそうなほど薄うすい。今にも折れてしまいそうで、砕くだけてしまいそうで、崩くずれてしまいそうでもあり、明らかに指一本ふれるべきではないのに、思わず手をのばしてしまいたくなる。抱だきしめて、つつみこんで、ありとあらゆる必然的あるいは偶ぐう発はつ的な衝しよう撃げきから守らなければという気にさせられる。そうしなければ、壊こわれてしまい、失われてしまう。それがいったいどれほどの損失か。とうてい計り知れない。

　声をかけようとした。

　どうしても声を出すことができなかった。

　それどころか身じろぎ一つできない。

　でも、いい。

　もういい。

　ここからキミの後ろ姿を見つめていられるだけで十分だ。

　それ以上のことは望むまい。

　せっかくこうして会えた。たしかにこの距きよ離りは近いようで遠く、忌いまわしいほどに、もどかしくて苦しくてたまらないほどに果てしなく遠すぎるけれど、もっと遠ざかってしまう結果になったら、きっと気が狂くるう。それに、近づいてキミを怯おびえさせ

たくない。キミに嫌きらわれたくない。キミの存在を感じられるだけでいい。それだけで満足だ。そのはずなのに、心と身体からだは裏腹で、ボクは寝台から下りて、キミが腰を下ろしている隣の寝台に近づこうとする。せめてこちらを向いて欲しい。顔を見せてくれないか。顔が見たい。声が聞きたい。どこまでも、どこまでも、とめどなく、とめどもなく、欲求が、欲望がふくれあがって、すぐにあふれだしてしまいそうになり、それを堰せき止めておくことなんて、抑おさえつけることなんて、できっこない。不可能だ。

真紅の髪が揺ゆれた。

キミが上半身をひねらせて振ふり向いた。

橙だいだい色いろの瞳ひとみがボクを射い貫ぬいた。

ああ──、

そうなのか。

そう？

何が？

わからない。

でも、わかっている。

全身の皮ひ膚ふが粟あわ立だって、総毛立った。

やっと見つけた。

キミを見つけた。

キミはひとりぼっちだ。

世界に見捨てられてしまっているかのように孤こ独どくだ。

でも、決してあきらめないで。

ボクがここにいるから。

何があってもボクがいるから。

　ボクもキミがそこにいると思えば耐たえられる。

　何かを信じることだってできる。

　たとえば、光を。

　明日の方向に目をやれば、遠くに、遥はるか遠くに、そこまでたどりつくことはできないかもしれないけれど、それはすぐに絶えてしまいそうなほど弱々しく、頼たよりないかもしれないけれど、光があることを。

　ずっと手を繋つないでいたい。

　片時でも指の先をふれあわせることができれば、それでいい。

　できなくてもいい。

　歩いていて欲しい。

　ボクも歩いてゆくから。

　キミの手を引いて、キミの足になって、キミに寄り添そうことができればいい。

　できなくたっていい。

　見失わないで欲しい。

　キミは、キミがそこにいることを。

　そのためにボクは歌おう。

　声を嗄からしていつまでも歌おう。

　遠くからでも声を届けよう。

　つまずいてしまったとき、くじけそうなとき、声を張りあげてボクは歌おう。

　忘れないで欲しい。

　忘れてしまってもいい。

キミが歩いてゆけるのなら。

ボクも歩いてゆけるはずだから。

キミとボクはとても似ている。

キミはまるでボクの半身のようで、生まれたときから知っているかのようで、ボクはキミのためにいるのだとしか思えなくて、キミはボクのためにいるのだと信じたくて、もしそうでなくてもかまわなくて、ボクはためらわずにキミに何かを捧ささげることができて、それがボク自身であってもよくて、キミはほとんどボクそのもののようで、キミはボクのすべてだ。

「ボクは、アジアン」

わかるだろうか。わからなくてもいいんだ。この思いが伝わらなくたっていい。

「キミは？」

「……僕は」

知っているからだ。

知らなくたって、知っている。

キミの何もかもを受け容れることができるのだから、知っているようなものだ。

「マリア」

透すきとおっていてやわらかく、それでいて芯しんのあるその声も。

何千何万の美び辞じ麗れい句くを連ねたとしても十分には説明しつくせないだろうその顔立ちと姿も。

目をそらして胸むなもとに手をあてた、その仕し種ぐさの一つ一つも。

これ以上にふさわしい響ひびきを持つ言葉は他ほかにないと思われるその名も。

「マリアローズ」

　すべてを。

23

　突とつ然ぜん、ダリエロが死神に担当替がえを申し出た。良好な作業態度や作業実績、それから適性を考こう慮りよして、４２８には磨みがきより組み立てをやらせたい、というのがダリエロの意見だった。

　担当替え自体は、班長が各作業員からの意見をとりまとめて、わりと頻ひん繁ぱんに進言するようだし、アジアンも自分以外の作業員の担当替えを二度ほど目にしたことがある。ただ、同じく磨きを担当しているローガンらが、アジアンに関する意見をダリエロに上げたという話は聞かなかったし、他の作業を担当している者がアジアンの担当を替えさせたがるような理由があるとも思えなかった。それに、組み立ては材木を設計図どおりに切る断材と、仕上げ段階の磨き、塗と装そうの間に入る重要な作業で、班長のダリエロが仕切っている。ようするに、組み立てに配属されれば、アジアンはダリエロの管かん轄かつ下に置かれることになるわけだ。ダリエロがアジアンの仕事ぶりを見て組み立てに引き抜ぬいた、という理り屈くつは、死神を納なつ得とくさせることはできるだろうし、事実、この担当替えは即そく日じつ認められた。だが、アジアンはもちろん、そうは思わない。ダリエロは何か企たくらんでいるに違ちがいない。しばらく仕し掛かけてこなかったとはいえ、相手はダリエロだ。疑うほうがむしろ自然だろう。

　アジアンは警けい戒かいして作業にあたったが、予想に反して平へい穏おん無事といっても差し支えないような日々がつづいた。

　ただ、二人一組で仕事をするように言い渡わたされた４２１のクルガイスとは、最初、意思の疎そ通つうがうまくできなくて困った。ダリエロには、てめぇの指導係ってやつだ、手取り足取り教えてもらいやがれ、と言われたのだが、図ずう体たいだけはリキエルにそうひけをとらないほど大きくて、隙すきあらば指をしゃぶり、何をきいても、あー、とか、うー、しか言わない男に、どうやって

指導を仰あおげばいいのか。仕方なく、近くにいた４０８のオーノという男に仕事の手順を尋たずねてみたら、大おお雑ざつ把ぱながら一から十まで説明してくれた。茶色い髪かみの毛が綿のようにやわらかそうなオーノは、声が大きくて陽気でいつもへらへらしているが、生きつ粋すいのダリエロ派なので、正直あまり期待していなかっただけに、拍ひよう子し抜ぬけした。

　とはいえ、助かったことは事実だし、いつまでも手を動かさずに口ばかり動かしていたら、死神が教導鞭べんで威い圧あつしてくる。オーノが親切ぶってわざと嘘うそを教えたという可能性も考えたが、今にも死神が近づいてきそうだったので、さっそく設計図と断材済みの木材を突つきあわせてゆく仕事にとりかかった。組み立てという作業の手順自体はそう複雑ではなく、オーノの指南に従って仕事を進めても、どうやら問題はなさそうだった。クルガイスも、あれをして、これをしてと頼たのめば、おとなしく従ってくれた。指導係ではなく相棒だと思えば、無力でも無能でもなかった。むしろ、巨きよ体たいを裏切らないすさまじい筋力は頼もしいかぎりだった。男としては細身のアジアンと巨漢のクルガイスを組ませたダリエロの采さい配はいは、案外、巧こう妙みようだったのではないかとさえ思えた。そう思わせておいて、行く手に落とし穴が用意されているのではないかと疑いもした。疑いながら、橙だいだい色いろの瞳ひとみを振ふり払はらうためにも作業に没ぼつ頭とうした。

　ばらばらの木材を並べ、設計図どおりに組み立てて、接着し、あるいは釘くぎを打って固定してゆく作業は、少なくとも退たい屈くつではなかった。設計図の見方がわからなかったり、組み立てる順番を間違えたり、接せつ着ちやく剤ざいの量が多すぎたり、少なすぎたり、釘がまっすぐ打てなかったりなど、困難は多かったが、課題が見えれば、それをどうにかすればいい。区切りがはっきりしている作業なので、気持ちの整理もつけやすかった。

　五日間で脚きゃ立たつを七つ、椅い子すを九つ、小型の棚たなを四つ組み立てあげたころには、作業中に迷うこともだいぶ少なくなり、クルガイスもアジアンの指示なしで動いてくれるようになった。

　磨きを担当していたときは、毎日同じことをひたすら繰くり返しているだけで、自分の技術が向上しているという実感はほとんどなかったが、組み立ては違った。少しずつだが、確実に要領がよくなってきているし、上達している。クルガイスも手て応ごたえを感

じているようで、うまく組み上がったときは、小さな、といっても身体からだが大きいせいで相対的に小さく見えるだけかもしれないが、ちょこんとした目を見開いて、おー、と唸うなってみせた。

　この作業は磨きよりも自分に向いているのかもしれない。

　もしかして、ダリエロは本当に適材適所のつもりでアジアンを磨きから組み立てに担当替えさせたのか。

　確信したわけではなかった。

　その可能性もなくはないかもしれない、と考えはじめていた。

　そんなある日だった。

「どうだ」

　作業の時間が終しゆう了りようして、道具返へん却きやくをすませたあと、作業場の出入口に向かおうとしたアジアンにダリエロが声をかけてきた。

「もうだいぶ慣れたかよ。俺が見こんだとおり、うまくやってやがるみてぇだが」

「それなりに」

「クルガイスとも相あい性しようがいいな。普ふ通つうの野や郎ろうだとああはいかねぇ。何しろとんでもなく鈍にぶい野郎だからな。だいたいすぐにむかついてぶちキレる。てめぇはそうじゃねぇ」

「ボクのことがわかるのか」

「それなりにな」

　アジアンは足を止めていない。歩きつづけている。ダリエロはぴったりとアジアンの真後ろについて、影かげと化したかのように離はなれようとしない。

「俺はてめぇに興味がある」

「ボクはべつにキミには興味がない」

「かまやしねぇよ。アジアン、てめぇが俺をどう思ってるかはまるっきり重要じゃねぇ。俺にとっても、てめぇにとってもな。てめぇにとって大事なことを教えてやる。それはな。俺の仲間になれば、てめぇはいろいろといい目を見られるってことだ」

「いい目」

「ああ、そうだ」

「たとえば」

「もう見てんだろうが」

「作業のことか」

「口でくどくど説明されるよりか、てめぇで体験しちまったほうが手っ取り早いんじゃねぇかと思ってな。人には向き不向きってものがあってよ。ただひたすら同じことを延々やってても苦にならねぇどころか、それがかえって気持ちよくてたまらねぇ野郎もいる。次から次へと目新しいことに手を出さねぇと倦うんじまう野郎もいる。俺はな。気に入ってるやつ、利用できるやつには、そいつに向いてる仕事をちゃあんと割り振ってやる。その逆は、言わなくたってわかるよな」

「キミはボクを利用したいのか」

「察しがいいやつは嫌きらいじゃねぇ。あまりに勘かんがよすぎるやつは危ねぇし邪じや魔まくせぇから、大だい嫌きらいだがな」

「ボクの何を利用するつもりだ」

「そいつは」

　ダリエロは低く笑った。

「言えねぇな。てめぇが俺の仲間になってからだ」

「ならなければどうする」

「想像してみろよ」

　作業場の出入口前では、係員による身体検査が行われる。ここで

道具や資材の欠片かけらが発見されれば、即そく懲ちよう罰ばつで保護房ぼう行きだ。最初のころは、そういう規則があって破れば懲罰を受けるのだから、大半の者は従っているのだろうと漠ばく然ぜんと考えていたが、実情は決してそうではない。木工にしても、金工にしても、その他の作業にしても、一人や二人ではない、大勢が危険を冒おかしていろいろなものを持ちだしているようだ。そうして持ちだされたものは、賽サイ遊びで賭かけの対象となったり、何らかの取引によって与あたえられたり交こう換かんされたりして、人の手から人の手に渡わたり、だいたい最終的には有力者の所有物となる。

「通ってよし」

　死神の身体検査は入念で執しつ拗ようだ。アジアンは身体中を二度、三度と探さぐられたあげく、ようやく解放されて第二作業場を出た。ダリエロはまだ別の係員に身体検査を受けている。終わるまで待っていてやる理由はもちろんない。アジアンは自分と同じ作業帰りの男女に交じって両側に各作業場の扉とびらが並ぶ幅はばの広い廊ろう下かを早足で歩き、開け放たれた鉄てつ扉ぴをくぐって会堂に入った。会堂から十字廊下を通って一いつ般ぱん房に戻もどるまでの間は、要所要所で係員が見張りについているだけなので、わりあい気軽に私語を交かわす者が多い。アジアンも何人かに声をかけられた。長身の姉を引き連れたナツコなどは、挨あい拶さつするなりしなだれかかってこようとした。

「なぁーんでかわすかなぁ。減るもんじゃないのにぃ。てゆーかぁ、男と女がいたらさぁ、やっぱさわりあったりぷにゅぷにゅしたりくちゅくちゅしたりしたくなるのがフツーじゃない？　ねぇ、姉さんだってそぉー思うでしょ？」

「く、くちゅくちゅって……ナツコちゃん、お、お下品だよ、そんな……」

「やだもぉ、姉さんってば、なぁーに想像しちゃってるわけぇ？」

「な、何って」

「どぉーせエロいことでしょ。姉さんはむっつりだもんね」

「ち、違ちがうよ、わたし、むっつりなんかじゃないもん」

「そぉーかなぁ。だってさぁ、自分で言うのもなんだけどこのナツコ様の姉さんなんだから、基本的にエロいはずじゃない？」

「そっ、そ、そっ、そんなこと──」

　不意に長身の姉が黙だまりこんだ。目の下まで前まえ髪がみを垂らしているので表情はわかりづらいが、口くち許もとが引きつっている。妹のナツコも肩かた越ごしにアジアンの後ろを見るなり、わずかに顔を強こわ張ばらせて姉の腕うでにしがみついた。振ふり返って確かく認にんするまでもなかった。ねっとりと全身に絡からみついてくるような、それでいてつめたい、この気配でわかる。

「あ、じゃ、じゃあ、またねぇー」

　ナツコは自分より遥はるかに背の高い姉を引きずるようにして走り去っていった。

　ため息が出た。

「ちゃんと想像してみたかよ」

「何を」

「てめぇがどうしても仲間になろうとしねぇ場合、俺がどうするか」

「ボクはキミじゃないからわからない」

「手段ってのはな。どうでもいいんだよ。たいした問題じゃねぇ」

　アジアンが歩きだすと、ダリエロもついてきた。

　真後ろだ。自分の身体からだの中心とダリエロの身体の中心が、同一線上に並んでいる。

　距きょ離りも一定で、近づくことも、離はなれることもない。

　呼吸まで一いっ致ちしているような気がする。

　そうすることで、ダリエロは示し唆さしているのかもしれない。

　見ろよ。

感じろ。

わかるかよ、ええ？

俺はこのとおり、てめぇを完全に掌しよう握あくしてる。てめぇを煮にるも焼くも俺の意のままだし、逃にげようったって無む駄だだ。絶対に逃にがさねぇ。黙って俺の前にひざまずけ。この俺に従え。そうすりゃあ俺はてめぇの飼い主になってやる。うまい餌えさをやる。ピカピカの首輪も嵌はめてやる。だから、俺が命令したら即そく座ざに走れ。俺のために。さもねぇと──。

「重要なのはよ。目的を果たすことだ。そのためなら手段は問わねぇ。欲を言えば、楽しめるほうがいいけどな。腹ァ抱かかえて笑えるなら、なおいい。俺は禁欲主義者じゃあねぇしな。どっちかっつったら、まぁ、欲深なほうだ。俺は何でもするぜ。アジアン。何でも、だ。汝なんじ欲ほつするところあらばただちにそれを為なせ、ってな。誰だれの言葉だと思う」

「さあ」

「俺だよ。何を隠かくそう、俺が今、思いついた」

「そう」

「何だ。つれねぇ返事だな。あぁ、こんな言葉もあるぜ。短気は損気。こいつは俺が考えたんじゃねぇぞ。知ってるかよ」

「どうかな」

「性急に結果を求めて近道するよりか、真綿で首を絞しめるみてぇにじわじわ攻せめたほうがたいていうまくいくもんだし、何より楽しめる。俺の好きな言葉だ。座右の銘めいってやつだな」

「少し意味が違うんじゃないか」

「いいや。違わねぇよ」

ダリエロは低く笑った。

「俺は焦あせらねぇ。どうせ時間だけは腐くさるほどありやがるしな。だからてめぇにも時間をやる。無制限とはいかねぇがな。よおく考えろ。考える材料もくれてやる」

「材料……？」

「ちょっとずつだ、アジアン。ちゃあんと想像しろよ。何かが起こったら、その次に何がどうなるか。たいして難しいことじゃねぇ。てめぇが底そこ抜ぬけの阿あ呆ほうじゃなけりゃあな。俺としちゃあ、そうじゃねぇことを祈いのってるよ」

急にダリエロの気配が消えた。

立ち止まって振り向くと、ダリエロはだいぶ後ろにいた。リー・ブラックとレイジを従えて、彼らと何か話している。アジアンとは目を合わせようともしない。まるで何事もなかったかのようなそぶりだ。驚おどろくというよりも感心して、それと同じくらい呆あきれていたら、係員に威い圧あつされた。あの中肉中背でこれといった特とく徴ちようのない顔の係員だった。

「どうした、４２８。私の顔に何かついているかね」

「何も」

「だったら黙って突つっ立っていないで、さっさと房ぼうに帰りたまえ」

係員は教導鞭べんで自分の掌てのひらを打ってみせた。骨まで響ひびきそうな重い音がした。それにもかかわらず、係員は表情一つ変えない。

アジアンは係員から顔を背そむけて歩きだしかけたが、少し待った。ダリエロらがだらだらした足どりで目の前を通りすぎてゆこうとしていた。ダリエロとリー・ブラックは笑いながら二人で何やら話しこんでいるが、レイジは無言でアジアンを見すえている。アジアンを追い越こしてからも、首をこちらに向けて目をそらそうとしない。

アジアンは目を伏ふせて息を吐はいた。

前を向いて歩きだすと、レイジはまだこちらを見ていた。それだけでなく、舌を突きだして、そうとう速い速度で円を描えがくように動かしてみせた。挑ちよう発はつのつもりか。それとも単にアジアンを侮ぶ辱じよくしようとしているのだろうか。よくわからないが、わかりたくもなかった。アジアンはかまわずダリエロらの後ろをついていった。レイジはいつまでも舌を動かしつづけた。

24

　考えたくないんだ。

　キミのことを考えたくはない。

　結局、あのときは何も話せなかった。名乗って、名前をきいただけだった。それ以上、何を話せばいいのか見当もつかなかった。ききたいことはたくさんあるはずなのに、正直、今こうして考えてみても、まったく思いつかない。

　キミを見ているだけで十分だった。キミはほとんどうつむいたままだった。顔を上げて欲しかった。でも、求めることが恐おそろしかった。拒こばまれたらどうしよう。それがキミの望まないことだったらどうすればいい。だから、キミが近くにいるだけでよかった。できればずっとキミのそばにいたかった。それが叶かなわないのなら、せめて一分、一秒でも長くキミを見ていたかった。キミの姿を脳のう裏りに焼きつけておきたかった。

　悪いが、もう時間だ。

　せんせいがそう告げてカーテンを閉めた瞬しゅん間かん、皮ひ膚ふが引き裂さかれ、肋あばら骨ぼねが抜きとられ、心臓が抉えぐりだされてしまったかのような、鮮せん烈れつで強きよう烈れつな痛みを覚えた。痛みは薄うすれるのではなく広がって、身体中を冒おかし、指一本動かすことさえ困難なほど全身が重く、鈍にぶくなった。目の前が暗くなって、呼吸をすることさえ億おつ劫くうになった。

　黒覆面がキミを連れてゆく。

　キミが連れ去られてしまう。

　キミはあの閉へい鎖さ房に閉じこめられて、今もきっとひとりきりでいる。

　キミはもうあきらめてしまっているかのようだった。

　すべてを受け容いれている目をしていた。

　なぜだろう、とは思わない。

　ボクにはわかる。

　そのほうが楽だからだ。

　ひとりきりでいい。期待はしない。何も望まない。そうするしかない。そうでもしないと耐たえられない。生きてゆけない。このいのちにしがみつくことすらできない。

　生きたいんだ。

　こんなにひとりぼっちでも、生きていたい。

　生きることでしか、ボクはボクを証明できない。生き抜くことで叫さけぶしかない。

　ボクはここにいる……！

　誰だれも、何も、ボクを知らないかもしれない。見向きもされないかもしれない。それでも、ボクはここにいる。

　キミもきっと同じなのではないかと思う。あきらめることで、受け容れることで、生きて、生きて、生き抜いて、キミはキミ自身を証明しようとしているのだろう。

　でも、その果てに何があるのか考えたことはありますか。

　ボクらは重い足あし枷かせを嵌はめられた足を懸けん命めいに動かして、前へ前へと進もうとしているけれど、いったいどこへ向かおうとしているのだろう。

　必死に、死にものぐるいで、もがいて、あがいて、何を手に入れようとしているのだろう。

　ボクらはただ生きるために生きるだけのものでしかないのか。

　目的が欲しい。

　意味が欲しい。

見つけたい。

そうしないと、ボクのいのちはあまりにからっぽで、がらんどうだ。

そうだろうさ。

貴様はお前は我らの大事な獲え物ものであり手て慰なぐさみの出で来き損そこないの人形人形人形なのだからな。

「……違ちがう」

ちがわないさ。

おまえはにんぎょうだよ。

わたしのためのにんぎょうなのだよ。

おまえをもとめるものたちがたくさんいるよ。

おまえはただこたえてやればいいのだよ。

おまえはてにいれるだろう。

おまえのそんざいりゆう。

おまえがいることのかち。

おまえはおまえでいられる。

「違う」

いいや。

ちがわないよ。

おまえはけっしてにげられないよ。

わたしからにげることなどできない。

おまえのすべてはわたしがあたえたものだろう？

おまえはわたしのものだろう？

「違う」

　ほんとうはわかっているのだろう？

　おまえもわかっているのだろう？

　おまえは、

　おまえはわたしの、

　わたしのための、

　にんぎょうだ、

　にんぎょうなのだよ。

「違う」

「何が違うんだ」

　上段からの声だった。自分は寝しん台だいで横になっている。照明はまだ消えていないが、小屋の扉はすでに閉ざされ、施せ錠じようされていた。就しゆう寝しん準備の時間だ。アジアンは目を閉じて深呼吸した。

「何も」

「何回も言ってたがね。違う、違う、ってな。もう眠ねむっちまっててうなされてるのかとも思ったんだが」

「いや、起きてる」

「そうかい」

「何でもない」

「それならいいがな」

　クラニィは喉のどを鳴らして静かに笑った。

　寝台が微かすかに軋きしんだ。

　低い話し声が聞こえる。

　消灯後は私語が禁じられ、見回りの係員に声を聞かれれば注意されるか、悪ければ懲ちよう罰ばつの対象となるが、就寝準備の間は度が過ぎないかぎり咎とがめられない。なかには就寝の号令がかかるまで鉄てつ格ごう子し越ごしに他ほかの小屋の者と雑談に興じる者もいるので、やかましいというほどではないにしても、静せい寂じやくとは無む縁えんだ。

　黙だまっていると、キミのことを考えてしまう。

　キミのことを考えたくはない。

「ダリエロは、ボクを利用したがっているみたいだ」

「そいつは光栄だな」

「そうかな」

「お前さんに利用価値があるってことだろう。評価されてるってことじゃないか」

「嬉うれしくはない」

「だろうな」

「ボクに利用価値があるのかな」

「俺はダリエロじゃあないからわからんがね。あいつのことだ。どうせ何か企たくらんでるんだろう。ようするに、暇ひまなのさ。そうでなくても、あいつはおとなしくじっとしてる玉じゃあないしな。まあ、あれでも前よりはずいぶんマシになったんだが」

「前って」

「今でこそ、それなりにうまく四号房を治めてる房ぼう長ちよう殿どのを気どってるがな。所しよ詮せん、あんなものはポーズだろうさ。ここより保護房暮らしのほうが長い雷ライ切キリほどじゃあないにしても、ダリエロのやつも懲罰食くらうのなんざ屁へでもないってかんじでずいぶん暴れてたよ」

「丸くなったのか」

「どうだかな。さっきも言ったように、何か目もく論ろ見みでもあ

るのかもしれんしな」

「そのために、ボクを？」

「もしそうだとしたら、お前さんはどうする」

「どうもしない」

「べつに意地を張ることもないんじゃないか。長い物には巻かれろってな。そういう言葉もあるぞ」

「意地を張っているわけじゃない」

「だったら、何だ」

「理由がない」

「理由ときたか」

「何も感じないから。仲間になれと言われても、答えられない」

「わりと面めん倒どうくさいやつなんだな、お前さんは」

「そうかな」

「そう思うがね。だってな。理由なんてものは──」

　クラニィは欠伸あくびをした。

　また寝台が軋んだ。

「そこらへんに転がってるわけでもないだろう。探そうとしたってな。なかなか見つからない。意外とな。探そうとすればするほど見つからなかったりする。そりゃあそうさ。そこには初めから何もありはしないんだからな」

「何も……ない？」

「あるんだったら、これほど楽なことはないと思うがね。そりゃあ、ちゃんと用意されてるんだったらな。迷うことも、悩なやむことも、苦しむこともない。たとえば誰だれかがああしろこうしろと決めてくれて、何の疑いもなくそれでいいんだと全面的に信じられるんなら、それはそれで幸せな人生ってやつだろう？　残念なが

ら、俺には無理だがね。あいにく俺は自分の目で見て、自分でこれと決めたもの以外は信用できない。いや、しないことにしてる。お前さんの言う理由ってのも、結局、同じことなんじゃないか」

「自分で……決める？」

「少なくとも、俺はそうしてるがね。だから、探し回ってもな。無む駄だなのさ。見つけるってよりは、自分でひねりだすってほうが俺にとってはしっくりくるな。それに──」

　寝台が揺ゆれた。

　クラニィが梯はし子ごを使って下りてきて、洗面台で顔を洗い、水を飲んだ。

「理由だの何だの、いちいちそんなことを考える前に、身体からだが勝手に動いちまうことだってあるしな。あとでいくらでもああだこうだ言うことはできるんだろうが、それだって言い訳に毛も生えてないようなみっともない屁へ理り屈くつだったりすることもある。だったらいっそ口をつぐんでたほうがいい。そのほうが恰かっ好こうもつくってもんだ」

「恰好をつけたいのか」

「これでも一応、恥はじってやつを知ってるつもりだからな。あくまで、一応、だがね」

　クラニィは肩かたをすくめてみせると、一つ息をついてから、アジアンの寝しん台だいに腰こしを下ろした。

　クラニィの影かげの中に自分がいる。

　アジアンは閉じた瞼まぶたの上に手の甲こうをのせた。

「人形、か」

　身体が震ふるえた。

　最初は自分が言ったのかと思った。

　違ちがった。

　まぎれもなくクラニィの声だった。

「……なんで」

「なんでって──さっき、お前さんが言ってたんだぞ。誰だれが誰の人形だとか、何だとか」

「ボクが？」

「ああ」

「そう」

「見えないがね」

「……え？」

「お前さんのことだ」

　思わず手をどけて目を開けてしまった。

　クラニィは背を向けていた。

　すぐにアジアンの視線に気づいたのか、振ふり向いた。

「お前さんは人形なんかじゃない」

　しばらくクラニィを見つめていた。

　やがて目め頭がしらが熱くなってきた。

　鼻の奥がつんとして、鼻をすすりそうになって我が慢まんした。

　唇くちびるがゆがもうとしているのがわかったが、自分ではどうしようもなかった。

　アジアンはまた目をつぶって、その上に手の甲をのせ、顔を隠かくした。

　違う。

　そうじゃない。

違うんだ。

心の中で何度否定しても、不安だった。

不安で、不安で、たまらなかった。

違うと思えば思うほど、本当はそうなのではないかという疑いが膨ふくれあがった。

ボクは怯おびえていた。

恐おそろしくて仕方なかった。

ボクは言って欲しかったんだ。

誰かに言って欲しかった。

ボクは人形じゃない。

25

自由時間にボダダグがやってこないなんて、珍めずらしいこともあるものだ。リキエルは相変わらず鉄てつ格ごう子しを利用しての訓練に余念がないが、小屋の隅すみでみずから考えだした不思議な獣けものだの虫だのについて語りつづけるボダダグのしわがれた声が聞こえないと、一いち抹まつの物足りなさを感じる。二時間ある自由時間の半分くらいが過ぎれば、いつものように寂ジヤク星セイやアンガルセン、ヘンドリクがぞろぞろと小屋に入ってきて何だかんだと騒さわぎだすのだろうが、それにしてもボダダグはいったいどうしたのだろう。体調でも悪いのか。昨日は普ふ通つうだったが、今日は運動ではなく入浴だったので、まだ口をきいていない。ため息が出た。

「どうした」

リキエルが声をかけてくるのも、また珍しい。しかも、鉄格子に引っかけた右手の人差し指と中指だけであの巨きよ体たいを支え、なおかつ身体をゆっくりと上下させているのにもかかわらず、その

声はまったく乱れていなかった。自分は本当にこの男と果たし合いをして勝ったのか。いまだに信じられない。

「ボダダグがこないなと思って」

「そうだな」

「いつもはキミがきてすぐか、キミよりも早く姿を現すから」

「お前のことが好きなのだろう」

「好き？」

「多くの者は見た目で相手を判断し、少なくとも区別しようとする。たとえば俺のように仮面をかぶっている者がいれば、奇き異いに感じて近づくまいとするだろう」

「キミの仮面は、ボクも普通じゃないと思っている」

「もしこの仮面を外して素す顔がおをさらせば、俺は普通じゃないと思われるどころか恐れられるに違いない。だが、お前はおそらく違う」

「そうかな」

「俺はそう考えている」

　リキエルは身体を支える指を右手の親指と小指に替かえた。

「お前はあくまで俺が素顔を隠しているという事実に対して違い和わ感かんを抱いだいているにすぎない。その違和感をもとに俺を判断しようとはしていないようだ。お前はおそらく俺の素顔を見ても驚おどろかないだろう。俺が思うに、ボダダグのような者にとって、それは十分以上に好意を持つに値あたいする性質だ」

「よくわからないけど」

「わかる必要はない。お前自身がわからずとも、他者はお前を見て、お前を感じ、お前を判断する」

「キミはそうやって訓練しながら、いつもそんなことを考えているのか」

「考えていることもある。雑念を払はらうことは難しい」

「どうしてキミはボクのそばにいるんだ」

「俺はお前に負けた」

「まぐれかもしれない」

「それでもお前は勝った。俺は今まで戦いに敗れたことがない。俺はお前に言ったな。神聖なる生を貫つらぬく絶えざる戦いにおける最大の敵は自分自身だと。俺は己おのれに打ち勝ってきた。そうして生きてきた。だが、俺はお前に敗れ、すなわち己に敗れた。俺は死ぬべきだった。お前に俺の命を絶つ意志がないのならば、みずから死ねばいい。そうするべきだとも考えた。お前の中に見た俺の姿のことを思い出さなければ、そうしていたかもしれない」

「ボクの中に……？」

「お前は見なかったか。俺との戦いの中で、お前自身の姿を」

　アジアンは開いた右手に目を落とした。

　ボクはあのとき、リキエルを殺そうとした。

　この右手で。

　殺すこともできたと思う。

　でも、そうしなかった。

「俺は生きたいと強く思った」

　リキエルは身体からだを支える指を右手の薬指と左手の薬指に替えた。

「お前に敗れるのだとしてもやむをえないと思いもした。悔くいはなかった。だが、俺はやはり生を欲ほつしていた。戦いつづけるかぎりはいつか必ず訪おとずれる敗北のとき、俺は潔いさぎよく死を受け容いれるだろうと想像していたのに、実際は違った。失望はしていない。それがまぎれもなく俺だからだ。ただ、俺の命は本来なら敗北とともに失われていたはずだ。俺はこの命を俺自身ではない、別のものに捧ささげようと思っている」

「別の、ものに」

「そうだ。この命は、アジアン、俺に勝ったお前のために使うことにした」

「……ボクの？」

「俺の命が入り用なときはいつでも言うがいい」

　まさか、その「入り用なとき」とやらがくるのを待つために、リキエルはアジアンのそばにいるのか。

　自分がリキエルに命を差しだすように求める状じよう況きようも、場面も、まるで頭に浮うかばないが、たとえ拒きよ絶ぜつしたとしても、たぶん無む駄だだろう。リキエルはもう決めてしまっている。そのうち心変わりすることもあるかもしれないが、それもまたリキエル次し第だいなのだろう。

　アジアンは寝しん台だいから腰こしを上げた。

「ボダダグの様子を見にいく」

「俺も行こう」

「そう」

　アジアンは小屋を出た。四号房ぼうだけでなく、一いつ般ぱん房の一号房から八号房はすべて同じ造りで、通路の両側に二段寝台が据すえつけられた小屋が七つずつ並んでいる。各小屋には、房の一番奥の右側にある小屋が一番、左側が二番という具合に番号が振ふられていて、アジアンとクラニィの小屋は十三番、メツェルディとポーの小屋が十四番だ。ボダダグの小屋はたしか八番だったか。八番の向かいの七番が〝占うらない師〟トトと〝巨きよ匠しよう〟ボンドの小屋だ。

　人だかりができていたのは、その七番と八番のあたりだった。

　アジアンは足を速めた。リキエルも遅おくれずについてきた。男たちを押しのけて八番を見ると、ボダダグが二段寝台の下段の隅すみで壁かべに向かって小さくなっていた。アジアンはボダダグに声をかけなかった。それよりも七番だった。

　あのやたらと長い髪かみを編んだり首に巻きつけたりしている短たん軀くの男は、ボダダグと同室の毛モウだ。それから、髪かみ型がただけでなく身のこなしまで女のようだが、そうとうがっちりした体格はどこからどう見ても男のそれだし、四号房にいるからには、実際、男なのだろう、あれはチェリーとかいったか。

　毛モウとチェリーは、手にした雑ぞう巾きんで七番小屋の床ゆかを懸けん命めいにふいている。どうやら鉛えん筆ぴつやチョークで描かかれたボンドの絵を消そうとしているらしい。ボンドの絵はもはや黙もく認にんされ、放置されていたはずだが、係員たちが方針を転てん換かんして、すべて消してしまえという指示でも出したのだろうか。そうなのかもしれないが、小屋の奥でシャマニとリョーヨルカに羽は交がい締じめにされているボンドはまったく納なつ得とくしていないようだ。

　ボンドは声こそ出していないものの、顔を真っ赤にして暴れている。黒い肌はだのシャマニとリョーヨルカは、飛び抜ぬけて背が高いわけではないが、引き締しまった敏びん捷しようそうな身体つきをしているし、ボンドは小こ柄がらだ。いくらあがいたところで、リー・ブラックの舎しや弟ていとして幅はばを利きかせている二人を振りほどくことはできないだろう。傍はたから見てもそれは明らかなのに、ボンドが抵てい抗こうを断念する気配はない。シャマニとリョーヨルカは、体力的にはまだまだ余よ裕ゆうがありそうだが、ボンドのしつこさにやや辟へき易えきしているといった様子だ。

「どうしていきなりこんなことを」

　アジアンは人だかりの中にいたオーノに尋たずねてみた。オーノはダリエロ派ではあるが、作業場で組み立ての手順を教えてくれた。今回も答えてくれるのではないかという期待がなかったとは言わない。甘かった。オーノは顔全体を大おお仰ぎようにゆがめて、イッヒヒヒ、と笑ってみせただけで、何も話してくれなかった。

　だが、シャマニにしても、リョーヨルカにしても、オーノにしても、ダリエロ派だ。他ほかにも、アルバートやメツェルディ、両刀だという噂うわさのシュトレーハウゼン、左手の指がないドルゲイや、〝漫まんオざい師し〟の異名をとるわりにまずい冗じよう談だんしか言えないキューレイが八番の周りにいる。彼らも全員、ダリエロ派だ。一方、七番を掃そう除じしている毛モウとチェリーは誰だれかに与くみする以前に一人きりでいることが多い者たちで、そ

れはボンドや二段寝台の上段で小さくなっているトトも、アジアンらとつきあうようになるまでは同じだった。あくまでリキエルの意見だが、アジアンを好きらしいボダダグは、なぜか八番に閉じこもっている。

　アジアンは通路の奥に置かれた椅い子すに腰かけているダリエロに顔を向けた。

　ダリエロはその前からアジアンを見ていたようだ。

　もともと歪いびつな顔が、いっそうぐちゃぐちゃになった。

　あれで笑え顔がおのつもりか。

　よおく考えろ、とダリエロはアジアンに言った。考える材料もくれてやる。ちょっとずつだ。ちゃんと想像しろよ。何かが起こったら、その次に何がどうなるか。

　アジアンは振り返ってリキエルの白い仮面を見上げた。

　リキエルは微かすかにうなずいた。

　お前の想像は正しいだろう、と言われた気がした。

　アジアンが七番小屋に足を踏ふみ入れると、毛モウとチェリーが手を止めた。

　シャマニが厚い唇くちびるをぺろりと舐なめた。

「何？　何？　何よぉ～？　も・し・か・して、アレかぁ～？　オレらのこと邪じや魔ましちゃうつもり？」

「これはダリエロの命令か」

「つ～かもとはっつえば、係員サマたちの命令だよ。ったりめぇ～だろ？」

「こうするように進言したのはダリエロじゃないのか」

「ンなことオレにきくんじゃねぇ～よ、っとにムカポンだな、テメェは。知ったこっちゃねぇ～っての。やれっつわれたんだからやるしかないっしょ？　オレら的にはよぉ～」

「ボンドを放せ」

　アジアンは右手をボンドに向かって差しだした。

　ボンドがぴたりと暴れるのをやめた。

　毛モウとチェリーが屈かがんだ体勢のままアジアンを見上げている。

「放せって、テメェ━」

　シャマニのこめかみに太い血管が浮うきだした。

「偉えらっそうに何命令してんだよ、このオレに、ふっざけてんじゃないよ、上等すぎだろ、そんなのテメェ何様だと思ってんだ勘かん違ちがいも甚はなはだしいぞヲ～イ？」

「勘違いなんかしていない」

　アジアンは首を傾かたむけてみせた。リキエルがすぐ後ろにいる。シャマニも忘れてはいないはずだ。みずから望んだことではないし、必ずしもそれが自分の実力だとは考えていないが、アジアンはリキエルと果たし合いをして、勝ったのだ。

「聞こえないのか。ボクはボンドを放せと言っている」

　先にボンドから手を放したのはリョーヨルカだった。アジアンはこの男の声を一度も聞いたことがないのだが、どうやら口数が多くて立ち居振ふる舞まいまでうるさいシャマニよりも遥はるかに冷静らしい。

「ちょっ━」

　シャマニが目を剝むいた。

「テメ……ヨルカ、ってヲ～イ、つーかオレが……畜生シツト、どぉ～すんだよもお、兄貴に怒おこられたら……それどころかマジでシメられんぞ、テメェ……」

　ぶつくさ言いながらも、結局、アジアンとリキエルを前にして、一人で突つっぱねつづける度胸はなかったようだ。それでも腹が立って仕方ないのか、シャマニはボンドを解放するというよりも乱

暴に突き飛ばした。ボンドはあやうく転てん倒とうしかけて、どうにかこらえ、おそるおそるといったかんじでアジアンを見た。

「おいで」

　アジアンは右手を差しだしたままだった。

　ボンドがゆっくりと近づいてきた。

　右手をそっとのばしてきた。

　それを握にぎった。

　体格のわりに大きい、骨張った手だった。

　ボンドがほっと息をついた。

　アジアンは二段寝しん台だいの上段を見た。

　トトが四つん這ばいの姿勢で身を乗りだしかけていた。

「キミもくるかい」

「い、行くダ」

　身軽なトトは梯はし子ごを使わずに上段から飛び降りて、ボンドにぴったりと寄り添そった。

　アジアンはシャマニとリョーヨルカを一いち瞥べつして、七番小屋をあとにした。房内はそう広いわけでもないから、ボンドと手を繋つないだままではやや歩きづらかったが、ぎゅっと強く握られているので離そうにも離せなかった。どのみちたいした問題でもなかった。リキエルを先頭にして通路に出ると、野次馬連中は道を空けた。ダリエロの視線を感じたが、無視した。アジアンはリキエルを通路に残し、ボンドとトトを引き連れて向かいの八番小屋に入った。その途と端たん、壁かべに向かって何か喋しやべっていたボダダグが、びくりと全身を震ふるわせて口をつぐんだ。

「ダリエロに何か言われたの」

「……ちち、ちが、違う」

「じゃあ、リー・ブラックかい」

「う、うん」

　ボダダグは振り返ろうとして途中でやめ、しがみつこうとでもするかのように壁に両手をついた。まばらに生えている針金のような髪かみの毛が逆立っている。頭皮全体が真っ赤だ。

「そ、そうなんだけどな。で、でも、おっかないしよ。あいつらは。さ、逆らうと、あとが怖こわいからな。何されるかわかんねえしな。今まではかまわれもしなかったのにな。突とつ然ぜん何だよとか思うけどよ。や、やだろが、ふつう。厄やつ介かい事ごとはさけようとか思うしな。やっぱりよ。それに、べつにな。お、おまえと話とかな。しなくてもな。困らないしよ。いいんだよ。おれは。た、ただな、おまえがな、ちょっと、なんていうか、寂さびしがるかなあ、とかな。思わないでもなかったけどよ。ありえねえよな。そんなの。うん。ないよな。あるはずねえな」

「そうかな」

「そ、そうだろが、ふつう」

「キミがこないから、気になって様子を見にきたんだ」

「う、嘘うそだな！　そんなの嘘っぱちだな！」

「嘘じゃない」

「信じないな！　お、おれは信じないな！　そんなわけないしよ！　おれのこと気にするやつなんかいるわけないからな！　今までいたことないしな！」

「ボクは気になった」

「な、な、なんでだよ！」

「理由かい」

「なんでってきいたら、そうだろが、ふつう！」

「わからない」

「何だよそれ！」

「でも、気になったんだ。おかしいかな」

「おっかしいな！」

　ボダダグが振り返った瞬しゅん間かん、ボンドが手を放して飛びのき、トトも二、三歩あとずさった。

「どう考えてもおかしいな！　すっげえおかしいな！　じつはちょっとだけ嬉うれしいけどよ！」

「そう」

　アジアンは目を伏ふせて軽くうなずき、すぐに顔を上げてもう一度ボダダグを見つめた。

「じゃあ、キミは自分で決めるといい」

「……決めるって、何をだよ」

「ダリエロたちが怖いのなら、彼らの言うとおりにするのもいい。それでもボクのところにきたいのなら、くればいい。それをキミが決めるんだ」

「お、おれが……？」

「ボクも自分のことは自分で決める」

　アジアンはボンドとトトを振り返った。

「ここにいて。ボクはダリエロに言わないといけないことがある」

　二人は眉まゆをひそめたり首をひねったりして驚おどろき戸と惑まどっている様子だ。

「すぐ戻もどってくる」

　アジアンはボンドとトトをボダダグの小屋に残して通路に出た。小屋の外で待っていたリキエルはそのままここに残るつもりのようだ。それもまたリキエルが決めたことなので、異存はなかった。

　オーノやアルバートらは、通路の端はしに寄ってこちらをうかがっているだけで、行く手を遮さえぎる気はないらしい。

　アジアンは通路の奥に向かって足を進めた。六番小屋でギャンガーやデ・ペドロ、ローガンとともに賽サイ遊びをしていたクラニィと一瞬目があったが、それだけだった。

　奥の椅い子すに座っているダリエロが、二番小屋から出てきかけたリー・ブラックとレイジを手で制した。

　ダリエロはうつむいているが、全身を揺ゆらして笑っているようだった。

　ただ、いくら近づいても、笑い声は聞こえなかった。

　何がそれほどまでにおもしろいのか知らないが、ダリエロは声を立てずに笑っていた。

「ダリエロ」

　名を呼ぶと、波打つように震えていたその背中がぴたりと動きを止めた。

　深く息を吸って、吐はきながら、ダリエロは顔を上げた。

「何だ」

「この間の返事だ」

「もうかよ」

　ダリエロはそっくり返って鼻から息を吐いた。

「意外と早かったな」

「そうかい」

「材料は足りたか。まだまだ少ねぇような気もしないではねぇがな。それとも俺のアドバイスが活いきたか。想像力ってのはなかなか侮あなどれねぇもんだしな」

「ああ。想像してみたヨ」

　アジアンは目を細めた。

「どう考えても、キミとはうまくやれそうもない」

「ほお」

　ダリエロの細長い舌が薄うすい唇くちびるをぺろりと舐なめた。

「で？」

「ボクはキミの仲間にはならない」

「カハッ」

　ダリエロは歯を剝むいて口を開け、青い右目をすぼめて黒い左目を見開いた。

　その両手が両りよう膝ひざをがっちりとつかみ、ものすごい勢いで震ふるえている。

「いいのかよ？　それで？」

「ああ」

「本当に？」

「しつこいネ」

「賢かしこい返事とは言えねぇと思うがな」

「それはキミの意見だ。ボクの考えは違ちがう」

「共同生活には妥だ協きようってもんが必要だぜ」

「キミの顔ほど自分を曲げないといけないのなら、ボクには無理そうだ」

「協調性がねぇ野や郎ろうだな」

「相手次し第だいサ」

「あの気色の悪ぃ不細工野郎だの、いんちき占うらない師だの、頭のいかれた落書き野郎だのが相手ならよくて、この俺が相手だといただけねぇってわけか」

「まさしくそのとおりだ」

「解げせねぇな」

「べつにわかってもらいたくないヨ」

「俺としちゃあ、てめぇのことを少しでも理解してやりてぇんだがな。もちろん、てめぇにも俺を理解して欲しいと思ってんだよ。たとえば、俺が生まれつきとんでもなく執しゆう念ねん深いこととかな。それから、いずれにせよ、てめぇはそのうち屈くつするだろうって俺は考えてる。予言してやってもいい。てめぇはいつか俺に詫わびを入れて、仲間にしてくださいと泣いて頼たのむだろうよ。あの糞くそくだらねぇ塵ゴミ屑クズ占い師とは違う。俺の予言は外れねぇぞ。必ず当たる。百発百中だ。なんでかわかるかよ」

「さあ」

「言っただろうが。執念深いんだよ、俺は。何があろうと絶対にあきらめねぇ。そうなるまで、絶対にな。だから俺の予言は当たる。当たるべくして当たるってわけだ」

「いんちきくさい予言だネ」

「アジアン、後こう悔かいするなとは言わねぇ」

　ダリエロは顔の前で両手を組みあわせて首を曲げた。

「せいぜい後悔しやがれ。たっぷりとな」

26

　作業における各担当は、独立しているようでそうではない。とりわけ組み立ては、断材の段階で寸法が狂くるっている木材だと使い物にならないから、断材の担当に差し戻もどさなければならないし、塗と装そうや磨みがきから不具合や不出来を指し摘てきされて、組み直しや改造に応じなければならない場合もある。その際、新しい部品が必要になって、係員に申しん請せいしなければならないような事態になると、さらに厄やつ介かいだ。だからこそ、組み立ては班長のダリエロがとりしきっていて、ミスを巧たくみに分配し、どこかの担当が極きよく端たんに泥どろを被かぶりすぎないよ

うにうまく調整している。仮に、断材の失敗があまりにも多いとか、塗装の仕上がりがいつもよくないといったことになると、最終的に責任を問われるのは班長だからだ。

　その班長殿が、クルガイスと二人で設計図どおりに組み上げた書しよ棚だなに難なん癖くせをつけてきた。いや、出で来き栄ばえに問題があることはたしかだったから、難癖とは言えないかもしれない。左右の横板の長さが微び妙みように違うために、全体がわずかにゆがんでいたのだ。

　もちろん、横板の寸法が狂っていることは最初の段階でわかっていた。それで、ダリエロに断材の担当に差し戻してもらえないかと依い頼らいしたのだが、受け容いれてもらえなかった。これくらいの狂いなら大だい丈じよう夫ぶだというのがダリエロの判断だった。その結果、こんなざまになったのだから、もとはと言えばダリエロのせいだと主張しても、白を切られておしまいだった。

　そんなことが三度つづいて、もしかしたら断材のミスさえもダリエロの命令による仕組まれたものではないのかと疑いはじめたころ、ダリエロが挙手して死神を呼びよせた。

「──ええ。そうなんスよ。なんだかねぇ。奴やつめ、どうもたるんでるみてぇで。仕事の覚えは早ぇし、適性はあるはずなんですがねぇ。俺もそのあたりを見こんで担当替がえしてもらったわけですしねぇ。ようするに、心構えがなってねぇんじゃねぇかと思うんですわ。見てても、こう、気合いってやつが伝わってこねぇ。一つ、ビシッとシメてやっちゃくれませんか。こんなことをおやっさんにお願いしなけりゃならねぇのも、俺の不徳の致いたすところっつーか、遺い憾かんっつーか、ホント、俺としちゃあ申し訳ねぇ気持ちで一いつ杯ぱいなんですがねぇ」

「わかった。貴様は作業に戻れ」

「すんません、おやっさん。手間ァかけます」

「仕事だ。やむをえん」

　死神はアジアンとクルガイスに不定期の移動担当を命じた。

　山と積まれた木材をこちらからあちらへ運んではもとの場所に戻し、また運ぶだけの作業を、心の底から反省するまでつづけなけれ

ばならない。

　反省の度合いは、作業態度と日誌の所感に書き添そえる反省文で死神が判断するとのことだった。態度については、どうせ手を抜ぬかずに黙もく々もくと作業していなければ、威い圧あつされて叱しつ咤たされるのだし、そう問題があるとは思えないが、反省文については何を書けばいいのかさっぱり見当がつかなかった。

　アジアンは反省文の内容を考えながら、木材をかついで歩いた。

　久しぶりの移動はきつかった。身体からだが慣れるまで、また何日かかかるだろう。あのリキエルと果たし合いをして勝った自分が、いくら重くてかさばるとはいえ、木材を運ぶだけのこんな作業ですぐへとへとになってしまうのは不思議だった。そうはいっても、実際、手や肩かたが軋きしむように痛んで、背中や腕うでや脚あしは自分の物ではないかのようにだるくなった。動きは速くないものの、膂りょ力りょくだけならリキエルに劣おとらないだろうクルガイスが、ぼんやりした顔つきで軽々と大きな木材を持って歩いている姿を見ると、多少気が滅め入いった。早く死神の気がすめばいい。移動はやはり苦行だ。だが、次は間ま違ちがいなく別の担当に回されるだろう。組み立ての作業にやりがいを見いだしかけていたところだっただけに、自然と顔も下を向いた。それこそがダリエロの手なのだと思い、いっそこのままずっと移動でもかまわないと腹を据すえた。反省文には、たまには移動も悪くないと書いてやろう。死神は激げつ昂こうするだろうか。するかもしれない。本当にずっと移動をやらせるかもしれない。それはさすがにたまらないし、ダリエロを喜ばせるだけだろう。意地を張らずに、移動を真ま面じ目めにこなして、反省文は反省文らしく書けばいいと思いなおした。反省文らしい反省文、か。わからない。クラニィに助言でも求めようか。まるでそんな魂こん胆たんを見み透すかされているかのようだった。

「そう長いつきあいってわけでもなかったがね」

　夕食後に帰き房ぼうすると、クラニィが二段寝しん台だいの梯はし子ごに背をもたれさせて、こちらを見ずに肩をすくめてみせた。

「とりあえず、お別れだ。えらく急な話だが、小屋替えらしい」

　クラニィが言うには、小屋替えは房長が申請を出して、係員経由で所長が承しよう認にんするまで何日かかかるらしい。ダリエロ

は、面と向かって仲間にはならないとアジアンが宣言した昨日ではなく、その前から手を打っていたということだ。

　自由時間になると、ボダダグやトト、ボンドも小屋替えの憂うき目に遭あったことがわかった。しかも、アジアンはシュトレーハウゼン、ボダダグはアルバート、トトはオーノ、ボンドはドルゲイと、全員がダリエロ派の者と相部屋にされた。つまり、ボンドとトトの八番小屋を掃そう除じしたのは、小屋替えで別の者が八番を使うことになるからという理り屈くつのようで、筋は通っていた。きっと、小屋替え自体にも、何かもっともらしい理由がつけられていて、所長としても拒きょ否ひする必要性をまったく感じなかったに違いない。

　正直、舌を巻くしかなかった。

「まッ、アレだな」

　緑色の髪かみのヘンドリクに肩を叩たたかれた。

「とにかくせいぜい用心しなくッちゃだな？」

「用心って」

「だってシュトレーハウゼンなんだろ、今度てめえと相部屋のやつって」

「ああ。挨あい拶さつはした。自由時間になったらすぐ小屋を出て行ったけどネ。それはクラニィと変わらないし」

「バッカ、てめえ、わーかってねえな。あいつは夜に本領発揮するタイプなんだよ」

「夜？」

「何だ、知らないのかよ、おまえ」

　金きん髪ぱつを真ん中分けにしているアンガルセンが鼻先で笑ってみせた。

「有名な話じゃん。あいつが両刀だってことはよ。わかる？　両刀ってことは、二刀流だよ、二刀流。ようするに、どっちもいけるクチってことだよ」

「聞いたことはある」

「おまえ、狙ねらわれるよ？」

「ボクが？」

「そりゃそうだろ。はっきり言って、おまえ、かなり器量好しだからよ。人によっちゃあ両刀じゃなくたっていけるだろ。たとえばだよ。ボダダグみたいな女がいたとして、アジアンとどっちとるっていったら、こいつは結構難問じゃん？」

「俺ならアジアンだな」

　ヘンドリクが顎あごを撫なでながらうなずくと、黒髪を結ゆっている寂ジヤク星セイが薄うすら笑いを浮うかべた。

「いくら何でも比ひ較かく対象がまずすぎる。だが、俺もアジアンだ」

「おいおい、マジかよ。どんだけ顔とかきれいでも男じゃん、男。穴はあってもそこは違う穴だろって穴しかないのに、勇者だな、おまえらは。そこはもうでたらめなおまえらと違って常識的なおれさまは―」

　アンガルセンは小屋の隅すみで縮こまっているボダダグをちらりと見て、顔をしかめた。

「やっぱアジアンだな。あれは無理」

「……む、無理って言うな。お、おれもちょっと無理だと思うけどな！」

「何ッだよ、しっかり自覚あんじゃねーかよ、てめえ」

　ヘンドリクが腹を抱かかえてゲラゲラ笑いだすと、ボダダグは壁かべのほうを向いてしまった。その隣となりで膝ひざを抱かかえたボンドが一心不乱に小屋の中を観察している。トトはシュトレーハウゼンの寝ね床どことなった二段寝台の上段で占うらないをしているようだ。リキエルも相変わらず鉄てつ格ごう子しを使って訓練をしているし、平へい穏おん無事な自由時間と思えなくもないが、こうしている間にもダリエロが次の手を打ってこようとしているかもしれない。

実際、ボンドは喋しやべらないのでわからないが、ボダダグは日誌を書いている間、アルバートにずいぶんけなされてなじられたというし、トトもオーノにさんざん馬ば鹿かにされたという。雷ライ切キリに共鳴しているヘンドリク、アンガルセン、寂ジヤク星セイも、アジアンとの距きょ離りを狭せばめつつある以上、きっとろくな目には遭わないだろう。

彼らを遠ざけたほうがいいのかもしれない、と考えもした。

ただ、そうすることでダリエロが彼らから手を引くとはかぎらない。それどころか、たぶん逆だろう。ダリエロはおそらく、アジアンにとって望ましくない方向へと事態を動かそうとする。アジアンがボダダグたちに危害が及およばないように自分から遠ざけようとすれば、ダリエロは余計に彼らを脅おどかし、傷つけるに違いない。

ボクは彼らが安あん穏のんに暮らすことを望んでいる。どうしてだろう。理由なんてどうでもいい。そう望んでいることは間ま違ちがいないからだ。

だとしたら、ボクは彼らを守ることができるだろうか。

方法はある。確実で即そつ効こう性のある方法が一つだけ。

何も頭をひねる必要はない。その方法は最初から用意されている。巧こう妙みようと言ってもいいだろう。それがダリエロの手口なのだ。様々な苦痛を与あたえながら、どうすればその苦痛を取り除くことができるか、耳みみ許もとで囁ささやいてみせる。我が慢まんなんてするこたぁねぇ、と。なあ、簡単なこったろうが？　飛びつきゃあいいんだよ。難しくねぇ。楽になっちまえよ。そう、俺に従え。ひざまずいて、許しを乞こえよ。たいしたことじゃあねぇ。ただ認めりゃあいい。こいつにゃあ逆らえねぇ、頭が上がらねぇ、言うとおりにするのが一番だ、そう認めるだけでいい。そうすりゃあ楽になれる。なあに、悪いようにはしねぇよ。むしろ、俺に従えばいいことずくめだ。損はねぇ。考えてみろよ。どうだ？　な？　答えは一つしかねぇだろうが？

「ちょっと」

妙な抑よく揚ようの野太い声だった。

　見れば、訓練をつづけているリキエルの脇わきに、がっちりした体格の男がしなを作って立っている。その隣には、長い髪を編んだり首に巻きつけたりしている短たん軀くの男もたたずんでいた。昨日、トトとボンドの小屋を掃そう除じさせられていた二人、チェリーと毛モウだ。

「いいかい。入って。話があるんだけどさ」

「ああ？」

　ヘンドリクが大おお仰ぎように眉まゆをひそめて唇くちびるをゆがめてみせた。

「何だ、てめえなんかお呼びじゃねーぞ、このオカマフアア野郎ギーが。髭ひげの剃そり跡あと青々させやがってよ。いッちいちグロイんだよ」

「うるさいねえ。あたいだって好きで髭剃そらなきゃならない性別に生まれてきたわけじゃないんだよ。ボディはこうでもハートが乙女おとめなんだから仕方ないじゃないのさ」

「仕方ないですむか、ボケッ。毎度毎度風ふ呂ろ場ばでてめえにじッろじろ見られるこっちの身にもなってみやがれ」

「そういうのをねえ、自意識過か剰じようっていうのさ。誰だれがあんたの貧ひん相そうな裸はだかなんか見てるもんかい。あたいにだってねえ、好みってものがあるんだ。あんたなんかこっちから願い下げだよ！」

「貧相な裸ってそれ、てめえ、きっちり見てんじゃねーかよ！」

「それくらい服の上からでもわかるんだよ！　あたいクラスになればねえ！」

「どんッなクラスだっつーんだ、この変態視し姦かん野や郎ろうが……！」

「話って」

　このまま放ほうっておいたら、二人はいつまでも言い争いをつづけそうだ。アジアンが声をかけると、チェリーは顔を背そむけてしきりと髪かみをいじりだした。

「そ……それは、その、話はあるんだけどさ、ちょっと、悪いんだけど、あんた、こっちを見ないでくれる？」

「気に入られているようだな」

　寂ジヤク星セイが腕うで組ぐみをして鼻を鳴らした。よくわからないが、見るなと言うのだから見なければいいのだろう。アジアンはチェリーから目をそらした。

「これでいいかな」

「あんまりよくないんだけどね。あんたクラスだと、オーラ的なものが、近くにいるだけで、こう──って、ま、まあ、それはいいよ。こっちの話だから。入っていいかい」

「どうぞ」

　小屋はそう広くない。二段寝しん台だいの上段にいるトトと、小屋の隅に収まっているボダダグとボンドは小こ柄がらだが、寝台の梯はし子ごにもたれかかっている寂ジヤク星セイは長身だし、床ゆかに座っているヘンドリクとアンガルセンも、二段寝台の下段の縁ふちに腰こしかけているアジアンよりは大きいだろう。七人でもかなり窮きゆう屈くつだが、チェリーと毛モウは身体からだを横にして寂ジヤク星セイの前を通り抜ぬけ、ヘンドリクとアンガルセンを部屋の隅のほうへと押しやって、空いた場所になんとか腰を下ろした。

「あの、さ」

　チェリーはうつむいてそう言ったきり、右手の人差し指で床をつつくばかりで言葉を発しない。毛モウにいたっては、自分の髪の毛を引っぱったり指にからめたり編んだりすることに熱中しているようだ。

　アンガルセンが舌打ちをして、ヘンドリクが尻しりをボリボリ掻かきはじめた。

　それでも黙だまっている二人に痺しびれを切らしたのか、寂ジヤク星セイが壁かべを蹴けった。

　さして大きな音ではなかったが、ようやくチェリーが顔を上げて、アジアンと目があうと慌あわてて背けた。

「──ええと、さ……だから、あたいのことは見ないで欲しいんだけど」

「すまない。忘れていた」

「わ、忘れないどくれよ。大事なことなんだよ。すごいんだからさ。オーラ的なものがさ。目が眩くらんじゃうよ、はっきり言って。いいんだけどさ。あたいの問題だし。それで、話っていうのは昨日のことなんだけどね」

「昨日がどうかしたの」

「掃除をやらされてただろ。八番の。あたいと毛モウが」

「それが何か」

「本意じゃなかったんだよ。あんなことするのは。あたいとしてもさ。ほんとだよ？　あんたもそうなんだろ、毛モウ」

　チェリーに膝ひざを叩たたかれると、毛モウは髪の毛をいじりながら無言で頭を上下にぴくぴく震ふるわせた。どうやらうなずいてみせたつもりらしい。

「しょうがなかったんだよ」

　チェリーは親指の爪つめを噛かんだ。

「言い訳にしか聞こえないだろうけどね。あたいらみたいなアウトサイダーは寄るべき大樹ってやつがないからさ。房ぼう長ちように逆らうような真ま似ねはできないじゃないか」

「ケッ。なーにがアウトサイダーだよ。単なる嫌きらわれ者の除のけ者じゃねーか」

「だから、うるさいんだよ、あんたは、ヘンドリク！　いいかげんにしやがらねえと、しまいにゃあキ●タマぶっ潰つぶすぞてめえ！」

「化けの皮が剝はがれたな」

「お黙りになりやがれ、寂ジヤク星セイ！　てめえ、じゃなくて、あんたも潰されてえのか！」

「ハッ、やれるならやってみろよ、この不細工マッチョが」

「アーンガールセーン……！　てめえ、短小のくせしやがって！」

「おい！　誰が短小だ、誰が！」

「てめえだよ！　てめえクラスのサイズなら自覚くらいあるだろうが！　なきゃおかしいほどてめえのはちっこいからなあ！」

「バカヤロウ！　そりゃあ標準よりは小さめかもしれないけどな、そんなにめちゃくちゃ小さいってほどじゃないんだよ、これくらいよくある小ささじゃん？　な、そうだよな？」

　アンガルセンは同意を求めるようにヘンドリクと寂ジヤク星セイを順々に見たが、二人とも目を合わせようとしなかった。

「──ち、違ちがう！　おれさまは短小なんかじゃない、認めないからな、誰が認めるか！」

「ふんっ。あんたが認める認めないにかかわらず、事実は一つさ」

「チェェェリィィィィ……！　調子に乗るなよ、この超最低ＳＵＣＫ野や郎ろう……！　ぶっ殺して──」

「そのへんにしておいたらどうかな」

　アジアンが息をついてみせると、小屋の中が静まりかえった。大きい声を出したわけでも、その他の方法で威い圧あつしたわけでもないのだが、ひょっとしたらリキエルと果たし合いをして勝ったという実績が役に立ったのかもしれない。

「で、チェリー、言い訳にしか聞こえないだろうとキミは言ったけど」

「あ、ああ、うん」

「言い訳じゃないとしても、それをボクに言うのはおかしい。相手が違うんじゃないかな」

「もちろん、わかってるよ。そんなことくらいは、あたいだってさ。だから──」

　チェリーはおもむろに立ちあがり、ヘンドリクとアンガルセンを押しのけて小屋の隅すみへと向かった。便器と洗面台の間に収まって膝を抱かかえて座っているボンドは、だが、目の前にいるチェリーを見ようとしない。チェリーはかまわず深々と頭を下げた。

「ごめんね、ボンド。ほんとにごめん。あんなことはしたくなかったんだけど、ダリエロの命令には逆らえなかったんだ。悪かったよ。あんたの絵、あたいは嫌いじゃないのにさ。だって、あんたが描かいてくれたあたいは、実物のあたいとは似ても似つかなかったけど、ちゃんと女の子に見えたんだもの」

「ゴメン……」

　聞きとりづらい声だった。見れば、毛モウが座ったまま髪かみの毛をさわるのをやめて両手を挙げている。あれで謝罪しているつもりなのか。頭を下げた姿勢をじっと保っているチェリーと同じように、毛モウもその体勢をひたすら維い持じしているから、やはりそうなのかもしれない。

　あとは許してもらえるかどうかだが、当のボンドは相変わらずどこか別の場所を見つめている。いつものように何かを観察しているのだろうか。たぶん、違う。ボンドの視線はふらふらと泳いでいる。きっと何か考えているのだ。やがて結論が出たようだった。

　ボンドはひっそりとうなずいて、ん、と言った。

「今日の、目の茶色い人、ラッキー度数、八十七ダ」

　二段寝しん台だいの上段からトトが顔を出した。チェリーの目も毛モウの目も茶色だった。

「八十七か。うらやましいネ」

　アジアンがそう言うと、チェリーが、へへ、と鼻をすすりながら頭を上げて、毛モウも両手を下ろした。ヘンドリクとアンガルセンはつまらなそうに肩かたや腕うでを回したりあくびをしたりしている。寂ジヤク星セイは自分にはまるで関係ないといったそぶりだ。

「──それで、話のつづきだけど。いろいろね。考えたんだよ。あたいもさ」

　チェリーはもとの場所に戻もどって腰こしを下ろし、膝を崩くず

した。

「ダリエロの命令には逆らえないと思ったんだ。たしかにあのときはね。でも、ほんとにそうなのかってさ。だって、どうせあたいはこの房じゃあ人間扱あつかいされてないんだし、だから掃そう除じなんてやらされたわけじゃないか。そりゃあダリエロに逆らえば立場が悪くなるよ。でも、今だってべつによかあないしね。せいぜい最悪なのがもっと最悪になるってだけだ」

「何言ってんだよ。最悪ってほど悪い状じよう況きようは味わってないじゃんか。おまえらは」

　アンガルセンが金きん髪ぱつをかきあげて眉まゆをつりあげた。

「おれさまとかな。ヘンドリクとか寂ジヤク星セイもそうだし、まあ、当然、雷ライ切キリが一番だけどよ。今まであの下げ衆す野郎にどんな目に遭あわされてきたと思ってんだよ。オーノ。ポー。アルバート。メツェルディ。寝ね返がえりやがったクソ野郎どもはむかつくけどよ。そりゃあ根こん性じようのないやつは耐たえられないだろうさ。あの下衆野郎に逆らうメリットなんざ正直ないしな。ただ気にくわないってだけで。そうやっておれさまたちがあの下衆野郎と張りあってる間、おまえらは何してやがった？　蚊か帳やの外で蚊に刺さされながらも結局はのうのうと暮らしてただけじゃんか」

「だから、あたいたちもその蚊帳の中に入ってやろうって言ってるんだよ」

「ハッ」

　ヘンドリクが唇くちびるの両りよう端たんを下げて、上に向けた両手を広げてみせた。

「ほざくんじゃねえよ。物の数じゃねえ木こっ端ぱのくせして──」

「へえ。そう思うかい？」

　いきなりチェリーの上半身が一・五倍程度に膨ふくれあがったように見えた。いや、実際、額に青筋が浮うきあがるほど肩だの腕だの胸だのに力をこめたチェリーの身体からだの上半分は、異様なくらい盛りあがっていた。筋肉質でがっちりした身体つきだということは見ただけでわかるが、まさかここまでとは。

「あんまりあたいを舐なめるんじゃないよ。争いごとは好きじゃないけどねえ。やるときゃやるよ。生まれつきハートは乙女おとめだけど、不本意ながらボディはこのとおりなんだ」

「……つーかきッもいんだよ、てめえは──って、何じゃこりゃあっ！」

　のけぞって叫さけんだヘンドリクの首に何か黒い物体が絡からみついている。いつの間に巻きつけたのかさっぱりわからないが、間ま違ちがいない。毛モウの髪の毛だ。

「首、吊つルカ……？」

「つッ、吊つらねーよ！　吊ったら死んじまうだろッ！　なんで死ななきゃなんねーんだよ！　考えたらわかんだろ、それくらい！」

「今日の、目の黒い人、ラッキー度数、三ダ」

「低ッ……！」

「所しよ詮せん、占うらないだ」

　そう言いながらも、ヘンドリクと同じ黒い目をした寂ジヤク星セイもやや浮かない顔をしている。

「まあ、貴様らがどうしようと勝手だが、保護房ぼう行きくらいは覚かく悟ごしておくんだな」

「当然、覚悟の上さ。あたいにとっちゃあむしろここより居心地がよさそうだし、楽しみなくらいだよ」

「オレ、ヤダ……」

「どうせすぐに音を上げるに決まってんだからよ。あと、おれさまは断じて短小じゃないからな。そこんとこは間違うなよ」

「ボクはどうなんだろう」

　ふと思いついて、言ってみたというよりは口をついて出た言葉だった。

「どう──って……」

　チェリーがアジアンを見て顔を真っ赤に染めた。それだけならともかく、ヘンドリクやアンガルセンまでアジアンを凝ぎよう視しして微かすかに頰ほおを赤らめている。寂ジヤク星セイも同じだ。トトは上段から身を乗りだしてただでさえ丸い目をさらにまん丸くしているし、壁かべに向かっていたボダダグもこっちを見ているし、あげくの果てにボンドまで。みんなして、いったいどうしたのだろう。

「保護房にはまだ入ったことがないから」

「──って、そっちかよ！　ナニのサイズの話じゃなくて！」

「思わず想像しちまったよ……おッかしいな……俺、ノーマルなのにな……」

「言っておくが、貴様らと違って俺は想像なんかしていないからな」

「でも、寂ジヤク星セイ、あんたなんで微び妙みように照れてるのさ」

「照れてるダ」

「ぐへへへ……じ、じつは、ひそかにアジアンのこと好きだったりするんだろが、きっと」

「首、吊ルカ？」

「吊らん！　なんで俺がアジアンを！　くだらんことをぬかすな、屑くずどもが……！」

　寂ジヤク星セイは壁を蹴けって小屋から出て行ってしまった。呼び止めるべきか迷ったが、アンガルセンに、やめとけよ、と制された。今そんなことしたら、あいつ、マジでおまえにときめいちまうからよ。ヘンドリクが大笑いして、チェリーも口を押さえて忍しのび笑いをもらし、ボダダグも全身を震ふるわせて笑った。トトは寝しん台だいの上段で転げ回っているようだし、ボンドも微び笑しようらしきものを浮かべていた。夜に本領を発揮するという刺し客かくのことなどすっかり忘れていた。

閉へい鎖さ房のような場所なのだろうかと想像していたのだが、ずいぶん違った。縦も横も端はしから端まで歩いて三歩程度だから、閉鎖房の半分以下の広さしかないし、明かりは扉の上のほうにある目の細かい格こう子し状じようの覗のぞき窓から差しこんでくる通路の照明だけだ。就しゆう寝しんの時間になるまで横おう臥がは禁止で、座っているか立っていなければならないのは一いつ緒しよのようだが、一いつ般ぱん房の生活を経験したせいだろう、閉鎖房にいたころと比べて精神的にはかなりつらい。閉鎖房に閉じこめられていたときは耐えていられたのに、どうしてこれほどまでに退たい屈くつで、落ちつかなくて、暴れだしたい気分で、だが、一いつ瞬しゆん後には萎なえてしまい、ボダダグやボンド、トト、寂ジヤク星セイやヘンドリク、アンガルセン、チェリーや毛モウは無事だろうかとか、ひどい目に遭わされてはいないだろうかとか、考えても仕方のないことを考えて、とはいっても彼らは自分よりも一般房暮らしが長いのだから、きっとそれなりにうまく身を処するすべも知っているに違いない、そう思いなおしたりしているうちに、ひたひたと、背中から肩かたを伝って胸の奥へと、ひどくつめたい何かが浸しん食しよくしてくる。

一人。一人だ。たかが三日だ。すぐに終わる。でも、それまでは一人だ。一人。ずっと一人だったのに。いや、そうじゃない。少なくとも途と中ちゆうからは、いつからかは覚えていないけれど、キミがいた。壁の向こうにキミが。

キミがいると信じて壁を叩たたいた。返事がないと、もしかしたらキミはいなくなってしまったんじゃないかと不安になることもあった。でも、キミはそこにいた。キミがいたから、ボクはじっと耐たえることができた。キミが一いち縷るの光だった。

マリア、ああ、マリア、マリア、マリア、マリアローズ。

キミに会いたい。キミはどうだろう。一人きりで寂さびしくはないだろうか。キミがボクにとってそうだったように、今もやはりそうであるように、もしボクがキミにとって一縷の光だったとしたら、ボクはキミを裏切ってしまったことになる。もう手て遅おくれだろうか。キミに手をさしのべることはできないのか。仮にキミがそれを望んでいなくても、ボクはキミを照らしたい。キミの行く先

をそっと照らしたい。キミが何かにつまずいてしまいそうになったら、支えなければと思う。なぜだか、ボクはそのためにいるのではないかという気がする。それなのに、ああ、ボクはキミに会うこともできない。キミを遠くから見守ることさえできない。

　キミはどこへ行ってしまったのだろう。

　ここにはいない。それだけはたしかだ。ボクはキミを捜さがした。

　街中を捜しまわった。

　あの街は──、

「……エルデン？」

　今、ボクは何を？　何と言った？　わからない。思い出せない。おかしい。頭が痛い。思い出せ。思い出す。思い出せる、そう──、

　ヘンドリクが言ったとおりだった。

　あの男は夜に本領を発揮しようとした。

　消灯の時間が過ぎてしばらく経たっていた。おそらく大半の者が寝ね静しずまっていただろうが、アジアンは寝ねつけなかった。寝台の上段にクラニィではない、得体の知れない男がいるのだと思うと、そう簡単に眠ねむれるものではなかった。それでも少しずつ瞼まぶたが重くなってきた。うつらうつらしていた。あの男はほとんど音を立てなかった。少なくとも梯はし子ごを使った音はしなかったので、何か別の手段で床ゆかに降り立ったのだろう。気配を感じた。そのときにはもう、あの男はアジアンにのしかかろうとしていた。とっさに押しのけようとしたが、毛布の上から肩と腕うでを固定された。手慣れた仕事だった。口も布で塞ふさがれた。あの男は顔を近づけてきて囁ささやいた。大だい丈じよう夫ぶですよ。最初だけですって。すぐに慣れます。そうしたらねェ、よくなりますよ。なァにわたしゃあこう見えて上手ですからねェ。そう痛くはしませんて。

　何を痛くしないのか、何に慣れるというのか。意味がわからなかったが、何かろくでもないことを企たくらんでいるに違いなかった。あの男はアジアンの上半身を覆おおうようにして身体からだをかぶせていた。右みぎ膝ひざで尻しりを蹴り上げてやった。あの男

は呻うめいたが、同時にアジアンの右足を器用に左手でからめとった。いいんですよォ。暴れてくだせェ。わたしゃあ抵てい抗こうされれば抵抗されるだけ燃えるタチなんでねェ。あの男の右手がアジアンの尻をまさぐった。悪お寒かんがしたが、それで隙すきができた。アジアンは身体をひねりながら飛び起きて、あの男を振ふり払はらった。寝台の外へと逃のがれたアジアンに、だが、あの男はすぐさま食らいついてこようとした。その瞬間だった。

　アジアンは何かの声を聞いた。いや、声とは言えない。音ではなかった。アジアンはそれに従ったのか。あらがおうとしたのか。わからないが、あの男を退のけようとしたことは間ま違ちがいない。不意を突つかれさえしなければ難しいことではなかった。ただ、あの男は執しつ拗ようだった。横っ面つらに回し蹴りを叩きこんでも、腿ももを蹴り払っても、喉のどに前蹴りを見み舞まっても、あきらめようとしなかった。何度となく吹ふき飛ばされて、尻しり餅もちをつき、横よこ倒だおしになりながらも、あの男はそのたびに起きあがってきた。いいですよォ。そういうのもいいねェ。楽しいじゃねェですかァ。もっとやってくだせェよ。わたしゃあやられればやられるほど燃えるタチなんですよ。

　殺そうか、と思った。

　息の根を止めてしまえば、さすがに立ちあがってはこないだろう。

　あのとき、向かいの小屋のメツェルディが声を張りあげて係員を呼ばなければ、ボクはあの男を、シュトレーハウゼンを殺していただろうか。

　シュトレーハウゼンは係員がくるなり床に倒たおれこんだ。い、いきなり……引きずり下ろされて……わたしにゃあ、もう、何がなんだか、さっぱり……。むろん、虚きよ言げんにすぎないが、アジアンは傷一つなく、シュトレーハウゼンは顔面をふくめて全身傷だらけで血だるまだった。弁解したところで聞き入れてもらえるとは思えず、猫ねこ背ぜの係員もためらわずに三日間の保護房ぼう収容をアジアンに言い渡わたした。アジアンは革かわ手て錠じようを嵌はめられて一般房から連れだされ、保護房に放ほうりこまれた。

　そう。ここは保護房だ。街ではない。街……？　それは何だ？　どこにある？

「……外」

　何か思い出せそうだった。頭の隅すみ、いや、奥のほうに、何かを引っかけることができそうな出っぱりがあって、もう少しでそこに何かが届きそうだった。

　何か。何か。何か。そればかりだ。

　今、何時なのだろう。一いつ般ぱん房のように時計を見て確かく認にんできるわけではないので、よくわからない。そもそも、ここに放りこまれてからどれくらい経ったのか。一時間か。二時間か。三時間か。起き床しようの号令を聞いたし、一度、食事が出た。朝食の時間はすでに過ぎているのだろう。朝食と昼食の間か。いや、保護房では食事は二回ではなかったか。ということは、朝食と夕食の間か。だが、朝？　昼？　夕？　それは何だ？　太陽？　空？　星？　月……？

「──外……」

　そこには風が吹いている。

　天にも地にも光が瞬またたいていて、そこかしこで闇やみが渦うず巻まいている。

　ボクが立っている場所は人の手で建てられた高い建物の上だ。

　ああ、世界は見果てぬ夢よりも広い。

　生きるということの本当の意味がここにはあるような気がした。

　それを見つけられれば、生きるために生きるだけのちっぽけな何か以外のものになることができるかもしれない。

　何かをするために生きてゆくことさえ、もしかしたらできるかもしれない。

　そして、ボクはそれを見つけた。たくさんのものを手に入れた。手に入れれば手に入れるだけ、ボクは欲張りになってゆき、欲しくて欲しくてたまらなかったくせに、ようやく胸に抱だいた途と端たん、その輝かがやきが失うせ、想像していたほどの価値がないように思えたり、こうであろうと予想していたものとは違うように思えたりして、いっそ捨ててしまおうと考えることもあった。ボクは度

しがたいほど強ごう欲よくで、どうしようもなく愚おろかだった。単なる形でしかなかった、餓うえと渇かわきしか知らなかったボクに、いろいろなことを手とり足とり教えてくれた、身につけさせてくれた、少しずつ満たしてくれた、それはとてつもなく大切で、かけがえのないものだったということを、ボクは失ってから気づいた。あまりにも遅おそかった。遅すぎて、後こう悔かいすることさえできなかった。

　ボクは馬ば鹿かだった。

　だからこそ、ずっと馬鹿でいつづけるわけにはゆかなかった。

　だって、そうだろう？

　わかっている。

　ボクはもう一人じゃない。

　感かん触しよくが残っている。皆みなの手の感触が。

　でも、キミはいない。

　去っていった者たちもいる。追いかけたかったんだ。本当は追いかけたかった。本当は聞いて欲しいんだ。

　マリア。

　キミに聞いて欲しい。

　ボクは、寂さびしくて、悲しくて、苦しくて、たまらない。

　ああ、ボクはこんなにも欲張りだ。

　不意に声が聞こえてきた。低い男の声だ。歌っている。宵よいの、薄うすら寒き風浴びて、独り路みち往く旅たび烏がらす一羽、時し雨ぐれて傘かさも差さず徒ただ歩く、果てなく続く此この荒あれ道みち。係員が、黙だまれ、やめろ、と怒ど鳴なっても歌は止やまなかった。喋しやべる声とはやや印象が違っていたので最初わからなかったが、少ししてから気づいた。雷ライ切キリだ。迂う闊かつにも忘れていた。保護房にはここと同じ造りの部屋が十三ある。雷ライ切キリもそのうちのどこかにいるのだ。

「いいかげんにしろ、４０５！　一日余計に入っていたいのか！」

「それも悪かねえ。一般房に戻もどって下げ衆す野や郎ろうと同じ空気を吸うよりはずっとマシだ」

「だったら望みどおり一日延長だ！」

「ご勝手に」

　雷ライ切キリはひとしきり笑ってから、また歌いだした。そうだ。ボクは一人じゃない。でも、ボクはあのときどこに立っていたのだろう。あの建物は何だろう。あの街は。広い世界なんてどこにあるのだろう。ボクは何を失ったのだろう。ボクは、マリア、キミに何を話したくて、聞いて欲しかったのだろう。腰こしを下ろしている床ゆかのつめたさを感じながら、光が射しこんでくる格こう子し状じようの覗のぞき窓を見上げた。外。それはいったいどこにあるのか。

28

「お帰り、アジアン。どうだったよ、保護房ぼう生活は」

「べつに」

「つまらねぇ感想だな。これからもたびたび世話になるかもしれねぇ場所なんだからよ。老ろう婆ば心しんから言ってやるが、少しはてめぇなりの楽しみ方ってやつを見つけといたほうがいいんじゃねぇか」

「余計なお世話だヨ」

「威い勢せいのいい奴やつは嫌きらいじゃねぇ━が」

　ダリエロは椅い子すに浅く腰かけなおして、首の骨を鳴らした。

「人として、礼れい儀ぎはちゃあんと守らねぇとな。それができねぇ野郎は塵ゴミ屑クズ以下だ」

「房長殿」

　アジアンは腰をきっちり七十五度曲げて頭を下げた。

「ただいま帰房しました。これからは房長殿どのはじめ房内諸氏にご迷めい惑わくをおかけしないよう心がけます。今後ともどうかよしなにお取り計らいください」

「ほう」

　鼻を鳴らす音がして、舌で唇くちびるを舐なめる音がそれにつづいた。

「やりゃあできんじゃねぇか。だったら最初からそうしやがれ」

「そうだネ」

　アジアンは上体を戻して口くち許もとをゆるめてみせた。

「これからはそうするヨ、房長殿」

　保護房の中で覚かく悟ごを決めていたこともあって、帰房の挨あい拶さつはうまくやってのけることができたが、状じよう況きようは決して芳かんばしくなかった。とくに、アルバートと同室にされたボダダグの状態が深刻だった。

　アルバートは、食堂では真向かいに座っているし、何しろリキエルとの果たし合いの一件があるので、アジアンにとっても因いん縁ねんのある男だが、とにかくのべつ幕なしにボダダグの外見、内面双そう方ほうの欠点をあげつらい、罵ば倒とうして、徹てつ底てい的に追つい及きゆうするのだという。アンガルセンやヘンドリクは、そんなものは無視すればいいとか、気にしなければいいとか言うのだが、ボダダグにしてみれば、アルバートの言葉はいちいちもっともで、自分のような者はいくら罵ののしられても仕方ないと考えてしまうらしい。

　それで、これ以上ないくらい落ちこんだあげく、ボダダグは運動の時間に毛モウに相談した。首を吊つるにはどうしたらいいか、と。これには毛モウも困ったようで、いきなり走って逃にげだしたのだが、ボダダグも必死に追いかけた。二人は絡からみあうように倒たおれた、というか、実際、毛モウの長い長い髪かみの毛が複雑に絡からんでひどい有様になった。係員たちも、二人を引き離はなすのにそうとう苦労したらしい。

　以来、毛モウはボダダグを恐おそれ、さけるようになったのだという。実際、自由時間も、アジアンの小屋にはボダダグがいるので、毛モウは姿を見せなかった。チェリー曰いわく、作業できつい担当に回されて、慣れない仕事で失敗を重ね、叱しつ責せきされつづけるなど、毛モウ自身もなかなか苦しい立場にあるようだ。トトやボンドも、新しい小屋での生活がよほど窮きゆう屈くつで苦痛なのか、ずいぶん憔しよう悴すいしているように見えた。

　何か手を打つべきなのかもしれないが、どうすればいいのか見当もつかない。やはり、ダリエロに膝ひざを屈くつしてしまうべきなのか。交こう換かん条件として、皆に手を出さないことを約束させる。そう申し合わせたとしても、あのダリエロがそれを守るかどうかは不明だが、このままだと間ま違ちがいなくボダダグたちは追いこまれてゆく一方だろう。手をこまねいているよりはましなのではないか。さんざん頭を悩なやませているつもりだったのに、一いつ般ぱん房に戻った日の翌日の自由時間に係員が迎むかえにきて、検

けん診しんやで、と言い渡わたされた瞬しゅん間かん、何もかもが吹ふき飛んでしまった。

　マリア。

　マリア、マリア、マリア。

　マリアローズ。

　ああ、やっとキミに会える……！

「どうしたんだい」

　せんせいはいつものように椅子に腰かけて、肩かたの上にまっ黒いナジをのせていた。わざとらしいほどいつもどおりだった。

「ひどい顔をしているね。さながら決して上ることのできない落とし穴にでも落ちてしまったかのような。何かあったのであれば、私に話してごらん。きみは私の大切な患かん者じゃだからね。私はきみのことが心配なのだよ」

　せんせいが身を乗りだし、手をのばしてきた。

　回転椅い子すに座っているアジアンの頬ほおに、つめたい指がふれた。

「さあ、遠えん慮りよせずに話してごらん。私はきみの話が聞きたい。きみが何を考えているのか。何を思っているのか。私は知りたいのだ。きみのすべてをね」

　知っているくせに。

　せんせいはわかっている。見み抜ぬいているはずだ。ボクがなぜこんなに打ちのめされているか。それなのに、あえて尋たずねている。ボクをなぶろうとしている。

　いつもそうだった。

　現れては消える。やがてまた現れる。何かを与あたえては遠ざける。あきらめたころにまた与える。そしていつかとりあげる。

　おまえはにんぎょうだよ。わたしのためのにんぎょうなのだよ。

そのことを思い知らせるつもりなのか。それともただの気まぐれなのか。

わたしにさからってもいいのだよ。べつにかまわないよ。わたしはしっているからね。おまえはけっきょくわたしのにんぎょうだということをね。

「言いたくないのかい。そう。残念だが、仕方ないね。服を脱ぬぎなさい」

裸はだかになって寝しん台だいに横たわり、閉じた瞼まぶたの上に何かを貼はりつけられて、鼻と口に何かをあてがわれ、首と手首と足首、それから腰こしのあたりに何かを嵌はめられる。せんせいはいつもより乱暴だ。何度も何度も激しい痛みを感じて、そのたびに声を出した。もしキミが隣となりの寝台にいたなら我が慢まんしたかもしれないけれど、キミはいない。きっと切り開かれて、切り裂さかれて、切り落とされて、切り刻まれて、ばらばらにされて、繋つなぎあわされているに違いないのに、どうして耐たえなければいけないのか。

時折せんせいがペンを走らせる音が聞こえる。何かを書きとめている。忘れないように。

ボクはむしろ忘れてしまいたい。こんなにつらいのなら、いっそ忘れてしまったほうがいいに決まっている。何もかも忘れてしまいたい。

お前さんは人形なんかじゃない。

誰だれかが言ってくれた。

信じたかった。信じようとした。

でも、そうじゃないかもしれない。

所しよ詮せん、ボクはたやすく操あやつられてしまう人形なのかもしれない。

「ああ、そういえば、マリアローズは──」

いかにも今ふと思い出した、思いついたといったかんじの口調だが、そんなはずがない。

「診しん察さつの時間をずらすことになったのだよ。私の口からは言えないが、いろいろと事情があってね」

　せんせいのつめたい指が身体からだのどこかにふれた。どこか、としかわからなかった。もう二度とキミに会うことはできないのか。キミの顔を見ることも、声を聞くこともできないのか。そんなことがあっていいのか。あってたまるか。

　鼻と口にあてがわれていたものが、それから身体の各所に嵌められていたものが外されて、瞼の上に貼りつけてあったものが剝はがされた。

　目を開けると、せんせいに見下ろされていた。

「知っているかい。今まで係員がやっていた仕事の一部を、他ほかの者たちに受け持ってもらうという計画が進んでいるらしいよ」

　たしか副所長がそんなことを言っていた。省力及および能率向上のための改革プログラム、だったか。

「私の仕事も増えるようだ。とりあえず、閉へい鎖さ房ぼうに食事を運ぶ役目を仰おおせつかってね。ゆくゆくは閉鎖房自体、なくしてしまいたいというのが上の意向らしいが、あれはあれで理由があって存在している。そう簡単にはゆかないだろうね」

　せんせいが唇くちびるの両りよう端たんをつりあげてみせた。

「誰かに手伝ってもらおうと思っているのだよ」

　頭を撫なでられた。

　せんせいは少しだけ首を傾かたむけた。

「お願いします、と言ってごらん」

29

　起き床しよう後の係員による点呼が終わってすぐ、皆みなより一

足先に出房して会堂へ行くと、せんせいが待っていた。ナジは肩かたの上ではなく、白衣のポケットから顔を出していた。厨ちゆう房ぼうの前で朝食のトレイを受けとり、せんせいに従って会堂を出た。十字廊ろう下かを通って医務室の前を過ぎると、そこから先は閉鎖房から一いつ般ぱん房に移って以来、一度も足を踏ふみ入れていない場所だった。懐なつかしさは微み塵じんも感じなかったが、閉鎖房に近づいてゆくごとに胸の鼓こ動どうが高まって、床ゆかをしっかりと踏みしめることができなくなった。閉鎖房の通路には黒い覆面をかぶった係員が一人立っているだけだった。背せ恰かつ好こうから、検けん診しんのときに迎むかえにくる黒覆面だろうと見当がついた。

「ご苦労さま」

　せんせいが声をかけると、黒覆面は無言で頭を下げ、閉鎖房の扉の床すれすれの位置についている小窓の鍵穴に鍵を差しこんで回した。小窓といっても、硝子ガラスが嵌めこまれているわけでもない、単なる金属の板だ。食事のトレイを出し入れする際にしか開閉されないが、今がまさにそのときだった。

　黒覆面が小窓を開けた。

　アジアンはしゃがみこんで小窓の向こうにトレイを差し入れた。

　音が聞こえる。

　おそらく、寝台から腰を上げて、歩いてくる音だ。

　キミは扉の前で膝ひざをついたのだろう。

　そして手をのばす。

　トレイをつかむ。

　この位置からだと、その指先さえも見ることはできないが、トレイが動いた。

　無意識の行動だった。

　前もってそうしようと考えていたわけでは決してない。

　気がつくと、右手を握にぎりしめて扉を叩たたいていた。

　さして力は入れなかったが、二度、叩いた。

　トレイが止まった。

　伝わっただろうか。

　ボクはここにいる。

　やがてトレイがまた動きだして、すぐに見えなくなった。

　黒覆面がアジアンを押しのけ、小窓を閉めて鍵をかけた。

「何しとんねん、ワレ」

「知らせようと思って」

　アジアンは立ちあがって黒い覆面の目の部分を正面から見すえた。

「食事の時間だってことを」

「お前じぶんも前はここにおった身ぃやろ。わしらはいっぺんもそないなことせえへんかったはずやで。いらんことすな」

「いらないことだとは思わない」

「何やて？」

「ボクはここにいた。だから、わかる。いらないことなんかじゃない」

　黒覆面はしばらく覆面に空けられた穴からじっとアジアンを見つめていたが、不意に大きなため息をついて首を左右に振ふった。

「次からは気ぃつけぇ」

　内心、ほっとした。もし黒覆面がこの出来事を問題視して上に報告したりすれば、いくらせんせいの手伝いとはいえ、二度とこの仕事を受け持たせてはもらえないかもしれない。だとしたら、あんなことをするべきではなかったのか。そうとも思えなかった。きっとキミはわかってくれた。扉を叩いただけでは、もしかしたら察することができなかったかもしれないが、そのあとの黒覆面とのやりとりもいくらか聞こえたはずだ。

　ボクはここにいる。

　キミがそこにいることを、ボクは知っている。

　ひょっとしたら、ボクである必要はないのかもしれない。他の誰だれかであってもかまわないのかもしれない。でも、誰かに覚えていて欲しいはずだ。自分がいることを。自分がちゃんと存在していることを。ボクもそうだった。キミもそうに違ちがいない。だから、伝えたい。

　ボクはここにいる。

　キミのことを思っている。

　帰り道の十字廊下で、せんせいに肩を抱だかれた。

「いいのだよ。きみが望むのなら、ずっとこの仕事をさせてあげよう。いつまでも、ね」

「お願いします」

「いい子だ」

　従順なふりをするくらい何でもないんだ。ひざまずいてみせることだってできる。足の裏を舐なめろと言われれば舐めるだろう。キミのためなら、ぜんぜん平気だ。

　朝食と夕食の前後の一日四回、一般房ぼうから会堂、運動場、浴場、またその逆の移動時間を削けずり、せんせいとともに閉へい鎖さ房のマリアローズに食事を運んで、トレイを回収する仕事を嬉き々きとしてやった。ただ、背の高い黒覆面がいるときは扉を叩かないことにした。あの男はおそらく危険だ。自分が閉鎖房にいたころの記き憶おくをたどってみても、情なさけ容よう赦しゃを一いつ切さいせず、徹てつ底ていして一言ももらさない、という印象がある。何かと口数の多いもう一人の黒覆面は、だいたいこれ見よがしにため息をついてみせるだけで、何も言わなかったから、二日に最低一度は扉を叩く機会があった。

　一度だけだが、扉を叩いた直後、トレイを引く動きが止まり、小さな、ほんの微かすかな音が聞こえたことがあった。

　たぶん、いや、間違いなく、指でトレイを叩いた音だった。

マリア、マリア、マリアローズ、ああ、キミが応こたえてくれた！

小こ躍おどりしたい気持ちを必死に抑おさえなければならないくらいだったが、二度目はなかった。正直、落らく胆たんしたけれど、キミは以前もそうだった。応えてくれることもあれば、応えてくれないこともあった。不満はなかった。失望などしない。キミはそこにいるんだ。そして、ボクはここにいる。そのことをお互たがいわかっている。それだけでいい。でも、それだけでいいのだろうか。本当に？

ボダダグの様子が完全におかしくなった。運動の時間はそばにくるし、自由時間になればアジアンの小屋にやってくる。ただ、一言も喋しやべらない。壁かべに向かって呟つぶやくことさえしない。肩に手を置くと、振り払はらわれる。急に背中を丸めてむせび泣きはじめることもある。周囲を観察して、絵を描かくためだけに生きているかのようなボンドはなんとか平気のようだが、トトは占うらないをしなくなった。チェリーや毛モウも、主に作業や消灯から起き床しようまでの時間、さまざまな嫌いやがらせを受けているようだ。アジアンも作業では移動と他ほかの担当を交こう互ごに繰くり返しているような状態だし、就しゆう寝しんの号令がかかるといつシュトレーハウゼンが忍しのび寄ってくるかわからないから、ほとんど熟じゆく睡すいできない。アンガルセンとヘンドリクは同じ小屋なのでまだましのようだが、寂ジヤク星セイは前の小屋替がえで巨きよ漢かんのクルガイスと同室になって以来、そのいびきがうるさくてあまり眠ねむれないという。クルガイスに悪気があるわけではなく、寝ねている間のことだから注意しても無む駄だなので、寂ジヤク星セイとしてもかなり参っているらしい。

追いつめられつつある。

そのうち誰かが限界に達するだろう。

それは明日かもしれない。明後日あさつてかもしれない。もしかしたら、今日かもしれない。

入浴は二日か三日置きに運動の時間を使って行われる。ずらりと並んでいるシャワーで身体からだと頭を洗ったあと、大だい浴よく槽そうに張られたぬるい湯に三分間浸つかり、最後に冷水のシャワーを浴びるのだが、当然、つつがなく終わるはずがない。たとえば、シャワーを浴びる際に、隣となりの者から石せつ鹼けんが回っ

てこないといったことが毎回起こる。いちいち気にせず受け流せばいいのだろうが、こんなことが絶え間なくつづき、いつになっても終わらないのだと思えば気が重くなるし、発ほつ作さ的にかっとなってしまうこともある。とはいえ、腹立ち紛まぎれに壁でも殴なぐろうものなら、係員が飛んできて叱しつ責せきされるのがオチだ。じっと我が慢まんするしかない。そのはずなのに、今日はすぐに隣から石鹸が回ってきた。隣が別の男であれば、拍ひよう子し抜ぬけしていたかもしれない。

「そろそろ考えが変わったころじゃねぇかと思ってな」

　返事をせずにシャワーを止め、石鹸を泡あわ立だてて身体をこすった。

「意地を張ったっていいことなんざこれっぽっちもありゃしねぇぞ。まあ、そんなことは最初からわかりそうなもんだがな。てめぇがわからねぇとかふざけたことをぬかしやがるから、俺としちゃあずいぶん懇こん切せつ丁てい寧ねいに教えてやったつもりだぜ。いくらなんでも、いいかげん思い知ったんじゃねぇか。それとも、まだ足りねぇのかよ。まったく──」

　ダリエロはすでに身体を洗い終えてシャワーを浴びている。

　小声なのに、やけにはっきりと聞こえるのはなぜだろう。





「見かけによらず、強ごう情じようだな。嫌きらいじゃあねぇんだよ。てめぇみてぇな見た目と中身がまるで一いつ致ちしねぇ、なんだかつかみどころのねぇおかしな野や郎ろうはな。俺が一等嫌いなのは、ちょっと脅おどしただけですぐにへいこらして、揉もみ手しながら金魚の糞ふんみてぇにケツを追っかけてくる奴やつらだ。そういう塵ゴミ屑クズはな。たいがい自分が吹ふけば飛ぶような存在

だってことをよぉく知ってやがる。だったらいっそ、どこまでも飛んでいきゃあいいのによ。必死こいてしがみつこうとする。美学ってやつがねぇ。虫むし酸ずが走るぜ。てめぇは違うな。というかな。正直よくわからねぇ。てめぇはいったいどんな野郎なんだ。興味がなくもねぇ。こいつは俺の偽いつわらざる本心ってやつだ。ただ、な。それとこれとは話が別だ」

　ダリエロがシャワーを止めた。

「想像してみろって言ったはずだよな。考えるための材料もだいぶくれてやった。それとも、まだまだ楽しく遊びましょうってか。そのわりにはおもしろみがねぇし、待ちぼうけ食わされるのは趣しゅ味みじゃねぇ。すぐに決めろ、アジアン。すぐに、だ。さもねぇと──」

「４０１！　私語は慎つつしめ！」

「へぇい。すんません」

　ダリエロは係員に頭を下げてみせてから、アジアンの左ひだり肩かたに手を置いた。

「いいな。すぐに、だぞ」

　アジアンは答えずにシャワーの蛇じゃ口ぐちをひねった。ダリエロが去ってから左肩を何度もこすった。皮ひ膚ふにこびりついたその感かん触しょくはなかなか消えなかった。

30

　──だいたい起床の号令がかかるより早く目が覚めるんだよ。そんなに前ってわけじゃなくて、何分か、せいぜい十分前ってとこかな。それで、号令がかかるまでぼんやりしてる。今日も同じだった。気づいたのは、起きて、しばらくしてからだった。音がしたんだよ。

　たっ、たっ、たっ。

そんなかんじだったな。微かすかな音だった。

最初は洗面台の蛇口でも開いてるんじゃないかと思ったんだ。ヘンドリクのやつがよく締しめ忘れるもんだからよ。それでたまに喧けん嘩かになる。いいんだよ、そんなことは、どうでも。とにかく、そう思ったんだよ。まあ、いいか、放ほうっておけばいい。でもな。ああいう音って、いったん気になると、もう無視できなくなっちまうもんだろ。だんだん苛いらついてきて、ああ、うっさい、ぼんやりもできないじゃんか、みたいなかんじで。

起きあがる前に、足をのばして上段の床ゆか板いたを蹴けってやった。どうせ上で寝てやがるだろうヘンドリクの野郎が蛇口を締め忘れたに違ちがいないって思ってたからだ。まだ起き床しよう前だったし、そんなに強くは蹴らなかったけどな。とはいっても、びっくりして起きてもおかしくはなかった。半分起こしてやるつもりだったしな。少しだけ、ほんのちょっとだけ、変だな、とは思った。妙みようだな。何かおかしくないか？　あとから考えれば、だけどな。そういう感覚はあったよ。

身体を起こした瞬しゆん間かん、あれ、と思った。何かが見えたんだ。それは上から下に落ちていった。一度じゃなかった。二度。三度。手をのばしてみた。さわれそうだったからだ。それは指をかすめていった。液体だった。つめたくはなかった。水じゃあなさそうだ。これがあの音の正体か。でも、これって何だ。手を引っこめて、指先を見てみた。まだ起床の時間じゃなかったし、暗かったから、はっきりとはわからなかった。でも、少なくとも透とう明めいじゃあなかった。黒っぽかった。すぐわかった。

血だ。

寝しん台だいから飛びだして上を見た。

手が見えた。

右手だった。

右手の手の甲こうの半分くらいから先が寝台からはみ出してやがった。

血ち塗まみれだった。

ああいうときはまず名前を呼んでみたりするべきなのかね。頭に

浮うかばなかったな。気がついたら梯はし子ごを使って上段の様子を見てた。一瞬、死んでるのかと思った。毛布を剥はいでみたら、呼吸をしてることはわかった。でも、とにかく血がすごかった。毛布も布ふ団とんもぐっしょりだった。傷は右の手首と、首筋と、それから、たぶん左の手首かな。とりあえずその場で確かく認にんできたのはそれだけだ。枕まくら元もとに薄うすっぺらい金属の破は片へんが置いてあった。それも血で濡ぬれてやがった。おそらくこれでやったんだろう。そう思った。

　おい。ヘンドリク。生きてるか。おい。起きろって。ヘンドリク。

　ほっぺたを軽く叩たたいてみた。返事はなかった。反応自体なかった。意識がないってことだ。呼吸もかなり弱々しかった。ダメだ。やばい。このままだと死んじまうかもしれない。そのときだった。ようやく係員を呼ぶことを思いついた。

　それからのことはおまえらもわかってるだろ。ちょっとした大おお騒さわぎだったからな。係員が駆かけつけてきて、ヘンドリクを医務室に運んで行ってから、事情をきかれた。といっても、話せることなんてなかったけどな。せいぜい今おまえらに話したことくらいで。白を切ってやがるのか、じゃあ、とりあえず何日か保護房に入ってろって話になって、このとおり、丸一日ぶちこまれてたわけだけどな。正直、係員だって内心、不思議だっただろうよ。そりゃあそうだ。言いたかないが、ヘンドリクは相棒みたいなもんだしな。ここまで突つっ張ってこられたのも、あいつのおかげって部分もある。雷ライ切キリは結局、ここより保護房にいるほうがずっと長いしな。係員だって一いつ般ぱん房の中の勢力分布くらいだいたいは知ってんだろ。だから、こっちだって不思議だよ。ていうかな。どう考えたってありえないじゃんか。

　いったいどうやってあんな真ま似ねを。

　誰だれがヘンドリクをやりやがったんだ。

　あいつはいまだに意識不明だよ。命に別状はないって話だけどな。どうなるかわかったもんじゃない。なんてことを。なんてことをしやがるんだ。

　でも、誰が、どうやって、あんなことを──。

31

当然、ダリエロ派の誰かの仕し業わざだろう。その誰かは、施せ錠じようされた小屋に音もなく忍しのびこみ、研といだ鉄片で寝ねているヘンドリクの両手首と首の静脈を切断して、さらにまんまと逃にげおおせたのだ。

すぐに決めろ。すぐに、だ。さもねぇと――。

ダリエロが匂におわせていたのはこれだったのか。だとしたら、ヘンドリクがやられたのは、アジアンがその日のうちに返事をしなかったせいだ。アジアンがダリエロの前にひざまずいて、わかった、仲間になる、そう言っていれば、こんなことにはならなかっただろう。

見込みが甘かった。いや、そもそもダリエロの脅おどしを真に受けていなかった。きっと揺ゆさぶりをかけてきているだけに違いない。いつものことだ。いちいち気にしていたらきりがない。はっきりとそう考えていたわけではないが、ようするにその程度の受け止め方しかしていなかったということだ。そして、こうなった。これが結果だ。

アンガルセンはアジアンの寝台の上で横になって上段の床板を睨にらみつけている。寂ジヤク星セイは寝台の梯子に背をもたれさせて立ったまま、身じろぎ一つしない。トトは寝台の上段で寝ね転ころんでいる。ボダダグと毛モウとボンドは小屋の隅すみでひとかたまりになっているが、口をきくわけでもなく、目も合わせない。チェリーは小屋の出入口付近の床に腰こしを下ろして膝ひざを抱かかえている。

静かだ。誰も声を発しようとしない。それどころか、息さえひそめている。寝台の縁へりに腰かけているアジアンもそれは一いつ緒しよだ。一人、リキエルだけが、普ふ段だんどおりに小屋のすぐ外で鉄てつ格ごう子しを使って黙もく々もくと訓練をつづけている。

意地を張ったっていいことなんざこれっぽっちもありゃしねぇぞ、か。

そのとおりなのかもしれない。ダリエロのやり口はたしかに気にくわないし、あの男に膝を屈くつすることを考えるだけで、それこそ虫むし酸ずが走るが、だからあくまで逆らうというのはアジアンの意地でしかない。

果たして、周りの者たちが傷つけられることに目をつぶってまで、我を通さなければならないのか。

アジアンはダリエロにいわば宣戦布告した。あのときはどこまでもあらがう覚かく悟ごだった。だが、それは本当に覚悟と呼べるようなものだったのか。ダリエロがここまでやるとは予想していなかった？　違ちがう。そうではない。何も考えていなかったのだ。ただ思うままに、欲ほつするままに振ふる舞まっただけだった。そうすることでどのようなリスクを背負うことになるのか、どこまでなら耐たえて、どこが限界なのか、あるいはすべてを犠ぎ牲せいにしてでも貫つらぬくのか、そうしたことは一いつ切さい頭になかった。

ボクは間違っていたのかもしれない。

今も間違っているのかもしれない。

だとしたら、何が正しいのか。どうするべきなのか。

アジアンは立ちあがった。皆みなの視線を感じたが、受け止めることができなかった。寂ジヤク星セイの前を通り抜ぬけ、チェリーの足をまたぐようにして小屋を出た。リキエルに、みんなを頼たのむ、とだけ言った。リキエルは一瞬だけ訓練の手を止めて、何もきかずにうなずいてくれた。

通路の奥の椅い子すにダリエロが座っている。両りよう脇わきにレイジとリー・ブラック、それからそのそばにシャマニとリョーヨルカもいた。

ダリエロはアジアンを見て唇くちびるをゆがめてみせた。あの男はアジアンがついに音を上げて降参することを期待しているのかもしれない。そうしたほうがいいのではないかとアジアンも思った。けれども、まだだ。まだ決断できない。決めかねている。

アジアンはダリエロから目をそらして五番小屋へ向かった。五番はデ・ペドロとギャンガーの小屋だ。でも、なんでボクは。正直、

わからなかった。少なくとも、そうしなければならないのだという確固たる意志はなかった。ただ、そうするしかなかった。身体からだが勝手に動いていた。止めることはできなかった。むしろ、止めるなんて思いも寄らなかった。

　五番では四人の男たちが賽サイ遊びに興じていた。

　寝しん台だいの縁に腰かけている二人は、縮れた黒い髪かみの毛を始終引っかきまわしている瘦やせた男のほうがデ・ペドロで、茶ちや髪ぱつを短く刈かりこんで側頭部を剃そりあげている小太りというより堅かた太ぶとりの男がギャンガーだ。

　頭頂部あたりの頭とう髪はつがだいぶ薄うすくなっている、ギャンガーと違って本当に小太りのローガンは、こちらを向いて床に座り、いままさに賽サイを振ろうとしていた。その手が止まった。

　ローガンはアジアンを見て、少しだけ目を瞠みはった。

　こちらに背を向けて床にあぐらをかいていた男が、ゆっくりと振り返った。

　男は眉まゆを上げて鼻の下を指でこすった。

「どうした、大将。何か用か」

「……大将って」

「何しろ、今のお前さんは反ダリエロ派の盟主、旗手、まあ、何でもいいが、とにかく、そんな存在だからな。まさしく大将だろう」

　デ・ペドロとギャンガーがにやにやしている。ローガンは両手で握にぎった賽サイをどうするべきか考えてでもいるのか。

「さて、と」

　クラニィは後頭部をボリボリ搔かきながら三人を見回し、アジアンに向きなおってにやりと笑ってみせた。

「どうやら大将が俺に用事があるみたいだし、今日はこのへんでお開きってことにするか」

「おい、そりゃーねーだろ、クラニィ。勝ち逃にげするつもりか

よ」

「負けて逃げるよりはいくらか俺の性しよう分ぶんにあってるがね。そう怒おこるな、デ・ペドロ。お前さんの相手はまたしてやる。というかな。いつも遊んでやってるだろうが」

「てめえのそーいう態度がむっかーつくんだよ！　遊んでやってるとかな！　マジで勝負してんだぞ、こっちは！」

「あれでマジだったのか。まったく歯は応ごたえってやつがないもんだからな。俺はまた、遊んでるつもりだとばかり思ってたよ」

「こちとら遊びも真しん剣けんなんだよ！　練習も勝負も全開だよ！　いーつも勝ちまくってるくらいで勝った気になってーんじゃねえぞ、この野や郎ろう！」

「……デ・ペドロ、それ、オマエ、オレもわりと同意ではあんだけどよ、若じやつ干かんめちゃくちゃなことゆってんべや」

「黙だまれギャンガー！　うっせーんだよてめえは！　デブが！」

「デブじゃねえ！　オレはけっこうマッチョなだけだべよ！」

「だったらなーんでたまに脂し肪ぼう燃えてるっぽいスメルとかすんだよ、てめえは！」

「スメルとか言うなや！　なんか微び妙みようにニオイよりも臭くさそうだべ！　ていうかオマエの鼻がおかしいだけでそんなニオイは絶対しませんから！　だいたいオマエなんか無む駄だに髪の毛もじゃもじゃしてっべよ！」

「もじゃもじゃなーんかしてねえ！　わっさわっさしてるだけだろーが！」

「まあまあ」

　もはやつかみあう寸前だったデ・ペドロとギャンガーの間にローガンが割って入った。その瞬しゆん間かんだった。おそらくものの弾はずみだろうが、ギャンガーの左手がローガンの顔を押しのけようとした。できなかった。

　ローガンの右手がギャンガーの左手首をがっちりと握っている。

　まったく見えなかった。いつの間に。

「いでっ、いでででっ……！」

「あ、ごめん」

　ローガンは慌あわてたように手を放して、自分の頭のてっぺんをいとおしむように撫なでた。

「ごめんよ、ギャンガー。痛かったかい。そんなに力を入れたつもりはなかったんだけどね。でも、ほら、きみたちって毎日同じようなことで喧けん嘩かばかりしてるだろ。それだけ仲がいいっていうことなんだろうけどね。そのへんにしておこうよ。今はさ。アジアンがクラニィに何か用があるっていう話だしね。うん。デ・ペドロもさ」

「……わ、わかったよ」

「ギャンガーも、いいかい」

「い、いいよ。いいけどよ。ていうかよくねえって言ったらオマエ、オレらのこと、どうするつもりだよ……」

「やだなあ」

　ローガンは基本的に笑えみを絶やさない男だが、その笑顔が時々で微妙に違い、たとえば、半分困こん惑わくしているようだったり、どことなく悲しそうだったりする。アジアンは今、これまで見たことのない種類の笑顔を目にした。ローガンの細められた両りよう眼めの輝かがやきが尋じん常じようではない鋭するどさを帯びたのだ。アジアンは思わず身構えてしまいそうになった。たぶん見み間ま違ちがいではないだろう。ほんの一瞬だけだったが、ローガンはそれくらい危険な雰ふん囲い気きを漂ただよわせていた。

「べつにどうもしないよ。するわけないじゃないか。ああ、アジアン──」

　それなのに、もういつもどおりの人じん畜ちく無害そうな中年男のたたずまいに戻もどっている。もしかしたら、笑みが貼はりついているかのようなその顔の下に何かをひた隠かくしに隠しているのかもしれないが、お互い様だ。そう──お互い様……？

「クラニィと二人きりのほうがいいかい。それならおれたちは席を外すよ。でも、あれだよね、なんか勝手に決めちゃってるけど、考えてみたら、きみはまだ何も言ってないよね」

「できれば、二人にして欲しい」

「うん。わかったよ。じゃあ、デ・ペドロ、ギャンガー、おれたちは出てようか」

　デ・ペドロとギャンガーはぶつくさ言いながらもローガンに従って小屋から出て行った。この五番は二人の小屋なのだから、文句をつけるどころか拒きょ否ひしてもいいくらいだろうが、今のローガンに逆らう気にはなれなかったのかもしれない。わざわざ説明せずにすんで、アジアンとしては助かった。ただ、同時に新たな困難にも直面していた。

　どうしよう。

　どうすればいい。

　ボクは何のためにここへきたんだ。

　もちろん、クラニィと会って、話をするためだ。それは間違いない。でも、何を？　何を話せばいいのか。

　わからない。さっぱりわからない。一言も思いつかない。

　クラニィが床ゆかから腰こしを上げて寝しん台だいの縁ふちに座り、ため息をつきながら首を左右に曲げた。

「言いたいことがあるなら早くしてくれ。ついでに、できるだけ手短に話してくれると助かるんだがね」

「あ──」

　ダメだ。あ？　その先どうつづけようとしたのか。明日？　明日がどうした。じゃあ、ありがとう？　なんで礼を。会いたかった？　馬ば鹿かな。

　力が抜ぬけた。

　アジアンはその場にしゃがみこんで、自分の膝ひざに額を押しつ

けた。

　目を閉じると、もう立ちあがれそうになかった。

「どうした」

　後頭部に何かがふれた。

　手だ。

　髪かみの毛をくしゃくしゃにされた。

　払はらいのけようとしたが、身体からだが動かなかった。

「疲つかれたか。背負いこんだ荷物が想像以上に重すぎたか。でもな。もともとお前さんが望んで、選んだことじゃないのか」

　そうだったかな。

　最初は違った。

　ボクの役目だとは考えていなかった。代わりに誰だれかがやってくれるはずだった。少なくともボクはそう思っていた。

「お前さんがやろうとしなけりゃあ、そうはならなかった。実際、誰も言いださなかったわけだしな。たとえ心の底から求めてたとしても、手を出せないことだってあるのさ。欲しければ欲しいほど、たった一歩が踏ふみだせなかったりする。ようするに、誰も彼もなかなか素す直なおにはなれないってことだ。だいたいすれちまうもんだしな。生きた時間のぶんだけ、どうしたって垢あかもたまる。そいつが意外と重くてな。だんだん思うように動けなくなるのさ。お前さんを見てると──」

　喉のどを低く鳴らして静かに笑う声だった。

　それをボクは何度となく聞いた。

「なんだか懐なつかしくてな。ああ、俺にもそんな時期があったよな、とかな。昔々のことだがね。それで、危なっかしくて、見ちゃいられない。逆か。目を離はなせない。そんな気分になっちまう。とはいえ、お前さんはまるで餓が鬼きみたいだが、やっぱり餓鬼じゃあないんだ。誰かのお守りは必要ないだろう」

そうだろうか。わからない。何もわからない。ボクは何一つわかっていないのかもしれない。いつもあとになってから気づかされるんだ。過ぎ去っていったものを目で追って、その後ろ姿を見送りながら、ようやくそれが自分にとって何だったのか理解する。そんなことばかりだ。二度と繰くり返すまいと思う。でも、手て遅おくれだ。とりもどすことができないものもある。

「何が大切か。何を守るべきなのか。簡単なようで、意外と難しいよな。考えりゃあわかるはずだって思うんだが、これがなかなかそうでもない。人間は揺ゆれるもんだしな。今はこうでも、一いつ瞬しゅん後にはまったく正反対のことが頭にあったりする。結局、自分で決めるしかない。いったん何か心に決めても、折にふれて迷うかもしれん。ふらつくことだってあるだろうさ。それでも歩いていくしかないしな。よさそうな道がなくたって、いつまでも座りこんでいじけてるわけにもいかん。腹も減るしな。喉も渇かわく。見当違いの方向かもしれんが、とにかく進むしかないだろう。そりゃあ、一休みしなけりゃ足が動かんときだってたまにはあるとは思うがね。道に迷ったら、引き返してまた違う道を行けばいい。それにな。正しい道なんて、じつはあってないようなものなのかもしれん。ただ正しいような気がするだけでな。俺たちは何かに押し流されて、いずれ消えていくだけの塵ちりか、よくても屑くずにすぎないのかもしれん。だとしても、俺はむなしくなんかないがね」

ボクはどうしてキミに会いに行ったのだろう。キミに教えられた店へと足を向けたりしたのだろう。いまだによくわからない。忘れてしまうこともできたはずだ。馬ば鹿か馬ば鹿かしいと思いもした。でも、後こう悔かいはしていない。それどころか、ぞっとする。もしキミとあれっきりだったら、ボクは今ごろどうしていただろう。どうなっていただろう。考えたくもない。あれは、だから、ボクにとっては天の配はい剤ざいだった。あのときは何らかの予感があったわけでも何かを期待していたわけでもなかったけれど、結果的には素晴らしい幸運だった。

でも、キミにとっては？

ききたいんだ。一度でいいからきいてみたかった。

果たせなかった。

ボクはキミが在りし日の夢を見る。

　それはいつもつかの間に消え失うせてしまう。

「どうした」

　後頭部に何かがふれた。

　そう思っていたのに。

　違う。

　何もふれていない。

　ボクは何かを聞いて、何かを感じて、何かを考えていたはずなのに、思い出せない。

　ただ、なぜだか、顔を上げて、立ちあがり、歩きだすことができそうな気がした。

「何でもないヨ」

「そうかい」

「ああ」

「おかしなやつだな」

「キミほどじゃないサ」

「そんな形なりをしてるやつに言われると、少しばかりむっとしなくもないな」

「たぶん──」

　アジアンは天てん井じようを見上げて、大きく息を吸いこみ、ゆっくりと吐はいた。

「一休みしたかっただけなんだ。それだけだと思う。決めることは、自分でできるから。ボクは、餓鬼じゃないから」

　クラニィは喉を低く鳴らして笑ってみせたが、何も言わなかった。アジアンもこれ以上、喋しやべるつもりはなかった。黙だまっていようと思った。気がすむまでここにいよう。クラニィも追いだしたりしないはずだ。どうしてかそう確信していたが、それが事実

かどうか確かく認にんすることはできなかった。

　喚かん声せいがあがった。

　もちろん、この小屋の外だ。

　アジアンは弾はじかれたように立ちあがって小屋を出た。

　十三番だ。その前に人だかりができている。

　クラニィも遅おくれずに小屋から出てきたが、後ろを気にしている場合ではなかった。アジアンは通路を駆かけて、男たちを押しのけ、その間をすり抜ぬけて、十三番の前まできた。最初、何がなんだか意味がわからなかった。

　どうしてだ。なんで寂ジヤク星セイがアンガルセンの胸むなぐらをつかんで、壁かべに押しつけたりしているんだ。リキエルは小屋の外でじっと二人を見つめている。なぜ止めない？　尋たずねるより身体からだのほうが早く動いた。アジアンは十三番に飛びこみ、青白い顔をしているチェリーの前を走り抜けて、寂ジヤク星セイとアンガルセンを引き離はなそうとした。

「邪じや魔まするな……！」

　寂ジヤク星セイが出した大声に驚おどろいたわけでも、怯ひるんだわけでもない。だが、アジアンの足を止めさせる何かがあった。それは憤ふん怒ぬと表現しても大おお袈げ裟さではないだろう寂ジヤク星セイの表情かもしれないし、少しふてくされているかのようなふてぶてしいアンガルセンの態度かもしれないし、その両方かもしれない。とにかく、寂ジヤク星セイは何の理由もなく、あるいは些さ細さいなことが原因でそんなことをしているわけではないのだ。アジアンがいない間に、何かが起こった。重大なことが。まずそれを知るべきだし、なんとしても知らなければならない。

「いったい何が」

「答えが出た。それだけのことだ」

　寂ジヤク星セイは奥歯をぎりりと嚙かみあわせた。

「じつに簡単だ。考えてみればわかる。ヘンドリクは小屋の中でやられた。小屋の扉は閉まっていて、鍵がかかっていた。それなの

に、ヘンドリクはやられた。糞くそが。それなのにも糞もへったくれもあるか。答えは最初から一つしかない」

「ちょっと──待って。それって」

「小屋の中には二人しかいなかった。やられたのはそのうちの一人だ。外から小屋に入ることはできなかった。だとしたら、やったのはもう一人だ。矛む盾じゆんはない。俺たちがそいつじゃあなかろうと思うこと以外はな。だが、それは俺たちの勝手な思いこみだ。事実じゃあない。そうだな、アンガルセン」

　寂ジヤク星セイはさっきから片時もアンガルセンから目を離していない。

　アジアンもアンガルセンを見た。本当は見たくなかった。

　アンガルセンが鼻を鳴らして笑うところなんて、見たくはなかったのに。

「だったらどうだってんだよ」

「貴様……！　せめてしらばっくれるくらいしてみせろ、裏切り者が……！」

「いって──痛えんだよ！　苦しいだろうが！　放せ、この」

「いつからだ！　いつから、貴様」

「ハッ、いつからだと？　そんなの覚えてるかよ！　ずっと前からだよ！」

「よくもたばかってくれたな……！」

「人聞きの悪い言い方するなよ！　おまえらが勝手に騙だまされてただけじゃんか！」

「なんで──」

「理由？　理由か。あるよ。そりゃあ、あるに決まってんだろうが……！」

　アンガルセンは急に血相を変えて、だが、声は逆にひそめて早口

で言った。

「最初はあっちについたほうが楽だろうって程度だったけどな。ダリエロは違ちがうんだよ。雷ライ切キリみたいにただ好き嫌きらいでどうとかな。そういう器うつわじゃない。おれさまに言わせれば、おまえらはなーんにも知らずに腹が減ったからってぴゃーぴゃー泣いてるだけの赤ん坊ぼうと同じだよ。おれさまはおまえらの母親じゃあないんだし、つきあってらんないじゃん、実際？　うざいし、むかつくんだよ。はっきり言って──」

「べらべらと……！」

　砕くだけるような音がした。

　寂ジヤク星セイの拳こぶしがアンガルセンの頰ほおから顎あごのあたりにめりこんで、ひしゃげさせていた。

「喋るな！　糞を垂れ流す肛こう門もんみたいなその口で！　薄うす汚よごれた臭くさい言葉を！　不ふ愉ゆ快かいだ！」

　床ゆかに崩くずれ落ちたアンガルセンは白目を剝むいている。これでは喋れと言われたとしても無理だろう。

　トトが寝しん台だいの上段から顔を出しかけて、引っこめた。

　ボダダグと毛モウは壁に張りつくようにして、ボンドは膝ひざを抱かかえて目を見開き、三人とも震ふるえている。

　チェリーが生なま唾つばを飲みくだす音がした。

　誰だれかが係員を呼んだようだ。

　寂ジヤク星セイが倒たおれたアンガルセンをさらに蹴け飛とばそうとしたが、途と中ちゆうで足を止め、代わりに壁を蹴けりつけた。

「糞……！」

　アジアンはその肩かたに手をのばそうとして、やめた。

　混乱はしていなかった。興奮もしていない。冷静だった。おそらく、進む道が決まったからだろう。いつ、どの瞬しゆん間かんに決

意したのか、自分でも説明することはできないが、すでに腹は据すわっていた。あとはやるだけだった。

32

　係員たちが下げ膳ぜんの号令をかけた瞬間か、ひょっとしたらその少し前にトレイを持って席を立った。さすがに走りはしなかったが、早足で向かった先は膳台ではなかった。トレイを膳台に下げる前にしなければならないことがあった。ダリエロはゆったりした動作で椅い子すから立ちあがりかけていた。足音を聞いたのか、気配を察したのか、顔をこちらに向けた。わずかに眉まゆをひそめて、訝いぶかしそうな顔つきだった。隣の席に座っていたレイジが立ちはだかろうとしたが、ダリエロに制された。

　さあ、ボクの身体よ、これ以上ないくらい、疾とく、速く動け。

　何もかもが止まって見える。

　実際、今のボクに比べれば静止しているようなものだ。

　アジアンはまだテーブルの上にあるダリエロのトレイに４２８と刻印された自分のフォークを置いた。

　ダリエロはその瞬間を見ていなかった。

　目で追うことができなかったのだ。

　アジアンはダリエロの耳みみ許もとで囁ささやいた。

「これが伝統なんだろう？」

　ダリエロがアジアンを睨にらみつけようとした。

　それより早く、アジアンはダリエロから離はなれて膳台へと向かった。

　しばらくしてからだった。ダリエロの席一帯がざわめきだして、係員が何事かと怒ど鳴なった。アジアンは振ふり返らなかった。膳

台にトレイを下げ、さっさと会堂をあとにして、十字廊ろう下かの二本の通路が直角に交わっている場所で待っていたせんせいに従って閉へい鎖さ房ぼうに行った。黒覆面は背が高いほうではなかった。正直、ほっとした。床に膝をつけ、黒覆面が開けた小窓の向こうに置かれたトレイを手にとる前に、扉とびらを二度叩たたいた。返事はなかった。いつもならあきらめるところだったが、もう一度叩いてみた。黒覆面がため息をついてみせたが、かまわなかった。あと一回だけと決めて、また叩いた。

　硬かたい音ではなかった。

　扉を拳や指で叩いたのではきっとない。

　掌てのひらで少し強めに押したような音だった。

　アジアンも扉に掌をあてた。

　黒覆面がわざとらしく咳せき払ばらいをした。

　トレイを回収して、黒覆面が小窓を閉めるのを見届けてから閉鎖房を出た。せんせいは何も言わなかった。アジアンは歩きながらトレイの上のフォークを見た。自分も同じだったから知っているが、閉鎖房の者が使うフォークには刻印がない。それがいいことなのかよくないことなのか、判断はつかなかった。ただ、閉鎖房よりは一いつ般ぱん房のほうがまだましだ。

　マリア。マリアローズ。キミもいつか閉鎖房から出られればいいのに。

　副所長がいずれ閉鎖房をなくしたいと言っていた。なくなってしまえばいいんだ。

　ボクらは閉じこめられて自由を奪うばわれるために生きているんじゃない。

　理由や意味なんかないのかもしれないけれど、このいのちが何かを奪われるためだけに存在しているのだとしたら、あまりにもむなしすぎる。

　ボクらは操あやつられて弄もてあそばれるだけの人形なんかじゃない。

絶対に違うはずだ。

一般房に戻って自分の小屋で日誌を書いた。いつも何かと話しかけてくるシュトレーハウゼンが静かだった。十八時四十分になると、房長か房長補ほ佐さが日誌を回収しはじめ、同時に点呼をしながら小屋の中をざっと見るだけの簡単な点検を行うのだが、ダリエロはアジアンと目を合わせることもなかった。それ以外は普ふ段だんどおりに見えた。アジアンも落ちついていた。引きつづいて係員の点呼、点検が始まり、やがて終わっても、気持ちの昂たかぶりのようなものは感じなかった。対照的に、四号房の中の空気は明らかにいつもと違っていた。やけにひっそりとしているのに、奇き妙みような熱気を帯びていた。リキエルと果たし合いをする羽目になったとき、勝手に立会人を買って出たリー・ブラックが言っていた。舞ぶ台たいに上がっておいて、やはり劇はやらないなんて話が通用するとは思わんことだ、と。舞台にはまだ誰も上がっていないが、観客はもうその気になっているということだろう。アジアンはまだしも、ダリエロには立場がある。保たなければならない面めん目ぼくがある。今さら劇を中止にするわけにはゆかないはずだ。

自由時間になると、逃にげるように小屋から出ていったシュトレーハウゼンと入れ替かわりに、ボダダグとボンド、トトとチェリー、それからリキエルがやってきた。毛モウはボダダグをさけているのでこない。アンガルセンを殴なぐった件で保護房行きになった寂ジヤク星セイは、きたくてもこられない。そのアンガルセンは医務室で手当てを受けてすぐに意識を取り戻し、今はたぶんダリエロ派の連中とつるんでいるのだろう。

アジアンとしても寂ジヤク星セイの気持ちは理解できるが、自分がアンガルセンに対して憤いきどおりを覚えているかというと、答えは否いなだ。嫌けん悪お感らしきものもない。失望もしていない。そうかといって、どうでもいい、というわけでは決してない。

アンガルセンがこの小屋で寂ジヤク星セイやヘンドリク、それからアジアンたちと一いつ緒しよに自由時間をすごすことはおそらく二度とないだろう。

そう考えると、惜おしい気はする。

ただ、まだ決定的に失ってしまったわけではない。

傷を負ったのだとしても、それは致ち命めい傷しようではないの

だ。

　見回りの係員が四号房の前を通りすぎていった。自由時間が始まってからそろそろ二十分経たつ。次の見回りまで二十分はあることになる。結局、誰も口を開かなかったので、少し気まずい沈ちん黙もくが小屋の中に淀よどんでいたが、アジアンはかまわず寝しん台だいの縁ふちから腰こしを上げて皆みなを見回した。目をそらす者は一人もいなかった。

「行ってくるヨ」

　小屋を出ると、リキエルに軽く肩かたを叩かれた。

　ダリエロは通路の奥の椅子に腰かけて膝ひざに肘ひじをつき、顔の前で両手を組みあわせてうつむいている。

　リー・ブラックとレイジがダリエロの両りよう脇わきに立って、こちらをねめつけていた。

　おい、と誰かが言った。アジアンだ、始まるぞ。そんな声も聞こえた。

　通路に出ていた者たちは、次々と近くの小屋の中に引っこんで、ゆっくりと歩いてゆくアジアンに道を譲ゆずった。

　五番小屋の前を通るとき、中にいたクラニィと目があった。

　クラニィは苦く笑しようらしきものを浮うかべて、掌の上で賽サイを転がしていた。

　アジアンも笑ってみせた。少なくとも、自分なりに微笑ほほえんでみたつもりだった。

　ボクは餓が鬼きじゃない。

　だから、これも自分で決めたことだ。

　そんなことはわかってるさ、とでも言いたげに、クラニィはただでさえ下がり気味の目め尻じりをさらに下げて肩をすくめた。

　アジアンは前を向いて三番と四番の前を通りすぎた。

　ダリエロはまだ顔を上げようとしない。

　アジアンが足を止めると、房内が水を打ったように静まりかえった。

「果たし合いだ」

　息を吐はく音や唾つばをのみこむ音がした。誰も声は発しない。もしかしたら、ダリエロがどう出るか、まだ推し量りかねている者が多いのかもしれない。正直なところ、アジアンもわからない。正面から勝負を挑いどまれて、まさか拒こばむことはないだろうと思う。だが、相手はダリエロだ。あえて予想を裏切ろうとするかもしれないし、いざとなれば立場や面めん目ぼくをかなぐり捨てるくらいのことはしてみせる男なのではないかという気もする。それでも、警けい戒かいは怠おこたっていなかった。くるとしたら、ダリエロはアジアンの不意を突つこうとするだろう。案の定だった。

　ダリエロは立ちあがらなかった。座った姿勢のまま身体からだを前に倒たおれこませて転がってきた。それから床ゆかに手をついて、浴びせ蹴げりを仕し掛かけてくる。アジアンには見えていた。一歩下がるだけでよかった。もっとも、まだ終わらない。ダリエロは素す早ばやく起きあがって殴りかかってくるに決まっている。拳こぶしは右か。左か。左だ。アジアンは後退しなかった。前に出て、ダリエロの身体の脇わきをすり抜ぬけて振ふり返った。ダリエロの背中が見えた。ダリエロもすぐさまこちらに向きなおったが、わかっているはずだ。

　今、ほんの一いつ瞬しゆんにすぎないとはいえ、アジアンはダリエロの背後をとった。

　それだけでなく、すれ違いざまに一いち撃げきを加えることもできた。

　その気になれば、殺すことだってできたのだ。

　そうだ殺せ殺してしまうがいい喜びを愉ゆ悦えつを甘き血を味わうために殺せ殺せそれが習性であるかのようにお前は貴様は殺せ殺せ殺すのだ思う儘ままに欲ほつする儘に害して屠ほふり殺してその手にかけ息の根を止めるがいい殺せ。

　黙だまれ。

　黙れ。

　黙れ。

　お前の、お前たちの言うとおりになどならない。ボクは殺さない。それがボクの意志でないかぎり、ボクは。

「俺はてめぇを見くびってたのかもしれねぇな」

　ダリエロは、だが、動どう揺ようしている様子はない。取り繕つくろっているのか。そうかもしれないし、そうではないかもしれない。まるで色の違う左右の目が別々のことを語っているかのようだ。立ち方も自然のようでどこか自然ではなく、身体のいろいろな箇か所しょに力が入っているようで、抜けているようにも見える。どちらの足に体重をかけているのかさえ判然としない。こうして相あい対たいしてみると、じつに読みづらい男だ。

「まさかこの俺に直接果たし合いを挑んできやがるとはよ。そんな糞くそ度ど胸きょうがある野や郎ろうだとは、正直、思っちゃいなかった。何のかの言って、その見目形に騙だまくらかされてたのかもな。どう見たって勇ましいってかんじの面ツラじゃあねぇしよ」

「キミの忠告に従って、いろいろと想像してみただけだヨ」

「ほう」

「その結果、こうするのが一番だと思った」

「ずいぶんとまあ飛ひ躍やくした答えを出しやがったもんだな」

「そうかい」

「少なくとも、俺が用意してた模も範はん解答とはまるで違う。笑えるくらい逆方向で、正解とは言いがてぇな」

「いいや。これが正解サ」

　アジアンは目にかかりかけていた前まえ髪がみを指先で払はらいのけた。

「この果たし合いでボクが負けたら、ダリエロ、キミの望みどおりにしてやろう。仲間にでも何でもなってやるヨ。その代わり、ボク

が勝ったら」

　ダリエロが微かすかに眉まゆをひそめた。

　四号房ぼうの全員が、一人の例外もなくアジアンの言葉に耳をそばだてている。

「キミがボクの手下になるんだ。ボクの前にひざまずいて、忠誠を誓ちかえ」

「カハッ」

　ダリエロは大口を開けて歯を剝むき、青い右目を細めて黒い左目を見開いた。どうやら笑っているらしいが、とてもそうは見えない。

「この勝負で勝った奴やつが四号房の頭かしらってわけか。いいぜ。単純すぎておもしろみはねぇが、わかりやすくはあるしな」

「そう。でも、キミがすんなり了りよう承しようしてくれるとは思っていなかったヨ」

「ああ……？」

「だって、ボクにとってはとても有利な条件だからサ」

　アジアンはただダリエロの懐ふところに入りこもうと思っただけだ。

　それだけで身体が動いて、一瞬後にはアジアンはダリエロの目の前にいた。

　ダリエロの腰こしが引けた。

　その顎あごめがけて右の掌しよう底ていを突きあげた。

　突き抜けるような手て応ごたえがあった。

「ボクがキミに負けるはずがないしネ」

　ダリエロは崩くずれ落ちるように倒れかけて、なんとか踏ふん張り、こらえようとしたが、無む駄だな努力だった。アジアンはダリエロの右側頭部に左の回し蹴りを叩たたきこんだ。ダリエロは防ぐ

こともかわすこともできなかった。単なる肉のかたまりのように横よこ倒だおしになって、それきりぴくりとも動かない。

あっという間だった。

観客たちにとっては、あまりにも呆あつ気けなさすぎて不満が残る幕切れだったかもしれないが、知ったことか。

アジアンは振ふり返って、椅い子すの両りよう脇わきに突つっ立っているリー・ブラックとレイジを見た。二人とも呆ぼう然ぜんとしているようだった。まだ我が目を疑っているようでもあった。アジアンも信じられなかった。

右膝の裏だ。

力が抜ぬけた。

蹴けられたらしい、と察した瞬しゆん間かん、相手が誰だれか考えたりはしなかったし、無理をして片足だけで体重を支えようともしなかった。アジアンはとっさに身体からだを浮うかせて、後方へ宙返りした。何かが鋭するどく光るのを空中で見た。髪の毛が舞まった。切られた。ダリエロだ。ダリエロはアジアンの膝ひざ裏を右足の踵かかとで蹴ってバランスを崩させ、閃ひらめかせた何かでおそらく首筋あたりを切り裂さこうとした。間かん一いつ髪ぱつかわしたが、危あやういところだった。

アジアンは着地してからさらに飛び退すさって、いったん距きよ離りをとった。

口の中が乾かわいている。

短いため息が出た。

立ちあがってこちらを向いたダリエロは、まだ目の焦しよう点てんが合っていないし、口の端はしから血液と一いつ緒しよに唾だ液えきを垂らしている。それにもかかわらず、今のダリエロはさっきまでのダリエロよりも明らかに危険だ。ナイフのように研とぎ澄すまして握にぎりの部分に布を巻きつけた鉄てつ片ぺんを右手に持っていることは、ほとんど関係ない。そんなものがなくてもこの男はひどく厄やつ介かいだ。

「……思ってた以上に……速ぇな、てめぇは。つかまえられる気が

しねぇよ。でもな……負ける気もしねぇ」

　ダリエロは左手で口の周りをぬぐって首の骨を鳴らした。

「ゼロだ、アジアン、ゼロだよ。俺が負ける可能性はな。てことはどういうことだ。俺が勝つってことじゃねぇか。あとは時間の問題ってやつだ。てめぇが音を上げるまで、俺はただ立ってりゃあいい。簡単すぎて笑えるな」

「そう簡単でもないと思うけどネ」

「いや、えらく簡単だぜ？」

　ダリエロがアジアンの間合いに踏みこんできた。単純に突っかかってくるのではない。それはすぐにわかったが、何を仕し掛かけてくるのか。口。唇くちびるを尖とがらせて、どうするつもりだ。結論が出る前に身をかわした。正しい判断だった。ダリエロは血や唾液を吐はきかけてきた。アジアンの顔面を狙ねらっていたので、目め潰つぶしか。そう。目潰しだった。アジアンは目をつぶって飛び下がった。間に合わなかった。両方の眼球が刺さすような痛みに襲おそわれた。涙なみだがとめどもなくあふれて止まりそうにない。血だの唾液だのは牽けん制せいだったのだ。本命はいつの間にか左手の中に握って隠かくしていた粉だった。あれは鉄粉か何かか。ダリエロは最初の目潰しを回かい避ひした直後のアジアンにそれを浴びせた。まんまと引っかかってしまった。見えない。目を開けても、涙で曇くもって何も見えない。痛みは我が慢まんできるが、涙を抑おさえることはできない。だったら、音で。ダメだ。喚かん声せい。手を打つ音。床ゆかを踏み鳴らす音。鉄てつ格ごう子しを叩く音。それしか聞こえない。ダリエロは。ダリエロはどこにいる。近づいてきているのか。まだ離はなれた場所にいるのか。それとも、すぐそばにいるのか。

　風。

　空気が動いた。くる。

　首筋だった。

　首の右側だ。

　切られたが、浅い。次は。感じようとすればするほど遅おくれる。考えるな。ただ反応しろ。迫せまってくる。左からだ。跳と

べ。立てつづけに、正面からくる。よけられない。受け止めろ。両手に衝しよう撃げき。吹ふっ飛ばされた。受け身をとって、転がりながら起きあがり、体勢を低くしたまま突っこんだ。いいのか。これで。相手は刃は物ものを持っているのに。かまうものか。頭からぶちあたった。腹か。どうやら、土手っ腹に頭ず突つきを見み舞まう恰かつ好こうになったようだ。ダリエロは低く呻うめいて、だが、倒たおれずに、そのままアジアンを抱かかえこもうとした。同時に右手に持っている刃物を振り上げて、振り下ろそうとしたに違ちがいない。やられてたまるか。そうだ殺せ斃たおせ屠ほふってしまうがいい血を命を啜すすれ我らに捧ささげよ。いやだ。いやだ。いやだ。アジアンはダリエロの左足の甲こうを思いきり踏んづけた。砕くだける音がして、ダリエロが悲鳴をあげた。その隙すきにダリエロの腕うでを振りほどいて後退しながら両手で何度も目をこすった。そのたびに激痛が走ったが、左目だけはどうにか薄うす目めを開けていられるようになった。

　ダリエロは骨が折れているに違いない左足で床を蹴ってみせ、舌なめずりをした。

「悪くねぇ。いい運動してるってかんじがビンビンするな。最近ちっと楽をしすぎて身体が鈍にぶっちまってたからよ。丁度いい。いい具合だ。グアハハハッ。アジアン。こいよ。その調子でどんどんこい。せっかく熱くなってきたんだからよ。俺の血を冷ますんじゃねぇぞ。どうせなら、沸ふつ騰とうさせてみろや」

「血が沸騰なんかしたら、死んでしまうヨ」

「そんなことァ、やってみねぇとわからねぇだろうが……！」

　ダリエロが袖そで口ぐちから何かを出して左手に握った。釘くぎか。三本の釘を指と指の間に挟はさみ、時間差をつけて次々と投げつけてきた。よけることは難しくなかった。実際、すべてかわした。だが、釘に注意をそそいでいる間にダリエロが突とつ進しんしてきた。左足の負傷の影えい響きようは微み塵じんも感じられなかった。むしろ、手傷を負う前よりも速いくらいだった。ダリエロは予想よりも一瞬、いや半瞬早く間合いに入ってきた。アジアンの手足が届く距離だ。同じように、ダリエロの攻こう撃げきもアジアンに届く。先手をとるべきだ。アジアンはダリエロの頬ほおを殴なぐりつけようとした。そのときにはもう、ダリエロは一歩下がっていた。当然、アジアンの拳こぶしはダリエロをとらえられない。もう一歩踏ふみこんで距離をつめる必要がある。ただ、それはダリエ

ロにとっても同様だ。また、下がったダリエロは重心が後ろにかかっている。紙かみ一ひと重えの差だが、アジアンのほうが早く次の手を打つことができるはずだ。瞬間的にでもそう思ったのだとしたら、迂う闊かつとしか言いようがない。

　ダリエロが右手を振った。肩かたと肘ひじはほとんど固定し、手首だけを使って、投げたのだ。あのナイフのような鉄片だった。あれを投げてくるなんて。意表を突つかれたぶん、反応が遅れた。左頰がざっくり切れた。これで完全に後手後手に回る羽目になった。まだ隠し持っていたとは。ダリエロは両手に研いだ鉄片を握にぎっていた。しかも、それぞれ長さが違う。その二本を持ち替かえつつ、矢や継つぎ早に切りつけてくるものだから、始末に負えない。考えるな、と自分に命令しても無む駄だだった。右のほうが長い。左は短い。いや、左だ。右か。今、左手に長いほうを。違う。右だ。左か。

「つまらねぇ、血が冷めてきちまったぞ、アジアン……！」

　そうだ。冷ませ。どこまでも冷ませ。ダリエロをよく見ろ。もう涙は止まった。だいぶ見える。考えるな。そうじゃない。考えなくてもいい。何かを考える必要がそもそもない。ボクの身体からだは動く。疾とく、速く動く。ボクはそのことを知っている。

　行け。

　ダリエロが両りよう眼めを見開いたが、アジアンをとらえることはできなかったはずだ。

　アジアンは右方向へ跳んで、六番小屋の鉄格子を蹴けって天てん井じように達し、そこからダリエロめがけて急降下した。

　ダリエロがアジアンを見上げようとした。

　その前に、ダリエロの頭頂部に踵かかと落おとしを食くらわせた。

　ダリエロの身体が沈しずんだ。ただ、まだ沈ちん没ぼつしてはいない。アジアンは着地するやいなや、ダリエロの喉のどに右の正せい拳けん突づきを叩たたきこんだ。ごえ、という、声とは呼べない音がして、ダリエロの両手から鉄てつ片ぺんが落ちた。ダリエロの目にはもう何も映っていなかった。身体のどこにも力が入っていな

いように見えた。それでもアジアンは気を抜ぬかなかった。もう一発、左拳をダリエロの喉のど仏ぼとけに見舞おうとして右手を引いた。その手首に、しゅる、と何かが巻きついた。

　紐ひもだった。いったいどこから出したのか。もちろん、ダリエロの仕し業わざだった。ダリエロは自分の体重を支えきれなくなったかのように倒れこみながら、アジアンの右手首に紐をからめて瞬しゅん時じに結んでしまったのだ。

　その紐のもう一方の端はしは、どうやらダリエロの左手首に結びつけられているようだった。

　おかげで、ダリエロの体重がまともにアジアンの右手首にかかった。

　体勢が崩くずれた。しがみつかれそうになった。足あし蹴げにして突き飛ばすと、紐のせいでアジアンの身体も引っぱられた。踏み支えてこらえたが、紐をといてしまうべきか。ちらりとそう考えた瞬間、ダリエロが尻しり餅もちをついた体勢のままで左手を引いた。また踏んばったら、その力を利用された。ダリエロは立ちあがって、右手で自分の喉を撫なでた。

「あー。あー。さすがに声が出づれぇな。やになるぜ。いちいちすばしっこくてよ。でもな。こうすりゃあてめぇも好きなようには動けねぇ。どうだ。うまい手だろうが」

「つかまえられそうな気がしないと言っていたくせにネ」

「俺は嘘うそつきなんだよ、アジアン。知らなかったのか」

「薄うす々うす気づいてはいたサ」

「そうかよ。だったらついでにもう一つ教えてやる。ちなみにこれは嘘じゃねぇぞ。俺の」

　絶ぜつ妙みような間だったと言わざるをえない。アジアンは無意識のうちにダリエロの言葉のつづきを聞こうとしていた。その瞬間、ダリエロが左手を引いたものだから、思わず紐を引っぱり返した。それにあわせて、ダリエロは距きょ離りをつめてきた。足音も立てず、床ゆかの上を滑すべるような動きだった。しかも、殴りかかってくるわけでも、蹴ってくるわけでもなかった。そのままぶつかってきた。わけがわからないまま、ものすごい音がして、視界が

暗転した。すぐに明るくなったが、何もかもが揺ゆれている。アジアンはふらついていた。ぐいと引っぱられた。

「俺の頭はとびきり固ぇ……！」

　また衝しよう撃げきがきた。

　頭ず突つきだ。

　二度。

　三度。

　目の前で、あるいは頭の中で激しく火花が散った。胸の奥が奇き妙みように熱かった。たぶん、今、自分はひどいざまだ。膝ひざがぐにゃぐにゃだし、腰こしも抜けそうで、額も切れているに違ちがいない。それなのに、負ける気がしない。

　アジアンは四度目の頭突きを待ち受けていた。受けて立ってやった。渾こん身しんの力をふりしぼって両足を突っ張り、ダリエロの額に思いきり自分の額をぶつけた。衝撃と音はこれまでの倍以上だった。だが、それはダリエロも同じだ。いや、覚かく悟ごしていたぶんだけ、アジアンのほうが打だ撃げきは少ない。ダリエロがわずかにのけぞった。アジアンはすかさず紐を利用してダリエロを引きよせ、もう一発、頭突きを食らわせてやった。

「ボクも一つ教えてやるヨ」

　額から鼻び梁りようの脇わきを伝って流れ落ちてきた血を舐なめた。

　味は感じなかった。

　麻ま痺ひしているのかもしれない。

「どうやらボクは嫌きらいじゃないみたいだ。戦いが」

　アジアンはダリエロに組みついて押し倒たおした。こうして馬乗りになってしまえば、紐なんて関係ない。もちろんダリエロは身をよじって抵てい抗こうしようとしたが、逃にがすつもりはなかった。アジアンはダリエロの顔面を殴なぐった。歯に当たって拳こぶしが切れてもかまわなかった。何度も何度も執しつ拗ように殴りつ

けた。ダリエロはもうぐったりしていた。死に体に見えた。それでも油断はできない。アジアンはダリエロの喉に両手をかけた。脳への血流を止めてしまえば、どれだけタフだろうと気を失う。その瞬間だった。ダリエロが今の今まで気息奄えん々えんとしていたとは思えない素す早ばやさで右手の人差し指と中指を突きだしてきた。眼球を狙ねらっていたに違いないその指を、だが、アジアンはがっちり嚙かんで止めた。ダリエロが悲鳴をあげた。それでも、まだあきらめなかった。ダリエロは人差し指と中指を嚙まれたまま、アジアンの左目めがけて薬指をのばしてきた。でも、それがどうした。左目は傷つけられた。涙なみだが噴ふきだして、左側がまったく見えなくなったが、痛くはなかった。痛みなんか感じている暇ひまがない。アジアンはひたすらダリエロの首を絞しめつづけた。て、てめぇ、とダリエロが言った。この至近距離でもほとんど聞きとれない、低くて掠かすれた声だった。それから、ダリエロはあがくように床を蹴けった。暴れても無む駄だだ。ボクの勝ちだ。

　目の前が激しく揺れた。

　何だろう。

　後頭部か。

　わからないが、手は緩ゆるめなかった。

　自分としては絶対に緩めないつもりだったのだが、もう一度、今度は背中に衝撃を感じた瞬しゆん間かん、息がつまった。その隙すきにダリエロが息を吹ふき返した。ほんの一瞬にすぎなかったのに、白目を剝むいていたっていうのに、なんてしぶといんだ。

　手を振ふりほどかれて、跳はね飛ばされた。

　尻餅をつく体勢になってから、ようやく気づいた。

　レイジとリー・ブラックだ。

　見下ろされている。

　それだけじゃない。

　二人は今まさにアジアンに向かって拳を振り下ろそうとしていた。

　そうか。

　そういうことか。

　ダリエロが床を蹴った。

　あれはじたばたしていたわけではない。

　合図だったのだ。

　まるで予想していなかった。果たし合いなのに。一対一じゃないのか。最後の最後で仲間に助すけ太だ刀ちさせるなんて、みずから負けを認めたようなものじゃないか。でも、やられた。まんまとしてやられた。

「そのへんにしとけ」

　何が起こったのか、即そく座ざには理解できなかった。

　おそらく、彼らも一いつ緒しよだろう。

　ほぼ同時だった。

　レイジとリー・ブラックが短い呻うめき声をもらして、床に片かた膝ひざをついた。

　二人の後ろにもう一人、別の男が立っている。

　当然、ただ突つっ立っているわけではなかった。

　その男は右手でレイジの左腕を、左手でリー・ブラックの右腕を、それぞれ極きめていた。

「勝負ありってやつだ。無駄に見苦しい真ま似ねをして、せっかくの見世物をつまらなくしちまうのは野暮ってもんだぞ」

「ほざくんじゃねぇ、クラニィ……！」

　ダリエロがまた袖そで口ぐちから何かをとりだして右手に持った。研といだ鉄てつ片ぺんだった。いったいどれだけ隠かくし持っているのか。

「見苦しい？　つまらねぇだと？　野暮がどうした。関係ねぇよ。

俺はな。自分がよけりゃあ他ほかのことなんざどうでもいい。世界は俺のためにある。てめぇらはぜんぶこの俺の従属物にすぎねぇ。塵ゴミ屑クズみてぇなもんだ。塵ごみの分際で、俺のやることにケチつけるんじゃねぇ……！」

「まあ、誰だれかにやめろと言われて、はいそうですかとおとなしく引っこむ玉じゃあないよな。お前さんは」

「わかってやがるじゃねぇか！　やれ……！」

　あの男はいつの間にクラニィの背後に忍しのび寄っていたのか。見た目でいえば初老の域すら超こえていると思われるのに、どう考えても老人の身のこなしではない。指のある右手で研ぎ澄すました鉄片を握にぎり、猛もう然ぜんと襲おそいかかってきたドルゲイを、だが、クラニィは振り向きもせずにしゃがんでよけた。そうすると、ドルゲイの身体からだの下にもぐりこむ恰かつ好こうになった。クラニィはレイジとリー・ブラックの腕うでを放し、ドルゲイの腹に自分の肩かたを押しつけて一気に跳ねあげた。ドルゲイがこちらに飛んできた。アジアンは横に転がってよけたが、ダリエロはしくじった手下に寛かん容ような主ではなかった。ドルゲイはダリエロに蹴け飛とばされて床ゆかに転がった。

「役立たずが……！　野や郎ろうは妙みような技わざを使いやがる！　数で押せ……！」

　ダリエロの号令一下、シャマニが、リョーヨルカが、オーノが、アルバートが、アンガルセンが、次々と小屋から飛びだしてきた。レイジとリー・ブラックも二人がかりでクラニィにつかみかかろうとしたが、するりするりとかわされた。クラニィはアジアンをちらりと見て、微かすかに苦い笑えみを浮うかべた。アジアンも笑い返してみせようとしたが、後ろから迫せまってくるものがあった。ダリエロだった。アジアンは右斜ななめ前に身を進ませてダリエロの鉄片をかわし、振り返ってクラニィと背中合わせになった。リキエルがメツェルディやポーを投げ飛ばしている。ギャンガーとデ・ペドロがシュトレーハウゼンとキューレイを袋ふくろ叩だたきにしていた。何がおもしろいのか知らないが、ダリエロが唇くちびるを舐なめてにやりとした。房ぼう内は騒そう然ぜんを通り越こしてもうめちゃくちゃだった。いくらなんでもこれでは係員がくるだろうと思った。間もなくそのとおりになった。

二度目の保護房生活は、いろいろなことをごちゃごちゃと考えずにすんだ。というよりも、ゆっくりと考え事をしていられるような状じよう況きようではなかった。

何しろ、アジアンに、ダリエロ、クラニィ、リー・ブラック、レイジ、リキエル、それから雷ライ切キリに寂ジヤク星セイと、もちろん別々の部屋ではあるものの、八人もがこの保護房にいる。しかも、雷ライ切キリと寂ジヤク星セイにとって、ダリエロは天敵だ。退たい屈くつをまぎらすためか、ダリエロが品のない冗じよう談だんを飛ばすと、雷ライ切キリか寂ジヤク星セイが怒ど鳴なって係員に注意され、ダリエロがそれに便乗して、さらに腹を立てた雷ライ切キリが扉とびらを殴なぐったり蹴ったりする。当然、係員も黙だまってはいない。荒あら々あらしく扉が開け放たれ、教導鞭べんで雷ライ切キリが矯正されている音を聞いて、ダリエロや、リー・ブラック、レイジが大笑いし、寂ジヤク星セイが何か罵ば声せいを発する。本気なのか口先だけなのか、クラニィが係員をなだめようとすることもある。そうすると、たいていダリエロが即座に何か反論して、クラニィはいかにもめんどうくさいといったかんじで適当に受け流す。リキエルはひたすら訓練に励はげんでいるようだが、ときにはとんでもない体勢で信じられないような芸当をすることもあるらしく、たまに係員に叱しつ責せきされている。

ダリエロが、このメンツだけが保護房に放ほうりこまれたのはどうも納なつ得とくしかねる、と言いだしたこともあった。

係員は、答える義務はない、と突っぱねたが、リー・ブラックが陰いん謀ぼう論めいた推測を語りだして、レイジがそれに賛同すると、係員がいきなり教導鞭で扉をぶっ叩たたきはじめて、ダリエロがゲラゲラ笑った。雷ライ切キリが、うるせえ、黙ってられねえのか、と怒ど声せいを発すると、ダリエロは余計に大笑いしてみせた。係員が伝家の宝刀とばかりに収容延長をちらつかせれば、ダリエロたちはおとなしくなったが、屈くつ服ぷくしているようには見えなかった。むしろ逆だった。延長を持ちだすことで、ダリエロを黙らせることができる。ダリエロはあえて係員にそう思わせているのではないか。係員がどこまで許容するのかわかれば、その範はん囲いの中でせいぜい羽をのばして暇ひま潰つぶしをすればいい。やたらと遅おそい時間の流れに苛いら立だちながらも、ひたすら黙っ

て耐たえている必要はどこにもないのだ。実際のところ、係員もそんなことは望んでいないだろう。たまには声を出して暴れる機会くらいあったほうが、気晴らしができていいに違ちがいない。

　寂ジヤク星セイは一足先に一いつ般ぱん房へと戻もどされ、三日目の消灯後だった。

　野太い声が聞こえだした。

　宵よいの、薄うすら寒き風浴びて。

　歌だった。雷ライ切キリだ。

　誰かがやめろと騒さわぎだすかと思ったら、そうはならなかった。

　独り路みち往く旅たび烏がらす一羽。

　雷ライ切キリの声にかぶせて他の者が歌いだした。

　時し雨ぐれて傘かさも差さず徒ただ歩く、果てなく続く此この荒あれ道みち。

　雷ライ切キリよりも節の調子のつけ方が軽けい妙みようだった。クラニィだ。

「──あー……と、ここから先は、何だったかな。忘れちまった」

「暗やみの空仰あおぎ足止めるも戸と惑まどわず」

　レイジは歌わずに歌詞を平板な口調でなぞっただけだった。リー・ブラックが短く笑った。

「何だ、どうせなら歌えばいいものを」

「あいにく音おん痴ちだ。お前と同じだ」

「俺は音痴じゃない。リズム感ほど音感がないだけだ」

「大差なかろう」

　暗やみの空仰ぎ足止めるも戸惑わず。

　レイジとリー・ブラックの言い争いを封ふうじた歌声は、雷ライ切キリのものでも、クラニィのものでもなかった。リキエルの声でもないだろう。もちろん、アジアンでもない。

　明け晴れて朱しゆ塗まみれる道。

　午ひるの、肌はだ刺さす日の眼まな差ざし浴びて。

　独り路往く旅烏一羽。

　ダリエロだった。

「おい、アジアン。つづきはてめぇが歌え」

「知らない歌だ」

「だったら適当に作れよ、阿あ呆ほうが」

「作れって──」

「お前たち、いいかげんにしろ！」

　ようやくといってもいいだろう、係員が声を荒あららげると、ダリエロが舌打ちをする音が聞こえた。独り路往く旅烏一羽、か。でも、ボクが掌てのひらをあてたあの扉の向こうにはキミがいた。ここで分厚い壁かべや扉に囲まれていても、他ほかの者たちの息い吹ぶきを感じる。

　ボクは歌をうたったことがあるのだろうか。わからない。覚えていない。

　それでも、歌えそうな気がした。

　落ちゆく日に翳かざす手は赫あかく、暮れなずみ影かげ差す末なき道。

　夕の、振ふり向き未まだ熱ある手を振りて。

　来る人待つ旅烏一羽。

　ダリエロが、カハッ、と笑い、誰だれかが大きく息を吐はく音がした。喉のどを低く鳴らして笑いながら手を叩いてみせたのはクラニィだろう。アジアンは急に恥はずかしくなって、もう二度と歌う

まいと心に決めた。ダリエロが、レイジ、てめぇが今のやつのつづきを歌え、と命じた。レイジは、無理です、と容よう貌ぼうに似合わない弱り果てたような声で言ったが、ダリエロは許さなかった。レイジの歌はひどく素すっ頓とん狂きようで、係員までもが笑った。リキエルがぽつりともらした。おもしろすぎて訓練ができん。クラニィが、じゃあ次はお前さんだ、とリキエルを指名した。リキエルは少しの間黙だまっていたが、やがて朗々と響ひびく声で歌いはじめた。見事な歌声だった。アジアンは目を閉じて聴きき入った。



「考えたんだがよ」

　保護房ぼうを出た日の自由時間だった。ダリエロに呼びだされて、一番小屋で二人きりになった。小屋の外にはレイジとリー・ブラックが立って、他の者たちを寄せつけまいとしていた。そうでもしなければ、小屋の前は人だかりになるだろう。アジアンも興味があった。ダリエロがどう出てくるのか。正直、意外だった。

　ダリエロはアジアンの前に片かた膝ひざをついて頭こうべを垂れた。

「俺の負けだ。てめぇの手下になってやる。そういう約束だったしな。まあ、約束なんざ知ったことじゃあねぇが、認めざるをえねぇよ。てめぇは強ぇ」

　何を言うべきなのか。どう反応したものか。見当がつかずに黙っていると、ダリエロは顔を上げて唇くちびるをゆがめてみせた。

「どうした。もともとてめぇが言いだしたことじゃねぇか。そのとおりになったんだ。てめぇにしてみりゃあしてやったりってところじゃねぇのかよ」

「あまりそういう気持ちにはなっていないみたいだ。ボクは、ただ──」

「ただ、何だ。やつらを助けたかったってか。あの蛆うじ虫むしみてぇな連中をよ。だとしたら、そうとう奇き特とくな野や郎ろうだな、てめぇは」

「手下の口のきき方じゃないネ」

「口が悪わりぃのは生まれつきなんでな。勘かん弁べんしろよ。それとも、係員の塵ゴミ屑クズ野郎どもに喋しやべるときみてぇな口調がお望みか。あからさまに慇いん懃ぎん無礼ってかんじだと自分じゃあ思ってるんだがな。慇懃ってほど丁てい寧ねいじゃあねぇけどよ」

「好きにすればいい」

「じゃあ、好きにさせてもらうぜ」

　ダリエロは立ちあがって寝しん台だいの縁へりに腰こしを下ろし

た。

「気づいてるかもしれねぇが、じつはこっからが本題だ」

「房長の引き継つぎでもするのかい」

「てめぇがあんな糞くそ仕事をやりてぇってんなら、今すぐにでも係員に申しん請せいしてやる。おすすめはしねぇがな。うざってぇだけだぞ。何か目的でもねぇかぎりはな」

「目的……？」

「ああ、目的だ。俺が何の考えもなく、こんな腐くされた房とりしきるなんて糞をしたあとにケツをふくよりも遥はるかに糞面めん倒どうでくだらねぇことしてたと思うかよ。今回は羽目を外しちまったけどな。わりと優等生だったろうが。たとえそれが上うわっ面つらだけだとしてもな。そんな柄がらかよ。この俺が」

　ダリエロはもともとアジアンを利用したがっていた。

　どうせ何か企たくらんでるんだろう、とクラニィが言っていた。

「俺には目的がある。あった、じゃねぇ。今もある。俺はあきらめねぇ。何しろしつこいからよ。たしか、前に言ったよな。仲間になってからだってな。てめぇが俺の仲間になったら話すつもりだった」

「そして、ボクを利用するつもりだった」

「もし協力しねぇとかぬかしやがるんなら、無理やりにでもな。ただ、てめぇはきっと俺に手を貸したくなったはずだぜ。こいつはな。悪い話じゃあねぇんだ。てめぇにかぎらず、誰にとってもな」

「だったら、さっさと話せばよかったのに」

「そうはいかねぇ。俺も何度かやばい橋を渡わたってきたけどな。どうしても必要な場合はしょうがねぇ。だが、リスクは最低限にとどめるべきだ」

「慎しん重ちようなんだネ」

「そう見えねぇか」

「見えなくもない」

「それが必要ならつべこべ言わずにやりゃあいい。いつか言ったよな。重要なのはよ。目的を果たすことだ。そのためなら手段は問わねぇ」

「でも、欲を言えば、楽しめるほうがいいんだろう」

「まぁな。ただ、正直、この目的の前じゃあそんなのは二の次だ」

　ダリエロは立ちあがって床ゆかに腰を下ろし、寝台の縁に座れとアジアンに目配せしてみせた。

　アジアンは拒こばまなかった。ダリエロに見上げられるなんてなんだか奇き妙みようだが、ようやく向かいあう恰かつ好こうになった。

「どれくらい前の話かもしかとは覚えちゃいねぇ。地味にここも大事なとこなんだけどよ。とりあえずそれはいい。後回しだ。俺は係員にくってかかったり、作業場をしっちゃかめっちゃかにしたり、他ほかの連中をぶん殴なぐったりして何度も保護房送りになってたが、あれだけは別だった。それ以来、俺は改心して──」

「上っ面だけの優等生になった」

「まぁ、そういうことだ」

　ダリエロはふんと鼻を鳴らして膝ひざを立てた。

「そのきっかけになった出来事を、まずはてめぇに話してやる。つっても、きっかけってのは正確じゃあねぇんだがよ。俺はすでにあることを決意してて、それを実行しようとしてたんだからな」

「それはキミの目的とやらと関係があるのか」

「ある。大ありだ。つーか、そのまんまだからな」

「キミは何をしたんだ」

「作業場が並んでやがる通路の突つきあたりに搬はん入にゅう口ってのがある。てめぇもそれくらいは知ってやがるだろう」

「あの扉か。あるということしか知らないけど」

「名前のとおり、作業場で使う資材だの食い物だのが、あそこからこのアサイラムに運びこまれてやがる。そういうふれこみだった。俺も馬ば鹿か正直にそう信じてたわけだ。疑ってもなかったよ」

「そうじゃなかった……？」

「俺はさっき実行しようとしてたって言ったけどな。半々ってとこだった。単純な計画だった。作業の時間に、便所に行きてぇと頼たのみこんで、外に出る。付き添そいの係員を殴り倒たおす。搬入口の前にいる警備の係員から力ずくで鍵を奪うばって、扉を開ける」

「キミはそれをやったのか」

「ああ。成功したぜ。計画ってのは単純なら単純なほど、クリアしなけりゃならねぇポイントは少なくなる。そのぶん一つ一つの難度は高くなる傾けい向こうがあるけどな」

「前言撤てつ回かいだ。キミは必ずしも慎重じゃないみたいだネ」

「手段は問わねぇ。そう言っただろうが。そのときは大だい胆たんさが必要だったし、実際、俺は扉を開けた」

「でも、キミはここにいる」

「そうだ。俺はいまだにここにいる。この糞くそ捨て場で糞に塗まみれて糞ばかり垂れてな」

　ダリエロは眉まゆをひそめてため息をついた。

「何もなかった」

「なかった……？」

「行き止まりだった。冗じよう談だんか何かだと思ったぜ。さすがの俺もな。にわかには信じがたいってかんじで、ぼうっとしちまった。いや、違ちがうな。俺は見てた。はっきりとこの目に焼きつけようとした。そこがどうなってやがって、何があるか。簡単に言えばな。部屋だった。縦長の部屋だ。その両側に資材と食い物が積まれてた。たいした量じゃなかったな。せいぜい二、三日分ってとこだろうよ。言ってみりゃあ倉庫だな。突きあたりは壁かべだった。

こいつは目で見ただけじゃねぇ。さわって確かく認にんしてみた。俺がその倉庫に入りこむときにくぐった扉以外、出入りできそうな場所はなかった。もちろん、逃にげ場もねぇ。俺は係員どもにつかまって保護房にぶちこまれた。三十日だ。延べ日数じゃあ雷ライ切キリの塵ゴミ屑クズ野や郎ろうにとてもかなわねぇけどな。一回の日数としては記録だと思うぜ」

「運動場の開かずの扉の話を、以前、クラニィから聞いたことがある」

「処理場か。じゃあ、俺たちがほとんど無意味な作業をやらされてるってことも知ってやがるんだな、てめぇは」

「どうして、そんなことを」

「さぁな。俺が知りてぇくらいだ。ずいぶん長い間ここにいるような気がするんだがな。わからねぇことはたくさんある。つーかよ。何もわかっちゃいねぇのは何も俺たちだけじゃあねぇ。係員どもだってほとんど同じだ。やつらと俺たちと、実際どれくらい違いがあると思う」

「そういえば、副所長が言っていた。これだけの人数が一歩も外に出ることなく生活しているって。係員たちは所長もふくめて住みこみで──」

「医務室の白衣野郎だけだ。外からここに通ってやがるのはな」

　ダリエロは壁に背中をあずけて首を傾かたむけ、色の異なる両りよう眼めをすぼめた。

「何かがおかしい。そうじゃねぇな。何もかも、だ。いったい俺はいつからここにいるんだ。なんでこんな場所に。覚えてねぇ。思い出せねぇ。俺だけじゃあねぇ。誰だれも彼もだ。ところが、気がつくとそのことをまるっきり変だと思ってねぇ自分がいる。俺はさいわいしつこいからよ。何度も何度も気色の悪わりぃ違い和わ感かんってやつを頭に刻みこんで、それでも気ィ抜ぬくと忘れちまいそうになる。でもな。俺は、俺たちは知ってるんだ。全員がな。間違いねぇ。アジアン、てめぇは覚えてるか。歌だ。保護房ぼうで歌っただろうが」

「歌──」

「宵よいの、薄うすら寒き風浴びて。午ひるの、肌はだ刺さす日の眼まな差ざし浴びて。それから、てめぇが即そつ興きようで作りやがった歌詞はこうだ。落ちゆく日に翳かざす手は赫あかく、暮れなずみ影かげ差す末なき道。夕の、振ふり向き未まだ熱ある手を振りて。変だと思わねぇか。宵。午。夕。風。日。暮れなずむ。風景が頭ん中に浮うかんできやがる。ありありとだ。つまり、俺たちはそれを知ってるってことだ。俺はたしかにいつからここにいるのか覚えてねぇ。ただ、ずっとここにいたわけじゃねぇ」

　ダリエロは小屋の外に目をやったが、どこか別の場所を見ているかのようだった。

「俺は外に出てぇ。いや。絶対に出てみせる。アジアン、今日から四号房の頭かしらはてめぇだ。それでいい。俺は全面的にてめぇに従ってやる。そのかわり、頼む。力を貸してくれ。俺には、俺たちには、てめぇが必要だ」

35

　その女はなぜかアジアンと目をあわせようとしなかった。それでいて、いつもダリエロたちが陣じん取どっている運動場の階段椅い子すに女二人で乗りこんできておきながら、気き後おくれしている様子は微み塵じんもない。むしろ堂々としていた。

「それにしても、驚おどろきましたわ」

　女は輝かがやく金きん髪ぱつを白く細い指でかきあげ、微かすかに細めた青い目でアジアンではなくダリエロを一いち瞥べつした。

「ここにきて突とつ然ぜん、胴元が交代するだなんて、由々しき事態ではありませんこと」

「こっちの都合だ。べつに今までと何が変わるってわけでもねぇしな。てめぇらが気にすることは何もねぇ」

「そうもいかないわね」

　金髪碧へき眼がんの女の連れの女が、ぷっくりした唇くちびるを

舌先でちろりと舐なめてから、垂れ目でダリエロを睨にらみつけた。

「いきなり派手な揉もめ事を起こして、連れん絡らくがとれなくなったと思ったら、今度はこれ？　まったく、冗談じゃないわ。あたしたちだって、伊だ達てや酔すい狂きようであんたの賭場に大枚つぎこもうとしてるわけじゃないのよ」

「ベティさんのおっしゃるとおりですわね。ダリエロさん、あなたがわたくしたちとの信しん頼らい関係を軽視してらっしゃるのでなければ、せめて事情くらい説明していただきませんと」

「うるせぇ女どもだな。クララにベティ、てめぇらも噂うわさくらいは聞いてやがんだろうが」

「そりゃあ聞いてるわよ。ダリエロ、あんたが果たし合いで負けたって話くらいはね」

「だったら、察しろよ。そのあたりはよ」

「あら。あんたの口から直接きかないとおもしろくないじゃない？」

「てめぇ。貧ひん乳にゅうのくせして、舐めたことぬかしてんじゃねぇぞ」

「だ、れ、が、貧乳ですって？」

「てめぇ以外に誰がいるっつんだ。そこにいるてめぇらの頭かしらときたら、牛みてぇにたぷたぷした乳してやがるじゃねぇか。比べるまでもねぇだろうがよ」

「ダリエロさん、今の発言は即そつ刻こく訂てい正せいなさい。わたくしの身体からだの一部は決してたぷたぷなんてしておりませんわ。瑞みず々みずしく、張りがあって、それはもう熟した果実のような──」

「何、クララ、それってあたしに対するあてつけのつもり？　だったら容よう赦しゃしないわよ？」

「とんでもありませんわ、ベティさん。どうしてそのようにお考えになられますの？」

「どうしてかしらね。その今にも重力に負けそうな自分の胸に手をあてて考えてみたらどう」

「わたくし、どこかのどなたかとは違って、負け惜おしみは申しあげないことにしておりますの。正々堂々戦って敗れたのであれば、敗者としては涙なみだをのんで勝者を讃たたえるべきではありませんこと」

「あの」

　横から口を挟はさんだアジアンにクララとベティの視線が集中した。

「事情は説明しなくていいのかな」

「あ、そ、そうでしたわね」

　クララが慌あわてたように顔を背そむけて両手で頰ほおを押さえた。ベティはここぞとばかりにアジアンの顔を見つめているが、何か珍めずらしいことでもあるのだろうか。

「じ、事情……そうですわ、説明していただけるかしら。わたくしたちには聞かせていただく権利があるはずです」

「しゃらくせぇ」

　ダリエロが顔をゆがめて鼻を鳴らした。

「だが、まぁ、俺だって何もてめぇらを軽かろんじてるわけじゃねぇ。そこんところは誤解してもらっちゃあちっとばかし困るからな。ようするに、だ—」

　階段椅子の最上段にはダリエロとアジアン、クララ、それからベティが並んで座り、二段目にはリー・ブラック、レイジ、シャマニ、リョーヨルカが、一番下の三段目にはボダダグ、トト、ボンド、チェリー、毛モウが、ボンドをのぞけばやや居心地が悪そうに腰こしかけている。

　ドルゲイやシュトレーハウゼン、メツェルディやポー、アンガルセンら、他ほかの元ダリエロ派の者たちは階段椅子の周りをまばらに取り囲んでいて、リキエルは相変わらず少し離はなれた場所で訓練中だ。

　ヘンドリクはまだ快復しきっておらず医務室だし、寂ジヤク星セイにしてもさすがに元ダリエロ派の連中と馴なれあう気にはなれないようだが、雷ライ切キリがもうすぐ保護房ぼうから出てくるはずだから、一度腹を割って話をしてみようと思っている。それで丸く収まることはないとしても、そのときがきて事態が動きだしてしまえば、どのみち敵だ味方だと騒さわいでいる場合ではなくなるのだ。もちろん、首しゅ尾びよく事が運べばの話ではあるが。

　ダリエロが顎あごをしゃくってアジアンを示してみせた。

「人の上に立つには資格ってもんがいる。そいつを俺からとりあげやがったのがこの野や郎ろうだ。こいつが俺より一枚上手だったってだけのことだがな。自分で言うのもなんだが、俺は腕うでっ節ぷしに自信があるし、ずば抜ぬけてしぶてぇし、おまけに卑ひ劣れつだけどよ。その俺をぶちのめしやがったんだ。だったら、俺としちゃあ白しろ旗はた揚あげるしかねぇだろうが。みじめったらしく自分の身の丈たけにあわねぇ椅子にしがみつくなんざ冗じよう談だんじゃねぇ。たとえいつか必ず奪うばい返すんだとしてもな。今はこの野郎に座らしとくしかねぇ。これ以上の説明が必要かよ」

「それでは、ダリエロさん、とりあえず現時点ではあなたも完全に納なつ得とくしたうえで、今後、胴どう元もとをこちらの方にお任せするということでよろしいのね」

「そうだっつってんだろうが。いちいちまどろっこしい女アマだな、てめぇは」

「賭場のしきたりについてはこの方にすべてお話ししたものと考えてよいのかしら」

「ああ。包み隠かくさずな。ついでに、こいつのおかげで駒もどうにかなりそうだ」

「本当ですの」

「嘘うそなんかついてどうなるってんだ、たぷたぷ女め」

「たぷたぷでは断じてないと何度申しあげたら──」

「それって、つまり」

　ベティが目を瞠みはった。

「その人がどうにかして駒を手に入れるっていうこと？」

「というかな」

　ダリエロはアジアンの肩かたに手を回した。決して馴れ馴れしい手つきではない。気を抜けば、袖そでから刃は物ものを出してアジアンの首筋に突つきつけるだろう。そういう男だ。

「そもそもこいつ以外に目はねぇのさ。俺らがずっと探してた、こいつがパズルの最後のピースだったってわけだ」

「さして見込みがなさそうな話だったけど、あきらめないでひたすら待っていたら、運のほうからこっちに歩いてきてくれたってことね」

「歩いてきただと？　阿あ呆ほうなことぬかすんじゃねぇよ。殴なぐりこんできやがったんだ。てめぇらもな。この面ツラに騙だまされるんじゃねぇぞ。なよなよしてるように見えやがるし、実際、最初はそうだったが、いったん牙きばァ剝むきやがったら手に負えねぇ」

「素す敵てきですわね」

　クララが顔全体をやや弛し緩かんさせてそっと息をついた。

「へえ」

　ベティが嘲あざ笑わらうように顎を上げてみせると、クララは我に返ったように目をしばたたかせて咳せき払ばらいをした。

「と、とにかく、よろしいですわ。その方がダリエロさんにかわって新しい胴元になられるということに関しては、こちらも了りよう解かいいたしました。ですが、胴元なら胴元らしくしていただきませんと」

「あたしも同感ね。だいたい、さっきから喋しやべってるのはダリエロばかりじゃない。新しい胴元っていっても形だけなの？　いくら見た目によらず喧けん嘩かが強くても、ダリエロの操あやつり人形にすぎないなら──」

　操り人形。

　人形。

　ふと疑いが首をもたげる。

　ボクは両手で何かをかき集めて、自分の中に必死につめこもうとしている。

　もともとからっぽだからじゃないのか。

「……って、どうかした？　あたし、何か変なことでも」

「いや」

　アジアンはベティの視線をしっかりと受け止めて、首を横に振ふってみせた。

「何でもないヨ」

「そう。それならいいけど」

「それから、ボクは人形じゃない。少なくとも、そうじゃなければいいと願ってはいる」

「願うだけなら、誰だれにでもできるわ」

「責任は果たすつもりだ。とりあえず、ボクは駒を何とかする。そう簡単じゃなさそうだけどネ。機会はあると思う」

「あなたは納戸に出入りできる。そう受けとってよろしいのですわね」

「機会はある。駒の在処ありかも知っている。それ以上だとは考えて欲しくない」

「在処を」

　ベティが下した唇くちびるを指でさわった。

「じゃあ、確かく認にんはできたってことね。駒はある。間ま違ちがいなく。そう思っていいのかしら」

「少なくとも、ボクは見たことがある。駒がないと賭と場ばは開けない。でも、駒を手に入れるとしたら、機会は一度きりだ。しく

じったら、当然、警けい戒かいされる。二度目はないと思ったほうがいいだろうネ。そう考えると、現状、駒を手に入れられるのはボクだけじゃないかという気がする。だとしたら、ボクがやるしかないサ」

「まぁ、頼たのむぜ、大将。そのとおり、てめぇに懸かかってやがるんだからよ」

「ああ」

　アジアンは微かすかに目を細めて口くち許もとをゆるめてみせた。

　ダリエロだけでなく、クララとベティも、瞬しゅん間かん、息をのんだようだった。

「賭場は開く。絶対にネ」

36

　表向き、四号房ぼうは以前とあまり変わっていない。房長はダリエロのままだし、房長補ほ佐さはリー・ブラックとレイジだ。自由時間になると、通路の奥の椅い子すにはダリエロが座り、目を光らせて房内を監かん視しする。ダリエロ派の連中がかたまっていて、それ以外は何人かでまとまったり、ばらばらだったりだ。アジアンは自分の小屋でボダダグらとすごすことが多い。ダリエロ派の嫌いやがらせがなくなったので、彼らの表情に明るさが戻もどったことと、毛モウがまたくるようになったことは、変化らしい変化と言えるだろう。寂ジヤク星セイはアジアンの小屋を訪おとずれはするが、たいてい一言も喋らない。リキエルはいつもどおり訓練、訓練の毎日だ。

　せんせいの手伝いという名目で閉へい鎖さ房に食事を運ぶ仕事はつづいている。扉とびらを叩たたいても、マリアローズが叩き返してくれることはめったにない。

　例の省力及および能率向上のための改革プログラムとやらは進んでいるらしく、一いつ般ぱん房内の廊ろう下かや浴場の清せい掃そ

うが、三日に一回、運動の時間を削けずって行われるようになった。八号房の房長クララやその参さん謀ぼう格である房長補佐のベティとは、主に運動場で連れん絡らくをとっていたのだが、清掃中でも可能なので、とくに困らない。シャマニあたりが女をからかうふりをして紙切れを渡わたし、あるいは受けとる。階段椅子の長おさ同士として、ごくたまに運動場で直接会談する。ずっと彼らがとってきた方法がそれで、単純だが、係員にあやしまれたことは一度もないという。

　雷ライ切キリが一般房に戻ってきた。どういう経けい緯いであんなことになったのか、保護房ではくわしく話すことはできなかったが、雷ライ切キリなりに察した部分もあるのだろう。雷ライ切キリは形ばかりといったかんじで房長のダリエロに頭を下げてみせると、アジアンの小屋を訪れてにやりと笑った。

「あんたに聞きてえ話が増えた。話してくれるんでしょう」

　ダリエロの真意はわからないにしても、アジアンはもはや胴元だ。まず仲間に引き入れてからすべてを話すというのが今までの流りゅう儀ぎだったようだが、自分のやり方に文句は言わせない。アジアンは雷ライ切キリにすべてを語り、そのうえで協力してもらえるよう頼んだ。雷ライ切キリは寂ジヤク星セイをちらりと見てから、腕うで組ぐみをして目をつぶり、三秒ほど考えこんだだけだった。

「いいでしょう。目的にも異存はねえ。ダリエロじゃあなく、あんたが胴元だってえんなら、一枚嚙かませてもらいやしょう。おめえもかまわねえな、寂ジヤク星セイ」

「かまわなくはない」

「そうか。こだわりやがるな、おめえも」

「あんたは平気なのか。相手はあのダリエロだぞ。アンガルセンのことだって──」

「ああ、おめえ、保護房で何か言ってやがったな。野や郎ろうがヘンドリクをどうしたとか」

「あいつは回し者だった。ダリエロに命じられて、見せしめのためにヘンドリクを半殺しにしやがったんだ」

「死んだわけじゃあねえんだろう」

「だからって」

「落とし前はあとでつけさせりゃあいい」

　雷ライ切キリは首を傾かたむけて右眉まゆの端はしを右手の中指でこすった。

「借りは賭場が開いたあとで倍返しすりゃいいだけのことだ。どのみちこのままじゃあ野郎の首をとることだって容易じゃねえ」

「そういうことなら、まあ」

「俺もいいかげん懲こりた。ここと保護房を行ったり来たりしてるだけの暮らしじゃあな。さすがに埒らちが明かねえ」

「ようやく気づいたのか。遅おそすぎるくらいだ」

「そう言うな、寂ジヤク星セイ。俺は世よ渡わたりがうまくねえ。気が短えしな。頭ん中のことがすぐ顔に出ちまうから、いざって時がくるまでは忍にんの一字でひたすらじっとしてたほうがよさそうだ」

　雷ライ切キリは両りよう膝ひざを手で押さえるような体勢になって、アジアンに頭を下げてみせた。

「いろいろ迷めい惑わくおかけすることもあるでしょうが、何とぞ頼たのんます」

「そんなことはしなくていいヨ。ボクはダリエロに代わって胴元をやることにしただけで、キミの親分になったわけじゃない」

「いや。あんたは俺の御オ頭カシラだ。方便でもいいんで、是ぜ非ひあんたもそう思ってくだせえ。俺はリキエルやダリエロに勝ったあんただから従う。御頭の命令なら歯ぁ食いしばって何なりと我が慢まんしやす。そうでもなけりゃあ、一日だってあの下げ衆す野郎を殴なぐらずにはいられねえ」

「わかった。じゃあ、賭と場ばを開くまでは」

「ええ。それで結構です」

「仲よくやれとは言わない。ただ、揉もめ事は起こさないで欲しい」

「心しやす」

　雷ライ切キリはもう一度深々と頭を下げてから、左頬ほおに刺青いれずみされた「雷」の一文字をゆがめて笑ってみせた。その笑えみが凍こおりついた。どうやらアジアンではなく、別の誰だれかを見ているようだ。

　アジアンは雷ライ切キリの視線の先を目で追った。

　小屋の隅すみにいるボダダグとボンドと毛モウ、そのうちの誰かか。

「反へ吐どが出るぜ。毛だらけ野郎め」

　そう吐はき捨てるように言って舌打ちをし、壁かべを蹴けったところからすると、毛モウか。まるで仇あだでも見るような目つきだ。堂々とした体格の雷ライ切キリが、髪かみの毛の長さと量の多さこそ尋じん常じようではないが、まず小兵といっていい毛モウをそんなふうに睨にらみつけているのは、なんだか滑こつ稽けいでさえある。

「何か因いん縁ねんでもあるのかい。べつに、仲よくやれとは言わないけどネ」

「自分でもよくわからねえ。とにかく嫌きらいで仕様がねえ。同じ空気を吸ってると思うだけで腸はらわたが煮にえくり返る。ですが、ええ、御頭がそうおっしゃるんでしたら、我慢しやす」

　雷ライ切キリは深呼吸をしたかと思うと、いきなり壁を殴りつけた。一いつ瞬しゆん、房ぼう内ないが静かになるほどの大きな音がした。しかも、それで気が収まったわけではないようだ。雷ライ切キリのこめかみには青筋が浮うきでていたし、拳こぶしはきつく握にぎりしめられたままだった。

「我慢しやすよ。ええ」

　クラニィは五番小屋でいつものように賽サイ遊びをしていた。今日は二人きりになる必要はなかった。ローガンとデ・ペドロ、ギャンガーにもいてもらった。

　デ・ペドロとギャンガーは二段寝しん台だいの上段であぐらをかき、クラニィは下段の縁ふちに腰こしかけて、ローガンは便器に座り、床ゆかに腰を下ろして壁に背中をもたれさせたアジアンに、四人四様の視線をそそいでいる。

　縮れた黒い髪の毛を引っかきまわす手を止めないデ・ペドロと、落ちつかなげに堅かた太ぶとりした身体からだのあちこちを掻かいたり肩かたや首を回したりしているギャンガーの眼まな差ざしは、控ひかえめに言っても訝いぶかしげだ。ローガンはにこにこしているが、ぼんやりしているようにも見える。クラニィはだらけた表情で、何を考えているのかさっぱりわからない。

　用件はわかっているはずだ。察してくれてもよさそうなものだ。どうしてだろう。クラニィを前にすると、自分がこうしたいとか、ああするべきだという意志よりも、相手にこうして欲しい、ああしてくれてもいいはずだという思いが先に立つ。クラニィがいつも応こたえてくれるわけではない。むしろ、応じてくれないことのほうが多い。それなのに、クラニィには見み抜ぬかれているような気がしてならない。クラニィは何歩も先にいて、アジアンに背を向けている。その後ろ姿を追うべきなのか。追わざるべきか。わからない。ボクにはわからないんだ。

　キミのそばにいると、どうしてこんなに懐なつかしいんだろう。

「もう知っていると思うけど」

　アジアンはデ・ペドロとギャンガーを見て、ローガンを一いち瞥べつし、それからクラニィと目を合わせた。

「ダリエロはボクの配下になった。つまり、四号房はダリエロに代わってボクがとりしきることになる。房長は今までどおりダリエロだけどネ」

「出世したもんだな、それにしても」

　クラニィが喉のどを低く鳴らして笑った。

「考えてみたら、お前さんが閉へい鎖さ房から出てきて、まだたいして経たってないってのにな。気がついたら、房長を陰かげで操あやつる真の頭領様だ」

「茶化しているのかい」

「そんなつもりはないさ。俺はただ、感かん慨がい深いって言ってるだけだ。お前さんと同室だったころとか、まあ、それこそちょっと前の話なんだが、どういうわけか懐かしくてな。俺が耄もう碌ろくしちまってるだけなんだろうがね」

「顔が老ふけているだけじゃなくて、頭も老化しているんだネ」

「まだ若いつもりなんだが、最近、身体がついてこなくてな」

「そのわりにはご活かつ躍やくだったじゃないか」

「昔取った杵きね柄づかってやつさ」

「どうしてボクを助けたの」

「助けて欲しくなかったか」

「そうは言っていない」

「義を見てせざるは勇なきなり、ってな。どこかの古い言葉で、そんなのがあるらしいぞ」

「義って柄がらかよ」

　デ・ペドロが鼻をほじりながら顔をしかめると、ギャンガーが、んだな、とうなずいた。

「どっちかっつーとよ。義ってよりか、あれだべよ。欺ってかんじだべな。いっつもテキトーに流してるくせに、おいしいとこはさらってくんだからよ。脂あぶら身みだけ食って赤身は残す的な。霜しも降ふりはぜんぶ平らげるみたいな」

「そんなーに脂身が好きなのかよ、てめえはよ……」

「あたりめえだべや。脂のうまさがわからんやつに肉を語る資格はねえべよ」

「だーから太ってんだよ、ギャンガー、てめえはよ」

「アホ、女はな、デ・ペドロ、オマエみてえなゲソゲソのガリガリよりか、ちょっとぷりぷりしてるほうが好きなんだっつの。そんなことも知らねえからダメなんだべよ」

「それ、女じゃなーくて男が痩やせすぎな女よりぽっちゃりしてる女のほうを好むって話だろ。なーんか勘かん違ちがいしてんじゃねーのか」

「勘違いなんかしてねえよ。たとえば、あれだべ、オレなんかすらっとしてる女のほうがずっと好きだしよ」

「そーんなのはてめえがデブだから無い物ねだりしてるだけだろ」

「デブじゃねえ！　オレはけっこうマッチョなだけだべよ！」

「だったらなーんでたまに脂し肪ぼう燃えてるっぽいスメルとかすんだよ、てめえは！」

「スメルとか言うなや！　なんか微び妙みようにニオイよりも臭くさそうだべ！」

「……いいんだがね、べつに。進歩ってもんがないな、お前さんたちは」

「うっせーぞ、てめえ、クラニィ！　偉えらっそーに、上から見てるみてーな物の言い方してんじゃねえ！」

「んだ！　だいたい、今、上にいるのはオレらですから！　高さ的に！」

「ああ、そうだな」

　クラニィは呆あきれたように鼻から息を吐はいて、後頭部をボリボリ掻いた。ローガンがくすりと笑って、それを見たデ・ペドロとギャンガーがまた何か言った。ローガンはすぐに謝ったが、二人は不満そうだ。

「ボクらは賭と場ばを開くつもりだ」

　アジアンはクラニィの目をまっすぐ見つめた。

「大きな賭場だ。胴どう元もとはボクがやる」

「そうかい」

　クラニィは目をそらさなかった。

「で、それがどうした」

「キミたちにも手を貸して欲しい」

「結局、まんまとダリエロに丸めこまれたか」

「違う」

　アジアンは自分の胸に右手を押しつけた。

「思いついて今まで準備を進めてきたのはたしかにダリエロだけど、話に乗ることにしたのはあくまでボクだ。ボクが自分で決めた」

「お前さんの意志で」

「ああ」

「俺たちを誘さそってるのもお前さんの独断か」

「胴元はボクだ」

「あのダリエロが本心からお前さんにひれ伏ふしてるとは思えんがね」

「そうかもしれない。でも、目的のために手段を選ばないのがあの男の流りゆう儀ぎなら、賭場が開くまではおかしな真ま似ねはしないサ。牙きばを剝むくのはそのあとだと思う」

「外、か」

　クラニィは上半身をのけぞらせて寝しん台だいに両手をつき、どこか遠くを見る目をした。

「また面めん倒どうくせえことを」

「……気づいていたんだネ。ダリエロが何をしようとしているか」

「俺だってな。考えなかったわけじゃあないさ。考える時間だけはたっぷりあったからな」

「考えるなと、ボクには言ったくせに。考えたって何がどうなるわけでもない、と」

「一から十まで本音ばかり喋しやべるわけじゃあない。他人が吐いた台詞せりふをいちいちぜんぶ真に受けてたら馬ば鹿かを見る羽目になるぞ」

「信じたらいけないのか。信じようとしたら」

「信じられるほうの身にもなってみろよ。誰だれもがいつもいつも誠実でいられるんならいいがな。そうもいかんだろうさ。みんな怖こわいんだ。傷つきたくない。傷つけたくない。まあ、そうじゃないやつもいるがね。始終何かを恐おそれて生きてることには変わりないんじゃないか。お前さんだってそうだろう」

「ボクは」

「何が怖い」

「……自分が」

「お前さん自身か」

「わからないから」

「自分のことなんざ、誰だってわかってるようで意外とわかってないものさ」

「そうじゃない」

「何がだ」

「ボクは」

　わからないんだ。

　どこまでがボクで、どこまでがボクじゃないのか。

　この手はボクのもの？　指は？　足は？　目は？　耳は？　唇くちびるは？　髪かみの毛は？　ボクのものだ。そう思う。そう感じ

ている。でも、そう思いこんでいるだけじゃないのか。証しよう拠こが欲しい。ボクがボクであることの証明が。だから生きたかった。生きて、生きて、生きて、生き抜ぬいて、ボクはいつかそこにたどりつく。年老いて、ぼろぼろになって、朽くちる寸前、ボクは実感することができるはずだ。ああ、この人生はたしかにボクのものだったと。それくらいしかないじゃないか。ボクは何も知らない。親すら知らない。ボクはどうやって生まれたのだろう。それすらわからない。気がついたら、ボクはボクとしていた。しかも、ボクはボクだけのものじゃなかった。何かがボクに話しかけてきた。ボクを蔑さげすみ、嘲あざけり、罵ののしって、ボクを引き裂さこうとした。もうボクはとっくに引き裂かれているのかもしれない。ボクは引きちぎられて彼らに与あたえられた餌えさにすぎないのかもしれない。この手はボクのもの？　指は？　足は？　目は？　耳は？　唇は？　髪の毛は？　ボクのものかもしれない。ボクのものじゃないかもしれない。どこまでがボクで、どこまでがボクじゃないのか、わからない。わからないんだ。もしかしたら、ボクなんてものは、そもそも存在しないのかもしれない。

　それでも、ボクはここにいるんだ！

　そうだろう？

　誰かそうだと言って欲しい。

　ボクを見て欲しい。ボクの正体を。ボクの実体を。ボクにふれて欲しい。ボクの身体からだを。

　ダメだ。

　ばれたらどうしよう。暴かれてしまったら。ボクがボクでないことを知られてしまったら。そのことがはっきりしてしまったら。

　知られたくない。

　誰よりも、ボクが知りたくない。

　キミたちが見ているボクは、ボクじゃないかもしれないんだ。

　これがボクだと叫さけびたいけれど、やっぱりそうじゃないかもしれないんだ。

　真しん紅くの虹こう彩さいと黒い瞳どう孔こうの境目が金色に輝

かがやいている。

　きにしすぎだよ。しんぱいすることはないのだよ。おまえはにんぎょうなのだから。わたしのためのにんぎょうなのだよ。おまえをもとめるものたちがたくさんいるよ。おまえはただこたえてやればいいのだよ。おまえはてにいれるだろう。おまえのそんざいりゆう。おまえがいることのかち。おまえはおまえでいられる。どうせおまえはけっしてにげられないよ。おまえのすべてはわたしがあたえたものだろう？　おまえはわたしのものだろう？　ほんとうはわかっているのだろう？　おまえもわかっているのだろう？

　わからない。わかりたくない。

「餓が鬼きだな、お前さんは」

　クラニィの手に髪の毛をくしゃくしゃにされた。

　少なくとも、その髪の毛はボクのものだろう。

「自分の頭の中だけでいくら考えたって、わからんことはたくさんあるんだ。というかな。わからんことだらけだぞ。生きてればな。しょうがないのさ。答えがない問題だってあるんだ。自分一人じゃあ出せない答えはもっと多い。俺だってそうさ。お前さんや他ほかの連中とつるむようになってからようやく見えてきたものとか、気づかなかったことに気づいたりとかな。いくらでもある」

「ボクらと……？」

「お前さんが言いだしたんだろう。あのときは驚おどろいたがね。まさか、よりにもよってお前さんが、ってな。他のやつらも同じだったはずだ。でもな。考えてみりゃあ、お前さん以外にはできなかったんだ」

「言いだした」

「覚えてないのか。べつにいいんだがね」

「ボクが」

「あれが始まりだったな」

「始まりだった」

「何度もはらはらさせられたがね。そのたびにお前さんは乗り越えた」

「でも、それは」

「そうだな。お前さん一人じゃあ無理だっただろうな」

「無理だった」

「お前さんは一人じゃない」

「わかってるヨ」

「そうかい」

「わかってる。そんなことは。わかってるんだ。でも──」

「外、か」

　クラニィは上半身をのけぞらせて寝しん台だいに両手をつき、どこか遠くを見る目をした。

「また面めん倒どうくせえことを」

「気づいていたんだネ。ダリエロが何をしようとしているか」

「俺だってな。考えなかったわけじゃあないさ。考える時間だけはたっぷりあったからな」

「考えるなと、ボクには言ったくせに。考えたって何がどうなるわけでもない、と」

「一から十まで本音ばかり喋しやべるわけじゃあない。他人が吐はいた台詞せりふをいちいちぜんぶ真に受けてたら馬ば鹿かを見る羽目になるぞ」

「手を貸してくれるかい」

「邪じや魔まはしないさ」

「信じるヨ」

　アジアンはクラニィに微笑ほほえんでみせた。

　クラニィは動じなかった。

「何のかの言って、キミはお人好しだからネ」

38

　具体的かつ詳しよう細さいな策があるわけではなかった。ただ、医務室ではヘンドリクが療りよう養よう中だ。それが一つの要点となる。自信はあった。少しでも隙すきを作ることができれば、必ず事を成し遂とげてみせる。

　自由時間になってすぐ、係員に連れられて医務室に行った。久しぶりの検けん診しんだった。せんせいはナジを肩かたの上にのせて書き物をしていた。廊ろう下か側の寝台がカーテンで仕切られている。そこにヘンドリクが寝ねかせられているのだろう。アジアンは、調子はどうだい、と尋たずねてきたせんせいに、見み舞まいをしたい、と頼たのみこんだ。四号房ぼうの仲間だから、ずっと心配だった、できれば様子を見たい、お願いします。深々と頭を下げてみせると、せんせいは少し考えこんだだけで、いいだろう、とうなずいた。

「ただし、少しだけだよ。おいで」

　はい、と従順な返事をして、せんせいに付き従い、カーテンの合わせ目をくぐった。ヘンドリクは起きていた。アジアンを見てわずかに目を瞠みはり、唇くちびるを動かしたが、声は出さなかった。首だの手首だのに包帯が巻かれている。まだ顔色が悪い。だいぶ瘦やせたようだ。痛々しい姿だが、本当は見かけよりも快復しているのではないか。目だ。アジアンに目を向けた瞬しゆん間かんの眼光、その強さが衰すい弱じやくしている重傷者のものとは思えなかった。

　ヘンドリクは寝台の上で悶もん々もんとしているのかもしれない。誰だれが自分をこんな目に遭あわせたのか。あるいは、アンガルセンの仕し業わざだということはわかっていて、そのうえで考えつづけているのかもしれない。恨うらんだり、憎にくんだり、苦しんだりしているのかもしれない。自分の中で何らかの答えが出るま

で、起きあがらずにじっとしようとしているのかもしれない。

　アジアンは寝台の脇わきで身を屈かがめてヘンドリクと見つめあった。

「大だい丈じよう夫ぶかい」

　ヘンドリクは微かすかに鼻を鳴らしてゆっくりと頭を横に向けた。アジアンはその耳に顔を近づけた。せんせいが天てん井じようを見上げた。今なら見られていない。囁ささやきかけた。ボクガアッチヘイッタラアバレテ。ヘンドリクが横目でアジアンを見た。もうせんせいはこちらへ目を向けている。アジアンはそっとうなずいてみせた。

「キミはよくなることだけを考えればいい。心配はいらないヨ」

　ヘンドリクは答えず、苦しげに低く呻うめいただけだった。名演技だ。アジアンはせんせいに、ありがとうございます、とまた頭を下げてカーテンの合わせ目をくぐり、回転椅い子すに腰こしを下ろした。せんせいも椅子に腰かけ、机の上の紙切れを何気なくといったかんじで手にとって、何か喋ろうとした。

　ヘンドリクが咳せきをした。鼻を啜すする音がそれにつづいた。ヘンドリクは喉のどにからんだ痰たんを切ろうとしてうまくゆかず、荒あらい息をした。もう一度、咳。せっぱつまった息づかい。振ふり返ると、ヘンドリクの寝台を仕切っているカーテンが揺ゆれた。足をのばして蹴けったのか。

　せんせいが椅子から立ちあがり、アジアンの肩に手を置いた。

「ここで待っていなさい」

「はい。大丈夫ですか。ヘンドリク—４２４は」

「見てくるよ。ただ、彼は快方に向かっているはずだ。また、何らかの処置が必要であれば、私はそれを施ほどこすだろう。私が言えることはそれだけだ」

「お願いします」

「きみにそう言われるのは悪い気分ではないよ」

いくらでも言ってやる。形ばかりの服従なら大おお盤ばん振ぶる舞まいしても惜おしくない。きっとまだ思っているのだろう。ボクのことを自分の人形だと。意のままに操あやつることができる人形にすぎないと。勝手に思っていればいい。口では否定したりしない。行動で示してやる。

せんせいがカーテンをくぐっていった。アジアンは立ちあがるというよりも、滑すべり落ちるように椅子から離はなれて、せんせいの机の下に置かれていた箱形の鞄かばんに手をかけた。余計なことは一いつ切さい考えなかった。思うだけで身体からだは動いた。アジアンは音を立てないように指で押さえて留め金を外し、鞄を開けた。箱形の鞄の中にはさらに箱形の物体が収められていた。それを持ちあげると、なめらかな手ざわりの布が張られた鞄の内側にファスナーがついていた。左右一列ずつとりつけられた金属の小しよう片へんが互たがいに嚙かみあっていて、中央の金具を動かすことで開閉できるポケットだ。アジアンは金具の両りよう端たんを押さえながらファスナーを開けた。音はほとんどしなかった。ポケットの中に、それはあった。

黝あおぐろい金属でできていて、ずっしりと重く、輪に棒がぶら下がっていて、その棒から短い横棒が左右に何本も突つきだした形をしている。

鍵だ。

これこそが賭場を開くためにどうしても必要な駒だった。

アジアンは間を置かずに上着の内ポケットから粘ねん土どをとりだした。それで輪にぶら下がっている棒より下の部分をくるむようにして型をとった。粘土をしまったら、あとはもとどおりにするだけだ。鍵をポケットに収め、ファスナーを閉めて箱形の物体を鞄の中に戻もどし、鞄を閉めて留め金を止めた。鞄を机の下に置いて、回転椅子に座ったころにはもう、自分が何かをしたという実感すらなくなっていた。ボクは何もしてない。ずっと椅子に座っていた。そう信じることさえできた。むしろ、そうとしか思えなかった。動どう揺ようなんて微み塵じんもしていなかった。平静そのものだった。

せんせいは間もなくカーテンをくぐって戻ってきた。

「痰がからんで呼吸がしづらくなっただけのようだ。もしかした

ら、きみと顔をあわせて多少興奮したのかもしれないね。いずれにしても、もう平気だよ。あまり食べてくれないこともあって、だいぶ衰弱しているが、食べられるようにさえなれば体力もつくだろう。そう遠くないうちに一いつ般ぱん房に戻れるはずだ」

「そうですか」

「では、きみの診しん察さつをしよう」

　はい、と短く返事をしながら、もどかしさのようなものを感じていた。自分は何かに気づいているのだが、それが何かわからない。どうしてすぐにわからなかったのか。かえって不思議なほどだった。

　ナジがいない。

　さっきまではせんせいの肩かたの上にのっていたはずだ。さっき？　正確には、いつまで？　医務室に入ったときは間ま違ちがいなくいた。ヘンドリクの様子を見にいったときはどうだっただろう。いたような気もするし、いなかったようにも思える。覚えていない。はっきりしない。

「どうかしたのかい」

　せんせいが唇の両側をつりあげてみせた。

「顔色がすぐれないよ」

「何でもありません」

「それならいいが。ああ、そうだ。今、思いついたことがある。少しいいかい」

　せんせいは机の中から白い紙をとりだして何か書きはじめた。いったい何を書いているのか。のぞき見したい衝しょう動どうに駆られた。見て、内容を確かく認にんしなければならない。それは義務感にも似た強い欲求だったが、できなかった。不ふ審しんに思われる行動は慎つつしむべきだ。万が一あやしまれて、上着の内ポケットの中にある駒の型が発見されでもしたら、元も子もなくなる。賭場は絶対に開かなければならない。今は普ふ段だんどおりに振り舞うべきだ。わかっているのだが、それでも気になる。せんせいは何を書いているのか。ナジはどこに行ったのか。

　せんせいがペンを置いて、紙を真っ二つに破り、片方を握にぎりつぶして、もう片方は壁かべに鋲びようで留めた。

　希望

　計画

　潜せん伏ぷく

　我がものに

　書き殴なぐられた文字はそのように読めた。

「これでいい」

　せんせいは椅子に座りなおして脚あしを組んだ。

　まっ黒くてまん丸い、尻尾しつぽのある生き物が机の下から飛びだしてきて、せんせいの脚を伝って肩の上にのった。

「さあ、今度こそ診察をしよう」

「はい」

「服を脱ぬぎなさい」

　ボクは何もしてない。ずっと椅い子すに座っていた。自分にそう言い聞かせながら、慎しん重ちように、だが、無造作を装よそおって服を脱いだ。どのみちもう引き返すことはできない。ボクは後ろを見ずに前へと進む。ボクは人形なんかじゃない。この軛くびきから逃のがれて、そのことを証明してやる。そうする以外ないし、何よりもボク自身がそう望んでいるんだ。

39

　最後の準備に六日かけた。その間に左足の甲こうの亀き裂れつ骨折がすっかり治ったとダリエロは言い張って、アジアンの目の前で床ゆかを強く蹴けってみせた。ヘンドリクも一般房ぼうに戻ってきた。ただ静かに日々はすぎていった。もはや猶ゆう予よすべき理由はなかった。

　消灯、就しゆう寝しんの号令がかかってから、もう五時間以上が経過している。廊ろう下かの照明は点つけっぱなしだが、四号房の中には光を発するものは一つもない。それでも、十三番は一番廊下に近い小屋なので、まだ明るいほうだ。

　何か硬かたいものにやわらかいものを押しつけたような、本当に微かすかな、よくよく注意していなければ聞き逃してしまうに違いない音が聞こえた。

　寝しん台だいから顔だけ出して通路のほうに目をやると、白はく髪はつの男が鉄てつ格ごう子しに手をかけてこちらを見ていた。

　アジアンはうなずいて寝台から降り、足音を忍しのばせて男に近づいた。

「成功を」

「言われるまでもねぇ。この俺がこんなところでしくじるかよ」

「そうだネ。キミはやると言ったら必ずやる男だ」

「あたりめぇだろうが」

「信じるヨ」

「ああ……？」

　ダリエロは目をそらして鼻をこすった。

「糞くそが」

一般房の鍵は、一号房から八号房までの扉の鍵、それから各房内の小屋の鍵、浴室や見張り小屋の鍵など、ぜんぶ別々だから、あわせればかなりの数だが、一般房担当の係員はそのすべてをいくつかの束に分けて腰こしにぶら下げている。四号房にはアルバートをはじめとして手て癖くせの悪い者が何人もいるとはいえ、鍵束の中から特定の鍵をくすねることはもちろん、鍵束ごと盗ぬすみとるにしても容易ではない。うまくいったとしても、なくなったことに係員が気づけば、当然、問題になるだろう。盗んだ鍵で型をとり、気づかれる前に戻もどすという方法も検討されたが、あまりに危険が大きすぎた。

結局、ダリエロは第三の道を選せん択たくした。ある意味、最大の博打だったかもしれねぇな、とダリエロはアジアンに語った。
正々堂々と盗む、あまり正せい攻こう法ほうらしくない正攻法が通用しないのなら、搦からめ手から攻せめるしかない。弱点を突つくために、どうすればいいか。

考えに考え抜ぬいた末に、ダリエロは女たちを仲間に引き入れることを思いついた。ただし、同じ房ではないので、力ずくで従わせることはできない。そこで、みずから公言しているように、目的を果たすためならば手段を選ばないダリエロは、運動場に二つある階段椅子の一方の支配者、八号房の房長クララに、自分の企たくらみを打ち明けたうえで協力を求めた。

ダリエロは博打に勝った。あくまで対等の立場ではあったが、クララたちと手を結ぶことに成功したのだ。なあに、賭場が開いちまえばこっちのもんだしな、全員残らず犯ヤっちまえばいい、などとダリエロはのたまっていたが、彼女たちは頼たよりになる同盟者だった。八号房の房長補ほ佐さで、クララの参さん謀ぼう格と目されているものの、実態はほとんど房長と同格といってもいいベティが陰かげの立て役者だった。彼女は搦め手からの攻こう略りやく法ほうを幾いく通りも考えだして、そのなかでもっとも分がいいと思われる策が採用され、適切な人材が選定されて、実行に移された。

すなわち、八号房のナツコが係員の一人をたらしこみ、深夜、自分の小屋に誘さそいこんで事に及およばせる。その間に、係員が脱ぎ捨てたズボンをナツコと同室の者が拝借して、ベルトに吊つるされている鍵束から目当ての鍵を探しあて、その型をとる。型をもとに、無口だが度胸があり、手先がきわめて器用なリョーヨルカが、金工の作業中に係員の目を盗んで鍵の複製を作る。

要約してしまうと簡単だが、小屋に迎むかえ入れた係員をすぐさま寝台の梯はし子ごに押しつけて服を脱がせ、ズボンをその梯子に引っかけてから寝台の下段に押し倒たおす、といった具合に、実際には綿密に手順が決められ、何度も予行演習が行われた。ナツコの同室者はもともと姉のヴィクトリアだったのだが、妹の情事を目まの当たりにしなければならないことや、性格的な向き不向きを考こう慮りよして部屋替がえを行い、ジャン・スタンバックに交代した。ジャン・スタンバックは八号房にいることからもわかるとおり女性だし、口くち髭ひげさえ生やしていなければ、容よう貌ぼうも女性のそれだ。風変わりな人物ではあるが、とにかく人並み外れて冷静沈ちん着ちやくで、責任感が強く、なおかつ精神的にタフで、義ぎ理り堅がたくもあり、信しん頼らいが置けるとのことで、ベティに指名された。

ジャン・スタンバックは見事その期待に応こたえてみせた。

もちろん、ナツコもうまくやった。

リョーヨルカは事もなげに鍵を作って、アルバートがそれを作業場から持ちだした。

その甲か斐いあって手に入れることができた四号房及および四号房の一番小屋の鍵、それから一いつ般ぱん房内に二箇か所しょ存在する係員の詰つめ所、見張り小屋と呼ばれている小部屋のうちの一つの鍵が、今、ダリエロの手の中にある。

その鍵を使って小屋を抜けだしてきたダリエロが、四号房と廊下を隔へだてている格子状の鉄てつ扉ぴに手をかけた。鉄格子の合間に手を突っこんで、扉の外側にある鍵穴に鍵を差しこんで回すと、かちりと音がした。鉄扉には入念に油が差してある。一般房内の清せい掃そうが新しく作業に組みこまれてから、クララが係員に進言し、所長の承しよう認にんが下りて実現した。そのおかげもあって、鉄扉はほとんど音を立てずに開いた。

ダリエロは廊下に出て、少しだけ隙すき間まを空けて鉄扉を閉めた。アジアンと目があった。ダリエロは薄うすい唇くちびるを舌先で舐なめ、うなずくともなくうなずいて廊ろう下かの向こうに消えた。二十二時の消灯・就しゆう寝しん以降、係員は約二時間おきに一般房内の見回りをする。現時刻は三時で、ちょうど二時と四時の見回りの間だ。四角い一般房の対角にある見張り小屋に、それぞれ一人ずつ詰めている係員は今ごろ休きゆう憩けい中だろう。時間帯

が時間帯だけに、舟ふねを漕こいでいるかもしれない。その係員から鍵束を奪うばう役目については、ダリエロは最初から他ほかの者に任せる気などさらさらなかったようだ。自信もあるらしい。成功を確信しているようでさえあった。

いずれにせよ、アジアンは待っているしかない。

寝しん台だいの上段でシュトレーハウゼンが身を起こす気配がした。

他の小屋でも皆みなが次々と起きだしているだろう。

見張り小屋は四号房を出て三号房、二号房、一号房の前を通りすぎた先にある。一号から八号までの房をぐるりと取り囲んでいる廊下の角だ。ここからだと普ふ通つうに歩けば一分もかからないが、足音を消して、気配を絶ってということになれば、もう少し時間が必要かもしれない。行って、何らかの手段で鍵を盗むか強ごう奪だつして、戻ってくる。どれくらいかかるだろう。

気持ちは落ちついている。

不安らしきものは感じない。

遠くで何か物音がした。

気のせいではない。たしかに聞こえた。

あまりにも微かすかだったので、はっきりとはわからないが、音というよりも、あれは声か。

シュトレーハウゼンが梯子を使って寝台の上段から降りてきた。

それから間もなくだった。

ダリエロがやはり音もなく戻もどってきて四号房の鉄扉を開け、赤い液体で濡ぬれそぼっている重そうな布の包みをポケットからとりだした。じゃら、と金属がこすれあう音がした。包みの中身は鍵束だった。戦利品はそれだけではなかった。ダリエロが腰こしにぶら下げているホルダーには見覚えがある。ありすぎるといってもいい。係員の教導鞭べんだ。

「殺やったのか」

「まぁな。それが一番手っ取り早ぇ」

　鍵束をくるんでいた布だけではない。ダリエロの衣服はあちこちが赤いもので汚よごれていた。ダリエロは十三番小屋の鍵を開けながら、その不ふ吉きつな面相に物ぶつ騒そうな笑えみを刻んだ。

「見張り小屋はもう一つある。べつに俺が片づけてきてやってもいい。たいした手間じゃねぇし、もともとそのつもりだったからな」

「いや」

　アジアンは小屋から通路に出て、首をわずかに傾かたむけてみせた。

「ボクがやる」

「ほぉ」

　ダリエロの青い右目が見開かれ、黒い左目が細められた。

「いいところを見せてぇって柄がらでもねぇよな、てめぇは。俺と張りあうつもりか。それとも、大将として、手下だけに手を汚させる気はねぇってか」

「手下だとは思っていないヨ」

「じゃあ何だと思ってやがるんだ」

「仲間じゃないのか」

「はあ？」

「キミはボクの仲間だ。少なくとも今のところはネ」

「笑わせるぜ」

　ダリエロはもとからゆがんでいる顔をさらにゆがめ、唾つばを吐はこうとして、途と中ちゆうでやめた。

「ふざけたことぬかしてんじゃねぇ。こんなときに冗じよう談だんなんざ飛ばしてる場合かよ、塵ゴミ屑クズ野や郎ろうが。てめぇがやるってんなら、とっとと行きやがれ」

「こっちは頼たのむ」

「見張り小屋を片づけたら、女どもの房ぼうを解放しろ」

「わかってるサ」

「鍵だ」

　ダリエロが鍵束から鍵を一本抜ぬいて投げてよこした。見張り小屋の鍵だろう。

「他のもいるか」

「あとは自分で手に入れる。キミが奪った分は予備としてキミが持っておけばいい」

「仕損じるんじゃねぇぞ」

「ああ」

　アジアンは四号房を出て、八号房の近くにあるもう一つの見張り小屋へと向かった。一人きりで無人の廊下を歩くのはこれが初めてだが、戸と惑まどいはなかった。閉鎖房にいたころはもちろん、一般房に移ってきた当初は、自分の身体からだが自分のものではないかのようで、ひどく脆ぜい弱じゃくで鈍どん重じゅうな乗り物をたどたどしく操あやつっているような感覚だったものの、今は違ちがう。考える必要はなかった。思うだけでいい。

　見張り小屋は廊下の突つきあたりの向かって左側にある。アジアンは左の壁かべ際ぎわをまっすぐ歩いた。いや、歩いているという意識すらとくになかった。とにかく、あの見張り小屋の前まで移動する。そう思えば、身体が勝手に最善の道筋と方法とを選んで動いてくれた。障害となりうるものは何もなかった。隠かくれることもしなかった。

　アジアンは見張り小屋の扉の前に立っていた。

　格こう子し状の鉄てつ扉ぴの向こうには、二人か、せいぜい三人が寝ね転ころがれる程度の小部屋があって、一組の机と椅子が置かれている。

　椅子に座っていたわりと大おお柄がらでやたらと顎あごの長い係

員が、やけにゆっくりとした動作でこちらを見ようとした。

　鍵を使おうとは思わなかった。

　右手で鉄格子をつかんだ。

　アルカーディア。

　ボクはたしかにそう言った。

　それが何を意味するのか、ボクは知らなかった。

　知らないくせに、ボクはその名を呼んだ。

　知らないと言い張るために、ボクは目を閉じていた。

　目を開けると、係員も大きく両りよう眼めを見開いていた。

　椅子に座ったままだった。

　額に黒っぽい穴が空いていて、そこから血が流れだしていた。

　鉄格子をつかんでいたはずの右手が別のものを持っていた。

　鍵束だ。

　もう呼吸をしていないだろう、あの係員から奪うばったのか。

　アジアンは見張り小屋に背を向けた。

　動どう揺ようしていることを悟さとらせてはならない。

　誰だれに？

　自分自身に。

　騙だまさなければ。

　隠さなければ。

　何もなかった。おかしなことは起こっていない。何も見ていない。でも、この手の中には鍵束がある。

　アジアンはそれを使って八号房の鉄扉を解かい錠じようし、ナツコとジャン・スタンバックの十三番小屋を開け放った。ナツコはすぐに寝しん台だいから飛びだしてきた。抱だきついてこようとしたので、身をかわして鍵束を渡わたした。ナツコは不満げだったが、文句は言わなかった。八号房の小屋がナツコとジャン・スタンバックの手によって次々と開放されていった。奥の一番小屋からクララが、二番小屋からベティが出てきた。クララとベティが立てつづけに何か言った。アジアンはうなずいたが、何に対して首を縦に振ふったのか、自分でもよくわからなかった。

　ナツコに鍵束を手て渡わたされたクララは、白シロ妙タエとミョーチ、コリンに、それぞれ七号房、六号房、五号房の開放を指示した。鍵束は分割されて配られた。

　どこか水すい棲せい生物を思わせる容姿の白シロ妙タエが、にゃははーん、とでも表現するしかない奇き矯きような笑い声を発しながら八号房を飛びだしていった。

　小こ柄がらで、剝むきだしにした額に渦うず巻まきの刺青いれずみがあるミョーチは金属の味が好きらしく、鍵を口にふくんでいた。

　コリンは、放ほうっておかれると、壁かべに頭を叩たたきつけたりちぎれかけるほど指を嚙かんだりする癖くせのある女だった。自分は疫やく病びよう神がみだとさかんに言い募つのって顰ひん蹙しゆくを買い、よくクラニィにたしなめられていた。仲間内では、クラニィに叱しかられたくてたまらないだけなのではないかとも囁ささやかれていた。

　ボクは知っている。

　彼女たちのことを知っている。

　祝花ノリカは引っ込み思案で、いつも袖そでのにおいを嗅かいでばかりいる。雷ライ切キリと同じ凰おう州しゆう難民で、二人は幼おさな馴な染じみだ。流れついたエルデンで、祝花を養うために辻つじ強ごう盗とうの真ま似ね事ごとをしていた雷ライ切キリは、腕うでっ節の強さと度胸のよさを見こまれて蛾が次じ郎ろう組というクランに引き入れられた。だが、好色な組長マスターゲマルジが自分の孫ほどの年ねん齢れいの祝花ノリカを見み初そめ、雷ライ切キリに幼馴染みを差しだすよう要求した。雷ライ切キリは拒きよ絶ぜ

つし、ゲマルジを斬きって逃にげた。四十余名に追われる身となった二人に救いの手をさしのべたのは、雷ライ切キリにとっては仕事がらみで一面識があっただけの取り立て屋だった。

〝嵐ストーミーの〟ラギィは何日も飲まず食わずで動かずにじっとしていることもあれば、あのダリエロに猛もう然ぜんと食ってかかることもある度を過ぎた気分屋だ。

　がりがりに痩やせた〝骨女〟ロロは独特の占うらないをする。少しだけ魔ま術じゆつも使える。いつだったか、トトと占い対決をした。みんなで昼飯を食べたときだった。ルールはよくわからなかったが、勝敗は全員で多数決をとって決めた。ロロが勝って、トトはそうとう落ちこんでいた。

　レイジ。あのレイジの妹を名乗っているが、血のつながりはない。彼らレイジ兄妹は誰かに依い頼らいされてアジアンを殺そうとした。不意打ちではなかった。通せんぼをしてきて、ちゃんと名乗ったうえで襲おそいかかってきた。彼らはぴったりと息が合っていた。彼らが繰くりだす技わざは意外性に富んでいて、鋭するどく、冴さえていた。二人で丁てい寧ねいに死角を補いあってもいた。彼らは心底から戦いを楽しんでいるようだったし、アジアンも楽しかった。まるで三人で遊んでいるみたいだった。しばし真しん剣けんに、本気でその遊びに熱中した。殺すことを忘れたほどだった。誰が彼らに自分の殺害を依頼したのか、そんなことにも興味がなくなっていた。彼らも同じだった。

　ミシーリャは第九区の外れの道みち端ばたに倒たおれていた。朝方だった。ミケランジェロで飲んで、その帰り道だった。死体ではないことは一目でわかった。微かすかに肩かたが上下していたからだ。そのままにしておけば、だが、そのうち動かなくなるだろう。エルデンでは行き倒だおれなど珍めずらしくもない。通りすぎようとした。なぜか足が止まった。一いつ緒しよにいたダリエロが舌打ちをして、そのくせアジアンより先にミシーリャに近づいていった。首根っこをつかんで、持ちあげた。何だ、この塵ゴミ屑クズ、阿あ呆ほうみてぇに軽いな。

「──とはいえ、これからですわね、本番は」

　クララは数人、いや、それ以上、おそらく二十人か三十人もの男たちに追われていた。たまたまその場面に出くわした取り立て屋が得意のお節せつ介かいを焼いて、アジアンらも手を貸す羽目にな

り、クララを助けたのだが、まさしく余計な世話だったのかもしれない。追っ手はラフレシアの貴族にして貿易商、シャストロ・ド・デプレの手の者たちだった。なぜド・デプレがクララをつかまえようとしていたのかというと、彼女が彼の娘むすめだからだ。動機は知らないが、クララは父親のもとから逃げだし、逃げ切るために、取り立て屋の親切心につけこんで、これを利用し、まんまと逃げおおせた。たとえ誰かにそう非難されたとしても、本人は悪びれずに悠ゆう然ぜんと笑いながら、行きがかり上やむをえなかっただけですわ、と主張してみせるに違ちがいない。

「気を引きしめて参りましょう。ここまできてしまえば、失敗は許されません。これが最後の機会と思い定めて、必ずやわたくしたちの大願を成じよう就じゆさせるのです」

「あんまり気張りすぎると、足あし許もとが見えなくなるわよ」

「そのあたりの気配りは、たとえばベティさん、あなたのような性しよう根ねからひねくれてらっしゃる方にお任せしますわ。この先は突とつ撃げき、突とつ貫かん、突とつ破ぱの戦いくさです。何よりも必要とされるのは勢いですわ」

「突撃、突貫、突破か」

　短めの黒くろ髪かみに寝ね癖ぐせをつけたまま小屋から出てくるなり、小鼻を膨ふくらませて右の拳こぶしで左の掌てのひらを何度も殴なぐってみせたのはカイだ。

　カァイ。キミと初めて会ったのはアンダーグラウンドだった。最初は偶ぐう然ぜんだったのだろうが、同じ異界生物フリークスに狙ねらいをつけて、何人もいたこちらが先に獲え物ものをしとめた。そんなことが何度かつづいて、キミはむきになった。ダリエロがおもしろがって、キミを挑ちよう発はつしたりもした。キミはアンダーグラウンドの外までついてきて、ボクらに決けつ闘とうを挑いどみ、リキエルが受けた。キミはリキエルに蹴け散ちらされた。ズボンを下ろそうとしたダリエロを、ボクが止めた。リキエルに、筋は悪くない、だが、すべてにおいて単純すぎる、と冷静に指し摘てきされて、キミは烈れつ火かのごとく怒おこっていた。リキエルがn'ebulaの場所を教えて、またいつでも挑んでくるがいい、とキミに告げた。もしかしたら、リキエルはカイのことを気に入ったかもしれない、と思った。初めてオトミさんの店でみんなと一緒に飯を食ったキミは、わざわざ隅すみのほうの席に移動して、目をぎらぎ

らさせ、不安そうに、何かに怯おびえているかのように、食べるというより、ただ食べ物を胃の中に流しこんでいた。何なんだい、ありゃあ、とオトミさんが苦笑いしていた。ボクは、でも、どうしてキミがそうしているのか、なんとなくわかった。少なくとも、わかったような気がした。ボクはキミのそばに行って伝えた。ここは大だい丈じよう夫ぶだヨ。オトミさんの店で乱暴狼ろう藉ぜきを働く怖こわいもの知らずはそうそういないサ。キミはボクと少しだけ似ているけれど、まったく違う。いつも素す直なおで正直だ。はっとしたように顔を上げて、心底から意外そうに、キミは言った。え、そうなのか、と。

「あたしの得意分野だ。邪じや魔まするやつは何であろうと粉ふん砕さいしてやる」

「頼たのもしいわね」

　ベティが肩をすくめてみせた。キミはとても頭がよくて、それでも自分が現時点で到とう達たつできる高みには限界があることも知っているようで、何もかも見み抜ぬいているようでもあるけれど、自分に見通せないものがあることもわきまえているようだった。ボクはキミと、それから一人の取り立て屋を通して、自分のことや、自分以外の人間のことをたくさん学んできたように思う。ボクにはそういう存在がいないから、この感じ方が正しいかどうか自信はないが、ボクにとってキミは姉のようで、取り立て屋は兄のようだった。同時に対等の仲間で、友でもあった。ときに、自分でもよくわかっていないことをまるでわかっているかのように話し、振ふる舞まおうとするボクを、キミたちはそれと了りよう解かいしたうえで受け容いれてくれた。包み隠かくさず言えば、キミを異性として意識した瞬しゆん間かんもボクにはあった。そのときはたぶん自分でも理解できず、おそらく今だからわかることだけれど、ボクは少なくともある部分、キミに惹ひかれていた。あのときボクの前で弱さをさらしたキミに、もっと寄り添そうべきかもしれないと思いもした。結局、ボクはそうしなかった。キミが望まないだろうと考えたからか。それとも、ボクはやはり踏ふみこむことが怖かったのか。いずれにしても、ボクは目の前にいないキミを思ったことはなかった。ボクはキミに恋をしなかった。きっとキミはそのことに気づいていて、だから、適切な距きよ離りを置いて、ボクの仲間で、友だちでいてくれる。もしかしたら取り立て屋と同じくらいボクのことを理解してくれているキミに、それでも秘密にしていることは、ひた隠しにしていることはたくさんあるのだけれど、ボクは

甘えているのかもしれない。キミはボクを甘やかしてくれる、ナツコにとってのヴィクトリアのような、姉のごとき存在なのかもしれない。

　ボクは一人じゃない。

　一人きりには程ほど遠い。

　がらんどうの人形でもない。

　どんどん内容物がこぼれ落ちていって、それはその中身がかりそめの、水増しのための、がらくたや廃はい液えきや模造品の残ざん骸がいのようなものでしかないからだと思っていたけれど、ボクの中はいつしかこんなにもたくさんのもので満たされていた。

　歓かん声せいというよりも、ほとんど怒ど声せいに近いような野太い声が聞こえてきた。

　四号房ぼうと八号房の者たち以外は、計画のことを何も知らない。ただ、全員が房から解き放たれて、扇せん動どうされれば、この一いつ斉せい蜂ほう起きに参加しようとしない者は少数だろう。皆みな、ここから出たい。あきらめたり、外があるということ自体、忘れていたりする者が大半だとしても、今、出られるのだ、出口はすぐそこにあるのだと示されれば、意識せざるをえないはずだ。アサイラム。だいたい、ふざけた名前ではないか。アジアンが知っているアサイラムは、こんな場所ではない。なぜここがよりにもよってアサイラムなのか。どうして日の光も射ささないこのような息苦しい施し設せつに、いつまでも閉じこめられていなければならないのか。

　ボクは出る。

　ボクらは外に出る。

　外へ！

　外へ……！

「行こう」

　アジアンはベティらにそう声をかけて八号房をあとにした。開け放たれた七号房、六号房、五号房から廊ろう下かに出てくる女たち

の大半は、寝ね惚ぼけているか、まだ状じよう況きようを把は握あくできていないか、そのどちらかのようで、すでに事が成ったかのごとくはしゃいだり、興奮して駆かけ回ったりしている者はそう多くない。彼女らがまだ燻いぶっているだけの薪まきならば、誰だれかが息を吹ふきこんで火勢を強めなければならなかった。果たして、自分にそんなことができるだろうか。ここはクララやベティに任せたほうがいいかもしれない。そう思わなくもなかったのだが、女たちはアジアンを見るとなかなか目を離はなそうとしなかった。それも当然かもしれない。周りは全員女で、男はアジアンだけだ。誰だって奇き異いに感じるに決まっている。しかし、妙みような雰ふん囲い気きだ。男たちの声はいや増すばかりなのに、女たちは逆におとなしくなる一方で、これから一気呵か成せいに賭と場ばを開くところまで持ってゆかないといけないというときに、こんなことでいいのか。いや、よくはない。

「外だ」

　アジアンは女たちを見回した。

「行こう。外へ。自由になるんだ」

　手て応ごたえはあった。それまで疑っているようで、不安そうで、何がなんだかわかっていないようで、ぼんやりしていた女たちの顔つきが、一斉にぱっと明るくなった。

「ボクにつづけ！」



　アジアンは走りだした。女たちを引き連れて七号房の前を、六号房の前を、五号房の前を駆け抜ぬけ、突つきあたりを右に曲がると、一いつ般ぱん房の出入口のあたりに男たちが群がっていた。もう鉄てつ扉ぴは突とつ破ぱしたらしい。男たちは次々と十字廊下に吸いこまれていっている。アジアンは速度を上げて、男たちの間をすり抜け、猪い首くびの係員の死体を踏み越こえて、一気に先頭の

ダリエロに追いついた。十字廊下という呼び名の由来である廊下の交こう叉さ点てんが目の前に迫せまっていた。交叉点は四方を格こう子し状の鉄扉で囲まれていて、中には常時四人の係員が配置されている。しかも、この四人は他ほかの係員とは装備が違う。教導鞭べんではなく金属でできた伸しん縮しゆく自在の棒を腰こしにぶら下げていて、厚い胸当ても装着している。いざとなれば、頑がん丈じような鉄格子の檻おりに閉じこもり、中から棒をのばして外の者を攻こう撃げき、あるいは牽けん制せいしつつ、係員舎からの援えん軍ぐんを待てばいいというわけだ。ここで手間取れば、完全武装した係員が大勢駆けつけてきて、呆あつ気けなく制圧されてしまいかねない。それゆえに、この交叉点は関門の一つになると思われたが、ダリエロの考えは違ちがっていた。端はなっから守ろうって意識しかねぇ、腰の引けた連中なんざ目じゃねぇよ。

「手本ってやつを見せてやる……！」

　ダリエロがちらりとアジアンを見て唇くちびるの端を舐なめた。どうするつもりなのか。どうもこうもなかった。ダリエロは交叉点の鉄扉にまっすぐ突っこんでいった。怯ひるんだというよりも、たぶん驚おどろいたのだろう、中の係員たちが一瞬、下がりかけて、すぐに前に出た。係員たちはつづけざまに鉄格子の合間から棒を突きだした。ダリエロを迎むかえ撃うとうとしたに違いなかった。その中の一本が狙ねらわれた。ダリエロは棒の先せん端たんを軽々とつかんでしまった。

「グアハハッ……！」

　思いきり棒を引っぱられた係員は、無様に体勢を崩くずして鉄格子に倒たおれこんだ。ダリエロは棒を奪うばって後ろへ投げるなり、その係員の両りよう眼めに人差し指と中指を突き入れた。他の係員がダリエロを棒で突こうとしたが、遅おそかった。ダリエロはすでに棒が届かない位置まで後退していた。ダリエロが投げた棒は、老人にしか見えないが、本人が年ねん齢れいを明かさないから一応年齢不ふ詳しようで、左手の指を失った経けい緯いも黙もくして語らず、鳥を餌え付づけするのが趣しゆ味みだが、焼き鳥が大好物で、酒を飲んだときだけは陽気になるドルゲイが右手でしっかりと受けとっていた。

「──鵺ヌエ流古式戦闘術〝摩マ打ダ喝カツ〟」

　ドルゲイはぐっと腰を落として鉄扉にほとんど密着し、息もつか

せず鉄格子の隙すき間まから突き入れた棒を立てつづけに係員たちの喉のどや股こ間かんに命中させた。無む駄だな打撃は一いつ切さいなかった。あっという間だった。ダリエロに目玉を抉えぐられた係員は床ゆかを転げ回り、残り三人の係員はドルゲイの棒術によって金的を砕くだかれ、あるいは気道を潰つぶされて悶もん絶ぜつした。すかさずアルバートが鉄格子の隙間に手を突っこみ、倒れた係員の腰から探さぐり当てた鍵を、信じがたい角度に手首やら指やらをひん曲げて鍵穴に挿さし入れた。鉄扉が開いた。

　交叉点に足を踏ふみ入れた瞬しゅん間かん、頭の隅すみを暗い靄もやのようなものがよぎった。十字廊下は一般房と会堂、それから医務室や閉へい鎖さ房、保護房がある区画と、係員舎とを繋つないでいる。アジアンは係員舎のほうに目をやった。人ひと影かげはなかった。係員たちは援軍を呼ばなかったのか。仮にそんな余よ裕ゆうがなかったのだとしても、この騒そう動どうに誰も気づかないなんてことがあるだろうか。

　ダリエロたちはもう医務室方面に向かおうとしている。注意をうながすべきか、と考えながらあとを追っている間に、レイジとリー・ブラックが鉄扉の前に配置されていた係員を教導鞭で殴なぐり倒してしまった。外への扉をのぞけば、これが最後の鉄扉だった。突破した瞬間、皆みなが一斉に歓かん声せいをあげた。アジアンも叫さけびそうになった。心臓がものすごい勢いで暴れだして、もう他のことは何も考えられなかった。

　この先だ。この先に。ああ。そうだ。頼たのむ。力を貸してくれ。俺には、俺たちには、てめぇが必要だ。ダリエロにそう求められ、計画の詳しよう細さいを教えられたあと、即そく答とうはできなかった。考えた。考えに考えた。ずいぶん考えこんだ。返事をするまで、ダリエロもよく黙だまって待っていたものだと思う。

「──条件がある」

「何だ。言ってみやがれ」

「もう一人、外に連れだしたい人がいるんだ」

「わけがわからねぇな。言ったはずだぜ。俺の計画では、一般房ぼうの奴やつらは全員連れだす。たとえ烏う合ごうの衆しゅうでも、数は力だしな。途と中ちゅうで脱だつ落らくする奴はいるかもしれねぇ、まぁ、確実にいるだろうが、そいつは運がなかったと思って

あきらめてもらうしかねぇ。自分の力で道を拓ひらくこともできねぇ塵ゴミ屑クズのことなんざ知ったこっちゃねぇしな」

「一般房じゃない」

「何だと？」

「その人は閉鎖房にいる。ボクはその人を連れて行きたい。いや、その人を連れて行けないのなら、外に出る意味なんかない」

　ダリエロはうつむいてため息をつき、人を小こ馬ば鹿かにするように鼻を鳴らしてから、好きなのかよ、そいつのことが、と、らしくない、湿しめっぽい声で、呟つぶやくように言った。そんなに大事なのかよ、そいつのことが。

「ああ」

「好きにしやがれ。どのみちてめぇの要求を拒きょ否ひするわけにはいかねぇんだしな」

「ありがとう」

　思わず礼を述べると、ダリエロは、へっ、と笑って、ぶっ殺すぞ、と吐はき捨てるように、だが、やや力なく言って頭を振ふった。なんだか様子が変だった。気にはなったけれど、そんなことはどうでもいいんだ。本当にどうでもいい。

　医務室の前を通りすぎて、突きあたりを左に曲がって、まっすぐ行けば大きな扉がある。その手前だ。アジアンは閉鎖房の通路に飛びこんだ。向かって右側に扉が四つ並んでいる。こちらから数えて三つ目の扉の前で黒覆面が立ちすくんでいた。一人ではない。二人だ。ちょうど交代の時間だったのかもしれない。

「じ、お前じぶんら──」

　一方の黒覆面は腰こしから教導鞭を抜ぬいてアジアンの前に立ちふさがろうとしたが、もう一人の背の高い黒覆面は突つっ立っているだけだった。呆ぼう然ぜんとしているのか。そうではなかった。

　背の高い黒覆面は、腰に差した教導鞭ではなく、鍵束を手にとった。

まさか、と思う間もなかった。

背の高い黒覆面は三つ目の扉を解かい錠じようして、開け放った。

「な、なっ、ななな、何さらしとんねん、ワレ！」

「見てわからないか」

「いや、そら、わからんこともあらへんけども！　わかるけどな！　見たまんまのことくらいは、ナンボ半分魚的人間のわしかて、て、誰だれが半分魚じゃボケェッ！　ちゅうかな、ほら、職務っちゅうか、あるやろ、わしらにも仕事があるわけやし──」

「だったら、お前は本心から望んでいるのか。あいつをこんな場所にずっと閉じこめておきたいのか」

「そっ、それは、そのう……」

「それに、どうせ抵てい抗こうしても無駄だ」

背の高い黒覆面は顎あごをしゃくってアジアンの後ろを示してみせた。アジアンは振り返らなかった。そんなことをしなくてもわかる。そこにはリキエルが、ボダダグが、ボンドが、トトが、チェリーが、毛モウが、たぶん雷ライ切キリや寂ジヤク星セイやヘンドリクが、そして、もしかしたらクラニィやローガン、ギャンガー、デ・ペドロがいるだろう。

アジアンは背の高い黒覆面が開けた扉をくぐって部屋の中に入った。

マリアローズは寝しん台だいに腰かけて下を向いていた。

「キミを迎むかえにきた」

アジアンはマリアローズの右みぎ腕うでをつかもうとした。そうするつもりだったのだが、右手が強こわ張ばってうまく動かない。

マリアローズは両手で寝台の縁へりをぎゅっとつかみ、身を硬かたくしている。

拒こばんでいるのか。キミは出たくないのか。ここにいたいの

か。こんなところに。

　いいんだ。どうしてもボクにふれられたくないというのなら、それはべつにいい。

　でも、ここにいてはダメだ。外に出よう。そんなふうに目の前のものを見ないようにして、耳をふさいで、何にも、誰にも期待しないで、人を遠ざけて、応こたえることさえ控ひかえめで、誰も期待させないように、誰も手ひどく傷つけてしまわないように、ひっそりと、息を殺して、足を引きずって、壁かべに寄りかかることもしないで、つまずきながら、たまに転びながら、誰かが手をさしのべたら振り払はらって、一人で、一人きりで歩いてゆこうとしているキミを、どうして放ほうっておけるだろう。

　ああ、でも、本当は怖こわくてたまらない。キミに拒きよ絶ぜつされることが、キミに嫌きらわれることが、キミに忘れられてしまうことが、キミの頭の中からボクがすっかり消えてしまうことが、恐おそろしくてたまらない。いつかキミに理解してもらえるだろう、受け容いれてもらえるだろうという見通しが、単なる願望でしか、都合のいい希望的観測でしかないことを思い知りたくはない。

　それでも、アジアンは震ふるえる手でマリアローズの細い手首をつかんだ。

「出よう。外へ」

　マリアローズは予想に反してあらがわなかった。アジアンに引っぱられるままに立ちあがったが、身体からだに力が入りきっていないような、もしくは身体の動かし方を半分忘れているかのようなぎこちない動作だった。手首ではなく、手を握にぎってみると、マリアローズが顔を上げた。信じられないほど鮮あざやかな橙だいだい色いろの瞳ひとみに、今はアジアンがちゃんと映っている。

　マリアローズの唇くちびるが微かすかに動いた。

　アジアンはうなずいた。

　マリアローズがアジアンの手を握りかえしてきた。

　部屋を出ると、二人の黒覆面はしゃがまされて壁に両手をついていた。雷ライ切キリと寂ジヤク星セイが二人の黒覆面を部屋に押しこみ、奪うばった鍵で施せ錠じようした。黒覆面のどちらかが扉を

蹴けって何か叫さけんだが、アジアンは聞いていなかった。さよならだ、閉へい鎖さ房ぼう。もう二度と戻もどってくるものか。外への扉の前には男たちと女たちがほとんど密集していた。アジアンはマリアローズの手を引いて彼らをかきわけていった。黙だまって道を空けてくれる者もいたが、目の前を通りすぎる際、興味深げに、あるいは、訝いぶかしげにアジアンとマリアローズを見る者もいた。口笛を吹ふく者もいた。奇き声せいを発する者もいた。ナツコなどは眉み間けんに皺しわを寄せてマリアローズを睨にらみつけ、姉にたしなめられていた。アジアンは、だが、気にしなかった。扉の前で待ちかまえていたダリエロが、わざとらしく顔をゆがめて舌打ちをしてみせても、平然としていられた。どのみち自分にはマリアローズの手を放すという選せん択たく肢しはないのだ。アジアンはマリアローズと手をつないだまま、リョーヨルカが複製した鍵を上着の内ポケットからとりだした。

「気にならないか。係員舎から係員が一人も出てこない」

「気にしたからってどうなるわけでもねぇ。どっちにしろ、この先は行き当たりばったりだ。でもな。俺は何があろうと外に出てやる。必ずだ」

「ボクだってそのつもりだ」

「じゃあぐだぐだ言ってねぇでさっさと開けやがれ」

　ダリエロはかなり昂たかぶっているようだ。アジアンは振ふり返って主だった者たちを順々に見た。クララは多少緊きん張ちょう気味なのか、表情が硬い。ベティはアジアンとマリアローズを視界におさめて、何か考えているのか、いないのか。雷ライ切キリはアジアンの視線に気づいてうなずいてみせた。クラニィは片方の眉まゆをわずかに上げて、どうした、とでも言いたそうな顔つきだった。おそらく、アジアンがよほど物問いたげだったのだろう。自覚はある。いいんじゃないか、と言ってもらいたい。お前さんがそうしたいんなら、それでいいんだろうと思うがね。少なくとも、俺はな。あのときもそうだった。

「珍めずらしいな。お前さんが俺を誘さそうなんて。酒はとりたてて好きじゃないんだろう」

「そうだネ」

「何か話したいことでもあるのか」

「うん」

「何だ」

「好きな人がいるんだ」

「──お前さんってやつは……たまに、唐とう突とつすぎるっていうかな。まあ、いいんだが、そんなことは……何だって？　好きな？　ああ、そいつは……よかったな、ってのもおかしいか」

「おかしいかな」

「いや、そうじゃない。おかしかないさ。むしろ、そういうことがまったくないほうが変なんじゃないか。それ自体は、べつにな。ただ、そんなこと言われても、俺としてはな」

「ボクは、どうすればいいのかな」

「お前さんはどうしたい」

「わからないヨ。誰だれかのことをこんなふうに思うのは、たぶん初めてだから」

「こんなふうにってのは、具体的にどういうかんじなんだ」

「言葉があふれてくる。いろいろな言葉が、勝手に。その人が目の前にいるわけでもないのに、すぐそばにいるように感じて、でも、すごく遠くにいるような、手が届かないようなかんじもする。痛くなるんだ。胸が。ぐっと押されているみたいに。ぎゅっと何かに心臓がつかまれているみたいに。どうしたらいいかわからなくて、なんだかその人の前ではとても変なことをしてしまっているような気もする」

「まさしく恋ってかんじだな。恋、か。恋、ねえ。ああ、茶化してるわけじゃあない、そうじゃなくてな──まあ、いいんじゃないか。今はわからなくても、そのうちわかってくるかもしれんしな」

「そういうものなのかな」

「わからんがね。人それぞれだろうしな」

「誰にも言わないほうがいいと思うかい」

「そいつはお前さん次し第だいだろう」

「ボクは、無理に隠かくし通したくはない」

「じゃあ隠さなけりゃいい。お前さんがそうしたいんなら、それでいいんだろうと思うがね。少なくとも、俺はな」

　アジアンは目を閉じて深呼吸をして、扉とびらに向きなおった。

　黝あおぐろい、金属とも石ともつかない材質の、きわめて頑がん丈じようそうな、全面に模様とも文字ともつかない彫ちよう刻こくが施ほどこされている、明らかにアサイラムにある他ほかの扉とはまったく違ちがう、これが外への扉だということは一目瞭りよう然ぜんだった。

　鍵穴に鍵を挿さしこみ、噛かみあうような音がするまで一気に回した。

　ダリエロが黝い扉を押し開けた。

　全員が、一人の例外もなく息を殺した。

　開け放たれた黝い扉の向こうには、長い、とてつもなく長い、果ての見えない通路がのびていた。

　真っ暗ではない。天てん井じように一定の間かん隔かくを置いて空けられた四角い穴から弱々しい光が射さしこんでいる。その光が、黒っぽい石を削けずって造ったような、完全に滑なめらかではない、わずかに凹おう凸とつがある床ゆかに白く反射していた。



　左右の壁かべは、いや、壁とは言えまい、その全面が金属とも岩石ともつかないもので出来ている、あれは格こう子しなのか。目が細かいので、むしろ網あみと呼ぶべきかもしれない。闇やみに閉ざされた網の向こうには何があるのだろう。いったい何が。

　それをボクは──知っている。

　ここを、この場所を、見たことがある。

　ボクは、そうだ、いつか、この道を通った。

　あの国では、もはや見ア棄バテンらドれウ路ラという名さえ忘れられかけていた、この長い通路を。

　その男は、際限なく穢けがされきった憐あわれな国くに民たみにも見限られて久しいつめたく湿しめった薄うす暗くらがりに身をひたして、逃とう亡ぼう者しやたちの訪おとずれを待っていたとでもいうのか。

「てめぇは……」

　腰こしに差してある教導鞭べんを抜ぬこうとしたダリエロを制して、アジアンが前に出た。

　男は右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直してから、軽く手を叩たたいてみせた。

「まずはおめでとうございます。正解ですよ。ここは正しい道です。残念ながら僕にはたいしたことはできませんでしたが、前にも言ったとおり、するわけにはゆかなかったのです」

「……キミは、何を」

「僕のことはどうでもいい。本当にね。今は僕のことなど忘れてしまっていい。ただ、すべてはあなた次第だということだけ、それだけは決して忘れないでください。何があっても、アジアン、あなたは進まなければいけない。たとえどんなことがあっても、です」

「サイケングレンマイセルヒ、キミは──」

「普段どおりヨグでいいですよ。僕の名前は、これでもだいぶ縮めているのですが、少々長い。それに、じつはたくさんありましてね。そのどれにも、たいした意味はない。僕の名と僕の姿は単なる記号にすぎません。おっと、くだらないことを無む駄だに喋しやべりすぎですね。僕の悪い癖くせです。いいですね、アジアン。何があっても振ふり向かずに進んでください。僕は、僕たちは、あなたを待っています」

「ボクを、待って……？」

「ええ」

　サイケングレンマイセルヒは、じゃあ、と手を振って、背を向けたわけでも、こちらに向かって足を踏ふみだしたわけでもなかったが、この場から立ち去ろうとしていた。なぜかアジアンはそう思った。ダリエロも同じだったのだろう。

「待て。待ちやがれ。てめぇは」

　ゴリゴリと何かをすり潰つぶすような音がした。見ると、ダリエロが青い右目を見開いて奥歯を噛みあわせていた。

「──覚えのある顔だ。そうだ。てめぇは、あれは、いつだ……アジアンの野や郎ろうがくる前だ。そうだな？　いた。てめぇは、四号房ぼうに。いた……はずだ。それなのに……なんでだ。わからねぇ。いなくなった？　どうやって。なんで、てめぇ、係員の服なんぞを。どういうことだ。何がどうなってやがる」

「それは僕じゃありませんよ。僕にそっくりだったとしてもね」

　サイケングレンマイセルヒはため息をつきかけて、それを抑おさえようとするかのようにまた眼鏡の位置を直した。

「彼は僕が消してしまいました。同じ顔をした者が二人いると、やっぱり都合が悪いですからね。一いつ般ぱん房は定員一いつ杯ぱいでしたから、どのみち人減らしをしないといけませんでしたし。多少改変しても、解釈されてしまえば、辻褄が合うようになっているのです。ただ、匙さじ加減が結構難しくて。あやまって壊してしまったら、取り返しのつかないことになりますから」

「わけのわからねぇ戯たわ言ごとをべらべらと──」

「わからなくていいです。申し訳ありませんが、僕はあなたには興味がない」

「何だと」

「アジアン」

　サイケングレンマイセルヒは眼鏡の奥の両りよう眼めを微笑ほほえませた。

「この先は深しん淵えんに近い場所です。僕のようなものが土足で立ち入って踏み荒あらすべきではないでしょう。僕にできることはもう何もない。繰くり返しになりますが、あとはあなたが自分で道を切り開いて、前に進んでください。何があっても、です。さよならは言いませんよ」

　返事はできなかった。

　何か答える間もなく、今の今まで間違いなくそこにいたのに、サイケングレンマイセルヒはいなくなってしまった。

　何しろ、瞬しゅん時じに、音もなく、一つの痕こん跡せきも残さず、完全に消えてしまったので、一人の男がそこにいて、消えたという事実自体を否定してしまったほうがまだ納なっ得とくできそうだった。サイケングレンマイセルヒの話も、ダリエロの言葉を借りれば、わけのわからねぇ戯言か、少なくともそれに近かった。そのせいもあってか、誰だれも彼も突とつ然ぜんの登場と退場に驚おどろいているというより、あまりタチのよくないペテンにでもかけられたかのように、きょとんとしていながらも、どこかばつが悪そうにしていた。

　ただ、先行きや消えた男のわかるようなわからないような話についてここで黙だまって考えているよりも、やるべきことは他ほかにあるはずだ。

　アジアンは皆みなを見回した。

「進もう」

「てめぇに言われるまでもねぇ」

　ダリエロが吐はき捨てるように言って駆かけだした。アジアンもすぐにあとを追った。マリアローズの足どりはまだ覚おぼ束つかなかったが、なんとかついてきた。他の者たちも続々と走りはじめた。なかにはためらう者もいたに違ちがいないが、先に進むか、引き返すか、選せん択たく肢しはそのどちらかしかない。そう難しくない部類に入る二者択一だろう。それに、いくらか度胸や思いきりが必要なのは最初だけだった。もともと大半の者は極度に興奮していた。冷水を浴びせられて少しだけ下がった温度は、通路に足を踏み入れて足を進めるたびに上じよう昇しようし、あっという間に沸ふっ点てん近くまで達した。あとは熱ねっ狂きように身を任せて駆

ければいい。

　途と中ちゆう、足がもつれでもしたのか、マリアローズの速度がいきなり落ちた。アジアンはとっさにマリアローズを引きよせて抱かかえあげた。マリアローズが驚いたような声をあげた。抗こう議ぎめいたことを言われた気もするが、かまわなかった。なんだか気が急せいていた。ボクはたしかにこのにおいを、このよどんだ空気を知っている。サイケングレンマイセルヒが、ヨグが言ったように、これは正しい道だ。そう思う。いや、間違いないと断言してもいい。でも、急がなければならない。一刻も早くこの通路を抜ぬけてしまわなければならない。まだ見えてこないが、出口はある。必ずある。そこまでたどりつかなければならない。そうしないと――いったい何が起こるというのか。

　考える必要はなかった。

　硬かたいもの同士がこすれ合う音が轟とどろいた。

　近いとも、遠いとも言えなかった。

　その両方だった。

　大きな音だった。

　不快な音でもあった。

　先頭のダリエロが足を止めて、アジアンも思わず立ち止まった。

　他の者たちも同様だろう。

　網あみだ。

　左右の網が何らかの力によって引きあげられようとしていた。

　アジアンは叫さけぼうとした。その前に悲鳴があがった。一人ではなかった。二人か、三人か、それ以上か。網の向こうから、それは、それらは、出てきた。飛びだしてきたものもいれば、這はいだしてきたものもいたし、転がり出てきたものもいた。それらが、彼らが、正確には何ものなのか、どのように生みだされたものたちなのか、アジアンは知らなかった。ただ、彼らのことは知っていた。彼らの正体について、推測することもできた。

　いずれにせよ、少なくとも彼らは生き物だった。腕うで、あるいは脚あしか、それに類する何かを備えているものがいた。それは一本だったり、二本だったり、四本だったり、七本だったり、それ以上だったりした。ただのかたまりのようなものもいた。ぐねぐねした粘ねん液えきのような身体からだともいえないような身体から、触しよく手しゆのごときものを無数に生やしているものもいた。飛び回るものもいた。甲かん高だかい声を出すものもいた。咆ほう哮こうするものもいた。動くたびに弾はじけるものがいた。移動のために分ぶん裂れつしつづけるものもいた。あの地底の国の最下層に閉じこめられ、互たがいを貪むさぼり食い、ときに交わり、殺しあい、結局は喰くらいあうしかない見棄てアバられ子ダンたちは、紛まぎれもなく生き物だが、彼ら以外のどの生き物とも違っていた。そもそも、彼ら自体、それぞれが違うものたちだった。微かすかな明かりに照らされた彼らは色とりどりで、そのすべての色にはおそらく名前がなかった。彼らは際きわ立だって独特な生き物に違いなかったが、彼らほど醜みにくく、あさましくて、見苦しく、呪のろわれていて、世界から切り離はなされている生き物は他になかった。他の生き物は見棄てアバられ子ダンを見ればすぐにそのことがわかるはずだ。あるいは、彼らが一番そのことをわかっているのかもしれない。

　見棄てアバられ子ダンたちは、だから容よう赦しやしなかった。他の生き物は無条件で彼らにとって羨うらやむべき、憎ぞう悪おすべき敵で、喰らうべき獲え物ものだった。

　通路はたちまち悲鳴と、噛かみ砕くだく音と、咀そ嚼しやくする音と、生なま臭ぐさいにおいに満たされた。

　アジアンは見た。

　褐かつ色しよくの繊せん毛もうの集合体のようで、その中心に牙きばだらけの大きな口を備えている見棄てアバられ子ダンが、真ん中分けの金きん髪ぱつ、あれはアンガルセンだ。アンガルセンの右腕に食くらいついた。アンガルセンはとっさにその腕を引いた。腕は呆あつ気けなく嚙みちぎられた。そうして簡単に、あまりにもたやすく右腕を失ったアンガルセンは尻しり餅もちをついたが、すぐに引っぱり起こされた。緑色の髪かみだ。ヘンドリクだった。

　アンガルセンが呆ぼう然ぜんとした顔で、なんで、おまえ、と言った。

そのヘンドリクの頭に、尻尾しっぽのような脚を十本かそれ以上持ち、二本の腕の先に首のようなものを生やしている見棄てアバられ子ダンがかぶりついた。

「ヘンドリクゥゥッ……！」

アンガルセンは叫びながらその見棄てアバられ子ダンに組みつこうとしたが、果たせなかった。繊毛大口の見棄てアバられ子ダンがアンガルセンの左足に食らいついていたのだ。転てん倒とうしたアンガルセンに、複雑にからみあった内臓のような見棄てアバられ子ダンがのしかかった。寂ジヤク星セイが内臓野や郎ろうを蹴け飛とばそうとした。その右足が内臓の中にずぶりとのみこまれた。雷ライ切キリがすかさず寂ジヤク星セイを引っぱって助けださなければ、どうなっていたことか。

ボダダグは、ボンドは、トトは、無事だろうか。毛モウは。チェリーは。クラニィは。ローガンは。デ・ペドロは。ギャンガーは。他ほかの男たちは。ベティは。クララは。カイは。ナツコは。ヴィクトリアは。それ以外の女たちは。わからない。暗いし、何より見棄てアバられ子ダンの数が多すぎる。アジアンは引き返そうとした。でも、マリアローズを抱だいたままでは。だからといって、マリアローズを床ゆかに下ろすのか。迷っている間に、舌の化物のような見棄てアバられ子ダンがばたばた跳はねながら襲おそいかかってきた。なんとかよけたが、すぐに違う見棄てアバられ子ダンが、瓢ひよう箪たん型の頭部の先せん端たんから粘ねん性せいの強い液体を撒まき散らしながら、鎌かま形がたの手足を振ふり回すようにして接近してきた。その頭部に教導鞭べんを叩たたきこんだダリエロの背後に、舌の化物が迫せまろうとしていた。アジアンはマリアローズの身体をぎゅっと強く抱きしめて、舌の化物に飛び蹴げりを見み舞まった。ダリエロが舌打ちをした。アジアンは、喉のどよ、この胸よ、張り裂さけろとばかりに声を張りあげた。

「走るんだ……！　出口はある！　だから、前に進むんだ！　絶対に止まるな！　立ち止まったら終わりだと思って、走れ……！」

気休めなんかじゃない。出口は本当にある。ボクは、ボクらは、そこにたどりつけるはずだ。アジアンは前を向いた。進まなければならなかった。振り向いてはならない。ここで足を止めていたら、見棄てアバられ子ダンたちに食いつくされる。ああ、でも、いいのか。いいわけがない。ダメだ。だけど、マリアローズがボクの胸に顔を押しつけるようにして目をつぶっている。マリア、マリア、マ

リアローズ、キミとーいつ緒しよに外に出たい。キミを外に連れださなければ。

「馬ば鹿か野郎……！　アジアン！　てめぇが止まっててどうする！　走れ、塵ゴミ屑クズが……！」

「わかってる！」

　そうだ。わかっている。ボクは卑ひ怯きよう者ものだ。ダリエロに叱しつ咤たされて、ほっとしている。内心では感謝さえしている。どうせボクは振り返ることができない。振り返らないのではなく、できない。惨さん状じようを目にするのが怖こわいからだ。仲間たちが、もしかしたら友と呼ぶべきかもしれない者たちが、傷つき、倒たおれ、もう二度と会えないかもしれない、いや、かもしれない、ではない、会えない、その現実を目まの当たりにしたくない。ボクは逃にげ足ばかり速い、とんだ卑ひ劣れつ漢で、臆おく病びよう者ものだ。弱虫だ。

　ボクは走りながら叫んだ。謝りたかったけれど、謝る勇気がなくて、何か自分でも意味がわからないことをわめいていた。駆かけながら、ボクは自分に問うた。こうなることを、ボクは知っていたのか。予期していたのか。大切なものを失うかもしれない、それでもなすべきことをなすのだと、覚かく悟ごしていたのか。

　違う。

　違う。

　違う。

　そうじゃない。

　なんてことだ。

　深く考えていなかった。

　こんなことになるなんて思ってもみなかった。

　シャマニの声が聞こえた。リョーヨルカの名を呼んでいた。オーノの絶ぜつ叫きよう。クララが金切り声で何か叫さけんだ。ナツコちゃん！　ダメ、姉さん、あたしはいいから。よくないよ！　いたい。いた。い。きゃああ。祝花ノリカァァッ……！　あたいを舐な

めるんじゃないよ、舐めるんじゃ。ギャンガー！　くるんじゃねえ、寂ジヤク星セイ、おれはもう。たべ、たべないで、わたしを、たべな。くそったれえ！　兄ィィ！　ミシーリャ、もういい、もういいから。誰だれが、誰がてめえらなんぞに。やられるかよ。やられて、たまる、か。いでえよお。だめだこのままじゃあ。たす、たす、たすけて。どけ！　粉ふん砕さいして──粉砕！　よせ、いいから、だめだ、止め、止める、止めるな、くそ、ああ、ああ、あれは、あれは、あれは、誰の声だろう。泣き声が聞こえる。笑い声も。恐きよう怖ふのあまり頭がおかしくなった者が大笑いしているのかもしれない。吐はき気がする。行く手を遮さえぎろうとする見棄てアバられ子ダンたちは、かぎりなく憐あわれで、あまりにもすべてが剝むきだしで、汚けがらわしくて、醜くて、くさくて、たまらない。こんなものに少しでもふれられたら、まともな生き物は、まともではない生き物も、何か得体の知れない毒に冒おかされ、腐くさって、朽くちてしまうだろう。信じられない。本当に信じられないことに、これが二度目だ。見棄てアバられ子ダンたちに埋うめつくされた見ア棄バテンらドれウ路ラを通って、ボクはあの国を出た。もういいだろう？　一度で十分だ。二度目なんて。思い出したくなかったのに。封ふうじこめておきたかった。この穢けがれは忘れてしまうべきだ。消し去るべきだ。そうしないと、どこまでも、どこまでも、どこまでも、どこまでも、追いかけてくる。逃げだしてきたはずなのに、どうしてボクはまだここにいるんだ。ボクだけじゃなくて、みんなまで。よりにもよって、マリアまで。

　ばれてしまうじゃないか。

　せっかく騙だまそうとしていたのに。

　みんなを。

　そして、自分を。

　ボクが穢れし者どもの国を千年繁はん栄えいさせるためにつくられた、あの男の人形だということが、ばれてしまうじゃないか。

「お前さんは人形なんかじゃない」

　本当にそうなのか。

　そう思いたい。

　ああ。

　光が見える。

　出口だ。

「――しかし、なんでまた昼日中にこんな場所で勢せい揃ぞろいしてのんびり飯なんか食ってるんだ、俺たちは」

「キミが言いだしたんじゃないか。ここしばらく、みんなで集まっていないから、近いうちにまたご飯でも食べようって」

「そうだったか」

「そうだヨ」

　昼下がりの強い日ひ射ざしは木々の枝葉に遮られて、だいぶ弱められている。そこらじゅうに広げられた敷しき物ものの上では、昼食よりも何かの争そう奪だつ戦や、くだらない言い争いや、悪乗りした馬ば鹿か騒さわぎが繰くりひろげられていて、やかましいといったらない。それでもときおり鳥のさえずりが聞こえる。何の鳥だろう。もしその姿を見つけることができたとしても、鳥の種類なんてわからないけれど。

「でも、天気がよくてよかったよね」

　ローガンが水すい筒とうからついだお茶をクラニィに渡わたした。クラニィはそれを一口飲んで、まあ、悪いよりはな、と呟つぶやきながら空を見上げ、だいたい誰が決めたんだ、雨天決行ってのは、と喉のどを低く鳴らして静かに笑った。

「ダリエロでしょう」

　ベティは小皿に手製のサンドイッチやら肉料理やらをとりわけている。

「一度やると決めたら、絶対にやらないと気がすまないって、いつもの理り屈くつよ。やるって決まるまでは人一倍ぶーぶー言うくせにね」

「あたりめぇだろうが」

　ダリエロは裸足はだしになって敷物の上に寝ね転ころがっている。いつもどおり不平そうな口調とは裏腹に、結構くつろいでいる様子だ。

「やるならやる、やらねぇならやらねぇ、そんなもんは二つに一つだ」

「でも、豪ごう雨うの中でピクニックなんかして、楽しいと思う？」

「そもそも楽しかねぇんだから、晴れてようが雨が降ってようが吹雪ふぶきだろうが矢だの槍やりだのが降ってようが変わりがあるかよ」

「じゃあこなきゃいいじゃないの」

「いちいちうるせぇ女だな。犯ヤっちまうぞ、てめぇ」

「意外と口だけよね。あんたって。はい」

「誰が口だけだ、俺はな──」

　ダリエロは身体からだを起こしてベティに食ってかかろうとしたが、目の前に突つきだされた小皿を見て考えなおしたようだ。だから口だけだと言われるのだろうが、ベティの料理の腕うで前まえには定評がある。ダリエロは小皿をひったくってサンドイッチを口に放ほうりこみ、何度か噛かんだだけで飲みくだすと、憎にく々にくしげに、それでも認めざるをえない、といったかんじで低く呻うめいた。

「うめぇじゃねぇか。畜ちく生しようが」

「たくさんあるわよ」

「見りゃあわかんだよ、そんなことは」

　ダリエロががっつく姿を目を細めてながめているベティは、満まん更ざらでもなさそうだ。クラニィが、というかな、と欠伸あくび混じりに言って、近くの木の枝に指一本でぶらさがって筋トレをしているリキエルを見た。

「お前さんも、こんなときくらいはやめたらどうだ。下りてきて食

えよ」

「すまない」

　リキエルが地面に降りたって敷物の端はしに正座した。すかさずローガンがお茶を持ってゆき、ベティも小皿に料理をのせはじめた。あの、と後ろから声をかけられて、振ふり向くと、カイが立っていた。両手を後ろに回して、何か隠かくしているようだ。周りから歓かん声せいがあがった。カイの顔が赤い。どうしたんだい、ときいたら、カイは、これ、と手を前に出した。両手で小さな籠かごを持っている。籠は蓋ふたが開いていて、中に入っているのは、白っぽい物体が二つ、いや、三つか。大きさが均等ではないし、形もいびつだが、どうやらおにぎりらしい。

「た、た、食べろ。あ、えええと、一個でいい。それ以上は、多すぎるかもしれないし、だから、あたしが作ってみたんだ、それで、つまり、ど、毒味だ」

　おにぎりを一つ手にとって食べてみた。

　正直、見た目はよくないし、塩味がきつすぎて、具は入っていなかったが、おにぎりと言えなくもない味がした。

「うん。大だい丈じよう夫ぶだヨ」

「そ、そ、そうか。それならよかった。あ、もし、あれなら、他ほかも──いや、いい、いいんだ、忘れろ」

　カイは籠を抱かかえて走り去った。ベティが吹ふきだし、ダリエロがケケッと笑って、ローガンが、笑っちゃいけないよ、と言いながらもやっぱり笑い、クラニィは、いいな、若いってのは、と年寄りみたいな感想をもらした。リキエルは仮面を少しだけずらして黙もく々もくと食べている。出し抜ぬけに、向こうの敷物で何かが割れるような音がした。

「ちょ、あ……だめ……っす、雷ライ切キリ！」

　祝花ノリカの声だ。見れば、雷ライ切キリが毛モウにのしかかっていた。毛モウも雷ライ切キリの首に髪かみの毛を巻きつけて絞しめようとしている。

「ほっとけほっとけ」

　ダリエロがサンドイッチを丸のみにした。

「いやあ、そうもいかないよ」

　ローガンが立ちあがると、しょうがねえな、と頭を掻かきながら、クラニィもつづいた。

　アジアンもクラニィのあとを追った。

「お互たがい本気にならなきゃいいけどネ」

「まあ、どうしてもそりが合わんみたいだからな、あいつらは」

「いろいろあるんだろうねえ。喧けん嘩かするほど仲がいいっていうけど」

「そいつは当てはまらないんじゃないか。さすがに」

「あはは、ほんとだ、結構な修しゆ羅ら場ばだよ」

　ローガンが笑いながら足を速めた。

　クラニィは逆に立ち止まって、アジアンに向きなおった。

「でも、本当はわかってるんだろう。お前さんは」

「何のこと……？」

「これは現実じゃない」

　──光だと思った。だが、これを光と呼んでいいものかどうか。天てん井じようから降りそそいでいるのは、明るいとは言いがたい、むしろ薄うす暗ぐらい、青とも緑ともつかない色の光だ。

　ボクはこの場所を知っている。

　きたことがある。

　そこはかなり奥行きがある広間で、両側は壁かべではなく硝子ガラス張りの水すい槽そうのようなものに占しめられており、その前に無数の大小様々な円えん筒とう形の透とう明めいな物体が並んでいる。水槽も、円筒形の物体も、何らかの液体で満たされているが、それだけではない。

　液体の中に何かがいる。それは、いや、それらは、見棄てアバられ子ダンほど生き物として混こん沌とんとしてはいないし、不完全でもない。彼らよりは穢けがれし者どもの国の住民や修モ道ン僧クに似ている。だが、どこがどう違ちがい、どこがどう類似しているのか、うまく説明できる自信はない。

　マリアローズを床ゆかに下ろし、手を引いて歩いた。自分の手に必要以上の力がこもっているのがわかった。こんなに強く握にぎられたら、痛いかもしれない。そう思っても、力をゆるめることができなかった。

　かつて、ボクはわけもわからずここにいた。水槽や円筒形の物体の中にいるものたちを、微び動どうだにしない、あるいは、たまに身動きして、うつろな目でこちらを見ることもあるものたちを、ぼんやりと見ていた。そして、手招きされ、あそこに──そう、広間の奥にある、あの大きな円形の台座の上に設しつらえられた、傾かたむいている椅い子すに座らされた。見ア棄バてンらドれウ路ラを通り抜けて、ボクがたどりついたのはここだった。

「──く……っそ、が……！」

　振り返ると、ダリエロが広間に駆かけこんできたところだった。血に染まった左ひだり肩かたを右手で押さえていて、それ以外の傷を負っている様子はないが、息が上がっているようだ。ダリエロは後ろを見て舌打ちをすると、床に腰こしを下ろし、畜生フアツク、と叫さけんで大の字になった。その上をローガンが軽々と飛び越こえた。ローガンは何かを背負っていて、それを床に寝ねかせた。座らせることはできなかった。腰から下がなかったからだ。当然、ぴくりともしなかった。カイだった。ローガンは毛もう髪はつの薄うすい頭頂部を撫なでながら深々と息を吐はき、いきなり床に膝ひざをついた。どうやら、ローガンの背中を濡ぬらしている血はカイのものだけではないようだった。

「なんだかよくわからんが、連中、ここには入ってこられないみたいだな」

　しばらく外で様子をうかがっていたらしいクラニィが広間に入ってきた。その後ろから姿を現したリキエルは、激しく見棄てアバられ子ダンたちとやりあったのか、裸はだかの上半身が傷だらけで、血液とそれ以外の液体でずぶ濡れだったが、深手は負っていないようだ。むしろ、リキエルにつづいて、よろめきながら広間にたどり

ついたベティの状態がかなり深刻そうだった。

「……何よ、ここ」

　ベティは円筒形の物体にもたれかかり、あたりを見回そうとしたが、こみあげてきた咳せきに邪じゃ魔まされた。口を押さえた両手の指の合間から、咳にあわせて、赤い液体がにじみだすというよりもあふれだしている。ベティがずり落ちるようにしゃがみこむと、円筒形の物体に血の跡あとがべっとりとついた。

　クラニィがベティの前に屈かがんで、その耳みみ許もとで何か囁ささやいた。

　ベティは微かすかに首を横に振ふったが、クラニィはリキエルを見て顎あごをしゃくってみせた。

　リキエルは無言でベティを抱だきあげた。

　ベティはあらがわなかった。もうその力も残っていないのかもしれない。

　クラニィはローガンに肩を貸して立たせ、ダリエロに短く声をかけた。

　ダリエロがのろのろと立ちあがり、床に唾つばを吐いて、ヘッ、と笑った。

「道理で係員どもが出てこねぇわけだぜ。わざわざ俺らを追いかける必要なんざねぇ。放ほうっておけば化物どもの餌えさだ。そういうわけかよ。でもな。ざまあみやがれ。俺は生きてるぞ。俺は生きてる。もともと覚かく悟ごの上だしな。何人くたばろうが知ったことじゃあねぇんだ。俺さえ外に出られりゃいい。あとは勝手に死ね。全員、死んじまえ」

　誰だれも、何も、言わなかった。

　アジアンは見ア棄バテンらドれウ路ラに目をやった。クラニィの言うとおり、見棄てアバられ子ダンたちは広間の手前に群がっているが、そこから先へは決して入ってこようとはしない。彼らにとって、ここは侵おかすべからざる聖域だからだ。知性らしきものは皆かい無むかせいぜい欠片かけら程度しか持たない彼らが、唯ゆい一いつ、恐おそれ、敬い、ひれ伏ふして、何があっても手向かうこと

のない、彼らの王、真の王、おそらくは彼らの創造主でもあるあの男の、ここは実験室であり、標本の保管所だった。アジアンはかつて何度もここに連れてこられた。そして、ここから外に出ようとした。そのための仕し掛かけがあることを知っていたからだ。

　アジアンはマリアローズの手を引いて広間の奥へと向かった。

　心が麻ま痺ひしてしまっているかのようだ。

　何か感じてもいいどころか、たぶん感じるべきなのに、こんなにも静かな気持ちで、足どりも乱れていない。

　傾いた椅子が据すえつけられている円形の台座に足を踏ふみ入れても、懐なつかしさや、忌いまわしさ、そうした感情のたぐいは一いつ切さいわきあがってこなかった。

　アジアンは他ほかの皆みなが追いついてきて台座の上に乗ったことを確かく認にんしてから、椅子の脇わきに備えつけられている制せい御ぎょ盤ばんに掌てのひらをあてて起動させ、操作した。

　台座が全員を乗せたまま滑すべるように動きはじめた。

　まっすぐ降下してゆく。

　床の下に吸いこまれると、四方は黒一色となって、見上げる光はみるみるうちに遠ざかっていった。

　ダリエロが荒あらい息をしながらアジアンを睨にらみつけた。

「てめぇ、まるで何もかも知ってやがるみてぇなそぶりだな」

　アジアンは答えなかった。

　ただ、マリアローズの手を強く握にぎった。

　二人の手はまったく汗あせばんでいなかった。

　台座は間もなく、正二十四角形の部屋の床ゆかに着地するような恰かつ好こうで停止した。

　この部屋は、あの男が秘ひ儀ぎを行うための装置と、あの男が何かを書きつけた紙切れであふれている。装置のそこかしこが発光し

ているので、その微かすかな光を頼たよりにして壁かべに近づき、掌で探さぐっていると、ある一面に手て応ごたえがあった。

　それこそが古き扉とびらだった。

　古き扉は重い音を立てて開いた。

　その向こうは真っ白い光に満たされた円い小部屋だった。

　アジアンはマリアローズを連れて小部屋に入った。マリアローズが不安げに眉まゆをひそめてアジアンを見た。ダリエロが走ってくる。クラニィはローガンに肩を貸していることもあって、ゆっくりと歩いていた。ぐったりしているベティを抱きかかえたリキエルはその後ろだ。マリアローズを安心させるために、何か言わなければならないと思った。でも、ボクの言葉は、今だけじゃなく、どんなときだって、空回りするだけじゃないのか。

　扉が閉まりはじめた。

　どうしてだ。

　なんで。

　ボクは何もしていないのに。

　まだ小部屋の中にはアジアンとマリアローズしかいない。ダリエロが血相を変えて足を速めた。クラニィも駆かけだそうとしたが、ローガンがついてこられなかった。リキエルは立ちすくんでいた。扉が閉まってゆく。もう閉ざされてしまう。

「てめぇ……！　何のつもりだ……！」

　ダリエロが扉の縁へりに指を引っかけ、力ずくで開けようとしたが、びくともしなかった。

「この塵ゴミ屑クズ野や郎ろう、てめぇらだけ、てめぇらだけで、最初から、くそ──」

「違ちがう」

「ぐうあッ」

「違う」

　アジアンはダリエロの指を、手を押し潰つぶして完全に閉まりきりつつある扉に駆けよろうとした。違う。そんな。ボクは。そんなことは、少しも。でも、光が、ああ、白い光が強まって、見えない、何も、すごい光だ、熱いほどの、真っ白で、とてつもない量の光がすべてを覆おおいつくして、耳鳴りのような音がどんどん高まって、何も聞こえない、もちろん何も見えない、ボクは叫さけぶ、違う、違うんだ、違う、本当だ、そんなことは決して望んでいないのに、そうなってしまうことだって、絶対にないとは言いきれないのだと、身を以もつてボクは、思い知らされたんじゃなかったのか。

　それなのに、ボクは。

　ボクってやつは。

「──気分はどうだい、４２８」

　お前さんは餓が鬼きだ、と何度も言われたっけ。

　まったくそのとおりだ。

「ＥＥＥＥィィ気分かい？　それとも、聞こえてないのかねえ。お手々つないで、じつに気持ちよさそうに寝ているしねえ。実際、そのまま眠ねむらせておいてあげたいくらいだよ。永遠にねえ。そうして暇ひまなときに鑑かん賞しようするんだ。うん。我ながら悪くないアイディアだな。悪くないが、ベストじゃあない。というわけで、さあ、目を覚ますんだ、４２８」

　目を開けると、禍まが々まがしい輝かがやきを宿した双そう眸ぼうに見下ろされていた。左右に裂さけた薄うすい唇くちびるは亀き裂れつのようだ。男は白地に黒い斑はん点てんがある細身のズボンを穿はいて、奇き妙みようになめらかな生白い素す肌はだの上に赤い上着を羽織り、手に持ったサーベルの切っ先をアジアンの首筋に突つきつけていた。

「……ＳＩＸ」

「人違いだよ、４２８。惜おしいような気もするがねえ。俺の名は〝数字ゼツクス・の６ツイツフアー〟、仮にその男と俺が瓜うり二ふたつだとしても、同一人物じゃあない。別人さ。おっと、動くん

じゃないよ。俺は目を覚ませと命じただけで、起きあがれとは言わなかっただろう？　命令以外のことはするんじゃない。さもないと、なんて、わざわざ教えてやらなくたって、それくらいはいくらなんでもわかるんじゃないかねえ」

　アジアンに剣けんを向けているのは、数字の６を名乗る所長だけではなかった。

　たしか、所長の秘書だったか。縦たて縞じまの上下を身にまとい、灰色の髪かみと目をした鉤かぎ鼻ばなの男が、アジアンのそばにしゃがみこんで、大きな釘くぎのようなものの先せん端たんを額に押しつけていた。

　死神と渾あだ名なされていた係員もアジアンに刀を向けている。

　中肉中背で、特とく徴ちようのない顔をした嫌いや味みな係員もいた。

　猪首の係員も、猫ねこ背ぜの係員もいる。アジアンがみずから手にかけたはずの顎あごが長い係員の姿まであった。あの魚に似た顔をした係員、あれは黒覆面ではないのか。閉鎖房に閉じこめてきたのに。背が高くて黒い色眼鏡をかけている係員、彼も黒覆面だ。あの顔にも見覚えがある。あの顔にも。知らない顔もある。それとも、覚えていないだけか。ぜんぶで何人いるのだろう。十人か。二十人か。百人か。それ以上だ。数えきれない。とにかく大勢だ。白い石でできたドーム状の建物は、武器を手にした係員たちに埋うめつくされていた。

　アジアンは頭を動かさないように注意して、横目で隣となりのマリアローズを見た。

　まばたきもせずに、じっと天てん井じようを見上げている、すべての表情を忘れてしまっているかのようなキミを、ほんの少しでもいいから、笑わせてあげることができれば、いいのに。

　それはだいそれた願いだったのだろうか。

「そんなことはないよ、４２８」

　数字の６を名乗る男が裂け目のような唇の両りよう端たんをつりあげてみせた。

「お前は間違っちまっただけさ。ほんのちょっと愚おろかだったんだよ。だからといって、恥はじることはないんだよ？　まだ間に合うんだからねえ。だって、お前はほんのちょっと愚かだったってだけで、本当の本当に愚かなわけじゃない。さいわいお前はそこまで馬ば鹿かじゃあないってことを、俺は知ってるからねえ。そうだろう？　誰だれしも過あやまちを犯す。その意味では皆みな、愚かなんだ。だが、何度も何度も同じ場所にある肥こえ溜だめに落ちるブワァカがいる一方で、過ちから学び、二度同じ過誤を繰くり返さない利口な者もいる。お前は後者だろう？」

数字の６がサーベルを引いて、切っ先で自分の後ろを示してみせた。

アジアンはその方向を目で追って、思わず身体からだを起こしてしまったが、秘書も係員たちもさまたげようとはしなかった。

どうしてとか、なんでとか、そんなことは一いつ切さい考えなかった。やはり、ずっと麻ま痺ひしていたのだ。心が感覚を失っていた。それがあまりにひどい痛手だったから、とても耐たえられない、耐えられるはずがないから、無意識のうちにほとんどの刺し激げきを遮しや断だんしていたのだろう。

後ろ手に縛しばり上げられたダリエロが、係員にひざまずかされ、だが、顔を上げてこちらを見ると、ニヤリと笑った。リキエルは二、三人の係員に取り囲まれて突っ立っていた。ベティはその脇わきで、まいったわね、とでも言いたそうな表情だった。ローガンは縄なわでがんじがらめにされて正座していた。カイはしきりと係員に抵てい抗こうして、手を焼かせていた。クララも丁てい寧ねいな言葉遣づかいと激しい声こわ音ねでさかんに抗こう議ぎしている。ナツコは係員にしなだれかかってたらしこもうとし、ヴィクトリアは困ったように長身を縮めて、その足あし許もとでミシーリャが転げ回っていた。両刀遣いのシュトレーハウゼンもナツコの真ま似ねをして係員にすり寄ろうとしたが、こちらはさすがに突き飛ばされて終わりだった。リー・ブラックはとらえられても堂々としたもので、リョーヨルカも革かわ手て錠じようなどあってなきがごとしといったふうだが、シャマニはこの世の終わりとばかりに泣き叫さけんでいる。嘘うそ泣きに違いない。金きん髪ぱつを真ん中分けにしているアンガルセンは、胸を反そり返らせて傲ごう然ぜんと仁に王おう立ちしているが、強がっているだけだろう。緑色の髪のヘンドリクのほうが度胸は据すわっている。やや自信過か剰じよう気味で、危なっかしくもあるのだが。

　革手錠をかけられた両手を前に出して座りこみ、微び動どうだにしない〝嵐ストーミーの〟ラギィの今日の気分は、きわめて鬱うつなのか。白シロ妙タエは涼すずしい顔だ。いつもだが。ジャン・スタンバックは一暴れしたあとなのか床ゆかに押しつけられていて、乱れた口くち髭ひげを気にしている。その脇で、ミョーチは額の渦うず巻まき型の刺青いれずみをボリボリ掻かきながら、何を考えているのやら。指のない左手を軽く振ふってみせたドルゲイは、じつは見かけよりもずっと若いのかもしれない。そういえば、詐さ欺ぎ師しでありスリでもあるアルバートもどこか年ねん齢れい不ふ詳しようだ。キレやすいオーノが大暴れして、係員に殴なぐられまくっている。それを楽しげに囃はやし立てているメツェルディと〝漫まんオざい師し〟キューレイは、どっちの味方なのか。巨きょ漢かんのクルガイスは自分が置かれている状じよう況きようをまったく把は握あくできていないようで、ぼうっとしている。トトとロロは革手錠を嵌はめられたまま、ひっそり占うらない合戦でもしているのか。あの二人ならやりかねない。ボンドはじっと観察している。あとでこの光景を絵に描かくだろう。陰いん鬱うつな顔をしかめているポーは、また例の難解で意味がさっぱりわからない詩を書くために、頭の中で呻しん吟ぎんしてでもいるのか。レイジ兄妹はどの係員から抹まつ殺さつしようかと獲え物ものの選定をしているかのような目つきだ。寂ジヤク星セイも、あれで結構な激情家だし、そこらじゅうの係員を残らず蹴け飛とばしたくてたまらないといった顔つきだ。雷ライ切キリはどっかとあぐらをかいて目をつぶり、祝花ノリカがその背中にぴったりとくっついてにおいを嗅かいでいる。ボダダグとチェリー、毛モウは、なぜか係員が近くにおらず、少なくとも他ほかの仲間たちに比べて窮きゆう屈くつな思いはしなくてすんでいるようだ。ギャンガーとデ・ペドロ、コリンはひとかたまりになって床に座りこみ、その前にクラニィが立っていた。

　クラニィはアジアンを見て目許と口許をゆるめ、ほんの少しだけ肩かたをすくめてみせた。

　全身の力が抜ぬけた。

　本当は跳とびあがりたいくらいの気分だった。

　とうてい無理だ。

　ぎゅっ、と指を握にぎられた。

　マリアローズが、天井ではなくて、アジアンを見上げていた。

「お前は知っていたかい、４２８。俺はねえ。寛かん大だいなんだ。自分でも少し甘すぎるんじゃないかと思うくらい寛かん容ようなんだよ。だからねえ。お前にチャンスをやろう」

　数字の６は腰こしを屈かがめて、アジアンの耳じ朶だに息がかかる位置まで顔を近づけてきた。

「帰らないか。あの場所へ。みんなで戻もどるんだよ。お前が望むなら、ほら、その、お前と手を繫つないでいる赤毛のハニィーも一いつ般ぱん房ぼうに移してやろう。今までの暮らしが少々堅かた苦くるしくて憂ゆう鬱うつだったっていうなら、もっと楽しく、がやがやと、面おも白しろ可お笑かしく騒さわげるようにしてやったっていい。信用できないのかい？　どうして？　俺は所長なのに。俺がそうすると言ったらそうなる。いや、それよりも、お前がそう望むことが大事なんだよ、アジアン。何よりも、それが大切だ。ねえ、帰ろう、アジアン。ためらうことはないだろう？　だって、お前は知っているはずだよ。お前にとって、それが一番幸せなんだってことをねえ。あそこにいれば、ずっとみんなで楽しくやっていれば、お前は何も悩なやまなくていいし、苦しみも、悲しみも、せつなさも、感じずにすむ。それは素す晴ばらしいことだよ。お前もそう思うだろう？」

　アジアンはもう一度、仲間たちを見回した。

　最後に、クラニィを見た。

　その唇くちびるが動いた。

　声は聞こえなかった。

　でも、本当はわかってるんだろう。お前さんは。

　うん。

　わかっている。

　わかっているんだ、だけど。

　クラニィは目を伏ふせてため息をついた。

　それから少しうつむき加減になって、腰を曲げたかと思うと、革手錠を後ろ手に嵌められた両手を飛び越こす要領で前に持ってき

た。

　クラニィは近くにいた係員から素早く剣けんを奪うばい、そいつを斬きり伏せるなり、数字の６に斬りかかった。

　間かん一いつ髪ぱつのところで飛びのいて剣をかわした数字の６をかばうように、鉤かぎ鼻ばなの秘書が猛もう然ぜんとクラニィに突つっこんでいった。

　クラニィは秘書をまともには相手にせず、すぐそばにいた係員に体当たりを見み舞まい、また別の係員を突き飛ばしながら、剣で器用に自分の革手錠を外した。

「ローガン！　リキエル……！」

　クラニィに名を呼ばれる前に、ローガンも、リキエルも、それぞれ係員に襲おそいかかっていた。すかさずダリエロも自分を組み伏せていた係員の手の指を噛かみちぎり、怯ひるませ、蹴け倒たおしてしまった。すぐに他の係員がダリエロに殺さつ到とうしようとしたが、リー・ブラックやリョーヨルカが身体からだを張って防いだ。雷ライ切キリも立ちあがって、そばの係員に頭ず突つきを食くらわせた。女たちは何人かが組になって係員たちを押し倒たおし、身動きできないようにして、その隙すきに男たちが武器を奪いとった。レイジ兄が、ドルゲイが、寂ジヤク星セイが、オーノが、クルガイスが、アンガルセンが、ヘンドリクが、シュトレーハウゼンが、デ・ペドロが、ギャンガーが、武器を手に暴れまくった。カイやレイジ妹、ミシーリャやラギィ、ジャン・スタンバックのように、男たちに負けじと係員に立ち向かってゆく女たちもいた。おろおろしているだけの者もいた。逃にげ回るだけの男たちもいた。そう見せかけて係員たちを引っかき回そうとしている逞たくましい者もいた。数字の６と秘書の二人に追い立てられながら、クラニィが叫んだ。

「アジアン、逃げろ……！」

「いやだ、ボクも──」

「お前さんだって、とっくにわかってるはずだ！　ここにとどまって戦ったところで、何の意味もない……！」

「でも」

「早くしろ……！」

「でも、キミは」

　あっちにはいないんだ。

　キミはここにしかいないんだ。

　キミは死んでしまった。

　ボクのせいで死んでしまった。

　ここから去ったら、キミに会えないじゃないか。

　これが現実じゃないと認めてしまったら、この夢から覚めてしまったら、ボクはもう二度とキミに会えないじゃないか。

　大事なものは何だろう。

　決して捨てられない大事なものは何だろう。

　それは失うまで気づかないものなのだろうか。

　失ってみないと確かめられないなんて、馬ば鹿かげているけれど、ボクはキミが何度も言ったように、きっと餓が鬼きだから、よくわかっていなくて、信じられないことに、ボクは、ボクはキミに何も伝えていない。

　キミはボクの仲間で、まるで兄みたいで、大切な友だちだということさえ、口では言えなくても、ボクはそう思っているということさえ、ボクは言えなかった。

　いつでも言えたはずだった。

　言う機会はいくらでもあった。

　それなのに、もう言えないんだ。

「──ったく、世話の焼ける……！」

　クラニィが数字の６のサーベルをかわしながら近づいてきて、アジアンの手首をつかみ、強ごう引いんに立ちあがらせた。

「行け！　お前さんはこんなところにいるべきじゃない！」

「そんなの、キミが決めることじゃ──」

「そう言うんだったらな！　お前さんが自分で決めろ！　ちゃんと決めてみせろ！」

「ボクは」

「外にはお前さんを待ってるやつらがたくさんいるんだ！」

「……だけど、ボクは、キミに」

「俺のことはどうでもいい！」

「よくない！」

「馬ば鹿か野や郎ろう、お前さんの考えることなんざな！　ぜんぶお見通しなんだよ！　だいたい、素す直なおじゃないわりに見え見えだしな！　いちいち口に出して言われなくたってわかるに決まってるだろうが！」

「悪かったな！　見え見えで……！」

　アジアンはマリアローズを立たせた。

　クラニィが笑った。

　笑い返さなければならないのかもしれないけれど、できなかった。

　何か最後に伝えるべきだろうか。

　いや、不要だ。

　どうせボクのことなんてすっかり見み透すかされていて、本当はたぶん、ボクがひた隠かくしに隠しているものも、その正体はともかく、ボクがどういう思いで、どうして隠しているのかも、だいたい見み抜ぬかれていて、おそらく、いつか秘密を抱かかえていることに我が慢まんできなくなって打ち明けたとしても、ああ、そうか、それで、みたいな反応が返ってくるだけなのだろう。そんなことはわかりきっているのに、こんなとてつもない運命を背負わされ

ているのは自分一人だけだ、みたいに思いこんで、びくびくして、自分はうまくやれているだろうか、落ち度はないか、そんなふうに取り繕つくろうことだけに心を奪うばわれて、みんなはボクを見ているのか、上辺だけを見て判断しているんじゃないのか、それはボクじゃない、本当のボクは、こんなに──こんなにも臆おく病びようで、弱虫で、いつも迷ってばかりで、心細くて、怖こわくて、たまらなくて、逃げだしたい、いっそすべてを捨ててしまいたい、大切なものはぜんぶ守ると決意したはずなのに、そんなことをつい考えてしまう、だから、こんな罠わなに、そう、ボクは罠にかけられて、まだ抜けだせないでいる。

　それでも、クラニィ、キミに会えてよかった。

　ボクは声には出さず、失ってしまった生しよう涯がいの友にそう告げ、愛する人の手を引いて走った。

　今はもう完全にわかっていた。

　ボクが望めば、強く、強く欲ほつすれば、ボクの行く手をさえぎるものはない。

　数字の６も、秘書も、係員たちも、仲間たちさえも、もうボクの目には見えない。ボクは愛する人を抱えあげて、かつて古き扉とびらを通ってたどりついた白い石の建物に一つだけある出入口を目指す。光。あれこそが本当の光だ。陽ひの光。飛びだすと、白とも黄色ともつかないまばゆい光につつまれた。吹ふく風が頰ほおを、髪かみの毛を撫なでて、打ちよせる波の音が耳をくすぐり、少しもよどんでいない、新しん鮮せんな、美味としか言いようがない空気があっという間に肺を満たして、ボクは、ああ、ついに、とうとう、外に出た、外に、と、叫さけんだのだったか、叫ぶこともできずにむせび泣いたのだったか。

　気がつくと、ボクは海辺の草むらに身を横たえていた。

　ボクのすぐそばに腰こしを下ろして、突つき抜けるような青い空を見上げているキミの赤い髪が、少し強い海風になぶられて揺ゆれている。

　キミは髪の毛を手で押さえて、ボクのほうを見た。

　マリア。

マリア。

マリアローズ。

キミの笑え顔がおはあの太陽よりも遥はるかにまぶしい。

おかげでボクの目は眩くらんでしまい、思わず瞼まぶたを閉じると、影かげが差すのを感じた。

心臓が飛び跳はねて、慌あわてて目を開けると、キミはボクに覆おおいかぶさるようにして顔を近づけてきた。

ボクは動けなかった。キミの両手がボクの首にかかっても、身動きがとれなかった。キミが体重をかけてきた。息ができない。でも、キミは笑っている。唇くちびるの両りよう端たんをつりあげて笑っている。すごいな。すごい力だ。キミにこんな力があったなんて。ボクはもう気が遠くなりかけている。キミは笑っている。しょうがないかな、という気もする。キミがそうしたいのなら、仕方ない。ボクは受け容いれるだろう。キミは笑っている。ボクはおそらく、最後の最後には選ぶだろうと思う。どうしてかわからないけれど、キミと、キミ以外のすべてと、どちらかを選ばなければならないとしたら、ボクはきっとキミを選ぶだろう。キミのために何を失っても、後こう悔かいはするかもしれないけれど、何度同じ選せん択たくをしても、やっぱりボクはキミを選ぶだろう。ああ、キミは笑っている。唇の両端をつりあげて、笑っている。ボクはもう目をつぶってしまおう。理由はわからない。でも、キミがあくまでそうしたいというのなら、ボクは、そうだ、ボクは、見ていた。

キミが地面に放った剣けんを目で追った。

『僕は、やっぱりきみとは戦えない。明日はどうかわからないよ。一時間後だって知らない。だけど、今の僕は、たとえきみに殺されるだけだってわかっていても、戦ったりできない。僕の剣にはきみを傷つける力なんかないかもしれないけど、そんな剣でもきみに向けたくない』

違う。

絶対に、違う。

キミはこんなことをしたりしない。

　ふたたび目を開けた。もう目がかすんでよく見えないけれど、やはり違った。キミじゃない。マリアローズ。キミであるはずがない。すさまじい力だ。その手を首から剝はがそうとする。黒い爪つめの白い手を。白い肌はだ。白い髪。眉まゆや睫まつ毛げまで白い。白い服を着ている。いつもそうだった。この男は白を好んだ。だが、その目は、本来、白かそれに近い色であるべき白目が黒く、虹こう彩さいは真しん紅くで、黒い瞳どう孔こうの境目は金色に輝かがやいている。

「──ルヴィー・ブルーム……！」

　そうだ。ボクはあのとき、あの場所に。マリアの部屋の前に。だって、さんざん街中を捜さがし回ったあげく、できれば避さけたかったけれど、仕方なく野菜野や郎ろうの家を訪ねたら、変な生き物しかいなくて、何を尋たずねても答えが返ってくるはずもなくて。それで、思いあまって、マリアの部屋に。当然、不在で。待っていようとした。実際、待っていた。丸一日。それ以上。突とつ然ぜん、背後から声をかけられた。聞き覚えのある声だった。二度と聞きたくない声だった。

「久しぶりだね、アジアン」

　その先は、ダメだ、覚えていない、いや、ボクは振ふり返った。ルヴィー・ブルーム。あの男が、この男がいた。ボクは何をされた？　わからない。でも、ボクは見た。ルヴィーの肩かたの上に──そいつはいた。今もいる。ああ。こいつか。こいつが。毛むくじゃらで、真っ黒で、まん丸く、毛に埋うもれているせいか、口も鼻も耳も見あたらない。手足はある。爪もある。尻尾しつぽは無毛だ。紐ひものようだ。ナジ。ナジがルヴィーの肩の上で目を見開いていた。目は一つしかなかった。白目はない。虹彩は赤あか錆さび色で、瞳孔は黒く縦に裂さけていた。こいつの仕し業わざか。



「妙みような邪じや魔まが入ったりもしたからね。やりなおしだよ、アジアン。もう一度眠ねむるといい」

　ルヴィーがさらに力をこめてきた。アジアンはもはやその手を引き剝がそうとはしなかった。かまわず、ルヴィーの肩の上のナジに右手をのばした。つかまえて、思いきり、握にぎりつぶした。

epilogue

　尻尾をつまんで、ポイ捨てして、そいつがどうなったかは見届けなかった。正直、ちょっとまずいかな、と思わないでもなかった。第十三区で二番目に高い高層寺院ＧＭエンパシィの屋上から地上めがけて落下した物体は、ものすごい破は壊かい力を発揮するだろう。片手でつかめる程度のあんなものでも、命中したらただではすまないはずだ。けどさ、紙か何かにつつんでおくにしたって、だよ？　死んでたっぽいけど、あんなの見たことないし、なんか不気味で、やばいかんじだったし。ゴミ箱に入れておくのもやだし、部屋の外に出しておくのも微び妙みようだし。てゆうか、なんであんな正体不明の生き物が僕の部屋の中に？　しばらく留守にしてたから、勝手に棲すみつかれちゃってたとか？　だとしたら、一匹ぴきだけじゃなくて、まだ他ほかにも……？

　寒気がした。風が強くて、つめたくて、実際、わりと寒い。ジェードリに行って帰ってきたら、すっかり季節が変わってしまっていた。

　それにしても、何だったんだろ、あの生き物。ぽとっ、と何かが床ゆかに落ちる音がして、振り向いたら死んでいた。場所から考えると、戸と棚だなの上にでも隠かくれていたようだが、他にもあんなのがひそんでるかもしれないなんて、マジで勘かん弁べんして欲しい。自分の部屋なのに、安心して眠れないじゃないか。まあ、今の状じよう況きようだと、そうじゃなくても眠れないんだけどさ。

　屋上から部屋に入ると、ため息が出た。

　まだ荷ほどきもできていない。部屋の掃そう除じもしていない。埃ほこりとか、めいっぱいたまってるのに。いや、埃どころか、すっごいでっかい粗そ大だいゴミが一つ、部屋の中に、それも、ベッドの上に転がっている。本当は、あの生き物の死し骸がいなんかより、あれを屋上から捨てるべきなのかもしれない。そうだ。今すぐにでもそうするべきだ。でも、やろうと思えばそうすることだってできたのに、僕はしなかったんだ。なんで、僕は。

「や、待って。それは、さ……ほら、だってだよ？　いくら何でも、そんなことしたら、あいつだって、ねえ？　死んじゃうよ、冗じよう談だん抜ぬきで。それはまずいでしょ、やっぱ。あんな状態だし。そこまでは、いくら僕でも……」

ベッドの上のあいつをちらりと見て、もう一度ため息をついた。

アンダーグラウンドとは別の地下からＧＭエンパシィの地階に侵しん入にゅうして、梯はし子ごを使って五階まで上り、そこから裏階段で三十五階まで、さらに梯子で屋上へ、という、日常でしかなかったはずのルートに異様な疲ひ労ろう感かんを覚えて、やっと我が家へ、と思ったら、部屋の前にあいつがばったり倒たおれていた。間ま違ちがいなく、倒れているふりだろうと最初は考えた。無視して部屋に入ろうとしたが、ドアを開けた瞬しゆん間かん、押し入られて、なんてことになったら目も当てられない。一応、名前を呼んでみた。反応がなかった。背中を蹴けってみた。これにも反応がなかった。見下ろしたあいつの横顔が、やけに憔しよう悴すいしているというか、顔色もかなり悪かったし、頬ほおも若じやつ干かんこけていることに気づいたのはそのあとだった。どうやら本当に意識がないらしかった。

「まったく、やさしすぎるよね。僕ってば。人間ができてるっていうか。あーもう、なんでこんな……てゆうか、心の準備ってものが……」

マリアローズは床に座りこんで頭を掻かきむしった。

台詞せりふも考えてあったのに。どうするか、決めていたのに。少なくとも、決めていたつもりだったのに。こんなことになるなんて。ずるいよ。そういう問題でもないか。だけど、なんであいつがここに。まあ、惻そく隠いんの情っていうか、僕が思わず運びこんじゃったんだけど、そうじゃなくて、なんで僕の部屋の前に。や、それはわかるけど。待ってたんだろうとか。待つなよ、バカ。もしかして、ずうっと飲まず食わずで待ってて、ついに栄養失調か何かで気絶しちゃったとか？　それにしては、なんていうか、においとかしなかったけど。いや、においって。べつに嗅かいでないし。でも、軽かった。やけに軽くて、不安になった。こいつ、生きてるのかな。息はしてるけど。なんだか妙に頼たよりなくて。そりゃあ気を失ってるわけだし、生き物としては危機的な状態だから、心こころ許もとないのはあたりまえだけど。少し苦しそうな表情だった。

今も同じだ。

放ほうっておいたら、やばいかもしれない。

そもそも、ただベッドに寝ねかしておくだけでいいんだろうか。

ユリカでも呼んでこようか。ここに？　こいつが僕のベッドで寝てる、僕の部屋に？　それは──ちょっと、まずい。まずい、よね……？　なんか。やっぱり、ほら、誤解とか招いちゃいそうだし。でも、そんなこと言ってる場合なのかな。

　おそるおそるベッドに近づいて、あいつを観察してみる。

　相変わらず、無む駄だに美形だ。睫まつ毛げが長い。鼻筋が通っている人はいくらでもいるけれど、鼻び梁りようの高さと太さのバランスがここまでとれているとなると、そうはいないだろう。髪かみの毛も、ここまで徹てつ底てい的な黒は珍めずらしい。薄うすくもなく、厚くもない唇くちびるは、あまりにも丁度よすぎて無個性になってしまいそうなものだが、全体と調和して水みず際ぎわ立つ。マリアローズが思うに、この男はあまり笑うのがうまくないが、唇を笑う形にしただけで、人目を引いてやまない笑え顔がおに見えてしまう。ただ、今はいかにも不健康そうな色なので、こけた頬とあいまって、なんとも──無残というか、痛ましいというか。大だい丈じよう夫ぶなのかな、こいつ。やっぱり、ユリカに診みてもらったほうが。そう思った瞬間だった。

　目が開いた。

　薄うす青あお色の瞳ひとみだった。

　空の色とも、海の色とも違う。

　ずいぶん久しぶりに見た気がして、じっと見入ってしまった。

「……マリア」

　何も考えずに、ただ呼ばれたから、というかんじでうなずいてしまった。

　後こう悔かいした。

　違う。

　そうじゃなくて、僕は狼ろう狽ばいしていた。

「マリア」

　薄青色の瞳がみるみるうちにぬれていった。

　涙なみだがあふれる瞬間を、こんなに近くで目もく撃げきしたことがかつてあっただろうか。

　あいつのむやみと形のいい唇が震ふるえていた。すごい不ぶ恰かつ好こうな震え方だった。

　歯がガチガチ鳴った。

　眉まゆがひそめられて、小鼻の脇わきにみっともない皺しわが寄った。

　目め尻じりも皺だらけになって、頬がゆがんだ。

　うっ、としゃっくりに似た音がした。何度もした。

　あいつは鼻をすすった。

　あとからあとからあふれてくる涙は、あいつの目尻からこめかみのあたりを伝って髪の毛をぬらした。

「夢を、見ていたんだ……長い、夢を」

「そう……なんだ」

「ボクは」

　あいつは声をつまらせて、よりいっそう顔全体をゆがませた。これ以上は無理なんじゃないかと思えるくらい、ひどいゆがませ方だった。

「キミは……マリア、だ──本物、の……マリア、ボク、は──」

「うん」

「クラニィ」

　それからあいつは、悲ひ嘆たんとも、絶望とも、後悔ともとれるような、ああ、という声をもらして、頭を、髪の毛を、自分の両手でつかんだ。ものすごい力で引っぱって、頭を叩たたいて、また髪の毛を引っぱった。あいつは、おお、と泣いた。おお、おお、おおお。僕はあいつの手首をつかんだ。右手を左手で、左手を右手で、ぎゅっと握にぎりしめて、ダメだよ、と言った。それでもあいつは

泣きやまなかった。おお。おおお。おおおお。それは、でも、なんてなってない泣き方だろう。泣くなら泣くで、もう少しやり方というものがあるはずだ。知らないんだ。こいつってば、そんなことも知らないんだ。つらいとき、悲しいとき、どうやって泣けばいいのかもよく知らないんだ。どうしてつらいのか、悲しいのか、僕にはわからない。クラニィ。それはいったい誰だれのことだろう。やっぱりわからないけれど、僕はあいつの手首から手を放した。代わりに、あいつの頭の両側に手をのばした。そして、両手をあいつの頭の裏側に回して、力をこめて引きよせて、ぎゅっと抱だいた。すぐにあいつの両りよう腕うでが僕の身体からだを締しめつけてきた。少し気が遠くなりかけて、僕はベッドの上に転がって、仰あお向むけになった。あいつは僕の胸に顔を押しつけて、おお、おおお、おおおお、と泣きつづけた。僕はあいつの背中を叩いた。軽く、叩いた。よし、よし、と子供をあやすように、何度も、何度も叩いた。

『薔ば薇らのマリア　VIII．ただ祈り願え儚きさだめたちよ』了



あとがき

「これは連続刊行しかないね」

「……はい？」

「いや、だから、二冊連続でさ。つづけざまにね。VIII、IX、と、こう、ぽんぽんって」

「いや、それはわかりますけど。言葉の意味は。というか、たった今VIII書き終えたところなわけじゃないですか。これからすぐIX書けってことですか」

「書けってことですね（笑）」

「何笑ってんだよ。（笑）じゃないよ。どういうつもりだよ。殺す気か！」

「大だい丈じよう夫ぶだって。きみはそれくらいで死なないって。結構しぶといって。自分で思ってるよりずっとタフだって」

「あのねえ。薔薇マリはねえ。厚いの。文字とか多いの。見たらわかるでしょ。というかねえ。あんた、僕の担当編集者じゃないか。そんなの誰だれよりも一番よく知ってるじゃないか。すごいんだって実際マジで。量がさ。ハンパじゃないんだって」

「誰も厚くしろなんて頼たのんでないよ（笑）」

「だから（笑）じゃねえって言ってんだろ！　そりゃ頼まれてはないけど！　自じ業ごう自得って言えばそうかもしれないけど！」

「きみねえ。十文字くんねえ。よく考えてごらんなさいよ。いいかい。厚いってことはだよ。そのぶんこっちの仕事だって増えるんだよ。何回も何回もチェックするんだからね。校正の皆みなさんだって大変だよ。いや、べつにね？　それが悪いって言ってるわけじゃないよ？　今まで文句なんか言ったこと一度もないでしょう？　ある？　ないよね？」

「……ないです」

「でしょう。ほら、それじゃあ、がんばりましょう。一いつ緒しよに。ね。ＢＵＮＢＵＮさんにもがんばってもらわないといけないわけだしね。つらいのはきみだけじゃないんだよ。わかるよね？　いいかげん。もう何年かやってるんだから。このお仕事。そろそろ大人になろうよ。ね」

「何言ってるんですか。僕はとっくに大人ですよ」

「よし、よく言った。じゃあ、連続刊行決定ってことで。よろしくね」

「わかりましたよ。やりますよ。大人ですから。それに僕もね。一回やってみたかったんですよ。連続刊行。いいじゃないですか。望むところだ。見てろよ。あとで吠ほえ面づらかくな！」

　━━というわけで、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆様へ、抱かかえきれない愛と感謝をこめつつ、来月の再会をお約束して、筆を置かずに次巻IXの作業に戻もどります。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

VIII．ただ祈いのり願ねがえ儚はかなきさだめたちよ

十じゅう文もん字じ　青あお



平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア VIII．ただ祈り願え儚きさだめたちよ』平成20年1月1日初版発行

平成20年11月15日4版発行



BOOK☆WALKER